

< + + + + + + + + + < 男女共同参画推進センター報告書 | <

> | 平成

年

30



京都大学

男女共同参画推進センター報告書

平成31年3月

目 次

男女共同参画推進センター長 挨拶	1
運営体制	3
I 「広報・相談・社会連携」事業	5
1) Women and the World フォーラム 5	6
2) 京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）	7
3) 講義・ゼミ	14
4) 女子高生・車座フォーラム 2018	15
5) 第 13 回女子中高生のための関西科学塾	25
6) 日経ウーマノミクスフォーラムシンポジウム	27
7) 女性研究者紹介冊子「青いリボンのエトセトラ Vol.5」	29
8) 女子卒業生紹介冊子「Will」	30
9) 男女共同参画推進センターNewsletter	31
II 「育児・介護支援」事業	59
1) 平成 30 年度「保育園入園待機乳児のための保育施設」	60
2) おむかえ保育	67
3) ベビーシッター育児利用支援	69
III 「病児保育」事業	71
1) 病児保育室「こもも」	72
IV 「就労支援」事業	85
1) 研究・実験補助者雇用制度	86
男女共同参画推進本部支援室長 退任の挨拶	95
資料	
1) 男女共同参画推進センター関係者名簿	97
2) 男女共同参画推進委員会会議議事	98
3) 京都大学の教員・学生数	101
4) 京都大学の女性研究者・女子学生の状況	103
教員・研究員 アンケート調査	
1) 京都大学教員・研究員の生活時間に関するアンケート調査	109



ご挨拶

理事・副学長
京都大学男女共同参画推進センター長
稲葉カヨ

平成 18 年に科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成事業」の下で設立された「女性研究者支援センター」を中心とした活動も 13 年目に入っています。この間、平成 26 年度には、「女性研究者支援センター」を発展的に改組し、男女共同参画推進本部のもとに「男女共同参画推進センター」を設置しました。そのため、支援の対象も女性研究者のみならず教職員・学生へと広がってきています。

平成 27 年 4 月には、山極総長の下にアクション・プラン（2015 年度～2020 年度）を公表しました。その中では、「男女共同参画推進本部・推進センターを軸にして、基盤整備の拡充を進めると共に、女性リーダーの育成、家庭生活との両立支援、次世代育成支援という 3 つの目標を設定し、本学における男女共同参画の一層の進化を進める」としています。また、その後発表された「WINDOW 構想」の末尾の W は“Women and Wish”を表すとし、「男女共同参画推進アクション・プランに基づき明るい希望を持てる環境を整備します」と明記されました。さらに 3 年が経過した平成 30 年 3 月には実績を見た上で、この W は“Women and the World”と改訂されました。

平成 26 年 7 月に思修館の学寮「船哲房」の 1 階に入居したセンターの待機乳児保育室では、既に定員増を行い以前より多くの待機乳児を受け入れることができるようになっていました。また、9 月からの開室を 4 月へと変更し、利用者の利便性の向上に努めています。

今年度は 7 回発行したニューズレターでも、多くの方々を楽しみにしていただいている「連載：研究者になる！」では 70 人目の教員に登場していただきました。京大の女性研究者を紹介する「未来に繋がる青いリボンのエトセトラ」も Vol.1.5 となり、社会で活躍する女性の先輩達を紹介する冊子「Will Kyoto University」も発行することができました。学部一回生に向けた ILAS セミナー「ジェンダーとセクシュアリティ」や全学共通科目「ジェンダー論」の講義においては本センターの運営に関与する教員が大きな役割を担っています。京都大学進学を目指す女子高校生を対象として開催した「女子高生・車座フォーラム 2018（第 13 回）」にも、東北から九州にまたがる地域から、多くの女子高校生とその保護者の参加を得ることができました。さらに、本年新しく「女子高生応援大使」事業を開始しました。教育学生支援課と共同し、「鼎会（卒業生財界トップによる総長支援団体）」の支援のもとに、女子学生に出身校に出向いて後輩を京大へ勧誘してもらう試みです。

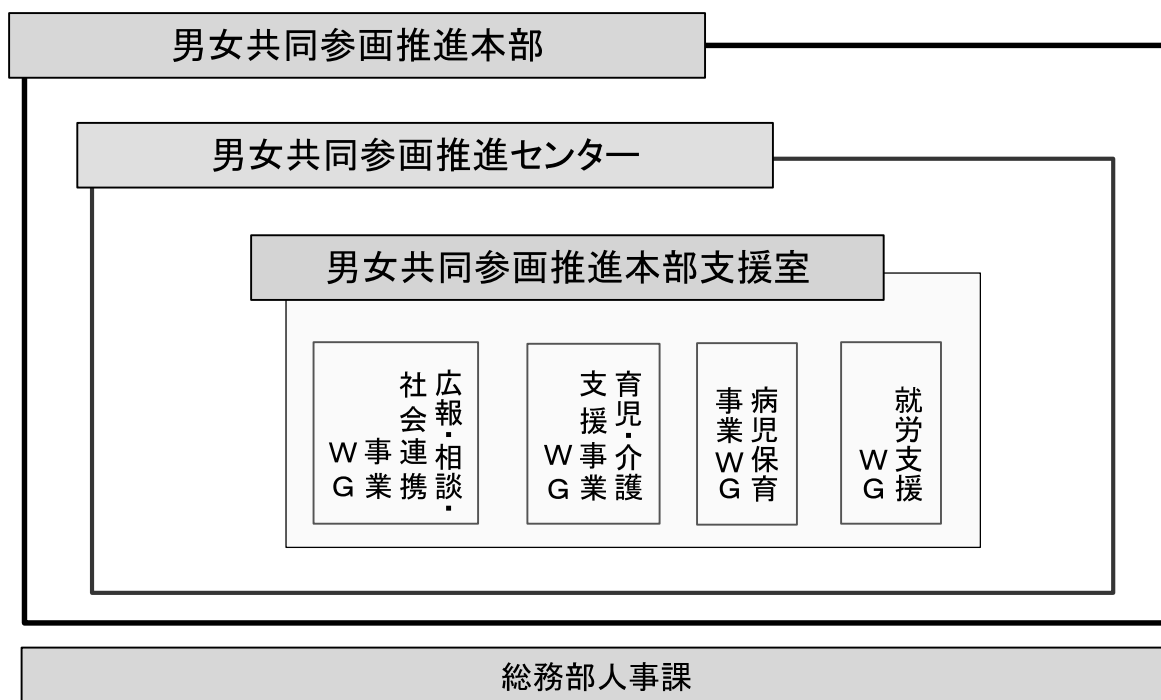
学内の男女共同参画を推進している本センターにとって大切なイベントは、女性教員懇話会との共催として今年度も開催した第 5 回“Women and the World”フォーラムです。総長の出席

を得て、多くの出席者との対話の中で、課題に立ち向かう姿勢を示していただいたことは大きな成果でした。しかし、教職員共に女性の方が、男女共同参画に対する関心やセンターの活動に対する認知度が低いという問題も浮かび上がっております。

このような状況ではありますが、さらに多くの方々への事業の周知を図り、活動の重要性を御理解頂けるよう、ホームページの刷新を始めとして広報に積極的に努めていきたいと考えております。そのため、今後もなお一層のご理解、ご支援とご協力をお願い申し上げます。

運営体制

男女共同参画推進本部のもと、京都大学の男女共同参画を推進するために、男女共同参画推進センターが設置されています。本センターには男女共同参画推進本部支援室をおき、そのもとに学内教員を委員とする4つのワーキンググループを設置して、それぞれの事業を企画・運営しています。

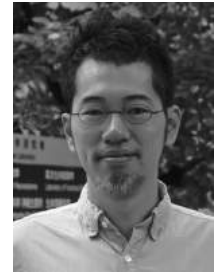


推進委員会	氏名
男女共同参画推進センター長	稲葉 カヨ (理事・副学長)
男女共同参画推進本部支援室長	佐藤 亨 (情報学研究科)
広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査	今村 博臣 (生命科学研究所)
育児・介護支援事業ワーキンググループ主査	矢野 孝次 (理学研究科)
病児保育事業ワーキンググループ主査	足立 壯一 (医学研究科)
就労支援事業ワーキンググループ主査	喜多 恵子 (農学研究科)

I 「広報・相談・社会連携」事業

広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ活動報告

広報事業では、3月4日にWomen and the Worldフォーラム5「総長と語る！研究者のワーク・ライフ・バランス」を女性教員懇話会との共催で行い、総長との意見交流をおこないました。また、センターの活動について、ウェブサイトやニュースレター「たちばな」、研究者紹介の冊子「未来に繋がる 青いリボンのエトセトラ」、卒業生紹介の冊子「Will」を通して、学内外に広報活動を行いました。



社会連携事業としては、京都大学主催で関西の他大学と連携し、第13回女子中高生のための関西科学塾を開催しました。京都大学においては、7月22日に女性研究者の講演・交流会、3月16日から17日にかけては、実験から発表までを行う宿泊研修を実施しました。また、12月22日には女子高生・車座フォーラム2018を学内に開催しました。両イベントとも多数の高校生および保護者にご参加いただきました。将来を担う次世代の女性たちに、早い段階から大学の雰囲気に触れ、教員や学生と交流する機会を提供することができたと考えています。

こうした従来の活動に加え、新たな取り組みとして男女共同参画センターの基金を立ち上げることとなりました。その準備として本年度は基金のあり方についての議論を深めてきました。男女共同参画センターの基金は2019年度に設置される予定です。

広報・相談・社会連携事業WG主査 今村 博臣

■H30 活動記録

- | | |
|-----------|---|
| 4月25日(水) | ニュースレター「たちばな」第78号発行 |
| 7月1日(日) | ニュースレター「たちばな」第79号発行 |
| 5月17日(木) | 日経ウーマノミクスプロジェクト「女性研究者キャリアカフェ」in 京都大学 |
| 8月31日(金) | 日経ウーマノミクスプロジェクト「ダイバーシティ研究環境整備と女性研究者の未来」 |
| 9月1日(土) | ニュースレター「たちばな」第80号発行 |
| 9月3日(月) | 広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ会議 |
| 10月2日(火) | 広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ会議 |
| 11月1日(木) | ニュースレター「たちばな」第81号発行 |
| 11月8日(木) | 広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ会議 |
| 11月9日(金) | 栃木県立宇都宮女子高校 京都大学訪問・講義：稲葉カヨ |
| 12月22日(土) | 女子高生・車座フォーラム2018 |
| 12月22日(土) | 「未来に繋がる 青いリボンのエトセトラ Vol.5」「Will」発行 |
| 1月1日(火) | ニュースレター「たちばな」第82号発行 |
| 2月15日(金) | ニュースレター「たちばな」女子高生・車座フォーラム2018 特集号発行 |
| 3月15日(金) | ニュースレター「たちばな」第83号発行 |
| 3月4日(月) | “Women and the World”フォーラム5「総長と語る！研究者のワーク・ライフ・バランス」 |

京都大学男女共同参画推進センター



シリーズ“Women and the World” フォーラム5

〈ランチミーティング〉総長と語る！研究者のワーク・ライフ・バランス

日時：2019年3月4日（月）11時40分～13時（11時30分 受付・開場）

場所：国際科学イノベーション棟会議室 5a・5b

山極壽一京都大学第26代総長は、六つの活動指針の頭文字をとった標語 *WINDOW* の結びの “W” として、「京都大学男女共同参画推進アクションプラン」（2015年度～2020年度）に基づき、明るい希望を持てる環境を整備することを宣言するために、“*Women and Wish*” を掲げました。この “W” は、2018年、環境・支援体制に加え、休業から復帰後の子育て期に柔軟な働き方を選べる制度を構築することも含むものとして、“*Women and the World*” と改訂されました。

男女共同参画推進センターでは、京都大学女性教員懇話会との共催で、今年度もフォーラムを開催します（*Women and Wish* フォーラムから名称変更）。今回は、ワーク・ライフ・バランスの面で研究者が直面している課題について、情報や意見の交換を行う場を設けます。総長およびセンターの関係者も、家族や地域の中にいる一研究者として、またそのような後進研究者を育てる一指導者として出席し、参加者のお話をうかがいながら、柔軟な働き方を選べる制度を構築したり、学生が希望を持ってキャリアパスを描くことができる環境を整えたりするためには、どのような視点が必要であるのかにつき、考えます。男女を問わず、是非、多くの方が参加して、総長やセンターに生の声をお届け下さい。

出席予定者 山極 壽一 総長

稲葉 カヨ 理事・副学長、男女共同参画推進センター長

佐藤 亨 男女共同参画推進本部支援室長

男女共同参画支援センターWG各主査

京都大学女性教員懇話会事務局



対象者：京都大学に所属する教職員・学生

定員：40名（先着順）申込：予約制 下のQRコードよりお申し込みください。

QRコードが読めない方は w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp へ所属、氏名、電話番号、メールアドレスを記入のうえ、2月28日（金）までにお申し込みください。ランチを食べながらの和やかなミーティングを予定していません。希望者には、500円でお茶付きのお弁当の販売も致しますので、申込み時にその旨をご記入ください。お弁当申込み後のキャンセルはできませんのでご了承ください。お弁当を頼まれない方も、趣旨をお汲み取りいただき、お弁当のご持参にご協力ください。

総長およびセンターの関係者も、一研究者個人として出席・発言します。大学の運営方針等につき、何かの約束をすることを目的とする会合ではないことを予めご了承ください。



共催：京都大学女性教員懇話会





応募者募集

京都大学 たちばな賞

第十一回

この京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによって、研究意欲を高め、我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成を目的として創設されました。



対象

学術上優れた研究成果をあげた本学に所属する45歳未満（昭和49年4月2日以降生まれ）の若手女性研究者のうち下記条件を満たす者

【学生部門】 応募時点において、大学院博士後期課程に在学中であること。

【研究者部門】 博士の学位を取得（博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する者を含む）していること。なお、教授職（特定教員を含む）の者は応募できません。

顕彰

- | | | |
|----------------|---------------------------|----------------|
| ● たちばな賞 | 正賞：賞状
(研究者部門・学生部門 各1名) | 副賞：記念品及び賞金10万円 |
| ● 奨励賞 | 正賞：賞状
(該当者がいた場合のみ) | 副賞：記念品及び賞金8万円 |



応募受付期間

平成30年11月1日(木)～11月30日(金)
(17時必着)

【協賛】

株式会社ワコール

● 応募要領などの詳細について

京都大学のHPからダウンロードしてください。 <http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/female>
お問い合わせ先：総務部人事課職員掛 電話：075-753-2059

第11回京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）応募要領

1. 趣旨・目的

京都大学における若手の女性研究者の優れた研究成果を讃えるため、平成20年度に「たちばな賞（京都大学優秀女性研究者賞）」を創設しました。本制度は、学術上優れた研究成果を挙げた若手の女性研究者を顕彰することにより、当該若手女性研究者自身及びこれに続く多くの若手女性研究者の励みとし、ステップアップに繋がるよう研究意欲を高め、もって本学、さらには我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成等に資することを目的としています。

2. 応募条件

昭和49年4月2日以降生まれの本学に所属する女性の大学院生及び女性研究者（研究を職務に含んでいる者。ポスドク及び日本学術振興会特別研究員を含む。）のうち、学術上優れた研究成果を挙げたと認められる者で、以下の条件を満たす者とします。なお、過去に学生部門でたちばな賞を授与された者も、研究者部門に応募することができます。また、過去に奨励賞を授与された者も、受賞対象となる業績が異なる場合に限り、次年度以降に本賞へ応募できます。

【学生部門】

応募時点において、大学院博士後期課程に在学中であること（医学研究科医学専攻及び薬学研究科薬学専攻にあつては博士課程、アジア・アフリカ地域研究研究科及び総合生存学館の博士課程にあつては後期に相当する課程を含む。休学中の者は除く。）なお、募集年度において京都大学通則第33条に規定する懲戒を受けている者は応募できません。

【研究者部門】

博士の学位を取得（博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する者を含む）していること。なお、教授職（特定教員を含む）の者は応募できません。

3. 顕彰

受賞者は、各部門1名ずつとし、表彰状と副賞（記念品及び賞金10万円）を授与します。また、該当者がある場合は、奨励賞として各部門原則1名に表彰状と副賞（記念品及び賞金8万円）を授与します。

4. 提出書類

- ①応募調書（様式1 / PDF）
- ②これまでの研究の概要（様式2 / PDF）
- ③推薦状（様式3 / PDF）
- ④業績目録（A4 / 形式自由 / PDF）
- ⑤その他特記すべき事項（特許・書評・新聞記事などの参考

資料（形式自由） / PDF）

⑥応募対象となった書籍、論文の別刷（主なものを学生は3編以内、研究者は5編以内 / PDF）

上記③の推薦状については、応募者の研究をよく理解している、本学に所属する常勤の研究者が作成してください。③以外の書類については、応募者本人が作成してください。

5. 提出方法

(1) 提出書類は、応募者が直接、下記連絡先にメールに添付して提出してください。

(2) 提出書類①～⑥については、PDFにして提出してください。なお、⑥については、表紙、目次及び該当部分を抜粋したPDFを提出してください。

PDF file が大容量になる場合には、大容量文書にて提出もしくはCDに焼くかUSBメモリーに入れて学内便にて提出することも可とします。

6. 応募受付期間

平成30年11月1日（木）～平成30年11月30日（金）

7. 選考及び選考結果の通知

学内に設置された選考委員会において、書面審査による第一次選考を行います。第一次選考通過者にはヒアリング審査による第二次選考を行い、受賞者を決定します。

なお、ヒアリング審査は平成31年1月下旬に実施予定です。

また、第一次選考通過者には、平成30年12月末日までに第一次選考のご連絡及び第二次選考ヒアリング審査用の資料の提出を依頼いたしますので、よろしくお願いたします。

受賞決定の通知は、平成31年2月上旬頃に行い、学内外へ公表します。

8. 表彰式

平成31年3月4日（月）午前に行います。また、表彰式後に受賞対象となった研究成果の発表をしていただきます。日程等詳細については、別途、受賞者に通知します。

9. その他

(1) 選考結果に対する問い合わせには応じかねます。

(2) 受賞者の氏名、略歴及び受賞の対象となった研究業績等は公表されますので、予めご承知願います。

(3) 提出書類に含まれる個人情報、厳重に管理し、本表彰の事業遂行のためのみに利用します。



第十一回

京都大学

「たちばな賞」表彰式

日時…2019年3月4日(月) 午前10時30分～11時30分
場所…京都大学国際科学イノベーション棟5階
シンポジウムホール

京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによって、研究意欲を高め、我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成を目的とする賞です。

〈受賞者による研究発表〉

たちばな賞

受賞者

学生部門

藤森 詩織

(理学研究科 博士後期課程3年)

「高周期14族元素を骨格を含む
フェニルアニオン種の合成とその性質解明」

研究者部門

西本 希呼

(人間・環境学研究所 特定研究員)

「〈茨の国〉の言語
—マダガスカル南部タンレイ語の記述—」

奨励賞 受賞者

学生部門

齋藤 美保 (理学研究科)

木邑 真理子 (理学研究科)

プログラム

- 10:30~10:35 開会の挨拶 **稲葉 カヨ** (京都大学理事)
- 10:35~10:45 表彰式・ワコール賞贈呈
- 10:45~10:55 総長挨拶
- 10:55~11:05 来賓祝辞 **伊東 知康** (株式会社ワコール代表取締役社長)
- 11:05~11:15 研究発表1 【学生部門】 **藤森 詩織**
- 11:15~11:25 研究発表2 【研究者部門】 **西本 希呼**
- 11:25~11:30 閉会の挨拶

表彰式は、山極総長より、表彰状と記念楯が授与されます。
副賞として、(株)ワコール 伊東代表取締役社長より、ワコール賞が授与されます。
表彰式のあと、たちばな賞受賞者による研究発表を行います。

お問い合わせ先：総務部人事課職員掛 電話 075-753-2283
URL:<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/female>



2018年度 京都大学たちばな賞(優秀女性研究者賞)表彰式

受賞者略歴

【たちばな賞】



【学生部門】

藤森 詩織

現 職: 京都大学大学院理学研究科 博士課程3年 (化学研究所・有機元素化学分科)

日本学術振興会特別研究員(DC1)

専門分野: 有機元素化学

研究テーマ: 高周期 14 族元素を骨格に含むフェニルアニオンの合成・性質解明

(略 歴)

2014年3月 信州大学理学部 卒業

2016年3月 京都大学大学院理学研究科修士課程 修了

2016年4月 日本学術振興会特別研究員(DC1)

2017年4月～2017年9月 カナダ・アルバータ大学 留学

2019年3月 京都大学大学院理学研究科博士課程 修了見込み

(受賞歴)

2015年 第50回有機反応若手の会 優秀ポスター賞

2015年 The 5th Asian Silicon Symposium Best Poster Award

2015年 The 27th International Conference on Organometallic Chemistry Best Poster Award

2015年 第62回有機金属化学討論会 ポスター賞

2015年 第19回ケイ素化学協会シンポジウム ポスター賞

2016年 平成27年度化学研究所大学院生研究発表会 ポスター大賞

2017年 日本化学会第97春季年会 CSJ Student Presentation Award 2017

2017年 平成29年度第22回京大化研学生研究賞

(研究概要)

ベンゼンに代表される芳香族化合物は、医薬品、電子材料、香料など身の回りで広く利用されており、重要な化合物群である。この芳香環に、高周期典型元素、特に炭素と同じ 14 族の高周期元素 (Si, Ge, Sn, Pb) を含む置換基を導入することで、蛍光・りん光量子収率の増大や発光効率の増大が実現可能であり、近年これを利用した様々な機能性材料が開発されている。さらに、芳香環骨格の構成原子として高周期 14 族元素を導入した「重い芳香族化合物」は、より高効率の機能性材料の開発の可能性や、新たな物性発現等の観点から興味もたれ、理論的・実験的にも数多くの研究がなされてきた。しかし、これらの化学種は高反応性であり、容易に自己多量化が進行してしまうという問題点がある。その安定化法としてかさ高い置換基を用いた「立体保護」が有効である。しかし、かさ高い置換基の存在がその機能性材料への展開等のさらなる応用を制限していた。そこで、本研究では、新たな安定化の手法として、「電荷反発」によりその多量化反応を抑制できると考え、研究を行った。その結果、フェニルアニオン(ベンゼンのアニオン種)の高周期 14 族元素類縁体(Ge あるいは Sn を含むフェニルアニオン種)、即ち「重いフェニルアニオン」の合成・単離に初めて成功した。これらのアニオン種は、芳香族性のみならず、炭素フェニルアニオンでは見られない二価化学種としての性質も併せ持つため、多様な反応様式を持つことが期待される。実際にこれらの重いアニオン種はビルディングブロックとして利用可能であり、本成果は材料科学に新たな方向性を与え、電子材料の応用展開を進展させる可能性を秘めている。



【研究者部門】
西本希呼

現職：人間・環境学研究所 特定研究員、東南アジア地域研究研究所 連携講師

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 客員研究員

専門分野：フィールド言語学、数の認知科学

研究テーマ：「＜茨の国＞の言語-マダガスカル南部タンルイ語の記述」

(略歴)

2006年3月大阪外国語大学南欧地域文化学科南欧地域文化専攻(フランス語)卒業

2011年3月京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻5年一貫制博士課程修了

2008年4月-2011年3月 日本学術振興会特別研究員(DC1)

2011年4月-2013年3月 日本学術振興会特別研究員(PD)

2013年4月-2018年3月 京都大学白眉センター特定助教、東南アジア地域研究研究所連携助教

2018年4月(～現在に至る)京都大学人間・環境学研究所 特定研究員、東南アジア地域研究研究所 連携講師、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 客員研究員

(受賞歴)

2011年2月 第1回日本学術振興会 育志賞

(研究概要)

アフリカ大陸東海岸に位置するマダガスカルは、東南アジアとの歴史的連続性をもち、今も尚、アジアの言語と文化を保持している国である。マダガスカル語は、オーストロネシア語族に属し、インドネシアの諸言語、フィリピンの諸言語、台湾原住民の言語、マオリ語、タヒチ語、チャモロ語、ツバル語、ハワイ語、ラパヌイ語(イースター島)等と同じ系統の言語である。私は2006年よりマダガスカルの主に南部で言語学を基礎とした現地調査を続けている。2011年より、マダガスカル語およびマダガスカルの歴史や文化の変遷を広くオーストロネシア比較言語学的視点から理解するために、仏領ポリネシア、イースター島、トンガへと視野を広げた。本書の研究は、マダガスカル南部で話されているタンルイ族の言語の体系的な記述研究である。資料のほぼない言語であるタンルイ語に関して対面調査、自然会話の観察、小中学校など各種教育機関での参与観察などあらゆる手段を尽くして、言語の構造分析とし記述すること、モノリンガル話者に依頼し録音した口頭伝承の対訳や辞書や例文集を集めできる限り精緻に完成させ出版するのに10年の歳月を要した。言語学的観点から体系的に記述したのは世界で初めてである(※原則成果は欧文で発表し、本書はこれまでの成果物を邦訳したものである)。「タンルイ」とは「棘の土地、有刺植物の生い茂る地域」という意味であり、その名が示す通り、サボテンをはじめとする有刺植物で囲まれた乾燥した地域である。そのような厳しい自然環境や交通手段未発達で首都近辺からのアクセスが困難であったという地政学的事情から、旧宗主国フランスやマダガスカルの主要民族による支配をこれまで一度も受けてこなかった、比較的古くからの伝統を維持している社会である。そのうちのひとつとして、タンルイ語には、他のマダガスカルの諸方言(諸言語)にはない、「敬語」が存在する。身体部位、身体部位を使う行為、生死に関わる表現、衣食住に関連する語を中心に、語の使い分けがみられる。例えば、「頭」「飲む」「死ぬ」といった語には、普通語と尊敬語があり、相手の立場によって使い分けられる。フィールドワークを通して得る1つの未知の言語に関する詳しい知識は、同時に多くの言語の理解に結びつく。そして「言葉とは何なのか」「なぜ人間は言葉話すのか」ひいては「人間とは何か」という問いについて考える際の1つの鍵となる。人間には多様な側面と普遍的な側面がある。言語も同様である。マダガスカルをはじめとするオーストロネシア語圏での現地調査を通じて私は直に感じて来た。本書ではそれら全てを書き起こすことはできなかったが、本書が少しでも新しい知見を与えるきっかけになればと願う、そして、今後もさらに研究を深化させ社会へ発信して行きたい。

【奨励賞】



【学生部門】
齋藤 美保

現 職:理学研究科生物科学専攻博士後期課程 3年、日本学術振興会特別研究員(DC2)

専門分野:動物行動学、生態学

研究テーマ: タンザニア・カタヴィ国立公園に生息するマサイキリンの仔育て戦略に関する研究
(略 歴)

2010年3月 京都工芸繊維大学工芸科学部応用生物学課程 卒業

2012年3月 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻修士課程 修了

2015年4月 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士後期課程 進学

2017年4月 日本学術振興会特別研究員 DC2

(受賞歴)

2011年7月 1st Giraffe Indaba ポスター賞 第二位

2017年3月 The 7th International Symposium on Primatology and Wildlife Science 口頭発表賞 第三位

2018年3月 The 9th International Symposium on Primatology and Wildlife Science 口頭発表賞 第三位

(研究概要)

一般に、動物のメスの繁殖成功率には仔の生存率が深く関与しており、「仔育て」は仔の生存率を高める行動として重要である。アフリカを代表する大型草食獣であるキリンは絶滅の危機に瀕しており、彼らの生態や行動を明らかにすることは喫緊の課題である。現在までに、キリンの仔育ては草原生態系のアカシア林でのみ研究されてきたが、落葉樹林生態系のミオンボ林にもキリンは数多く生息している。動物は生息環境が異なるとその生態が異なるため、ミオンボ林ではアカシア林とは異なる戦略で仔育てが行われている可能性がある。しかし、ミオンボ林は樹間距離が短く車での移動が困難なため、現在までにミオンボ林におけるキリンの仔育てに関する研究は行われてこなかった。本研究では、今まで見過ごされてきた、ミオンボ林に生息するマサイキリンに着目することで、異なる環境下における彼らの仔育て戦略の違いや環境への適応力を明らかにすることができるのではないかと考えた。そして、その仮説にもとづいた四つの目的、①出産に伴う大人メス間の社会関係の変化、②大人メスが仔を残して採食に行く時間の長さ、③もらい乳が起こる条件、④仔育て集団における保護者役の役割分担、を明らかにするために、タンザニア・カタヴィ国立公園において、徒歩による長期調査を行った。その結果、①出産により大人メス間の社会関係が強くなる、②アカシア林とは異なり、ミオンボ林では母親が長時間仔の側を離れることはない、③離乳期を迎えている仔が最ももらい乳を行いやすい、④仔育て集団における保護者役は非分担制であること、が明らかになった。以上のように、受賞者はミオンボ林特有のキリンの仔育て戦略を明らかにし、またこれまで明らかでなかった彼らの社会関係や生態に関する結果についても成果を刊行した。これらの成果はこれからの野生下のキリンの保護や、飼育下のキリンの繁殖管理を行う上でも重要な知見となるだろう。さらにこれらの発見により、他の草食獣の仔育て方法との比較が可能となり、各種ごとの繁殖生態をより詳しく理解する上で有用な情報をもたらすことが期待される。現在、植生の違いだけでなく、捕食者の有無も考慮してキリンの仔育て戦略の更なる解明を目指して調査を継続している。



【学生部門】
木邑 真理子

現 職： 理学研究科宇宙物理学専攻博士後期課程 2 年、日本学術振興会特別研究員(DC1)

専門分野： 恒星物理学

研究テーマ： 多波長観測で探る、ブラックホール周囲の降着円盤を介した質量降着機構の解明
(略 歴)

2015 年 3 月 京都大学理学部 卒業

2017 年 3 月 京都大学大学院理学研究科宇宙物理学専攻修士課程 修了

2017 年 4 月 京都大学大学院理学研究科宇宙物理学専攻博士後期課程 進学
日本学術振興会特別研究員 DC1

(受賞歴)

2016 年 12 月 京都大学久能賞

2017 年 3 月 京都大学総長賞

(研究概要)

宇宙における様々な爆発現象(大きく明るさが変化する現象)には、降着円盤と呼ばれる、星の周りに形成されるガス円盤が関わっているものが多い。そのため、この降着円盤の物理現象を解明することが宇宙における爆発現象を網羅的に理解する鍵になると考えられる。ブラックホールと普通の星から成るブラックホール連星も、ブラックホールの周囲に降着円盤を持ち、間欠的に爆発現象を示す。その爆発現象は X 線・紫外線・可視光・赤外線などありとあらゆる波長域で観測される。そのため、多波長の同時観測データを取得し解析すれば、円盤全体の物理現象を理解できるが、これまで各波長域の観測者は別々に研究を行っていたため、降着円盤全体の描像が見えにくくなっていた。そこで、円盤全体の物理現象を大局的に理解するため、所属する研究グループで可視光観測を行いつつ、他の波長域での同時観測データも取得し、ブラックホール連星の爆発中の多波長同時観測データの解析に取り組んだ。その結果、降着円盤の外側から出ている可視光でもブラックホール近くで起こる強重力場中のユニークな現象を観測出来ることを示し、ブラックホール連星の可視光研究における新しい可能性を提示した。また、今まで降着円盤外側からの可視光放射は、X 線放射の延長線上で説明できるとされていたが、今までにない豊富なデータを用いた多波長解析により、X 線放射の影響だけでは説明できない降着円盤外側特有の物理現象も捉えることが出来た。加えて、多波長データ解析の精度を上げるため、統計学の専門家との研究により、天文学における解析の難しいまばらなデータからも時間情報を精度良く抽出できる手法を開発し、実際の天体に適用した。

私達が発見した現象は多数のブラックホール連星に共通であると考えられ、今後多波長観測が進むにつれ頻繁に観測されると期待されており、私達の研究はその先駆けとなった。また、天文学分野に特有のまばらなデータは今後京都大学の新しい望遠鏡であるせいめい望遠鏡の本格稼働により大量に取得されていくと考えられるため、私達が開発した解析手法を用いることで、天文学のデータ解析が加速度的に進むと期待されている。

現在は、多波長観測を続けながら降着円盤で起こる物理現象より深く理解するため、爆発現象を再現する数値シミュレーションも行っている。

講義・ゼミ

■ILAS セミナー「ジェンダーと科学」

平成30年度のILASセミナー「ジェンダーと科学」では、1回生を対象に少人数での講義、討論などを通して、ジェンダーについての基礎知識や考え方を身につけました。講師3名で講義を行いました。

平成30年度 4月開講のILASセミナー（前期） 「ジェンダーとセクシュアリティ」講師・テーマ一覧			
回	講義日	講師	テーマ
1	4月9日	田中 雅一（人文科学研究所）	ジェンダーとセクシュアリティについての概論
2	4月16日	栗屋 智就（医学研究科）	医学の視点から考えるジェンダーとセクシュアリティ ヒトの性分化、男女差の脳科学
3	4月23日	〃	
4	5月7日	〃	
5	5月14日	山内 淳（生態学研究センター）	生物進化から考えるジェンダーとセクシュアリティ 性の意義、性の特性、雄雌差
6	5月21日	〃	
7	5月28日	〃	
8	6月4日	〃	
9	6月11日	田中 雅一（人文科学研究所）	文化人類学の視点から考えるジェンダーとセクシュアリティ 結婚、売春（セックスワーク）、宗教
10	6月20日	〃	
11	6月25日	〃	
12	7月2日	〃	
13	7月9日	〃	
14	7月17日	栗屋 智就（医学研究科）	総括

火曜日5限（16時30分～18時）、男女共同参画推進センター会議室にて



■全学共通科目「ジェンダー論」

落合恵美子教授の全学共通科目「ジェンダー論」では、現代日本のジェンダーを広い視野に位置づけて理解し、課題解決の方法について自ら考える力を養いました。また、ゲストスピーカーをお招きし、さまざまな研究分野においてジェンダーが開くパースペクティブ、日本及び世界の他の地域のジェンダーの状況や課題についてお話をうかがいました。



知ろう！語ろう！ 京都大学！

受験の前に京大の教育・研究を知り、
研究者や大学院生・学部学生と
みんな輪になって話しに来ませんか？

京都大学の
受験を目指す

女子高生の
みなさまへ

参加
無料

女子高生のための

あれが
知りたい！

KURUMAZA

車座 FORUM フォーラム 2018

はい、
質問！

どんな
研究を
するの？

あの分野を
勉強したい！

日時

12/22 [SAT] 10:00-16:00

会場

京都大学国際科学イノベーション棟
シンポジウムホール、他

募集
定員

女子高校生100名程度(先着順)
保護者50名程度

主催／京都大学男女共同参画推進センター

共催／京都大学教育推進・学生支援部入試企画課

申込
方法

男女共同参画推進センター
ホームページをご覧ください、
申込んでください。

<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

申込期間

9.25[火]-11.22[木]

お問合せ

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町京都大学男女共同参画推進センター
mail: w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
tel: 075-753-2437

知ろう！語ろう！ 京都大学！



京都大学がどんなところなのか、大学ではどんな勉強や研究をするのか、また大学卒業後の進路にはどんなものがあるのか、などなど、色々な疑問をお持ちのみなさん、京都大学の企画する「女子高生・車座フォーラム2018」にいらっしませんか？ 京都大学男女共同参画推進センターでは、京都大学の研究者や科学者の仕事を知ってもらおうと「京都大学を知ろう・研究者と語ろう」を企画しました。フォーラムでは、理系・文系それぞれにどんな研究分野や領域があるのか、なぜ今の分野を選んだのかといった大学進学に関わる話をはじめ、研究の面白さや苦勞、専門職や研究職など大学卒業後の将来設計のための心得、あるいはまた、具体的に、たとえば子育てと研究生生活の両立方法、研究論文の執筆や学会発表といった研究者の仕事内容など、さまざまなテーマについて、教員や大学院生、学生が疑問にお答えします。保護者の方々の参加も募集します。どうぞ奮ってご参加ください。



当日の
流れを
チェック！

PROGRAM [プログラム]

10:00~10:30	受付
10:30~10:35	開会の挨拶
10:35~10:55	京都大学の紹介
10:55~11:10	入試に関する説明
11:10~11:30	女性研究者の講演
11:30~13:00	昼休憩 ※昼食は各自持参 ※学生食堂の利用可
13:00~13:40	講師紹介・グループワークの説明・移動
13:40~15:00	グループワーク「車座になって話そう」 <small>高校生</small> 講師・京大生とのグループワーク <small>保護者</small> 京大生との交流(13:30~15:00)
15:00~15:10	移動(休憩)
15:10~15:50	まとめ
15:50~16:00	閉会

閉会后17:00まで、入試に関する質疑応答を受け付けます。

あなたは
どの学部を
知りたい？

グループワーク 希望学部

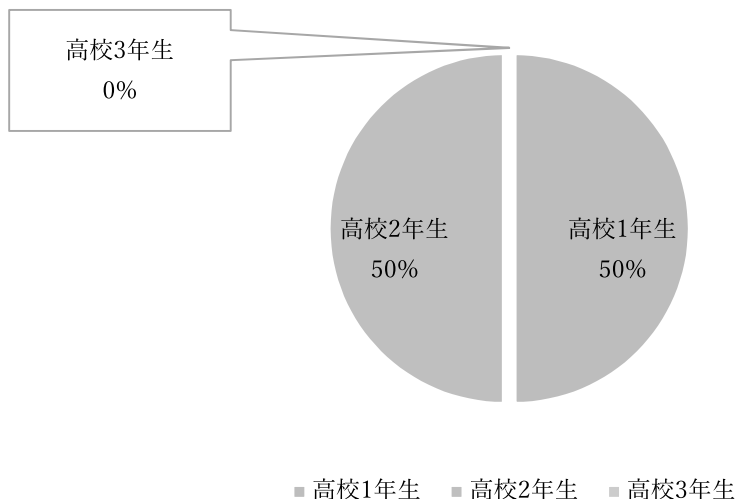
- A 文学部
- B 教育学部
- C 法学部
- D 経済学部
- E 理学部
- F 医学部(医学)
- G 医学部(人間健康科学)
- H 薬学部
- I 工学部
- J 農学部
- K 総合人間学部(文系)
- L 総合人間学部(理系)



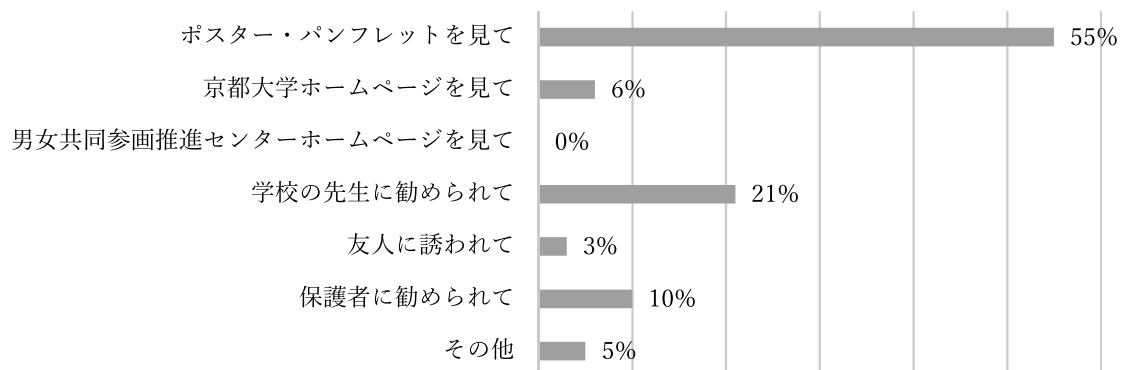
■車座フォーラム参加者アンケート 1

高校生

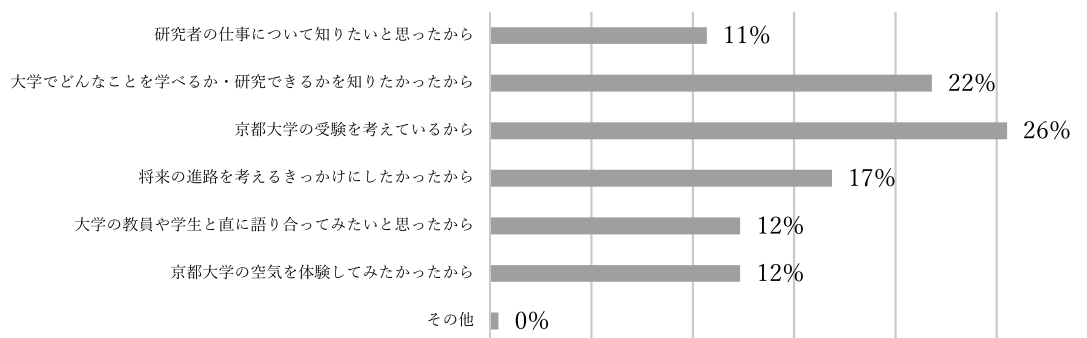
あなたの学年を教えてください。



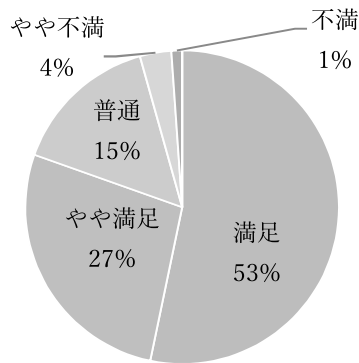
あなたはこの車座フォーラムを何でお知りになりましたか？



あなたがこの車座フォーラムに参加しようと思った動機は何ですか？(複数回答可)

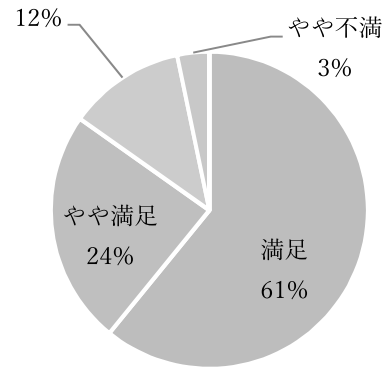


京都大学の紹介



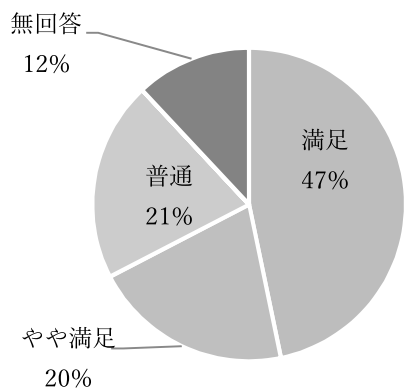
■ 満足 ■ やや満足 ■ 普通
■ やや不満 ■ 不満 ■ 無回答

女性研究者の講演



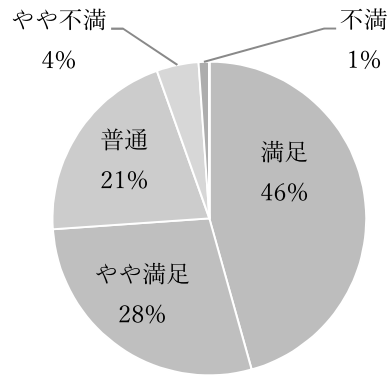
■ 満足 ■ やや満足 ■ 普通
■ やや不満 ■ 不満 ■ 無回答

グループワーク (午後)



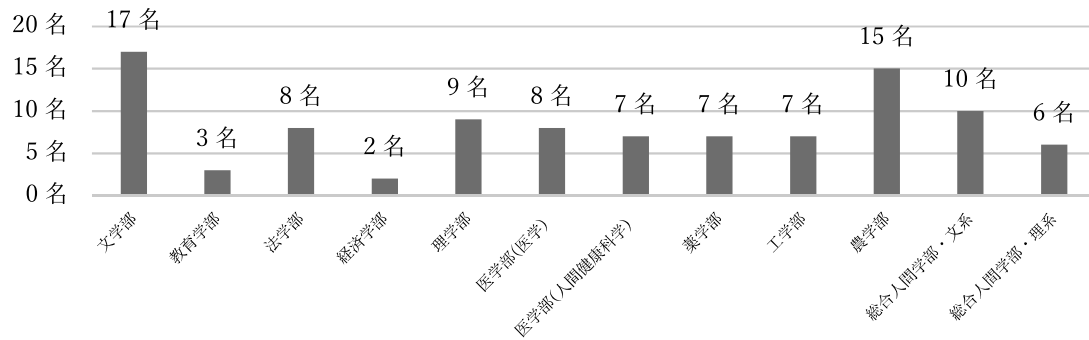
■ 満足 ■ やや満足 ■ 普通
■ やや不満 ■ 不満 ■ 無回答

入試に関する説明



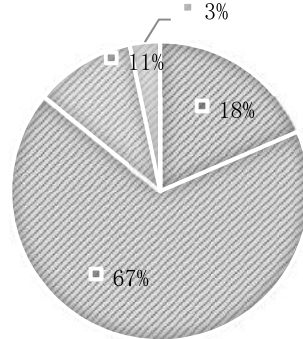
■ 満足 ■ やや満足 ■ 普通
■ やや不満 ■ 不満 ■ 無回答

グループ討論希望学部

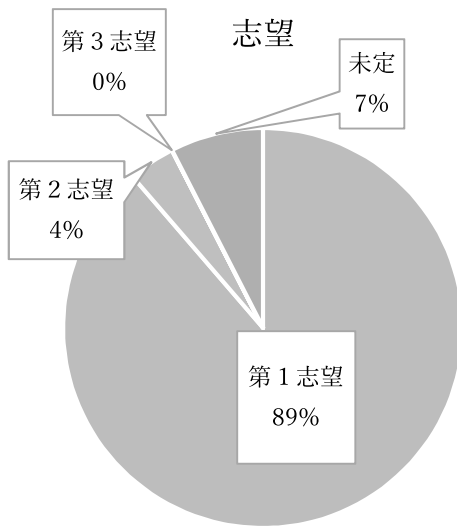
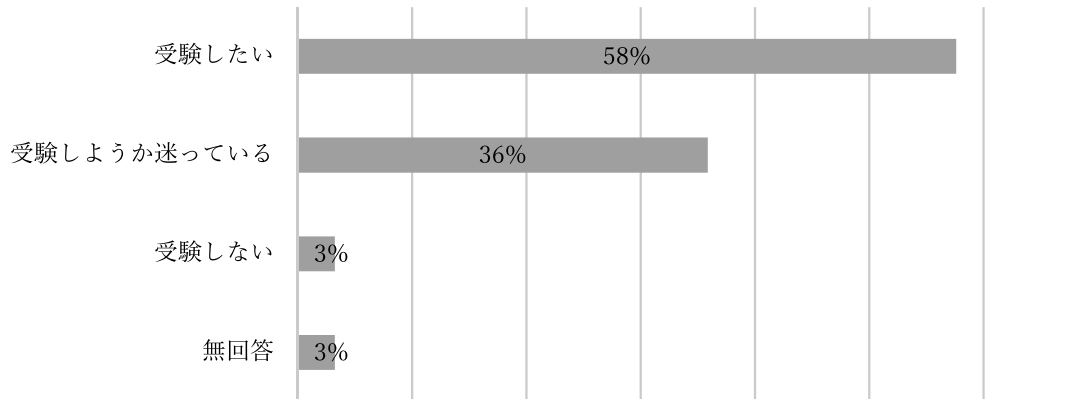


このフォーラムに参加して、将来、研究者になりたいと思いましたが？

- 研究者になりたい
- 研究者も将来の選択肢のひとつである
- 研究者になりたくない
- 無回答

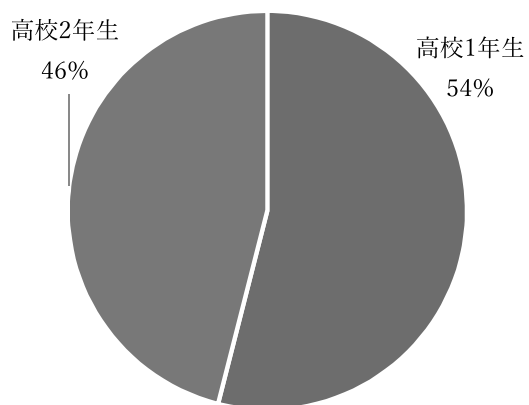


このフォーラムに参加して、京都大学を受験したいと思いましたが？



- 第1志望
- 第2志望
- 第3志望
- 未定

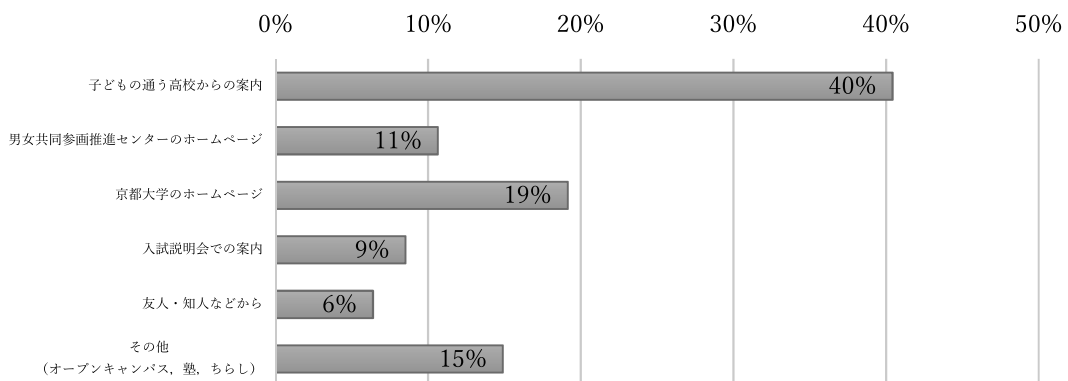
学年別志望者



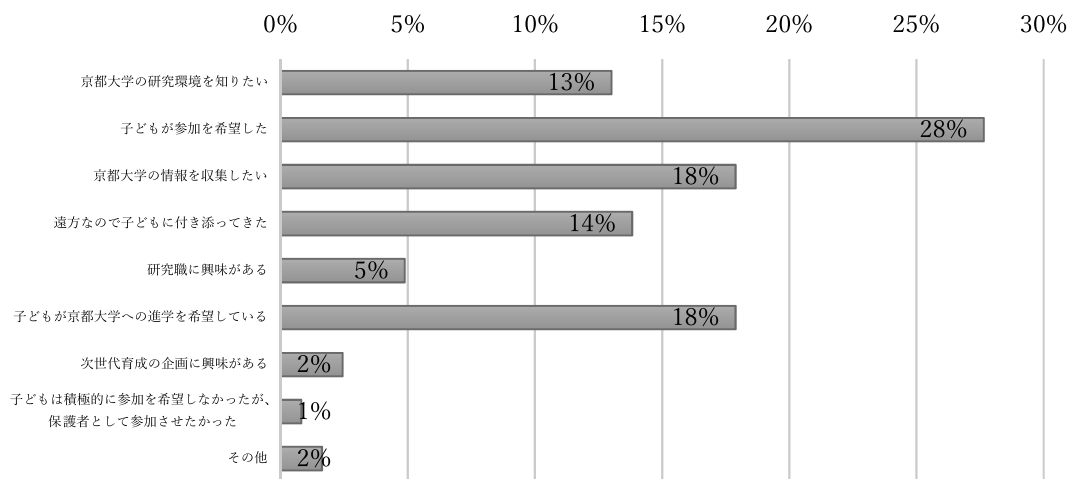
- 高校1年生
- 高校2年生

保護者

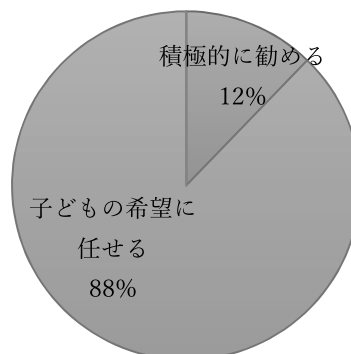
車座フォーラムを知ったきっかけ（複数回答）



参加の動機（複数回答）



子どもが研究職を目指すことについて



■ 積極的に勧める ■ 子どもの希望に任せる ■ 別の職業を目指してほしい

■車座フォーラム参加者アンケート2

高校生より

- ・自分以外の周りの子達が、どんな風に考えているか分かってよかった。
- ・パンフレットからはわからない話や、まだ広く知られていなく、身近にある情報が少ないので、実際にその現場に立たれている教員や学生に話を聞くと、イメージが変わったり新しく発見することができ、その学科に入ってどんなことができるかを知ることが、勉強するモチベーションにもつながり、ますます京大に入りたくなった。
- ・インターネットで調べても分からないようなことをたくさん聞くことができ、京大に興味を持ちました。研究者というとぼんやりとしたイメージしかありませんでしたが、自ら学び、視野を広げ、人生を豊かにすることが大切なのだと学ぶことができました。
- ・大学生活、勉強方法など色々知ることができてよかった。色々な質問にも答えていただき、話す機会もできて、とても楽しかった。
- ・自分の研究内容について、生き生きと話している姿に憧れをもちました。大学入学後も、本当に多様な選択肢があることがわかり参加して良かった。
- ・京大は自由で学びたいことに思いきり専念できる素敵な大学だと思った。
- ・少ない人数だったし女子だけだったので、とても話しやすい雰囲気だったのがよかった。
- ・教員も学生もいい感じで優しくかった。
- ・前回と違うグループに参加しましたが、新たな発見や何をしているのかをよく知ることができた。参考になった。
- ・好きなことを自由に学べるのがよいと感じました。私も自由の校風のもと、大学教授になるという夢をかなえたいと思います。
- ・グループワークでは、聞きたいことを全部聞けたので満足しています。教員も学生も良い方で、楽しい時間をすごせました。他県の人とも交流ができ、よい刺激を受けました。去年も参加すればよかったと後悔しました。
- ・正直参加するまでは怖いというイメージが先行していたが、担当の教員や学生が自分の経験を用いながら解り易く説明し、質問しやすい雰囲気だった。長所短所も知ることができ、人間健康科学のよくわからない点が解消された気がする。また参加したいと思いました。
- ・医学部以外の学部の話聞くことで、研究についての視野が広がりました。貴重で素晴らしい時間でした。
- ・楽しい時間でした。
- ・子育てがあると大変だと思いました。
- ・直に話すことができて、楽しかった。企業に就職したいので研究者にはならないが、好きなことを突き詰めて研究できるというのはいいと思った。
- ・女子学生とたくさん話せたのがよかった。
- ・女性研究者と直に話すことができ有意義な時間を過ごせた。女性研究者がとてもかっこいいと思いました。
- ・グループディスカッションがすごく有意義で楽しかった。
- ・レベルの高い方と直接話せ、意見を聞くことができとても刺激的だった。
- ・大学入学時の興味分野だけでなく、様々な体験を経て幅広く研究ができるのだと思いました。

- ・京大に入学したいという思いを改めて持つことができた一日だった。
- ・これまで違う大学の工学部しか考えてなかったけど選択肢が一つ増えました。
- ・教員や学生のお話をじっくり聞くことができてよかった。
- ・学生が生き生きしててかっこよかった。京大に行きたいと思った。
- ・大学院に行くことは割とマストなんだなと感じました。
- ・自由の校風があることは知っていたが、とても京大のことがよくわかった。
- ・実際に合格されている先輩や教員と話すことで塾や学校の先生から聞く話と違う事、実態がきけて有意義な時間だった。自分の好きな事に取り組み、生き生きしていいなと思った。
- ・理系学科を希望していなかったのに研究の道はないと思っていたが、将来の選択肢が増えてよかった。
- ・参加して本当に良かった。京大への思いや研究への思いが高まりました。
- ・たくさんの視点を持っていて目標に向かって真っすぐに進んでいる人が多くいることがとても刺激に成った。
- ・女性ならではの意見や、参加しないと聞くことができなかった情報を知ることができよかった。
- ・想像以上に様々な分野で活躍されている女性研究者のお話をきいて面白く、視野も広がった。
- ・文学部で選択の幅が広いと聞いていたが、実際の様子が変わって楽しかった。
- ・女性研究者でも、自分のしたい研究したいようにできる事を知ることができ、研究をしたいという気持ちがより高まった。
- ・実際に少人数で大学の教員や学生とお話することで、将来について現実的に考えられたり、京大の魅力について知ることができて大変良い経験になった。
- ・法学志望だったので、法学の研究職があることが意外でした。まだまだ知らないことがたくさんあると思い知ったし、興味も沸いた。
- ・女性研究者が多く、それぞれの分野で活躍していることがわかった。
- ・グループワークの中では、人数が少ないので自分の相談や質問をしやすく、アットホームな雰囲気だった。知りたいことも自由に聞け、京大や経済学のイメージがしやすく楽しかった。
- ・文学部では、就職という点が見えにくい印象が強かったが、学んだ事がどこかにつながるという話が印象的だった。自分がやりたいことを何でも研究できる点が魅力だと思った。
- ・やはり女性の研究職は少ないと感じました。将来、自分のしたいことができるよう勉強を頑張る。
- ・意欲的な人が多い。
- ・研究というと大学でというイメージが強かったが、企業でもできるということを強く感じた。同年代の意見が聞けて良かった。
- ・女性研究者も多岐にわたる分野の研究をしていることがわかった。学生もとても話しやすく、京大はみんな頭がよくてもっと堅いと持っていたが、楽しそうに感じた。
- ・研究職というと男性で理系というイメージだったが、女性の方も多くいて驚いた。教員が魅力的で、こういう先生の下で働きたいと思った。グループワークの時間がとても充実していた。
- ・理学部は女子の割合が特に少ないという事だったが、みんな楽しそうだった。前向きに研究をされているのが印象的だった。
- ・普段学校でできないことが聞けてよかった。
- ・もともと興味があったので、今日のフォーラムが楽しく是非入学したくなった。

保護者より

- ・部活動をやっているので大会などがない時期でよかった。
- ・県外からの参加なので開始終了時間が、日帰り可能でよかった。
- ・高校の終業式と同じ日程のため休みやすかった。
- ・高校の冬期講習の始まる前のちょうど良い時期であった。
- ・交通状況により少々到着が遅れたが、ほぼ予定通りだったので開始はこれでよいと思う。
- ・高1高2対象なので、この時期が適切かと思う。
ただ、高1の秋には文理選択や科目選択があるので高1にとっては夏頃のオープンキャンパス(工学部以外の学部も)時に、このような機会があればよいと思いました。
- ・オープンキャンパスより参加しやすい。(学校のテスト、部活、気候についても Good)
開始時間もちょうど良い。
- ・高3がこの時期に参加するのは難しいが、高2なので時期としてはちょうどよい。
- ・オープンキャンパスの企画はすぐに締めきられてしまい参加できなかった。
関東にいと情報がなく、残念に思っていたところこの時期にこのような催しがありとても有意義であった。
- ・冬休みに入ってから土曜日ということで遠方からの出席もできたし良かった。開始、終了時間もちょうど良かった。
- ・もう少し早い時期でもよかった。
- ・とてもいい時期でした。遠方から出席しましたが大丈夫でした。
- ・遠方だったので、10時半開始に間に合う事が難しかったが、内容的に妥当な時間であると思う。
- ・秋に開催してほしい。
- ・観光にピーク時期から外れていて良いと思う。
- ・昼が短すぎる。もしくは食堂の稼働を考慮してほしい。
- ・子供は土曜日登校日であり、今回は欠席となった、できれば日曜か祝日の開催にしてほしい。
お昼時間がおしてあわただしいと感じた。
- ・県外からも参加しやすく適切だった。
- ・昼休憩が短くて忙しかったので、もう少し余裕がほしい。
- ・秋頃の方が高3も参加ができ、もう少し早い方がいいかもしれない。
- ・いろいろな分野、角度から貴重な話を聞くことができとても実りあるフォーラムでした。
- ・京大生と直接話ができ参考になり、良かった。
- ・事前の案内に昼食持参がなかったので、当日学内カフェでは長蛇の列で結局物がなく大変だった。
- ・高島さんの話がよかった。
- ・疑問に思っていたポイントを質問できるのがよかった。
- ・学生・教員と一緒に話せるのがとてもいい。
- ・子供が研究をしたいと言っているの、とてもよかった。
- ・もう少し文系・理系に分かれる部分が多いと嬉しい。
- ・保護者と京大生の交流で工学部だからこそ女子学生の意見を聞きたかった。
- ・学生に保護者の知りたいことを質問できる機会はありがたかった。今後の参考になる。

- ・女性研究者を増やしたいという本気度を感じる。
- ・親の世代としては大学当時、院に進む人は恵まれた環境の人たちというイメージがありましたが、今は違ってきているのかと思いました。
選択肢が広がることは良いことだと期待したい。
- ・保護者との交流会に参加した学生の対応が素晴らしい。的確に質問に回答し参考になった。
- ・オープンキャンパスに続き2回目の訪問ですが、今日一日でより深く京大のことを知る事ができて、大変有意義な一日となった。
- ・娘がこの学生と学べるといいなと強く思いました。
- ・入試関連の話は聞く機会が多いが、大学に入学してからの生活や研究内容の話を現役女子学生から学生目線で聞くことができる機会は貴重な経験になった。
専門の講義や活躍されている学生の話も参考になった。
- ・学部を横断している分野についてどう考えたらよいのか知りたい。例えば、生命を扱うのに農、理、工、医でなんとなくイメージがつかめても詳しくわからなかった。
- ・稲葉先生のお話や高島さんの講演はとても参考になった。
- ・進路をどのように決めたかという事を学生から聞くことができよかった。
娘にとって大学がどういうところかわからないようでしたので、少しわかってくれたのではないかと思います。
- ・機会があれば、また参加したい。
- ・オープンキャンパスでは聞けない話がきけて有意義であった。今後も続けてほしい。
- ・大学院に関する情報をさらに詳しく教えてほしい。
- ・校内で迷ってしまった。何人かいる人の方に行って講演会場にたどり着きました。
- ・研究者と卒業生の話は興味深かったが理系の研究者や卒業生の話も聞きたかった。
- ・学生食堂の利用可となっていたのに閉店していたため、さらに昼休憩が短かったので、ほとんど食べられなかった。土、日休みは知っていましたが、チラシには利用可となっていました。
- ・本人が直接学生に聞くことができたので今後のモチベーションアップにつながったと思う。親も志望校については本人任せだったので、色々聞くことができて良かった。

第13回女子中高生のための



数学や理科が
得意かどうかなんか
関係ない

関西科学塾

まずは楽しい！
ということを感じてほしい

参加者
募集

2018年 **6/18** 月 締切

全日程の参加でも、一部の日程のみの参加でもOK! A-Eは無料。Fは9600円(税込・宿泊費・食費等)

A

2018年 7/22 (日) 午後

【定員 150名】 **京大**

身近なロールモデルと気軽に話そう！
対談 & 講演 & 理系大学生との交流会。

▲ 対談：「理系進路選択について」

田島 節子 × 平野 丈夫
大阪大学理学部長 × 京都大学理学部長

▲ 講演（女性研究者、女性大学生）

▲ 4次元デジタル宇宙シアター

▲ 女性大学生との交流会（詳細は裏面）



B

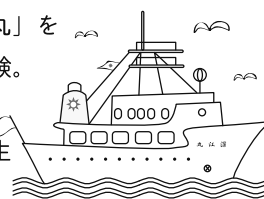
2018年 8/2 (木) 午後

【定員 40名】 **神戸大**

練習船をシミュレーションで体験！

神戸大の練習船「深江丸」を
シミュレーションで体験。

船を使った実験の解説、
海事科学部の女性大学生
との交流など。



C

2018年 10/14 (日) 午後

大阪大 大阪府立大 大阪市大

【定員 260名】 **大学の研究を体験！**

小グループに分かれて実験。

実験コースは裏面参照。



D

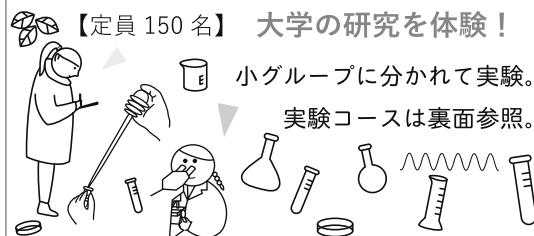
2018年 11/18 (日) 午後

神戸大 奈良女子大

【定員 150名】 **大学の研究を体験！**

小グループに分かれて実験。

実験コースは裏面参照。



E

2018年 12/8 (土) 午後

【定員 100名】 **株式会社クボタ**

科学で広がる世界を見よう！
科学の現場で働く女性技術者と交流しよう！

見学会、企業で働く技術者との交流会。

農業機械、水道用鉄管のトップメーカークボタ。

Kubota

F

2019年 3/16(土)~17 (日)

【定員 80名】 **京大**

実験の背景にある原理現象を理解！

実験から、結果の整理、考察、発表準備、発表まで。

1泊2日の充実の2日間。

開催場所

3/16 (土) 京都大学理学研究科 6号館、京都大学の研究室

3/17 (日) 京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール



申込方法は裏面参照または【関西科学塾 HP】 <http://kagaku-juku.jp/> ▶



問い合わせ先：京都大学理学研究科 社会交流室 関西科学塾事務局 E-mail: kagakujuku@cr.sci.kyoto-u.ac.jp（詳細は裏面参照）

主催：京都大学（理学研究科、男女共同参画推進センター）、一般社団法人関西科学塾コンソーシアム

共催：神戸大学男女共同参画推進室、大阪大学、奈良女子大学（理学部、理系女性教育開発共同機構、男女共同参画推進機構）、大阪府立大学、大阪市立大学、一般社団法人日本物理学会

協賛：株式会社ウィルウェイ、株式会社ダイヘン、東洋アルミニウム株式会社、株式会社フジキン、株式会社ダイセル

協力：男女共同参画協会連絡会、日本分子生物学会、日本遺伝学会、日本鉄鋼協会、日本金属学会、近畿化学協会、日本電子株式会社、東京ダイレック株式会社、株式会社クボタ、NPO法人あなたらしくをサポート

旅行実施会社：株式会社近畿日本ツーリスト関西京都支店

申込締切

6月18日【月】必着

申込方法：関西科学塾 HP の申込フォームから

<http://kagaku-juku.jp/> →



- 連絡は、基本的にメールでしますので、必ず関西科学塾メールアドレスを受信できるように設定をお願いします。特に携帯の方は迷惑メール防止フィルターで受信できないことがありますので、ご注意ください。(メールができない方は個別に相談にのります)
- 申し込みを受け付けましたら、関西科学塾から「受付 ID 番号」をメールで送ります。1 週間以内に返信のない場合は受信設定を確認の上、メールでその旨科学塾に連絡してください。ID 番号を再送します。
- 申込者多数の場合は抽選を行います。6 月末頃に抽選結果と各日程の資料を郵送します。
- C,D,F 日程の抽選に当選した方には、後日、実験コースの希望調査をします。

A 日程のスケジュール

- 12:00-12:30 開場・受付
12:30-12:35 開会挨拶 平野 丈夫 京都大学理学部長
12:35-13:10 対 談 「理系進路選択について」
田島 節子 大阪大学理学部長 × 平野 丈夫 京都大学理学部長
- 13:10-13:30 集合写真・休憩
13:30-15:20 4 次元デジタル宇宙シアター・女性大学生との交流会
15:20-15:30 休 憩
15:30-16:00 講 演 「太陽と宇宙のお天気」 浅井 歩 京都大学理学研究科 准教授
16:00-16:20 講 演 「理系大学生の生態」 磯田 珠奈子 京都大学理学研究科 修士 2 回生
16:20 閉 会
- 司会：安井 円香 京都大学理学研究科 修士 1 回生

C 日程に予定している実験コース

大阪府立大学(中学生)

- ・光と色のサイエンス
- ・DNA 鑑定：遺伝子で身元を突きとめる
- ・コンピュータシミュレーションを体験しよう！
- ・微生物を探せ！
- ・振動を調べてみよう
- ・金のつぶを作ってみよう！

大阪市立大学(高校生)

- ・感覚(視覚・触覚・聴覚)を科学する
- ・面積を上から下から近似してみよう！
- ・温めて水を凍らせる？～賢いポリマーの世界～
- ・カワイイ家を作ろう
- ・のぞいて見よう 花の色の不思議な世界

大阪大学(高校生)

- ・放射線って何？自分で放射線を測ってみよう！
- ・ハエは色を覚えられる？
- ・氷は冷たくて水に浮かぶって常識？～超高圧の世界をのぞいてみよう！
- ・大気中微粒子 PM2.5 の発生源を究明せよ！
- ・液晶を楽しもう！
- ・光を分解して楽しもう～あなただけの不思議なステンドグラス？～
- ・ロボットの基礎技術を知ろう

D 日程に予定している実験コース

奈良女子大学(中学生・高校生)

- ・食のライフサイエンス：味の不思議
- ・数学の定理を感じてみよう
- ・地球(アース)の贈り物～金属を支える私達の暮らし～
- ・光のスペクトルを測ってみよう
- ・液体？固体？どっちつかずの粉とペーストの物理
- ・生き物の進化を遺伝子から調べてみよう
- ・水は細胞の中にどうやって入る？

神戸大学(中学生・高校生)

- ・大気圧プラズマって何？
- ・赤外線でプラスチックを調べてみよう
- ・水中の DNA を使って魚の生息数を推定する
- ・お酒の強い人、弱い人
- ・身の回りの小さな世界～微生物を見よう～
- ・南海トラフ地震の揺れはどんなに強いのか
- ・温室効果ガスってなに？
- ・光で粒子をつかもう～光ピンセットって何？～

問い合わせ先：(できるだけメールでの連絡をお願いします)

住所：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学研究科社会交流室関西科学塾事務局

E-mail：kagaku-juku@cr.sci.kyoto-u.ac.jp
Tel：075-762-1345

日経ウーマノミクス
プロジェクト

2018年度

日経ウーマノミクスフォーラムシンポジウム

『ダイバーシティ研究環境整備と 女性研究者の未来』

参加
無料

(事前登録制)

◆ 会場 / 大阪府立国際会議場 3階イベントホール
大阪市北区中之島5丁目3-51

◆ 主催 / 日経ウーマノミクス・プロジェクト実行委員会(日本経済新聞社)

◆ 協力 / 京都大学、大阪大学、神戸大学、奈良女子大学、
奈良先端科学技術大学院大学、
大阪府立大学、関西大学、同志社大学、
立命館大学、龍谷大学、兵庫医科大学

◆ 協賛 / サラヤ株式会社、塩野義製薬株式会社、日本電産株式会社

◆ 後援 / 日経サイエンス、科学技術振興機構、産業技術総合研究所、
大阪府、理化学研究所、関西文化学術研究都市推進機構、
関西広域連合、関西経済連合会、関西経済同友会、
大阪商工会議所、京都商工会議所、神戸商工会議所、
大阪私立中学校高等学校連合会、大阪府教育委員会



2018
8/31 金
10:00-17:00

10:00~11:00 基調講演

「女性研究者としてのキャリアの築き方」

サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社 研究部 主幹研究員
大阪大学大学院 工学研究科 特任教授

福井 祐子氏



1983年サントリー入社。青いバラの開発、黒烏龍茶、伊右衛門特茶などの特保飲料、健康食品・化粧品の素材開発を担当。天然物の抽出・精製や健康に寄与する成分、特にポリフェノールの分析が専門分野。13年9月より現職。18年2月より大阪大学 特任教授に就任。

11:00~12:20

パネルディスカッションⅠ「日本の科学技術とダイバーシティ」

13:50~15:10

パネルディスカッションⅡ「女性研究リーダー育成と課題」

15:30~16:50

パネルディスカッションⅢ「教えて理系のキャリアパス」

※基調講演、パネルディスカッションは事前申込みが必要です。



10:30~16:30 大学・企業によるミニセミナー

ブース会場では、協力大学・協賛企業・後援団体によるミニセミナーを行います。

10:30-12:00 協賛企業・後援団体

13:10-16:20 協力大学の院生・学生による高校生向け「理系の学び」セミナー

※事前申込みは不要です。自由にご参加ください。

10:00~17:00 ブース・パネル展示コーナー

協力大学・協賛企業・後援団体のブース展示をしています。

男女共同参画、女性活躍推進の取り組みや大学・企業の最新情報が入手できます。

フォーラム最新情報はこちらから

<http://www.nikkei-ad.co.jp/nwpf18/index.html>

11:00~12:20

パネルディスカッションⅠ「日本の科学技術とダイバーシティ」

なぜ日本は、海外先進国に比べ女性研究者比率が圧倒的に少ないのか。研究現場が抱える問題点を洗い出し、日本があらゆる研究分野においてプレゼンスを高めるための改善点と解決策について議論する。

コーディネーター



日産サイエンス編集長

古田 彩氏



奈良先端科学技術大学院大学
先端科学研究科情報科学領域
教授

井上 美智子氏



大阪府立大学学長特別補佐
ダイバーシティ研究推進研究所長
現代システム科学域 教授

真嶋 由貴恵氏



大阪大学大学院医学系研究科
空間環境情報学共同研究講座
特任教授（兼勤）

江副 幸子氏



日本電産株式会社
生産技術研究所
企画管理部長

江角 智枝氏

13:50~15:10

パネルディスカッションⅡ「女性研究リーダー育成と課題」

ライフイベントによる離職などでキャリア形成が難しいと言われる女性研究者が、性差を感じることなく研究へのモチベーションを維持し続け、将来研究リーダーとして活躍するために必要な環境や制度について議論する。

コーディネーター



株式会社マザーネット
代表取締役社長

上田 理恵子氏



奈良女子大学理学部 教授
(奈良女子大学男女共同
参画推進機構 副機構長)

春本 晃江氏



関西大学
化学生命工学部
教授

原田 美由紀氏



同志社大学
生命医科学部
教授

飛龍 志津子氏



龍谷大学
農学部薬物生命科学科
講師

塩尻 かおり氏



サラヤ株式会社
商品開発本部/バイオケミカル
研究所 開発部 MDRG部長

川向 恵美子氏

15:30~16:50

パネルディスカッションⅢ「教えて理系のキャリアパス」

女性研究者がキャリアステージごとに抱える悩みや壁、それら課題の乗り越え方などをパネリストの実体験をもとに議論する。会場の高校生、学生・院生との質疑応答時間を設け、気付きや不安解消の共有を図る。

コーディネーター



国立研究開発法人産業技術総合研究所
開田センターバイオメディカル研究部門
先端ゲノムデザイン研究グループ主任研究員

竹内 美緒氏



京都大学
大学院理学研究科
准教授

浅井 歩氏



神戸大学
大学院工学研究科
応用化学専攻 助教

日出間 るり氏



立命館大学情報理工学部
情報理工学科
准教授

西原 陽子氏



兵庫医科大学
耳鼻咽喉科・頭頸部外科
講師

任 智美氏



塩野義製薬株式会社
研究企画統括室 戦略企画
サブグループ長

小山 美紀子氏

大学・企業によるミニセミナー

A 会場		B 会場		C 会場	
10時台		10:30-11:00	サラヤ		
11時台	11:30-12:00 塩野義製薬			11:00-11:30	関西経済連合会
13時台	13:00-13:30 日本電産	13:10-13:40	奈良先端科学技術大学院大学	13:20-13:50	大阪大学
	13:40-14:10 京都大学	13:50-14:20	立命館大学		
14時台	14:20-14:50 神戸大学	14:30-15:00	関西大学	14:00-14:30	兵庫医科大学
				14:40-15:10	大阪府立大学
15時台	15:40-16:10 奈良女子大学	15:10-15:40	龍谷大学		
		15:50-16:20	同志社大学		

お問い合わせ：ウーマノミクスフォーラム事務局 tel:06・4706・1100 (10:00~17:00 土日祝除く)



きっと誇りたくなる未来へ。

will
KYOTO
UNIVERSITY

男女共同参画推進センター
http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/



PERSON-01
近松 智子 CHIKAMATSU Tomoko
京都府立総合技術専門学校 国際情報科 卒業生

自由な学風で学んだことは自分で決めることの大切さ

国際バカロープで学んだ、学ぶ力の大切さを教わった。卒業生としての活躍についてインタビュー。

近松 智子 さん

京都府立総合技術専門学校 国際情報科 卒業生

卒業後、フリーランスとして活躍中。現在は、フリーランスとして活躍中。現在は、フリーランスとして活躍中。

当日の活動 1日 (開催日:7/27)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 2日 (開催日:7/28)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 3日 (開催日:7/29)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 4日 (開催日:7/30)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

PERSON-04
高橋 まどか TAKAHASHI Madoka
京都府立総合技術専門学校 国際情報科 卒業生

部活動で培ったチームを支える力 従業員を支える今に繋がっている

部活動で培ったチームを支える力、従業員を支える今に繋がっている。高橋 まどか さんのインタビュー。

高橋 まどか さん

京都府立総合技術専門学校 国際情報科 卒業生

卒業後、フリーランスとして活躍中。現在は、フリーランスとして活躍中。

当日の活動 5日 (開催日:7/31)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 6日 (開催日:8/1)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 7日 (開催日:8/2)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 8日 (開催日:8/3)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 9日 (開催日:8/4)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 10日 (開催日:8/5)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 11日 (開催日:8/6)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 12日 (開催日:8/7)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

PERSON-11
名護谷 希慧 NAGOYA Kie
京都府立総合技術専門学校 国際情報科 卒業生

いろいろな挑戦できるのが幸せ 「人が好き」が私のエネルギー

いろいろな挑戦できるのが幸せ、「人が好き」が私のエネルギー。名護谷 希慧 さんのインタビュー。

名護谷 希慧 さん

京都府立総合技術専門学校 国際情報科 卒業生

卒業後、フリーランスとして活躍中。現在は、フリーランスとして活躍中。

当日の活動 13日 (開催日:8/8)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 14日 (開催日:8/9)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 15日 (開催日:8/10)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 16日 (開催日:8/11)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 17日 (開催日:8/12)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 18日 (開催日:8/13)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 19日 (開催日:8/14)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

当日の活動 20日 (開催日:8/15)

10時開演、12時退場。当日は、卒業生と在校生の交流が盛んに行われ、多くの卒業生が参加しました。

たちばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center

京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）表彰式



京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）の表彰式が3月2日（金）、京都大学国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホールにて行われました。たちばな賞は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによって研究意欲を高め、我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者を育成することを目的として創設され、今回で第10回目となります。

はじめに、今村 博臣広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査の司会進行で、男女共同参画推進センター長の稲葉 カヨ理事・副学長より開会の挨拶がありました。

次に、山極 壽一総長よりたちばな賞 学生部門受賞者の森本 千恵氏（医学研究科 博士課程2年）、研究者部門受賞者の石井 美保氏（人文科学研究所 准教授）へ表

彰状と記念楯が授与され、株式会社ワコールの安原 弘展代表取締役社長より副賞の「ワコール賞」が授与されました。続いて、優秀女性研究者奨励賞 学生部門受賞者の華井 明子氏（医学研究科 博士課程3年）、研究者部門受賞者の三宅 可奈江氏（医学部附属病院 助教）へ山極総長より表彰状が、安原社長より副賞が授与されました。続いて、山極総長、安原社長が受賞者へ祝辞を述べました。

その後、たちばな賞学生部門受賞者の森本氏、研究者部門受賞者の石井氏が研究発表を行いました。

最後に、川添 信介理事・副学長より閉会の挨拶があり、表彰式及び研究発表会は盛会のうちに終了しました。



たちばな賞 優秀女性研究者奨励賞 受賞者
たちばな賞（優秀女性研究者賞）

部門	氏名	所属・身分	研究テーマ
学生部門	森本 千恵	医学研究科 博士課程2年	網羅的 SNPs 解析を利用した実践的血縁鑑定法の開発
研究者部門	石井 美保	人文科学研究所 准教授	西アフリカと南インドにおける宗教・自然・近代に関する人類学的研究

優秀女性研究者奨励賞

部門	氏名	所属・身分	研究テーマ
学生部門	華井 明子	医学研究科 博士課程3年	がん化学療法に伴う副作用を予防する非薬物介入法の開発
研究者部門	三宅 可奈江	医学部附属病院 助教	乳癌の画像診断：PETによる機能診断とマルチモダリティイメージング

“Women and Wish” フォーラム4 女性研究者の働き方・生き方を考える

3月2日（金）、国際科学イノベーション棟会議室 5a・5bにて“Women and Wish”フォーラム第4回「女性研究者の働き方・生き方を考える」を開催しました。基調講演では、大学院法学研究科島田裕子准教授が「働き方改革と女性研究者」と題し、労働時間規制、ワークライフバランス、裁量労働制についてお話しされまし

た。続いてセンターのサービス利用者を代表して、生存圏研究所田鶴寿弥子助教と医学研究科博士後期課程大西龍貴さんが講演されました。その後、女性教員懇話会より「育児・介護と業務の両立に対する女性教員のニーズ」の題で発表がありました。



平成30年度第1期研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

平成30年度1期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、19名（女性12名、男性7名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは出産・育児・介護等で、十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又は実験業務（注：教育関係の業務は支援対象外）を

補助する者の雇用経費を負担するものです。募集は、年2回（6月、12月）です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

北東北国立3大学連携推進会議連携協議会 男女共同参画シンポジウム

1月17日(水)、秋田大学にて北東北国立3大学連携推進会議連携協議会男女共同参画シンポジウム「これからもずっと輝き続けるためにパートII～多様性を活かす職場環境を考える」が開催され、本学の稲葉 カヨ理事・副学長が「京都大学の女性研究者支援を通じて」と題し、講演を行いました。



平成29年度 ワーキンググループ活動報告

広報・相談・社会連携事業 WG

主査 今村 博臣 (生命科学研究所)

広報事業では、3月2日に Women and Wish フォーラム4「女性研究者の働き方・生き方を考える」を女性教員懇話会との共催で行った。基調講演およびセンター利用者による講演に続いて、総長との意見交流をおこない、京都大学のWindow構想における本センターが果たすべき役割を再確認した。

社会連携事業としては、関西の他大学との連携で第12回女子中高生のための関西科学塾を開催した。京都大学では、11月19日に実験講座を行った。また、12月23日には女子高生・車座フォーラム2017を学内に開催した。両イベントとも多数の高校生および保護者が参加し、次世代の女性研究者としての役割を担う世代に、早い段階から大学の教員や学生と交流する機会を提供することができた。

そして、センターの活動について、ウェブサイトやニュースレターを通して、学内外に広報活動を行った。

就労支援事業 WG

就労支援事業 WG 主査 喜多 恵子 (農学研究所)

本WGの主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して、アンケートなどに示される利用者の声も考慮しながら、毎年、少しずつ改良を加えてきている。本年度中の実績は、第1期で応募者34名、利用者17名、第2期で応募者34名、利用者16名と、時期により変動はあるもののここ数年増加傾向にある。予算の制約のなかで、応募者が困難な状況にあることがわかりながら十分な支援ができないケースも増えてきている。また、ここ数回の傾向として、特任教員・研究員など比較的短い任期で京都大学に所属している研究者、特に外国人研究者からの応募が増加している。不安定な雇用、慣れない土地、家族からの援助も望めない、という状況のなかで育児や介護と研究の両立に苦慮されてい

る男女研究者も多い。

雇用形態の変化や教員のダイバーシティ拡大に適応した制度とその運用の見直しも、制度全体の拡充とともに今後の課題である。

育児・介護支援事業 WG

主査 小西 由紀子 (理学研究所)

当ワーキンググループは京都大学構成員の育児と介護に関する支援活動を行っています。今年度も4月に男女共同参画推進センター内に待機乳児保育室を開室いたしました。ここでは京都大学の学生・研究者を対象として、認可保育所に入所できなかった生後15ヶ月までのお子さんをお預かりしています。近年京都市に認可保育所が相次いで開設されていますが、依然として年度途中での保育所入所は厳しいもようで、保育室の利用者数は2月、3月には定員18名に達する見込みです。

病児保育事業 WG

主査 足立 壯一 (医学研究所)

京都大学男女共同参画推進センター・病児保育室「こもも」(以下、病児保育室)は、京都大学に在籍する全ての教職員・学生の子供(生後6ヶ月から小学校3年生)を対象とし、急な疾病により保育園/幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っています。事前登録制による運用で、登録者数はのべ1,016名、うち平成29年度の新規登録者103名と年々増加しています(平成29年12月末現在)。定員は5名(感染隔離室1名を含む)であり、平成29年度は809名の利用がありました(平成29年12月末現在)。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、定員を上回る利用希望のために断わらざるを得ない日が続くこともしばしばみられますが、利用者からは概ね良いご意見をいただいています。また、今年度も京大病院オープンホスピタルでのポスター掲示やホームページ等を通じての広報活動も継続して行いました。

連載：研究者になる！－第64回－

大きくなったら何になりたい？

農学研究科・教授 北島 薫

今年の初め、男子のなりたい職業の第1位は、野球選手やサッカー選手を超えて「学者・博士」だという某調査の結果が報道されました。そのとき、「女子は？」とか「なぜ男子のなりたい職業は報道されるけれど、女子のは報道されないのだろうか」、など、ムカっときました。この原稿を書くにあたり調べたら、小学校6年生までが対象のこの調査で女子の第1位は「食べ物屋さん」で、「学者・博士」は9位までに入っておらず残念です。私は、多分小学校の高学年ごろから、「人の能力は、男女の違いよりも個人差の方が大きい」という考えをはっきりもち、科学者になりたいと思っていました。ですから、私が研究者になるに至った根源は、さらに前に遡ります。

私の父は石油化学の技術者で、母は高卒で英文タイプを学び、二人は高度成長期の瀬戸内海の大コンビナート建設時代に職場で知り合いました。母は結婚後退職し専業主婦として、子育てに専念しました。同じ年に社内結婚などをしたカップル約40組ぐらいが揃って写っている記念写真があり、その人たちの子供たちと社宅で一緒に遊んで育ちました。ただ、「私も入れて」と、遊んでいる他の子供たちに自分から言い出せず、誰かが声をかけてくれるまでそばに立って見ている子供でした。ところが、小学校にあがると、「勉強はとても面白く、自然にできてしまう」、ということが判明し自信がつけました。両親（もちろん、仕事で夜遅くにしか帰らない父ではなく多くの場合は母）がたくさん本を読んでくれたのが、学力の下地になりました。小学校の高学年になる頃に、京葉コンビナートの建設のため父が転勤になったので、千葉の市原市に引っ越しました。その頃は、田んぼだらけの田舎で、学校の帰りに収穫後のつるに残っているえんどう豆を摘んで家に持って帰ったのがとても嬉しかったのを覚えています。中学受験とかには縁遠い環境で、親から「勉強しなさい」と言われた記憶が皆無です。成績は体育以外はダントツでしたので、「女子だから」というような制限をかけるアホな大人もいなかったのだと思います。授業中は退屈してノートの余白に落書きばかりしてました。数学などは最初の2ヶ月ぐらいで教科書を自習してしまっていたので、先生の許可のも

と参考書の問題を解いてました。この数学の先生は担任だったのですが、卒業前に「普通の人になるな」と言ってくれました。多くの男子からは補導で厳しいと怖がられていた男の先生です。一方、化学担当の女の先生は、「科学者になるのはいいけれど、化学はやめたほうがいい」と言いました。危険な薬品を扱う事もある分野は将来子育ての可能性もある女性にはちょっとね、というような説明でした。これには内心反発しましたし、今でも女の先生がそのような考えだったことが残念です。いずれにせよ、私はその頃には、生物学者になることを決めてました。

高校は男女比が1:1の進学校でしたが、運動音痴に挑戦すべくテニス部に入ったり、古典クラブで万葉集を議論したり、おしゃれな東京女子の多くとはどうもソリが合わない以外は楽しかったです。私が東大に入ったのは、女子新入生の総数が初めて200人を超えたという年でした。女子トイレの数が少なくて、講義と講義の間の休憩中に走り回ってました。男子のほうが話が合う人が多い、ということに気づけて大学は謳歌しました。私自身、女性差別の壁に直面した記憶はあまりありません。でも、数学者になりたかった友人は、「女は数学者にはなれない」、と大学院の面接で教授に言われて憤慨し別の大学の医学部に進学しました。高校時代から暇があったら大学レベルの解析問題を楽しんで解いていた彼女が数学者になったらどうなっていただろう、と今でも時々思います。私自身は「もし、英語で考えて英語で議論したら違う物が見えてくるのだろうか」、という素朴な疑問からアメリカに留学し、あとは流れに乗って研究者になる道を歩き、29年後に帰国して京都大学に就職しました。研究者になることのエッセンスは男女共通です。「他の人と違うことは長所」、「他の人の嘘を見抜き検証すること」、「他の人の見えないものを見えるようになり、それを説明すること」、というのが私の信条です。あと、私の趣味のひとつは手元にあるものを活用してレシピを開発し、見かけは悪いけど美味しい洋菓子を作ることです。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center

「女子高生・車座フォーラム2018」を12月22日(土)に開催

京都大学男女共同参画推進センターでは、京都大学の研究者や科学者の仕事を知ってもらうため「女子高生・車座フォーラム2018 知ろう、語ろう、京都大学。」を企画しています。

京都大学がどんなところなのか、大学ではどんな勉強や研究をするのか、また大学卒業後の進路にはどんなものがあるのか、などなど、さまざまな疑問に教員や学生がお答えします。

興味のある方は、右記センターホームページをご覧ください。

今年度のポスターは次のとおりです。

女子高生と保護者に響く、親しみやすいPOPな感じになっています。

日時 2018年12月22日(土) 10時~16時
会場 京都大学国際科学イノベーション棟、他
参加費 無料
募集定員 女子高校生 100名程度(先着順)
保護者 50名程度
申込方法 男女共同参画推進センターホームページより
<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>
申込期間 2018年9月25日(火)~11月22日(木)

日経ウーマノミクスプロジェクト 「女性研究者キャリアカフェ」 in 京都大学

5月17日（木）京都大学百周年時計台記念館会議室において日経ウーマノミクスプロジェクト「女性研究者キャリアカフェ」 in 京都大学が開催されました。このプロジェクトは数少ない女性研究者のネットワークづくりを目的としており、女性研究者が日々感じている疑問や課題を語り合うことを目的とし、関西の大学キャンパス等を会場に行っています。第1回目は本学で行われ、稲葉 カヨ男女共同参画担当理事・副学長より開会の挨拶があり、引き続き株式会社島津製作所の松谷 恵利氏からキャリアパスについての講演が行われました。学生、社会人など21名の参加があり、参加者からは「講演者の方をロールモデルとして知ることができ、学生や女性研究者の方にとって大変有意義な機会になったと思います」「これからの自分のキャリアパスを考えるにあたり会社とプライベートの話について、普段なかなか

か聞くことができないことを聞いて良かった」などの感想がよせられ、盛況のうちに終了しました。

<http://www.nikkei-ad.co.jp/ccafe/index.html>



ILAS セミナー「ジェンダーとセクシュアリティ」開講

平成30年度のILASセミナー「ジェンダーとセクシュアリティ」が4月から開講しました。講師3名でのリレー講義を行い、第1回目は田中 雅一人文学研究所教授よりジェンダーとセクシュアリティについての概論をテーマに、活発な意見交換が行われました。続いて粟屋 智就医学研究科特定助教より医学の視点から、山

内 淳生態学研究センター教授より生物進化から考えるとして講義が行われています。

日程：4月9日（月）～7月17日（火）

時間：毎週月曜日 5限（16：00～18：30）

場所：男女共同参画推進センター会議室



出前講義 京都教育大学附属高等学校

5月15日（火）京都教育大学附属高等学校において、薬学研究科伊藤 美千穂准教授が「薬と植物の関わり」をテーマに特別講義を行いました。講義では漢方の原料となる植物を触ったり、味を試したり生徒たちにとって貴重な体験となりました。



京都大学大学院薬学研究科・薬学部 <http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/>

男女共同参画推進センターでは、子育てと仕事や研究の両立支援を目的とした様々な取り組みを行っています。詳細、利用方法については、センターホームページをご覧ください。

<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp>

平成30年度保育園入園待機 乳児保育室「ゆりかご」開室

学生、研究者の学業、研究と育児の両立を支援することを目的とし、「保育園入園待機乳児のための保育施設」（愛称ゆりかご）を設けています。この保育施設は、自治体に保育園入園申請をおこなったが、入園待ちを余儀なくされている研究者等を対象としています。今年は4月4日から開室しています。

現時点で定員に迫るたくさんの申し込みをいただいています。



おむかえ保育

「急遽夕方に打合せが入り、保育園のお迎えに間に合わない……」などで、困っていませんか。そんな研究者・学生のために、男女共同参画推進センターでは「おむかえ保育」を民間企業に運営委託しています。保護者に代わり、センターが委託している企業から派遣された保育者（シッター）が子どもを保育機関などに迎えに行き、男女共同参画推進センターで一時的保育を行うものです。

今年度は利用料金が改定されています。

病児保育室「こもも」

病児保育室「こもも」は、京都大学教職員・学生の子供が、病中・病後のため幼稚園・保育園・学校へ登園・登校できない時、親が仕事や研究を休むことなく、子どもの保育ができる環境を提供する施設です。京都大学病児保育室では、京都大学医学部附属病院と連携し、看護師・保育士が常駐する安心できる環境において、病児の保育を行っています。

ベビーシッター利用育児支援

男女共同参画推進本部では、本学における教職員の仕事と子育ての両立支援を目的として、「ベビーシッター育児支援割引券」を発行して、ベビーシッター事業者が提供するサービスを利用した場合に、その利用料金の一部を助成しています。

今年度より対象者の変更があり昨年度は「配偶者が就労している場合の他、配偶者の入院、通院等により、サービスを使わなければ就労すること（職場への復帰を含む）が困難な状況にあること。」でしたが、今年度からは、「配偶者の就労、病気療養、求職活動、就学、職業訓練等、又はひとり親家庭であることにより、サービスを使わなければ就労すること（職場への復帰を含む）が困難な状況にあること。」となりました。

平成30年度第2期研究・実験 補助者雇用制度の利用者募集

平成30年度第2期研究・実験補助者雇用制度の利用者を募集しました。育児又は介護のために十分な研究・実験時間が確保できない研究者に対し、研究又は実験業務（注：教育関係の業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を助成します。本事業は、女性研究者に限らず、育児・介護等に携わる男性研究者も対象となります。今回の募集について、実験補助者の雇用期間は平成30年10月1日から平成31年3月末までです。

お問い合わせ先：総務部人事課職員掛
(g-e@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)

連載：研究者になる！－第65回－

医学部附属病院 麻酔科・助教 加藤 果林

●思い描いた将来は医師かバレリーナ

私が中学生の頃まで選択肢として考えていた職業は、医師かバレリーナでした。昔の私は体が弱く、長期間学校を休んだり、体育の組体操やマラソン大会に参加できなかったり……。病院にかかることが多い子どもでした。それに加え、京大の事務員を務めながら家事もこなす母に、家庭をもつ女性が働くことの大変さを聞かされ「ならば確実な資格をとろう。それなら医師だ」と。小学2年生の時には、漠然とそう考えていたように思います。

一方で、その頃から双子の姉妹の影響でバレエを習い始めました。体を動かすことも好きだったんです。そのうちバレエだけでなく、ジャズダンスやエアロビクスなどあらゆるダンスを習いました。とにかく踊ることが好きで、バレリーナになるという将来像を思い描くのも自然なことでした。しかし中学生の時、進路相談で「長く続けられる職業の方がいいのでは」と言われ、第一線で活躍し続けられる医学の道に進むことを決めました。



●研修先で見つけた運命の進路

京大医学部に進学するのは、今も昔も変わらず男子が8割・女子が2割。男子は灘や東大寺などの進学校がありますが、女子は高校の段階でそこまでの教育を受けられるところが少なく、高校受験の際は進路を決めるのにすごく悩みました。結局、選んだのは通学時間が短く勉強に支障が出ない京都の公立高校。週5日でバレエを続けながら、当時はペンを握る指の皮がめくれるほど勉強しました。大学時代は社交ダンスサークルに入って、ショーのダンサーをしたり某劇団のオーディションを受けたり。医学部の勉強は大変でしたが、そういったことができるのも最後の機会だと思い、いろいろと挑戦していました。

そしてやがて迎えた臨床研修。私たちの時代から、臨床研修期間に複数の科を経験するスーパーローテーション方式が導入され、マッチング制度によって研修先を自由に選べるようになりました。決まった研修先は西神戸医療センター。ここで私は、麻酔についてなら何時間でも話せる！というほど、麻酔科のやりがいに目覚めました。

麻酔科の業務は大別して、手術室での麻酔、重篤患者の呼吸・循環などを保つICU、痛みを取り除くペインクリニックの三つです。手術時には知識と技術と薬剤を駆使して片肺だけを換気したり、一部の神経をブロックしたり、全身麻酔だけでなく下半身麻酔を施行したりします。また緊急時には手術室の司令塔としてチームをまとめます。いつどの科に呼ばれるかわからない上、呼吸のこと、循環のこと、脳神経のこと、薬剤のこと……全部を理解していないとできない。麻酔科医は、職人であり救命のスペシャリストだと思いました。



●麻酔科医の現状と女性の働き方

そんな大好きな麻酔科なのですが、慢性的に人手不足なのが実情です。その要因は科としての歴史が浅く認知度が低いこと。手術室外での鎮静依頼を受けるなど多方面でニーズが高まったこと。そして高齢化社会を迎え、3人に1人が悪性腫瘍を患う今、治療の第一選択である手術の数が増加していることなどでしょうか。医学系大学の柱は教育・研究・臨床。私の研究テーマは周術期における感染症制御なのですが、臨床や子育てで限られた時間しかない今、できることを常に心がけています。その一つが「手指衛生の声かけリーダー」。周術時の手指衛生を徹底するという簡単なことで、感染症のリスクは大幅に下がるということを示したいと思っています。

麻酔科は比較的女性の比率が高い科です。オンオフがはっきりしているのも、9時5時で帰ることもできるし、扱う薬剤がシンプルなので、病院が変わっても働きやすい一方で、専門医制度が厳しいため長期の産休育休をとることが難しく、人手不足のため小さな子どもがいても当直を望まれることもあります。手指衛生の声かけ運動のように、今後、少しずつ意識を変えていきたいですね。

編集後記

センターの会議室から医学部構内を望んだものです。奥に小さく大文字が見えるでしょうか。大文字の送り火の日、大学は休みですが、結構特等席かもしれません！



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

平成30年度2期研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

平成30年度2期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、16名（女性10名、男性6名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは育児又は介護のため、十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又

は実験業務（注：教育関係の業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を負担するものです。募集は、年2回（6月、12月）です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

伊藤公雄名誉教授が男女共同参画社会づくり功労者 内閣総理大臣表彰を受賞



本学の元男女共同参画推進室長の伊藤 公雄 滋賀県・京都府・大阪府男女共同参画審議会会長（京都大学名誉教授）が、平成30年度男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰を受賞されました。

この表彰は、多年にわたり男女共同参画社会に向けた気運の醸成等に功績のあった者や、各分野において実践的な活動を積み重ね、男女共同参画の推進に貢献してきた者などを顕彰することにより、豊かで活力ある男女共同参画社会の形成に資することを目的として、内閣総理大臣が表彰するもので、今年度は10名の方が表彰されました。

伊藤先生のコメント

『先日、「男女共同参画功労者内閣総理大臣表彰」を受けました。京都、大阪、滋賀の二府一県からの推薦ということで、大阪ではもう30年ほど、京都も20年くらい、滋賀県も合わせて10年、男女共同参画審議会（あ

るいはその前身の懇話会など）の委員として参加してきました。ここ数年は、この二府一県の審議会長をしてきたので表彰されたのではないかと思慮される。（「この審議会の会長は女性にすべきだ」と言い続けてきたが、いろいろな理由で引き受けることになった）。最初は、受賞は遠慮しようと考えたが、日本のジェンダー状況がまったく改善していないこと、さらに、経済成長のための「女性の活用」にしかみえない政府の政策を前に、表彰なんてと考えてしまったのだ。とはいえ、わざわざ推薦してくれた方々のことを考えると、拒否というわけにもいかず、めでたさも中くらいというところで、今後のジェンダー政策への一里塚として受賞させていただいた。』

先生は男女共同参画事業に長年にわたり多大な功績があり、社会全体も認めたということだと思います。先生、本当におめでとうございます。

URL : <http://www.gender.go.jp/public/commendation/souri/meibo-h30.html>



第13回女子中高生のための関西科学塾

「女子中高生のための関西科学塾」は、関西の大学が中心となり女子中高生を対象に理科実験教室などを行う企画で、2006年から開催しています。第13回目となる今回は京都大学を中心に神戸大学、大阪大学、大阪府立大学、大阪市立大学、奈良女子大学、株式会社クボタなどが参加し、開催されます。京都大学では7月22日（日）に「理系進路選択について」と題して田島 節子大

阪大学理学部長と平野 丈夫京都大学理学部長の対談が行われ、続いて4次元デジタル宇宙シアターと女性大学生との交流会があり、休憩をはさみ浅井 歩理学研究科准教授と理学研究科修士2回生の磯田 珠奈子さんの講演がありました。



無意識のバイアス Unconscious Bias をご存知ですか

こんな行動や考え方、心当たりはありませんか。

- ①女性生まれつき数学の能力に欠ける、男性は育児が苦手である
- ②〇〇大学の出身者なら、この仕事を任せられる
- ③相手が話している最中に度々口を挟む、本人の前でその人を代弁する

男女共同参画学協会連絡会は、最近「無意識のバイアス — Unconscious Bias — を知っていますか？」というパンフレットを出しました。そこにはこんな紹介があります。

「無意識のバイアス — Unconscious Bias — とは、誰もが持っているバイアス（偏見）のことです。育つ環境や所属する集団のなかで知らず知らずのうちに脳にきざみこまれ、既成概念、固定観念となっていきます。バイアスの対象は、男女、人種、貧富など様々ですが、自覚できないために自制することも難しいのです。無意識のバイアスは色々な判断をする過程において便利なショートカットの役割を果たします。特に、下記に事例として挙げたように、採用や昇進人事の場では、無意識のうちに「バイアス」が働き得ることが示されています。それでも、私たちは「無意識のバイアス」がいつ、どのように現れるかを知ること、**「評価や判断」にあたってその影響を最小限に抑えることが可能です。**

そこでは、3つのカテゴリーが紹介されています。

- その1. ステレオタイプ・スレット (Stereotype Threat) : 先入観が脳に刻まれた結果、本人や周囲の考え方に影響を及ぼすこと。たとえば、「女子は生まれつき数学の能力に欠ける」という先入観が女性の進路選択に影響を及ぼすこと。
- その2. 属性に基づく無意識のバイアス: ジェンダー、職業、学歴等で人々を集団に分け、各集団の代表的な特徴（たとえば、〇〇に強い・弱い、信用できる・できない）を想定し、そこに属するメンバーの誰もがその特徴を持つと短絡的に判断してしまうこと。身内意識とよそ者意識も、これに含まれる。
- その3. マイクロアグレッション (些細な侮辱) : 日常生活において、他人に対して横柄な態度をとること。たとえば、話の最中に度々口を挟む、目の前にいる人の存在を無視する、間違えた名前と呼ぶ等。本人に自覚がなく、対象となる人への無意識のバイアスの表れ。

無意識のバイアスは、誰もが持っているものですが、その存在を自覚することによって、弊害を抑えることも可能である、と締めくくられています。詳細は以下の URL をご確認ください。

「無意識のバイアス — Unconscious Bias — を知っていますか？」

男女共同参画学協会連絡会（2017）、

http://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2017/UnconsciousBias_leaflet.pdf

https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2017/UnconsciousBias_leaflet_eng.pdf

無意識のバイアスに関する左記のパンフレットには、具体例として、以下のような実証研究も紹介されています。

Motherhood Penalty? (母親であるゆえのペナルティ?)

能力的にも学歴も職歴も全く同じレベルで、子供の有無だけが違う管理職候補者の評価をした際、父親の方が母親より有能とみなされ、初任給の額も高い。子供のいない女性は父親あるいは子供の無い男性と同レベルかそれ以上の評価を得る傾向にあり、推薦される割合も母親の2倍近い。

女性だからというわけではなく、「母親だから」とみなす「無意識のバイアス」があることを示しています。なお、評価結果に評価者のジェンダーによる違いはみられませんでした。

S. J. Correll, et al. (2007) *Am J. Sociology*, 112, 1297-1339.

選ぶ側に女性がいなければ、女性が選ばれにくい

これは日本の例です。理工系学会の中でも比較的女性割合の高いライフサイエンス系7学会 Visibility 調査からわかってきたことです。

年会のワークショップやシンポジウムの招待講演者の女性割合とオーガナイザーの女性割合を調べたところ、オーガナイザーが全員男性の場合、女性講演者の割合は10%であったが、オーガナイザーに女性が入った場合、32%に上がったのです。この32%という値は、学会の女性会員割合にほぼ匹敵します。選ぶ側に女性がいなければ、女性が選ばれにくいという典型例のひとつです (図略)。

M. K. Homma, et al. (2013) *Genes to Cells*, 18, 529-532.

教授の推薦状には男女で違いがある!?

指導教授が書く女性候補者への推薦状は男性候補者への推薦状と比べて短く、男性候補者の推薦状には「ずば抜けて優れている (Outstanding)」、「非常に優れている (Excellent)」という優秀さを表す言葉が頻用されるが、女性候補者には「細心」、「よく働く (Hard-working)」等の態度を表す言葉が多い、といった事例が挙げられています。

“よく気がついて協力的”という「女性の役割に対する既成概念」が「無意識のバイアス」となって推薦状の内容に反映されたものでしょう。

F. Trix and C. Psenka (2003) *Discourse & Society*, 12, 191-220.

なんとなく意識しないで過ごしている中で多くの「無意識のバイアス」があるという認識だけでも大事ですが、パンフレットでは、次のような時は影響が出やすいため、留意が必要と指摘されています。

- ・ 疲れている時、判断を急いでいるとき、色々な情報で脳がオーバーロードの状態にあるとき
- ・ 候補者の中の女性割合が大変低いとき
- ・ 業績に関する正確な、あるいは妥当な情報が不十分なとき
- ・ 評価基準があいまいで、紛らわしいとき

連載：研究者になる！－第66回－

農学研究科・准教授 山根 久代

●周りの影響と消去法で決めた農学部進学

「果樹の研究をしているの!」「よく喋るようになったね!」。島根にいた頃と同窓会に行くと、現在の私によく驚かれる。農学といっても祖父が趣味で畑を作っていただけで、実家が農家というわけでもない。また、人と積極的に関わるタイプでもなく、なんとなく植物が好きで地道に何かに打ち込んでいる。そんな子どもだったから、自分は間違いなく文系より理系。でも人の命を預かる仕事は怖い。そんな私が、自分に向いていることで人の役に立つには……。そう考えたときに、出した答えが農学部への進学でした。

私の地元には高校が一つしかなく、大学を目指す人は文系・理系問わずそちらの理数科に進学するという環境でした。そのため、クラスに女子はそれなりにいましたが、理系大学を目指していたのは二人だけ。私自身、特に志望校はありませんでしたが、2・3年時の担任の先生が熱心に偏差値の高い学校を勧めてくださったこと、そして周囲の志の高い生徒につられる形で京大を受験しました。今思えば、私の人生はその時の担任の先生が形作ってくださったのかもしれません。



●「面白いこと」に打ち込んだ学生時代

大学に入学してからは真面目に学業に専念しました。と、言いたいところですが、実は学生の特権!とばかりに、それまで縁のなかったアーチェリーに打ち込んでいました。「アーチェリーは大学に入ってから始める人が多いから、頑張ればインカレに出られるかも」という言葉に誘われての入部でした。波は激しかったですが、実際にインカレに出場し、関西の新人戦で2位という成績を残せたのは自分でもびっくり。研究に没頭し始めたのは、4回生の春に部活を引退してからでしょうか。

その頃の農学部は、今とは違う細分化された学科体制で、研究室も作物別に分かれていました。私が入ったのは作物生産を研究する農学科。それぞれの先生が稲・野菜・果樹と、専門の作物を詳しく教えてくださり、学生実験では実際に対象作物に触れて育てて研究していました。当時は見聞きするものがすべて楽しくて仕方



なく特に果樹園芸は育てる環境が身近になかった分、より魅力的に感じ、私のやりたかったことはこれだ!と自分に合っていると確信しました。

研究者になることは悩みましたが、結局決断した理由も、修士の時に与えられたテーマが先端的で面白かったから。毎日遅くまで残って実験を繰り返し、学会で発表すると皆さん熱心に聞いてくださるので、「もう少し頑張ればもっと興味を持ってもらえるかな」のその繰り返しでどんどん研究にのめり込んでいきました。



●女性研究者としての損得は半々。自分らしい道を進んで

現在は、10年前から行っている植物の休眠現象の解明に加え、消費者をターゲットにした、より美味しいブルーベリーとライチを作るための研究も行っています。果樹を相手の研究は、きちんと育てるところから始めなければいけない上、結実するその時に何らかのデータを得なければ、また1年後を待たなければいけない。そういった意味では、論文の本数で研究の進展を測られると厳しいものがあります。また、他分野の女性の先生方も同じだと思いますが、子育てをしていると時間の壁にぶつかることが多々あります。現在は「自分がやることをやる」と割り切っていますが、研究を主としたい女性研究者の場合、講義の量をオフィシャルに減らすなどの対策があってもいいのかもしれませんが、とはいえ、研究助成制度のなかには女性研究者向けのものがあっても思っているので、結局、研究者の性別によるメリット・デメリットは半々でしょうか。楽天的かもしれませんが私はそのように考えます。最近は「ノケジョ（農学系女子）」という言葉が巷で囁かれるように、農学の道に進む女子は増えてきています。自分の価値観を大切に個性を生かし、周りに惑わされず、どんどん目指す道を進んでもらえたらと思います。

編集後記

虫干し中!! センターには3台のお散歩カートがあります。保育室〜ゆりかご〜の待機乳児用のお散歩カートです。天気の良い日には虫干ししていつでも使えるようにしています。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center

全学共通科目（後期）「ジェンダー論」開講

落合 恵美子教授の全学共通科目「ジェンダー論」が開講しました。現代日本のジェンダーを広い視野に位置付けて理解し、問題解決の方法について自ら考える力の獲得を目指します。適宜ゲストスピーカーを招き、様々な観点からジェンダー問題の状況や課題、将来の見通しなどについて講義いただきます。



平成30年度10月開催 全学共通科目（後期）
「ジェンダー論」 講師・テーマ一覧

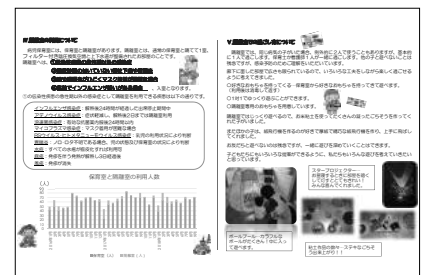
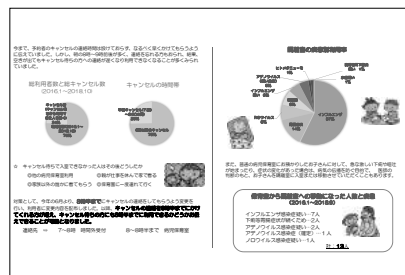
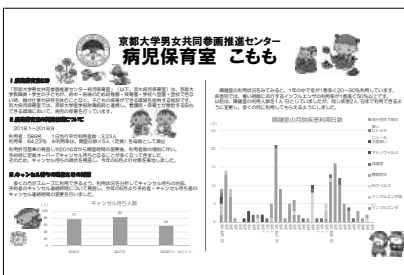
講義日	テーマ
10月1日	導入
10月15日	女性は昔から主婦だったか
10月22日	近代家族の成立と変容
10月29日	世界の中の現代日本家族 変化したことしないこと
11月5日	現代日本の子育てはなぜ難しいのか
11月12日	伝統を問い直す 二つのアジア
11月19日	ジェンダー平等と父親の育児休業
11月28日	文学とジェンダー
12月3日	LGBTとSOGI
12月10日	男性性と暴力
12月17日	ジェンダーやセクシュアリティにまつわる悩み
1月7日	男性のワーク・ライフ・バランス
1月15日	歴史とジェンダー
1月21日	まとめ

ゼミの時間：月曜日 3限（13時00分～14時30分）
ゼミの場所：吉田南構内 国際高等教育棟31

附属病院 オープンホスピタル

11月10日（土）10時から16時まで医学部附属病院外来棟アトリウムホールでオープンホスピタル（病院見学会）が開催されることになり、そこに病児保育室「こもも」がポスター参加することになりました。議題は「キャンセル待ちの現状とその対策」「隔離室とは～隔離室の利用状況と隔離室での1日の過ごし方～」です。

病児保育室でのキャンセル待ちの現状やその対策について詳しく紹介していますので、是非お越しの際はお立ち寄り下さい。



総合人間学部 人間・環境学研究科講演会「豊かな男女共同参画に向けて」

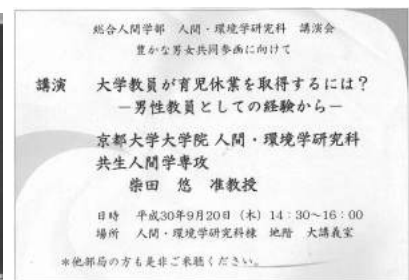
9月20日(木)14:30から人間・環境学研究棟地階大講義室において、大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻柴田 悠准教授により「大学教員が育児休業を取得するには?—男性教員としての経験から—」と題して講演がありました。

柴田准教授から、「育児休業を取得してよかった」というコメントで始まり、大学男性教員の取得率の低さ、制度の概要、取得方法などご自分や周りの方のご苦労があったことを話され、育児休業取得のためには周りの方々の理解がいかに助けになったかを講演されました。

講演後は、参加者から全共科目に関してや部分休業に関してなど多くの質問があり、関心の高さがうかがえました。

最後に研究科長からは、「人間・環境学研究科の男性教員育休取得者の最初の一人として開拓していただき有難う」とコメントをいただきました。終了後、柴田先生の奥様がいらしゃったのでお聞きしたところ「育休を

取得してもらってありがたかった」とコメントされました。



参考：http://www.kyoto_u.ac.jp/ja/about/gender_equality/07.html

2018年度日経ウーマノミクスフォーラム 「ダイバーシティ研究環境整備と女性研究者の未来」

8月31日(金)大阪府立国際会議場において、2018年度日経ウーマノミクスフォーラム「ダイバーシティ研究環境整備と女性研究者の未来」が開催されました。京都大学も協力大学として参加しました。大学法人にとどまらず私学、一般企業、大阪府、関西経済連合会など多くの協賛企業や後援団体が参加して、女性研究者がキャリアステージごとに抱える悩みや壁、それらの課題の乗り越え方などを議論し、参加者に対し気づきや不安解消法の共有を図りました。

メインホールでは、基調講演に始まり、3つのパネルディスカッションの中のⅢ「教えて理系のキャリアパス」に大学院理学研究科の浅井 歩准教授が参加し意見交換しました。また、ミニセミナーには、理学研究科宇宙物理学教室の学生町田 亜希さんが参加し、「宇宙天気がなんだろう?」と題して、多くの女子高生などにアピール

しました。当日は、団体受付を行った女子校もいくつかあり、一般の方を含めて500名の参加がありました。本学も質疑応答や資料等を配布し、本学受験に強くアピールしました。



男女共同参画推進センターでは、下記のような教員の応援を行っております。このような取り組みがありましたら、ぜひ男女共同参画推進センターまでお知らせ下さい。

北関東女子高校生受け入れ

7月25日（水）から27日（金）にかけて大学院理学研究科では、数学・物理、化学・地学グループの二手に分かれて埼玉県立熊谷女子高、茨城県立水戸第二高、埼玉県立川越女子高、群馬県立前橋女子高の4校13名が理学研究科を訪問しました。花山天文台では、大学院理学研究科浅井 歩准教授から講義を受けたのち、天文台内部を見学しました。女子高生たちには、現場でしか味わえない驚きと感動を味わってもらいました。



盛夏の薬学生研修会

8月3日（金）13時から左京区にある武田薬品工業株式会社京都薬用植物園において、薬学生の研修会が開催されました。大学院薬学研究科の伊藤 美千穂講師が講演され、ニッケイ（桂皮の基原植物）の皮むき体験、

精油定量、園内見学と研修、Cinnamomum 属植物の成分をTLCで見る試験など多くの研修を行いました。暑い中、参加者からは、この研修は他にはない実体験があり参加して本当によかったとコメントがありました。



四天王寺中学校訪問

医学部人間健康科学科は、毎年多くの中高生の訪問を受け入れています。8月20日には、私立四天王寺中学校（女子校）より中3の生徒さんと教員の方あわせて約100名が本学科を訪問されました。同校は医療系志望者が多い学校で、キャリア支援の一環として3年前から本学医学部を訪問されています。医学部、薬学部のOGに引率されて11のグループに分かれて研究室を訪問し、最先端の研究を見学しました。その後、本学科で医療技術を体験し、最後のOG講演会では、進路や勉強について悩んだ体験や大学生活など幅広く聞いてもらい

ました。今後も、女子中高生の皆さんが多様な職業について知る機会を持つために、私たちが協力していこうと思います。



連載：研究者になる！－第67回－

東南アジア地域研究研究所
社会共生研究部門・准教授 帯谷 知可

●研究者につづく道でもあったシルクロード

幼い頃の自分が、大人になって研究者になっていると知ったら、きっと驚くでしょう。なにしろ小学生時代は水泳やマーチングバンド、ポートボールなどのクラブ活動をして、常に動きまわっている子どもだったので。中高生の時もテニスに打ち込んでいたので、研究の道に進むとは思っていませんでした。ただ、小学校低学年から英語教室に通いはじめたことがきっかけで外国語に興味があわき、通訳など海外と関わる仕事に就きたいと思っていました。

多感な高校時代、井上靖の西域小説などをよく読み、シルクロードに憧れました。初めてNHK特集のカメラが敦煌などの遺跡に入った時期とも重なりました。そして外国語大学に進学し、ロシア語を専攻。最初はスペイン語を選択するつもりでしたが、実はやむなくロシア語になってしまったのです。今の専門からするとこの選択が重要な分かれ道でした。

ロシア語を専攻する学生のなかには、ロシア文学を愛読している人や社会主義思想に興味をもっている人もいました。私はほとんど事前の知識なく勉強を始めましたが、ロシア語の美しい響きに惹かれました。そんな時に授業でプラトーフの小説『粘土砂漠』が取り上げられ、ソ連の中の中央アジアに関心をもちました。ロシア革命後に中央アジアで起こった反ソヴィエト運動「バスマチ運動」を卒論のテーマにしました。

●ソ連解体後の激動の時代にキャリアも動きだす

もっと深く中央アジアのことを学びたいと思い、1年間の研究生時代を経て大学院へ。この時期にイスラーム世界からの視点で中央アジアを考えるアプローチや、中央アジアの言語で書かれた史料を使った近現代史研究といった新しい動きがでてきたことに刺激を受け、本格的に中央アジア近現代史研究を志すことになりました。ソ連解体という激動の時代を目の当たりにしたことも大きな影響を受けました。ソ連解体後、ロシア以外の旧ソ連地域に関心が集まり、まだキャリアもないのに事典項目執筆などの仕事をさせていただくようになり、その後ウズベキスタンに日本大使館ができると、専門調査員として勤務することになりました。当初は政治経済情勢分析の辞令をもらいましたが、当時の大使から文化広報担当に任命され、試行錯誤しながら日本文化紹介事業の運営などを行いました。この時に築いたネットワークが今の研究活動にも役立っています。

任期を終えて日本に戻ってからは、国立民族学博物館地域研究企



画交流センター（当時）で、グローバルな課題についての共同研究のオーガナイズなどを担当しました。こうした経験を積むなかで、ウズベキスタンが独立後の国づくりの過程で直面している課題と、ロシア革命後の中央アジアの社会主義的近代化の歴史が重なり、現在の研究スタイルができてきました。

●研究者も生活者であることを大切に

現在は、ウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国のモダニティの形成過程に関心があります。特に近年は、女性がまとうイスラーム・ヴェールを題材にして、中央アジアにおける女性解放運動の歴史、イスラーム復興と女性、現代のジェンダーの問題などについて調べています。その他にも、ロシア帝政期にロシア人によって編纂された『トルキスタン集成』という希少史料のデータベース化に携わってきました。研究の醍醐味は、断片的な情報や事柄をつなげていき、点から線になることで、何かしらの意味が浮かび上がった時のわくわくするような感覚や大きな達成感にあります。また学生に中央アジアについて話し、自分の興味に引き付けて関心をもってもらえた時も嬉しいです。

女性研究者にとって仕事と家庭の両立は大きな課題です。私も『トルキスタン集成』のデータベース化に取り組みはじめた頃に高齢出産と、ほぼ一人での育児を経験することになり、最も育児が大変な時期は、フィールドで飛び回るよりは子どものそばで、と切り替えました。職場の温かい雰囲気や育児経験者のサポートのおかげで、研究活動を続けることができました。現在は当研究所の男女共同参画推進委員会に参加して、小さな子どもをもつ教職員が無理なく働ける環境づくりに努めるとともに、男女共同参画のための広報活動にも取り組んでいます。育児支援も年々拡充されてきているので、研究と家庭の両立は確かにとても大変ですが、大変な分、豊かでもあるので、恐れずチャレンジしてほしいです。「研究者も生活者であることを大切に」というある先輩女性研究者の言葉を私も大事にしたいと思っています。

編集後記

台風の忘れ物

今年は台風の直撃もあり、ついに臨時休園となりました。利用者の皆様にはご迷惑をおかけしました。

通勤途上の道にも台風の忘れ物が。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center



Topic 1 研究集会の託児所開設

学会などの研究集会で託児所が併設されるケースが増えてきました。以前までは認められていなかったのですが、科研費 FAQ に託児所利用に関する項目（脚注 1）が追加されたのをきっかけに、休日出席や出張の際の託児所利用料について科研費などの研究費から支出することができるようになってきました。

一方で、研究集会を主催する立場から考えると、ある程度の規模の学会ならともかく、研究者が個人で開催する小集会で託児所が必要な場合はどうしたらいいでしょうか？男女共同参画推進センターが提供する情報、部局によるサポートなど、京都大学における現状と事例をまとめました。



1) 予算は？場所は？

保育室は学会会場にできるだけ近いほうが利用者にとって安心です。鍵がかかる必要は無いですが、安全を確保できること、何かあった時のためにプロの保育士を雇うことが重要です。アジア・アフリカ地域研究科のケースでは、研究科内に臨時保育室を設置し、派遣のベビーシッター利用料（保育士 1 名、3 時間で 1 万円程度）も部局内の補助費から賄われました。研究科内には、会議室も託児室として利用できるように、床マットが常備されています。

2) 男女共同参画推進センターが提供できること

同センターにご相談くだされば、いくらかお手伝いできることがあるかもしれません。たとえば、京都市内で利用実績のある業者の情報を提供したり、可能な範囲で玩具や備品を貸し出したりすることができます。まずはお問い合わせください（TEL：075-753-2437 Email：w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp）。

3) 研究費が利用可能？

補助事業に関連した研究集会を主催する場合、会場内への託児施設設置に係る費用を科研費の直接経費で支出することはできるでしょうか？これについて、科研費 FAQ に託児所設置に関する項目（脚注 2）が新しく追加されており、「当該研究課題の遂行上必要である場合には支出することができる」とあります。ただし、複数の研究費の補助を受けている場合など、実際に可能かどうかは個別の事情によるかもしれません。

育児介護支援事業 WG では、育児について新たな支援の可能性を模索すべく、コラム「みんなどうしてる？」を立ち上げました。このコラムでは、託児所問題以外にも情報を集約・発信していきたいと考えています。こんなサポートを受けたことがあるよ、こういうサポートがあったらいいな、などなど、コメントをお寄せくださると有難いです（専用アドレス：ikwg@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp）。また、コラムの内容は男女共同参画推進センターの HP にてアーカイブしていきます（www.cwr.kyoto-u.ac.jp）。

（文責 育児介護支援事業 WG）

脚注 1) http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/hojyo/faq/1400781.htm

脚注 2) http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/hojyo/faq/1378892.htm

栃木県立宇都宮女子高等学校 京都大学訪問

11月9日（金）9：00から栃木県立宇都宮女子高等学校文理混合の24名の生徒が、昨年に引き続き稲葉 カヨ男女共同参画・国際・広報担当理事、副学長の講義・京大紹介の後、卒業生（文理、大学院生含む）6名との懇談を行いました。

稲葉理事からは京大の紹介とともに、在学生在がどのよ

うに意識が高く自由の校風に沿った楽しみ方をしているかなど動画で紹介されました。その後卒業生との懇談では、京大を志望した理由、京大の魅力、アドバイスなどを身近な存在として意見交換しました。生徒からは勉強の方法など細かい質疑が交わされ有意義な時間となりました。



特別授業 岡山県立岡山操山中学校

11月16日（金）に岡山県立岡山操山中学校の生徒31名、引率教員1名が農学研究科を訪問しました。

農学研究科の講義室にて、山根 久代准教授が講義を行いました。果樹・果実についての研究内容、ワークライフバランスについて話され、「温暖化が進んでも、開花可能な果樹生産技術の開発をすることを研究の目標にして頑張りたい。」「仕事と家庭の両立は大変だが、両立しながら研究の第一線で活躍したい。」と述べられまし

た。そして、4種類の柿からどの柿が甘いかを当てるミニ実験を行いました。タンニンプリント紙を使って調べることで、甘・渋柿の見分けができることが分かり、生徒達からはおもしろいと歓声上がり、大いに盛り上がりました。

その後、柿の果樹園や農学研究科の研究室の見学を行い、参加した生徒は熱心に先生の話に耳を傾けていました。



亀岡市立詳徳中学校 出前授業

10月23日（火）、理学研究科の浅井 歩准教授が亀岡市立詳徳中学校の3年生 105名の生徒に向けて「子どもの知的好奇心をくすぐる体験授業」を行いました。太陽活動の地球への影響などについてわかりやすく話され、生徒達は興味深く話を聞いていました。



生徒からのアンケートには、「宇宙は私が想像できないくらい大きくて、すごく研究しがいのある分野だと思いい、宇宙のことに興味を持ちました。」「太陽にはまだまだわからないことが多く、神秘的なものだということを知りました。」など様々な感想がありました。

女子高生・車座フォーラム2018

12月22日（土）10：00から、京都大学国際科学イノベーション棟シンポジウムホールにて「女子高生・車座フォーラム2018」を開催しました。このフォーラムは、男女共同参画推進センターが中心となり、女子高生に京都大学の研究者や科学者の仕事を知ってもらおうという企画です。今年で13回目の開催となり、高校生

109名、保護者66名の参加がありました。お越しいただいた皆様、この度はご参加いただきありがとうございます。

当日の詳しい内容につきましては、「女子高生・車座フォーラム2018 特集号」を発行し、HPにも掲載致しますので、そちらをご覧ください。

Women and the Worldフォーラム

3月4日（月）11：30～13：00にWomen and the Worldフォーラムを開催します。ランチミーティングと

なりますので、昼食をご持参ください。詳細につきましては、後日HPでお知らせ致します。

懇話会セミナー開催のお知らせ

日時 2019年2月14日（木）12：30～14：00頃（入退室自由）

場所 京都大学吉田泉殿1階セミナー室

講師 木下 彩栄氏（医学部人間健康科学科教授）

演題 「認知症の病態と予防から近未来の治療まで」

京都大学の関係者ならどなたでも参加可能です。

参加申込み・お問い合わせは、研究会担当 浅井まで（理学研究科 email: asai@kwasan.kyoto-u.ac.jp）。

女性教員懇話会は、本学における女性研究者相互の親睦・交流等を目的として、1981年に設立された団体です。

連載：研究者になる！－第68回－

京都大学学生総合支援センター
特定准教授 松尾 寛子

●思ってもみなかったキャリア

北海道大学大学院修了後、株式会社リクルートに入社し、人事システムや能力測定、人材育成に関わっていました。その後、東京から関西に拠点を移し、京都大学大学キャリアサポートセンター（当時）で7年間勤務。高知大学に教員として赴任して2年間を過ごした後、京都大学に戻り、学生総合支援センターで京大生のキャリア教育や就職支援を担っています。キャリアのスタートが民間企業であることや「学生総合支援センター」という耳馴染みのない部署にいるため、「研究者」のイメージからは少し離れているかもしれませんが、私自身、数年前まで大学教員になるとは思っておらず、大学で学生を前にしていると、今も不思議な気持ちになることがあります。

●学生時代は大規模データの分析とスノーボード

学生時代は行動計量学を専攻していました。専攻希望調査の時点では、認知系の心理学を選択するつもりでしたが、研究室説明会で急遽変更。今もご指導いただいている大津 起夫先生（現・日本入試センター 試験・研究統括官）との出会いでした。配属後、ほぼマンツーマンのご指導のもと、学部・大学院を通じて“The Bell Curve”の再分析を行いました。数十万件のデータを分析し、人々のどんな属性や経歴が高収入に結びつくのかを探る研究で、社会学では階層研究と呼ばれる分野です。この時期に統計分析の基礎を学べたことにはとても感謝しています。

研究と並行して熱中したのが、スノーボードのアルペン競技。「せっかくなら北海道らしいスポーツを」と始めたところ、たちまち夢中になり、社会人チームに参加していました。インストラクターの資格も取り、遠征費用をレッスンで稼ぐ「雪山サイクル」で、学部生時代は一年の半分以上をスキー場で過ごしました。完全燃焼したせいか、北海道を離れてからは一度もスノーボードはしていません。



●点と点がつながっていく楽しさ

大学院修了後、入社したリクルートでは出版事業を希

望しましたが、配属は予想外の人事システムコンサルティング部門。希望の配属ではありませんでしたが、学生時代のデータ処理の経験からデータベース構築やプログラミングに難なく馴染め、自分の中では「点」であった大学の研究が今の仕事と「線」で繋がった感覚がありました。その後、適性検査の開発や人材育成コンサルティングにも関わりましたが、統計の知識が応用できたり、システム構築の経験がサービス開発のきっかけになったりと、点と点が繋がることで仕事を楽しく続けられたように思います。

キャリア理論の中で「計画された偶発性」という概念があります。ごく簡単に言い換えると「キャリアは用意周到に計画して形成されるものではない。大半が予想せぬことの積み重ねでできている」という考え方です。私のキャリアは計画性なし。これからも偶然起こることを楽しみつつ、歩んでいきたいと思っています。

●研究テーマは日本の新卒採用と大学生のキャリア形成

日本の新卒採用は「大学生が同じ時期に、一斉に、就業後の業務を指定されずに就職活動をする」という点で他国と異なります。また政府や大学、企業が採用活動にルールを設ける動きも特徴的です。最近話題になっている「守られない」採用活動解禁日の設定は100年近く前から幾度となく繰り返されてきています。これらの制度がなぜ日本社会に深く根付き、継続されているのか、そして、この制度のもとで就職活動をした大学生のその後のキャリア形成はどうなっているのかを明らかにしたいと思っています。その上で、日本の就職・採用活動の改善に向けて何らかの提言ができれば本望です。

近年、女性が牽引する社会運動が世界的に大きな影響力を持ってきています。こういった運動とその影響力を見るにつけ、自分に課された責任を果たすことについて考えます。多様性を認め合いながら一人ひとりがいきいきと働ける社会の実現に貢献したいと思っています。

編集後記

育児介護支援事業 WG では、育児について新たな支援の可能性を模索すべく、コラム「みんな どうしてる？」を立ち上げました。コメントをお寄せください。詳しくは HP で。

Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
HP http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center

女子高生・車座フォーラム 2018

※当日欠席があったため、ニュースレター 81 号掲載の車座フォーラム参加人数から変更しています。

12月22日(土)国際科学イノベーション棟シンポジウムホール等にて「女子高生・車座フォーラム 2018」を開催しました。このフォーラムは、男女共同参画推進センターが中心となり、女子高生に京都大学の研究者や科学者の仕事を知らせてもらうという企画です。今年で13回目の開催となり、高校生99名、保護者55名の参加がありました。今年度は、午前に大学紹介と女性研究者・卒業生の講演、午後にグループワーク、保護者と京都大学学生との交流会・入試の説明がありました。



今村 博田男女共同参画推進センター広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査の司会進行のもと、はじめに、稲葉 カヨセンター長、理事・副学長より開会の挨拶がありました。「京都大学は、『いきいきと輝けるような大学に』という意味を込めて WINDOW 構想の心を持っています。今、京都大学の人々がどんなことをしているのか、京都大学とはどんなところなのか、いろんな方面から知っていただきたい。そして夢と希望をもって、ぜひ京都大学に来ていただきたい。」と話し、最後に「今日一日みなさんにとって、有意義な一日であることを祈っています。」と開会の挨拶を締めくくりました。



次に北野 正雄理事・副学長が京都大学について紹介をしました。WINDOW 構想に掲げる6つの目標をあげ、「野性的で賢い学生を目指してほしい。」と話しました。京都大学の10学部について説明した上で「大学院にいくということを見視野に入れてほしい。4年で終わるのはもったいないので、ぜひ研究をしてほしい。」と述べ、最後に「自分がやりたいこと、行きたいところを自分自身で決めてほしい。大学での女性の活躍が目立っています。ぜひいろんなことにチャレンジしてほしい。」と高校生を激励しました。

引き続き、地球環境学堂の岩谷 彩子准教授が「女性と仕事 ― ロマ/『ジプシー』研究と私」の題で講演を

行いました。岩谷先生は、「古本屋で手に取った『ジプシーの魅力』という本に魅了され、翻訳された人に直接会いに行きました。」と文化人類学との出会いや、「ジプシー」/ロマ移動の歴史、ロマ女性の結婚の早さや結婚時に重視される「処女性」などのロマ社会における女性の地位について説明しました。また、自身が出会ったインドのカールベリヤー女性とトルコのロマ女性2人のダンサーとしての人生やギリシャのロマ女性について紹介しました。最後に、「私自身、育児や家事や研究など、さまざまな制約下で研究を行っています。それでも持続的にフィールドで人々と対話を続けるなかで、カテゴリーを超えた単独の個人に出会い、人との出会いによっていろんな方向にひらかれうる人間のあり方について探求していきたい」と話しました。



次に、法学部卒業生である高島 菜芭さんが「私と京大の4.5年間」の題で講演を行いました。「1・2回生の時に、国際交流プログラムを通じて様々な人とつながり、3・4年生になると自分のビジョンを探し求めるようになりました。イギリス留学をきっかけにジェンダーに興味を持ち、ロンドンのNGOや東京の国連機関でインターンをする中で、性暴力についてアプローチをしたいと考えるようになりました。」と自身がジェンダーに関する活動をするようになった経緯について話しました。「5年生になると、自分で起業したいと思うようになりました。性暴力で苦しむ人を少しでも減らしたいという思いから、ジェンダーハンドブックを作成し、性的同意の概念を広める活動を始めました。」と述べました。最後に、「自分の興味関心に関係なく、様々な人と対話をして視野を広げてほしい。自分のやりたいこと、夢中になれることを探してほしい。そして自分がやりたいと思ったら、積極的に何事にも挑戦してほしい。」と高校生へメッセージを送りました。

昼休憩後、高校生は希望学部別のグループに分かれ、総合研究8号館とイノベーション棟に移動し、グループワークを行いました。事前に高校生が記入した質問用紙をもとに、学生は受験勉強や学生生活といった実体験を語り、研究生活や専門などについては講師が回答しました。質疑応答以外にも活発な意見交換が行われ、非常に内容の充実したグループワークとなりました。

高校生がグループワークに参加している間、保護者は京都大学学生との交流会に参加しました。稲葉 カヨセンター長の挨拶の後、保護者から学生へ学校生活や学部などについて疑問に思うことを多々質問してもらい、学生が回答しました。

グループワーク終了後は再び全員で集まり、まとめの会を行いました。佐藤 亨男女共同参画推進本部支援室長の司会進行で、それぞれのグループで話し合った内容を報告し、他のグループでの話し合いについて情報共有しました。

続いて、教育推進・学生支援部入試企画課より、平成

31年度学生募集要項についての説明があり、アドミッションポリシーや入試についての説明がありました。車座フォーラム閉会後も、入試企画課と学生が残り、女子高生からの質問に丁寧に対応しました。

今年度のアンケートや昨年度の車座フォーラムの詳細内容は、後日 HP に掲載しますのでご覧ください。



グループワークの様子



文学部



教育学部・経済学部



法学部



理学部



医学部（医学）



医学部（人間健康科学）



薬学部



工学部



農学部



総合人間学部（文系）



総合人間学部（理系）



保護者（京大生との交流）

車座フォーラム参加者の声（保護者・高校生のアンケートより）※一部抜粋

- ・オープンキャンパスに続き2回目の訪問ですが、今日一日でより深く京大のことを知ることができて、大変有意義な一日となりました。
- ・入試関連の話は聞く機会が多いが、大学に入学してからの生活や研究内容の話を実役女子学生から学生目線で聞くことができる機会は貴重な経験になりました。
- ・本人が直接学生に聞くことができたので、今後のモチベーションアップにつながったと思います。
- ・インターネットで調べてもわからないようなことをたくさん聞くことができ、京大に興味を持ちました。研究者というとぼんやりとしたイメージしかありませんでしたが、自ら学び、視野を広げ、人生を豊かにすることが大切なのだと思ふことができました。
- ・好きなことを自由に学べるのがよいと感じました。私も自由の校風のもと、大学教授になるという夢をかなえたいと思います。
- ・グループワークでは、聞きたいことを全部聞けたので満足しています。他県の人とも交流することができ、よい刺激を受け、楽しい時間を過ごせました。

講師・グループ・会場

グループ	氏名	所属	研究分野	会場
文学部	山村 亜希	人間・環境学研究科	歴史地理学、過去の景観復原、城下町・港町・中世都市	総合研究 8 号館 講義室 3
教育学部	桑原 知子	教育学研究科	臨床心理学、心理療法、「もう一人の私」	国際科学イノベーション棟 ミーティングルーム 1
法学部	木村 敦子	法学研究科	民法（家族法）、生殖補助医療と法	国際科学イノベーション棟 ミーティングルーム 2
経済学部	北田 雅	経済学研究科	メンタルヘルス、医療経済学、社会心理学	総合研究 8 号館 演習室 1
理学部	常見 俊直	理学研究科	理学と社会交流、科学コミュニケーション、社会連携	総合研究 8 号館 数理会議室
	朴 昭映	理学研究科	ケミカルバイオロジー、有機化学、核酸化学	
医学部（医学）	加藤 果林	医学部附属病院	手術期感染症、腸内細菌叢、薬物血中濃度	国際科学イノベーション棟 会議室 5a
医学部（人間健康科学）	鎌田 真由美	医学研究科人間健康科学系専攻	バイオインフォマティクス、ゲノム医療、医療データサイエンス	総合研究 8 号館 演習室 2
	西山 知佳	医学研究科人間健康科学系専攻	心肺蘇生法、AED、心臓突然死、救急医療	
薬学部	三宅 歩	薬学研究科	分子生物学、発生生物学、神経科学	総合研究 8 号館 会議室 1
工学部	佐藤 亨	情報学研究科	電波工学、レーダー、イメージング	総合研究 8 号館 会議室 2
	杉野 未奈	工学研究科	建築学、耐震工学、木質構造	
農学部	山根 久代	農学研究科	果樹園芸学、植物生理学	総合研究 8 号館 講義室 4
	今村 博臣	生命科学研究科	生物物理、生化学、化学生物学、細胞生物学	
総人・文系	岩谷 彩子	地球環境学堂	文化人類学、ロマノ「ジプシー」研究	国際科学イノベーション棟 会議室 5b
総人・理系	船曳 康子	人間・環境学研究科	児童精神医学、発達行動学	総合研究 8 号館 演習室 3

学生スタッフ

グループ	氏名	所属
文学部	常盤 樹	文学部
	高橋 くるみ	文学部
教育学部	富田 一葉	教育学部
法学部	田中 茉央	法学部
経済学部	小川 早帆	経済学部
理学部	磯田 珠奈子	理学部
	東島 いずみ	理学部
医学部（医学）	向平 妃沙	医学研究科
	田端 毅大	医学部
医学部（人間健康科学）	勝島 倫子	医学研究科
薬学部	上原 茉緒	薬学部
	黒田 逸月	薬学部
工学部	西森 加奈	工学部
	切通 在菜	工学部
農学部	井上 未芙ゆ	農学部
総人・文系	寺坂 朋恵	総合人間学部（文系）
総人・理系	宮崎 瑛理香	総合人間学部（理系）

プログラム

- 10：00-10：30 受付
京都大学国際科学イノベーション棟シンポジウムホール
- 10：30-10：35 開会の挨拶
男女共同参画推進センター長
理事・副学長 稲葉カヨ
- 10：35-10：55 京都大学の紹介
理事・副学長 北野正雄
- 10：55-11：15 女性研究者の講演
「女性と仕事 ― ロマノ『ジプシー』研究と私」
地球環境学堂准教授 岩谷彩子
- 11：15-11：30 京大女子卒業生の講演
「私と京大の4.5年間」 法学部卒 高島菜芭
- 11：30-11：45 講師紹介・グループワークの説明
男女共同参画推進センター広報・相談・
社会連携事業ワーキンググループ主査 今村博臣
- 11：45-13：00 昼休憩
- 13：10-14：40 グループワーク「車座になって話そう」
高校生：講師・京大生とのグループワーク
グループワーク講師
保護者：京大生との交流 関西教育考学
- 14：40-14：50 移動、休憩
- 14：50-15：20 まとめの全体会
男女共同参画推進本部支援室長 佐藤 亨
- 15：20-15：40 入試説明会 教育推進・学生支援部 入試企画課
- 15：40-15：45 閉会、解散
- 15：45-16：30 入試に関する質疑応答（自由参加）
教育推進・学生支援部 入試企画課

連載：研究者になる！－第69回－

国際高等教育院・准教授 竹内 里欧

●人生で出会った様々な本が研究を推し進める力に

私が研究している分野は社会学です。一言で説明しようと思うと難しいですが、社会が抱える問題や現象、人間の社会的な生活などを幅広く追究する学問なので、教育や文化、歴史に産業と、いろいろなアプローチの仕方があります。

私には二つ研究テーマがありまして、一つ目は、ナショナリズムと「文明化」の関係というテーマで、博士論文では、西洋のまなざしの中で近代日本社会がどのように自画像を描いていったかということ进行分析しました。たとえば、注目した現象として、新渡戸稲造による「武士道」のブームがあります。新渡戸は、1899年に『武士道』を英語で出版し、「文明化」された「東洋の代表者」たる日本にふさわしいジェントルマンシップとして「武士道」を再構築しました。彼は何故この本を書いたのか、そこにはどのような戦略がひそんでいたのか、また、その戦略にはどのような陥穽や危うさがあったかということ进行分析しています。これに関しては、芥川の有名な小説「手巾」が研究を推し進める力となりました。「手巾」には新渡戸をモデルにした人物が戯画化して描かれているのですが、物語の最後、主人公は得体の知れない「不安」にとらわれます。この、芥川が暗示した不安は何かという謎が、分析をする上でのヒントともなっています。

そして、二つ目は、大正～昭和初期頃の家庭小説・佐々木邦の作品分析です。文化社会的な見地から、描かれた子どもや家庭のイメージを読み解いています。実は、佐々木の作品に出会ったのは小学1年生の時です。父が文系の研究者だったこともあって、家の本棚にはいろんな書籍があふれていました。そこにあった1冊が佐々木の『苦心の学友』でした。リベラルな雰囲気、上質のユーモアなど、子どもながらも面白くずっと心に残っていました。大人になって評伝的な興味から調べてみると、ユーモアに満ちた家庭小説を生み出しているのに、本人の方は冗談が苦手な真面目な性格であり、

厭世的な考えや人間観を抱いているなど、背景が複雑であり、いつかもっと深く掘り下げたいと思っています。

●日々迷いつつ

とはいえ、昔から研究者になると決めていたわけではありません。文学部に入学すると、同級生には、韻を踏んだ美しい英文をすらすら書く学生、西田幾多郎の哲学についてとうとう話す学生など志高く才気にあふれる学生もちらほらいて、こういう人こそ文学部向きなんだろうなあ、私みたいなのが入るところではない、と思いました。しかし、そうした中でも、友達の影響や背伸び心で、いい本や映画、音楽などをたくさん教えてもらって味わう時間がふんだんにあったのがよかったです。

研究の過程では迷うことが多かったのですが、一つの転機となった本は、橋川文三の『日本浪漫派批判序説』でした。自分の実存的関心と思っているものが、実は非常に世代や社会的なものに拘束されているという発見、文学的潮流と社会の接点、暗い部分に目配りした人間観など、大いに刺激を受けました。そして、それまでどちらかという小説などをただ面白く読んでいたのが、分析的思考の面白さに大変スローながら思い至りました。

(私自身、目指している途上にあるのですが)研究者になるためには、もちろん努力が必要なのですが、必ずしも努力が報われるということはありません。誰にでもおすすめできるとはいええないところがあります。現在、個人的には子育て中で、時間的制約が厳しく悩みつづきます。まわりの優しさに甘えつつ研究者としていさせていただいているので、感謝を忘れず、そこでできることを一生懸命やらなくてはと思っています。

編集後記

女子高生・車座フォーラム2018を無事終えることができました。アンケートでいただいたご意見を、来年度に生かしていきます！



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

たろばな 京都大学男女共同参画推進センター Gender Equality Promotion Center



Topic 1

研究集会の託児所開設

②アジア・アフリカ地域研究研究科でのとりくみ

アジア・アフリカ地域研究研究科 (ASAFAS) では、2015 年に「子育てフィールドワーカー WG」をたちあげ、子育て・介護等を担う研究者や事務職員の支援をしています (脚注 1)。その一環で、ASAFAS 関係者が学内で研究会などに出席する際の託児費用を助成しています。毎年、この支援のために部局内で 10 万円程度の予算を確保しており、研究会に出席する院生や教員などの要望に合わせて、臨時的託児所を設置しています。

こうした環境は、一朝一夕でできたわけではありません。アジア・アフリカの諸地域を対象とする地域研究者の集まりである ASAFAS では、フィールドワークは欠かせない研究活動です。しかし、子育てや介護を担いつつ海外のフィールドワークをするには多くの困難があり、人的・経済的資源の確保ができず、道半ばで諦めてしまうケースもありました。

そこで、同じように地域研究を柱とする部局 (当時の地域研究統合情報センターと東南アジア地域研究所) の研究者たちとのあいだで、女性地域研究者のためのより良い研究環境をめざすプロジェクトがたちあがったのが、2012 年です (脚注 2)。院生や若手研究者も積極的に参加し、その中で困難や課題が広く共有されていきました。このプロジェクトでは「会場の後方にマットを敷いて、子どもを遊ばせながらの研究会をしたこともありました」。プロジェクトメンバーの一人であった平野 美佐先生は、後に ASAFAS の子育てフィールドワーカー WG の初代リーダーにもなっています。

子育てフィールドワーカー WG 発足当時 (2015-2016 年) の研究科長であった小杉 泰先生に話を聞いてみました。「当時のことですが、そもそもそれ以前から ASAFAS の院生の男女比が均衡してきていて、男女共同参画に進まないという意識は、先生方の中でそれなりに下地はあったと思います」。本部で男女共同参画推進が本格化し、ASAFAS 内でも女性の先生方が入り始めていたということもあり、部局内で議論を提起しました。先生の決断には、学会の男女比の影響も大きかったようです。「私が若いときは、女性研究者と言えば、片倉 もとと先生とか、伝説的なパイオニアが主でしたが、2003 年に中東学会の会長になったとき、30 代以下は男女ほぼ半々という状態で、男女平等を進めないとな次の世代の将来が危ういと真剣に思い、学会の中でも機会があれば主張を押し出すようにしてきました」。

議論を進めるにあたって反対がなかったのかと聞くと、平野先生も小杉先生も、「特に先生方からの反対があった記憶はない」とのこと。もちろん、ASAFAS では当時から今に至るまで部屋不足が深刻な問題であり、色々な考えはあったらと思います。それでも、部局内での議論は比較的スムーズに進んだといいます。WG の名前でもある「子育てフィールドワーカー」という考え方を押し出し、WG の活動を進めるにあたっては、育児経験のある男性教員たちの存在がとても大きかったと聞きます。

2016 年には子連れ通学/出勤をしたときに授乳をしたり、子どもを遊ばせたりする「子育て交流室」が開設しました。子育て交流室を託児室として使うこともありますが、それ以外の部屋でも託児所設置ができるよう、市販の床マットを常備しています。稲盛財団記念館では、他部局の理解と協力を得ながら、車いす対応トイレ内にオムツ替え用の簡易ベッドが設置されました。

周囲からの理解と、ちょっとした工夫で、いろいろできることがあるのではないのでしょうか。とりくみの輪がひろがっていくことを願って、育児・介護支援 WG では今後も引き続き、情報共有をしてみたいです。

(文責：育児・介護支援事業 WG)

脚注 1) <https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/kosodate/>

脚注 2) http://www.jcas.jp/about/renkei_josei.html

東南アジア地域研究研究所 ジェンダー・セミナー

11月26日(月)・27日(火)に、京都大学稲盛財団記念館にて「東南アジア地域研究研究所 ジェンダー・セミナー」が開催されました。今回のゲストであるマレーシア・マラヤ大学のS.タンビアフさんが、自身の研究テーマや大学、研究機関での男女共同参画や子育て支援などについて講演しました。育児・介護支援事業

WGの矢野主査と吉永推進員が参加し、学内のジェンダーの状況について報告し、意見交換を行いました。



日経新聞に掲載 大学院 医学研究科 木下彩栄教授

1月28日(月)の日経新聞朝刊「折れないキャリア」というコラムに、医学部で認知症の病態や在宅看護を研究している木下 彩栄教授が掲載されました。このコラムは、毎月最終月曜日に女性キャリアを支援するために連載されている記事です。その中で、木下先生は

「女性医師自身が『子育ては女性の仕事』との意識から抜け切れていない」と話され、「目標を持ち、そのときどきを楽しみながらキャリアを伸ばして」と女性医師・研究者にエールを送りました。



平成31年度第1期研究・実験補助者雇用制度 利用者決定

平成31年度第1期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、14名(女性11名、男性3名)の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは出産・育児・介護等で十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又

は実験業務(注:教育関係の業務は支援対象外)を補助する者の雇用経費を負担するものです。募集は、年2回(6月、12月)です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請ができます。

佐藤 亨 男女共同参画推進本部支援室長 退任の挨拶

ジェンダー論で高名な先任の伊藤 公雄先生とは異なり、男女共同参画とまったく縁のない仕事をしてきた私が女性研究者支援センター(当時)のお手伝いを始めたのは、所属する工学部電気系教室の女性教員が私の妻が研究者であることをご存知で、「働く女性の夫」の立場でよいから、と勧誘された、というはなはだ個人的な事情でした。2009年度から就労形態検討WG(現就労支援事業WG)に参加し、伊藤先生のご退職に伴い昨年度から支援室長を勤めさせて頂きました。

毎年就労支援事業の募集に寄せられる多数の申請書に切々と書かれた、女性研究者を取り囲む厳しい現状を読んで、この国がいかになに遅れているかを痛感して参りました。10年が過ぎてもその状況には目に見える変化がないように思われます。私自身、申請書を機械的に処理する以上の貢献を何一つできずに勤めを終えようとし

ていることに忸怩たる想いです。男女差別という問題の根深さと共に、政府の唱える女性活躍社会とは何かに大きな疑問を抱いてしまいます。

しかし、問題が根源的であるだけに、解決に長い時間と多く

の人の継続する意思が不可欠なのは明らかです。「持続可能な活動」こそが重要だと思います。幸いなことに支援室には、若い男性教員も含め多くの強力なメンバーにご参加頂き、日々この問題に取り組んで頂いています。これらの活動がいつか実を結び、京大は男女を問わず働きやすい職場であると、構成員のすべてが感じる日が来ることを祈っております。



平成 30 年度 ワーキンググループ活動報告

広報・相談・社会連携事業WG

主査 今村 博臣

広報事業では、3月4日にWomen and the World フォーラム5「総長と語る！研究者のワーク・ライフ・バランス」を女性教員懇話会との共催で行い、総長との意見交流をおこないました。また、センターの活動について、ウェブサイトやニュースレター「たちばな」、研究者紹介の冊子「未来に繋がる 青いリボンのエトセトラ」、卒業生紹介の冊子「Will」を通して、学内外に広報活動を行いました。

社会連携事業としては、京都大学主催で関西の他大学と連携し、第13回女子中高生のための関西科学塾を開催しました。京都大学においては、7月22日に女性研究者の講演・交流会、3月16日から17日にかけては、実験から発表までを行う宿泊研修を実施します。また、12月22日には女子高生・車座フォーラム2018を学内にて開催しました。両イベントとも多数の高校生および保護者にご参加いただきました。将来を担う次世代の女性たちに、早い段階から大学の雰囲気に触れ、教員や学生と交流する機会を提供することができたと考えています。

こうした従来の活動に加え、新たな取り組みとして男女共同参画センターの基金を立ち上げることとなりました。その準備として本年度は基金のあり方についての議論を深めてきました。男女共同参画センターの基金は平成31年度に設置される予定です。

育児・介護支援事業 WG

主査 矢野 孝次

当WGでは京都大学構成員の育児と介護に関する支援活動を行っています。

今年度も4月に男女共同参画推進センター内に待機乳児保育室を開室いたしました。ここでは京都大学の学生・研究者を対象として、認可保育所に入所できなかった生後15ヶ月未満のお子さんをお預かりしています。近年京都市に認可保育所が相次いで開設されていますが、依然として年度途中での保育所入所は厳しいもようで、保育室の利用者数は1月の時点で定員18名に達しました。

今年度はWGのメンバーを増強して活動を活発化させました。積極的にWG会議を開催し、新たな支援の可能性についての議論を始めたところです。議論の中で情報発信と収集の必要性が話題に上がり、これを促進すべくニュースレターへの継続的なコラム掲載を始めることになりました。

病児保育事業 WG

主査 足立 壯一

京都大学男女共同参画推進センター・病児保育室「こもも」(以下、病児保育室)は、京都大学に在籍する全

ての教職員・学生の子供(生後6ヶ月から小学校3年生)を対象とし、急な疾病により保育園/幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っています。事前登録制による運用で、登録者数はのべ1,113名、うち平成30年度の新規登録者97名と年々増加しています(平成30年12月末現在)。定員は5名(感染隔離室1名を含む)であり、平成30年度は730名の利用がありました(平成30年12月末現在)。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、定員を上回る利用希望のために断わらざるを得ない日が続くこともしばしばみられますが、利用者からは概ね良いご意見をいただいています。また、今年度も京大病院オープンホスピタルでのポスター掲示やホームページ等を通じての広報活動も継続して行いました。

保護者からの要望を受けて、京都大学医学部附属病院感染制御部の承諾を得て平成28年4月より利用基準(利用開始時間)を変更しました。また、予約時間や事前登録方法の見直しも行った結果、より利用しやすくなったという声をいただいています。感染対策上、困難な点もありますが、京都大学職員・学生が育児を行いつつ、仕事や学業を継続することの可能な環境を実現するため、今後も引き続きよりよい運営方法を検討する必要があります。

※病児保育室では平成31年4月以降、受入対象を「小学校3年生」より「小学校6年生」に引き上げる予定です。

就労支援事業 WG

主査 喜多 恵子

本WGの主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して、アンケートなどに示される利用者の声も考慮しながら、毎年、少しずつ改良を加えてきている。本年度中の実績は、第1期で応募者24名、利用者19名、第2期で応募者24名、利用者16名と、時期により変動はあるものの、ここ数年増加傾向にある。予算の制約のなかで、応募者が困難な状況にあることがわかりながら十分な支援ができないケースも増えてきている。また、ここ数回の傾向として、特任教員・研究員など比較的短い任期で京都大学に所属している研究者、特に外国人研究者からの応募が増加している。不安定な雇用、慣れない土地、家族からの援助も望めない、という状況のなかで育児や介護と研究の両立に苦慮されている男女研究者も多い。

雇用形態の変化や教員のダイバーシティ拡大に適した制度とその運用の見直しも、制度全体の拡充とともに今後の課題である。

※平成31年度第1期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、14名の方に決まりました。

連載：研究者になる！－第10回－

人間・環境学研究科・教授 船曳 康子

●恩師の言葉を胸に刻み、我が道をひたむきに歩む

人から10年遅れをとってもいいから、我が道を進みなさい。その代わりに、先を争ってはいけない――。人生の指針となったのは、入局先の教授が掛けてくれた、この言葉でした。当時は今と違って、6回生の秋に所属する診療科を決めなければいけなかった時代。私は、その時点で人生の方向性を絞るのではなく、もう少し経験を積んでからにしたい。そして家庭も大切にしていきたいと考えていました。その希望を理解し、尊重してくださる教授に出会えたことは、とても幸せなことだったと思います。

それからはまさに我が道を選択し続けてきました。大学院では認知症の研究をしたのですが、進めるうちに“忘れる”の前段階である“覚える”から取り組みたいと思い、アメリカへ留学。小鳥を育てて歌を覚えさせ、忘れるまでの経過をみることで、ライフスパンを通した認知機構の研究を行いました。すると、思った以上に“覚える”こと、つまり発達の段階が大変という事に気が付きました。加えて、留学中に出産を経験したことで、子どもたちを取り巻く日本とアメリカの環境の違いにも興味を持ちました。アメリカは親や子に対する社会支援システムが整っていて、ハンディキャップのある方々への理解や配慮がおこなわれている。それに対して日本はどうだろう？と。その時の疑問が、今、私が行っている研究の出発点。認知症の研究者が増えていたこともあり、帰国したらこのテーマに取り組もうと決意しました。

●転身に見える選択。一つずつが繋がって今がある

ただ、一口に子どもの社会支援といっても、関わり方は多岐に渡ります。例えば行政でできることもあるし、教育学の目線からできることもある。私が思う重要なポイントは、何だろう？と考えた時、出した結論は“心”、中でも精神医学からのアプローチでした。一人ひとりの最も大変な状況を理解する必要があると考えました。さらに、発達障害など何らかの気付きのある子ども、または病気の子どものもつ親御さんは、必ずといっていいほど将来の心配をされています。その悩みに向き

合おうと思ったら、大人になった時の像を理解してないとなりません。子どもの支援だけ考えていると、「大人になったらもう知らない。」ということになりますから。

精神医学を一から学びなおし、成人のころの支援や診療もしっかりすることで、現在の子どもの支援に役立てようと考えました。

私が始めに所属したのは老年科。帰国してから精神科に移り、児童精神医学を専門とし、そして今は人間・環境学研究科で研究しています。周囲の人からはよく「なぜそんなに転身しているの？」と聞かれるのですが、私の中では転身ではなく、ひと繋がりのです。認知症を研究したから、それをヒントに子どもの社会支援の枠組みの発想につながり、それを実現するために精神医学を学んだから今がある。

現在は四つのプロジェクトを掲げていますが、メインで取り組んでいるのは、発達障害の人を支援するシステム作りや、自閉症における脳内メカニズムの解明。この研究によって、医療なら医療、社会なら社会、教育なら教育と、それぞれが単独で支援している現状を見つめ直し、総合的な支援体制を構築すること。そして、自閉症をはじめとした人への理解を深め、誤解や勘違いから起こる日常のトラブルを防ぐことを目指しています。

研究は大きな花火を一発打ち上げて、太く短くやればいい、というものではありません。細くてもねばり強く続け、長期的スパンで真髄に迫ること。それが本来の研究の姿であり、大切なことだと感じています。例外が多く、明確な答えが出にくい分野ではありますが、あきらめずにコツコツと。一人でも多くの人が過ごしやすい世の中を作るために……。

編集後記

3月は卒業の季節、そして新たな出発に向かった準備の時期です。センターでは、4月になると待機乳児の顔ぶれが一新し、少し寂しい気持ちとワクワクする気持ちが入り混じります。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

Ⅱ 「育児・介護支援」事業

育児・介護支援事業ワーキンググループ活動報告

当 WG では京都大学構成員の育児と介護に関する支援活動を行っています。今年度も4月に男女共同参画推進センター内に待機乳児保育室を開室いたしました。ここでは京都大学の学生・研究者を対象として、認可保育所に入所できなかった生後15ヶ月未満のお子さんをお預かりしています。近年京都市に認可保育所が相次いで開設されていますが、依然として年度途中での保育所入所は厳しいようで、保育室の利用者数は1月の時点で定員 18 名に達しました。今年度は WG のメンバーを増強して活動を活発化させました。積極的に WG 会議を開催し、新たな支援の可能性についての議論を始めたところです。議論の中で情報発信と収集の必要性が話題に上がり、これを促進すべくニュースレターへの継続的なコラム掲載を始めることになりました。



育児・介護支援事業 WG 主査 矢野孝次

■H30 活動記録

- 4月4日(水) 平成30年度保育園入園待機乳児保育室開室
- 5月11日(金) 育児・介護支援事業ワーキンググループ会議
- 6月8日(金) 育児・介護支援事業ワーキンググループ会議
- 9月7日(金) 育児・介護支援事業ワーキンググループ会議
- 11月2日(金) 育児・介護支援事業ワーキンググループ会議
- 1月18日(金) 育児・介護支援事業ワーキンググループ会議
- 1月31日(木) 保育室利用者懇談会

京都大学男女共同参画推進センター 平成 30 年度「保育園入園待機乳児のための保育施設」利用案内

京都大学男女共同参画推進センターでは、学生、研究者の研究と育児の両立を支援することを目的とし、男女共同参画推進センター内に、「保育園入園待機乳児のための保育施設」を設けます。この保育施設は、現在、保育園の入園待ちを余儀なくされている研究者等を対象とします。運営については、民間企業に委託し、大学が一部費用を負担して実施します。

◇保育施設の概要

施設の名称: 京都大学男女共同参画推進センター保育園
入園待機乳児保育室

施設の所在地: 京都市左京区吉田橋町 京都大学男女共同参画推進センター内

受入定員: 4月～5月: 3名、6月～8月: 6名、9月～翌3月: 18名

◇保育の概要

開室期間: 平成 30 年 4 月 4 日から平成 31 年 3 月 29 日
開室日: 月曜日～金曜日 (国民の祝日に関する法律に定める休日、大学の創立記念日、大学が定める夏季・冬季休業期間を除きます。また、京都大学男女共同参画推進センター長がやむを得ない事情により必要と認めるときは、臨時に休室することがあります。)

開室時間: 9 時～18 時

時間外保育は、8 時～9 時及び 18 時～20 時までとし、別途利用料が必要です。

対象乳児: 入室時生後 9 週目～平成 30 年 3 月末時点で 15 ヶ月未満の健康な乳児 (15 カ月になる月の前月まで利用できます。)

運営体制: 運営を保育業者に委託します。

◇利用条件

利用資格: 京都大学に所属する学生、常勤の教員、研究員 (週 30 時間以上勤務、学術振興会特別研究員を含む)、医員 (週 31 時間以上勤務)

京都大学
保育園入園待機乳児

保育室

2018年4月4日開室 愛称: ゆりかご



開室期間	平成30年4月4日(水)～平成31年3月29日(金)
開室日時	月曜日～金曜日 午前9時～午後6時 (時間外保育は、午前8時～9時/午後6時～8時)
保育場所	京都大学男女共同参画推進センター
利用資格	京都大学に所属する学生、常勤の教員、研究員 (週30時間以上勤務、学術振興会特別研究員を含む)、医員 (週31時間以上勤務)
対象乳児	生後9週目～15ヶ月未満 (入室時) の健康な乳児
定員	4月～5月: 3名、6月～8月: 6名、9月～翌3月: 18名
※平成30年度新入学生・新規應任者、及び諸事情により自治体の保育所の4月入所に申し込めなかった方を優先します。	

詳細は男女共同参画推進センターのホームページで! <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/index.php>

◇利用料金 (税込、乳児 1 人あたり):

週5日利用: 50,000 円/月、学生 40,000 円/月

週4日利用: 44,000 円/月、学生 35,000 円/月

週3日利用: 35,000 円/月、学生 28,000 円/月

週2日利用: 25,000 円/月、学生 20,000 円/月

※1) 週4日、週3日、週2日の利用は、あらかじめ曜日を指定して、利用するものとします。

※2) 月の途中の入・退室は日割り (1 日 2,500 円/学生 2,000 円 (税込)) 計算も可能です。

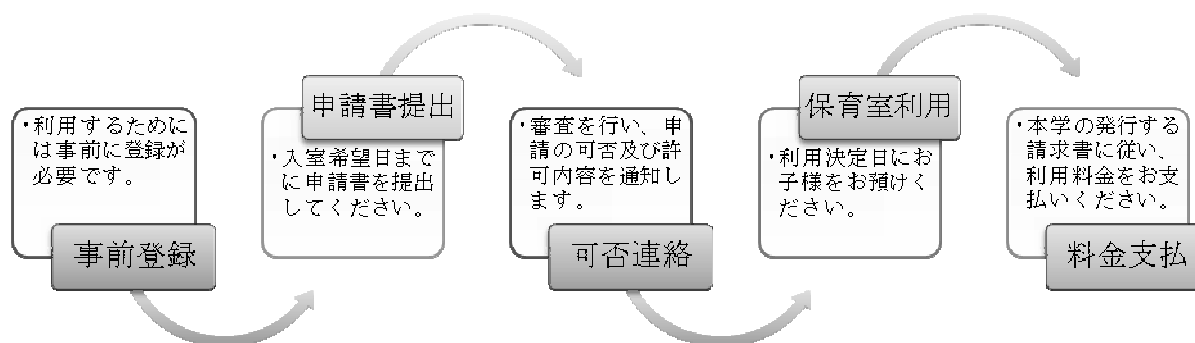
※3) 時間外保育料金は、30 分 1,000 円/学生 800 円 (税込、乳児 1 人あたり) です。

※4) 紙おむつ、ミルク、おやつ、食事等は利用料金に含まれませんので保護者が持参してください。

※5) 双子等の複数の乳児が利用する場合の利用料金は、乳児 1 人当たりについて、所定の利用料金に 80/100 を乗じた額とします。

入室申込: 1 ヶ月単位での申込みとします。但し、入・退室の月はこの限りではありません。

◇利用方法



1. 事前登録

利用希望の方は、別紙 1「事前登録票」に必要事項を記入のうえ、事前登録を行ってください。事前登録票は、ホームページ (<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp>) からダウンロードし、メールで送付することもできます。

送付先:京都市左京区吉田橋町

京都大学男女共同参画推進センター保育室利用係

メールアドレス:w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

(注) 定員を超えることが予想される場合は、先に事前登録した方の利用が優先されます。

2. 保育室利用申請書提出

原則として、入室希望日の 1 ヶ月前までに、別紙 2「利用申請書」・別紙 4「健康・身体状況伺い書」を提出してください。送付先・方法は事前登録と同様です。ただし、特別な事由のある場合は、事前登録票と合わせて、入室希望日の 1 ヶ月以内の提出も受け付けます。なお、申請事項に変更が生じた場合は、別紙 3「利用変更申請書」に変更内容を記載し提出してください。

なお、保育室入室までに自治体が発行する利用不可通知の控えを提出する必要があります。

3. 申請結果通知書の交付

受入の可否については書類審査を行って決定し、男女共同参画推進センターから申請者に「申請結果通知書」によりお知らせします。

4. 保育室の利用

保育室の利用については、「保育室利用の手引き」及び「京都大学男女共同参画推進センター保育園入園待機乳児保育室利用規程」を遵守し、利用してください。

5. 料金の支払い

利用者は、所定の方法で定められた期日までに、本学が発行する請求書によりお支払いください。

*利用登録・申請において得た個人に関わる各種情報は、保育室の各業務及びそれらの業務に関する連絡・問い合わせのために利用します。

別紙一覧(省略)

別紙 1:「保育園入園待機乳児保育室」利用の事前登録票

別紙 2:「保育園入園待機乳児保育室」利用申請書

別紙 3:「保育園入園待機乳児保育室」利用変更申請書

別紙 4:「保育園入園待機乳児保育室」健康・身体状況伺い書

■保護者懇談会(2019年1月31日)



「保育園入園待機乳児のための保育室」の利用者を対象に保護者懇談会を行いました。育児・介護支援事業WG主査 矢野 孝次先生の司会進行で、10名の参加者が一緒に昼食を食べながら、子どもたちの保育室での姿をスライドで見たり、保育士さんから日々の様子や、成長の過程を教えてもらうなどして、交流を深めました。



待機乳児保育室 利用者アンケート（平成 29 年度分 回答者：14 名）

- ・ どうやってこの待機乳児保育室を知りましたか（複数回答あり）

センターの HP を見て：3 名

知人の紹介：5 名

ポスターを見て：7 名

ニュースレター「たちばな」を見て：1 名

- ・ 翌 4 月以降の状況

認可保育園・認定こども園を利用：11 名

小規模保育事業所を利用：2 名

その他：1 名

- ・ 月齢制限のため、年度途中で退室された利用者の方対象（2 名）

3 月末までの状況

自宅育児(次が決まらなかったため)：1 名

民間の託児所を利用：1 名

- ・ 利用者の声

・ 1 ヶ月だけでしたがとても丁寧に保育をして頂き、息子も親も安心して通うことができました。ありがとうございました。現在第 2 子妊娠中ですが、是非また利用させていただきたいと思っております。

・ 大変お世話になりました。父母ともに、初めての保育室がこちらのように手厚く見守っていただけるところで良かったと、感謝しています。

・ 自分達に関しては非常に満足しております。本当にありがとうございました。環境や内容も不満はありません。他のみなさんにもお勧めしたいです。

一点のみ提案させていただきます。次の認可保育園に入るにあたって、減点されるのか、加点されるのかまったくわからず、市に何回も確認しました。市から配られた書類の文面だけを読んで、こちらから何もアクションをおこさないと「30.保育園からの転園希望」となり 5 点減点された可能性もありましたが、最終的には私達は加点されたようです。市の文章から考えると 37 の項目が一番加点項目に近く、その場合第一希望に 10 点加点されるようなので、相当なアドバンテージになると思います。希望された保育園に入れなかった方もいたみたいなので、みなさんちゃんと加点されていたのか気になり

ました。この情報は切実なものなので、もう一度、市の確認をとって、事前に連絡されておくと、今後入所する人達はとても助かると思います。このアンケートでも（可能なら）次にはいる保育園の名前、希望していた順位まで確認して、その情報を共有すると、今後入所されるみなさんの参考になるかと思いました。

・保育士の方皆様の対応が非常によく、安心して子供をお願いすることができました。利用時間など、こちらがよく自分の都合で前後するのも快く対応いただいて、感謝です。

・初めての子で、生後まもなくの託児だったため不安もありましたが、同世代の友達に囲まれて、感情豊かに育っている気がします。お迎えに行くと、毎日とても機嫌が良いです。

・とても良い環境で、子も過ごせたようです。また、周りに同じぐらいの月例の子どもがいて、おもちゃを通してのやりとりなど、社会性を身につける第一歩にもなり、家で育てるより、保育室に預けてよかったです。

・京都市の保育施設は、受け入れ可能な場所では、現実的に交通の便が不便であったり、年度途中までしか預かってもらえないことがあります。安定して預かってもらえるのが一番あり難いので、利用可能枠、年齢制限をもっと上げてもらえるとあり難いです。

とはいえ、短い間でしたが大変お世話になりました。ありがとうございます。また機会があればよろしく願います。

・正直、小さな部屋でどこまで遊んでいただけるのか、と不安に思っていました。しかし、先生方はとてもやさしく、きさくで、日々新しいおもちゃ、遊具が増えているようで子供たちがとても楽しく過ごしているのが伝わってきて、今では安心して預けさせていただいています。他の学生、教職員のかたにもぜひ、勧めたいと思います。ありがとうございました。

・仕事の都合上、育休を取るができなかったため、待機児童保育室で預かって頂いて本当に助かりました。保育室の環境が良く（清潔・少人数・職場に近い等）、未熟児出産で免疫の弱かった娘を安心して預けることができました。熟練の保育士の方々から育児上のアドバイスを折々に頂いたのも心強かったです。

・同じ月齢のお子さんと一緒に遊んだり、食事をしたり、一緒の時間を過ごす事が出来、とても嬉しく思っています。落ち着いた環境の中で、子供のペースに合わせて対応してくださり、本人も安心して過ごせたかと思えますし、親としましても、安心してお願いすることができました。大変感謝しております、ありがとうございました。

・利用前は保育施設の利用に否定的な部分が私にはございました。時間をかけられるのであれば親がかかわるべきだと思っておりました。しかし、実際に利用して、同年代のお友達とのかかわりから身に着けたことも多くあるように感じ、保育施設という「社会」に早くデビューさせてあげられたことを今ではよかったと感じています。短い間でしたがとてもお世話になりました。これからも多くの方の力になってあげてください。

・大変良くしていただきました。

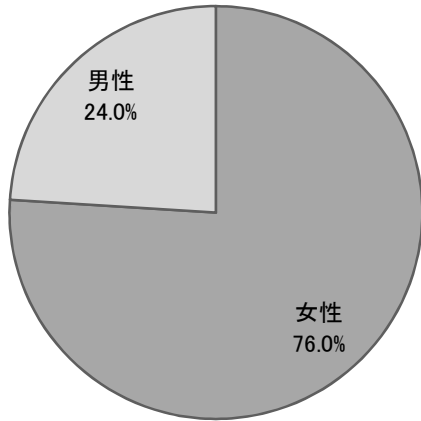
実はうっかり保育申し込みを前年度に 1 次調整し忘れててなんとか 2 次調整で保育園見
つかりましたが、11 月頃アナウンスしていただけたら助かります。

・年度途中からの夫婦共働きで、保育園に預けられず困っていたところを助けていただ
きました。大変ありがたかったです。

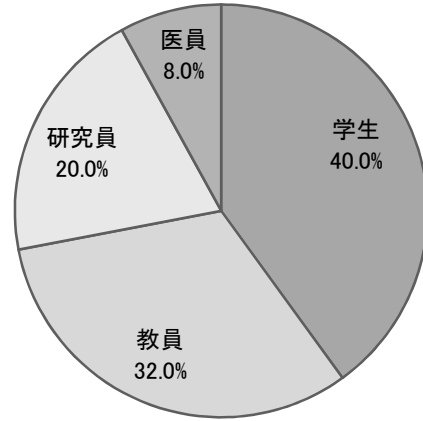
お世話をしてくださる人数も多く、広く清潔な室内であり、安心して預けることがで
きました。ありがとうございました。

平成 30 年度待機乳児保育室利用実績

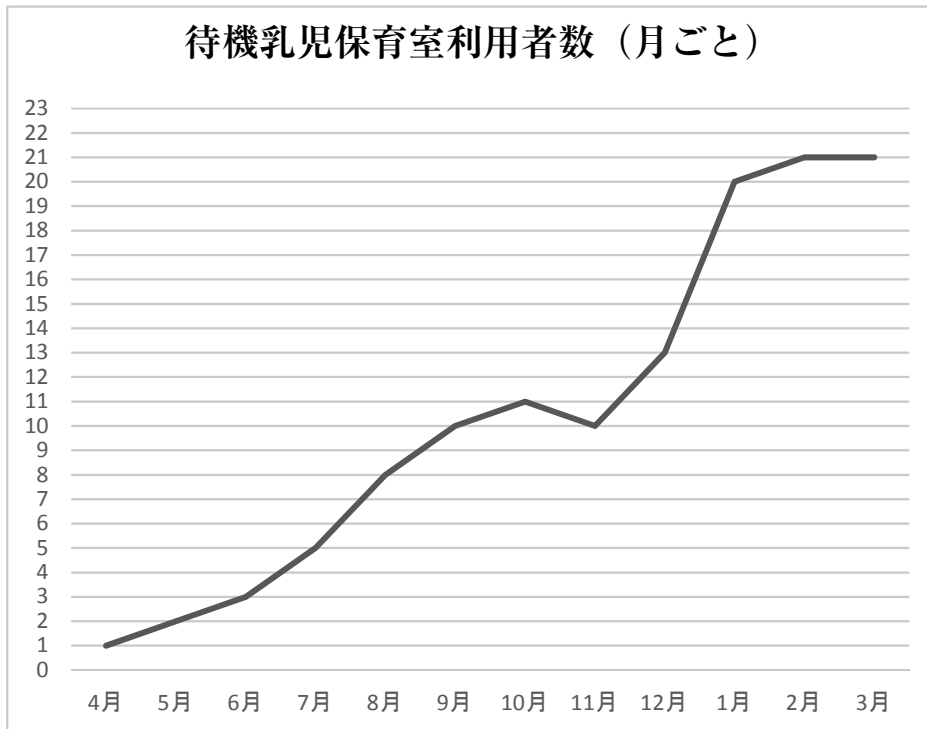
性別集計



身分別集計



待機乳児保育室利用者数（月ごと）



おむかえ保育

■利用案内

決まった曜日だけ子どもを保育園に迎えに行けない。急遽夕方に打合せが入り、保育園のお迎えに間に合わない…などで、困っていませんか。そんな研究者・学生のために、男女共同参画推進センターでは「おむかえ保育」を開設します。この保育は、研究等仕事の都合で子どもを保育機関に迎えに行けない保護者に代わり、保育者が子どもを迎えに行き、男女共同参画推進センターで一時保育を行うものです。運営については、保育業者に委託して実施します。ご利用を希望される方は、下記の内容を熟読のうえ、お申し込みください。

◇利用条件

利用資格：

京都大学に所属する学生、常勤の教職員、研究員(週30時間以上勤務日本学術振興会特別研究員を含む)、医員(週31時間以上勤務)

保育対象：

生後2カ月から小学3年生までの利用資格者の子ども

利用定員：

子ども5人程度(兄弟、年齢構成により異なる場合がある)

利用料金：

①保育料金 1,050円(税込)/30分～1,500円(税込)/30分(時間帯により異なる)

* 子ども1人についての料金です。

* 利用は2時間以上、30分単位で受け付けます。

* 学生は保育料金のみ、大学が半額を負担します。

②その他利用手数料(状況により異なる)

※交通費・夕食等は別途実費が必要です。

※詳細については別紙3「おむかえ保育利用料金表」をご覧ください。

1. 事前登録(無料)

別紙1「おむかえ保育事前登録票」に必要事項を記入のうえ、利用希望日の2日前の15時までに事前登録を行ってください。登録事項に変更が生じた場合は、再提出してください。

2. 利用方法

(1) 利用申込(FAX)

利用希望日の2日前の15時までに、別紙2「おむかえ保育申込票」を、センターにメールかFAX(075-753-2436)にて申込みをしてください。

事前登録票を2日前までに提出済みで、特別な事由のある場合は、利用希望当日の15時まで申込を受付けます。ただし、利用希望当日の申込みの場合は、保育者手配の都合によりご希望に添えない場合がありますのであらかじめご了承ください。



おむかえに行くと男女共同参画推進センターで保育します

子どもを保育機関に迎えに行くことのできない研究者に代わって、センターが子どもを迎えに行き、センターの保育室にて保育を行います。

利用日時：月曜日から金曜日 午後5時から10時
利用資格：本学の学生、常勤の教職員、研究員、医員
利用定員：生後2ヶ月目～小学3年生までの子ども、5名

登録と申込が必要です。(有料：学部学生・院生は半額補助があります。)

詳細は、男女共同参画推進センターのホームページを参照してください。
(URL) <http://www.ccm.kyoto-u.ac.jp/> (TEL) 753-2437

おむかえ保育

(2) 利用申込受付連絡

別紙2の申込票の受信を確認後、センターから、指定された連絡先に受付確認の連絡をします。

(3) 利用可否連絡

(保育利用が可能な場合)保育者については決定次第、委託企業から連絡します。

保育者決定後に申し出があった場合は、事前に保育者の写真を渡すことが出来ます。

(4) 保育者との打合せ

保育者手配が可能な場合、利用前日(当日申込の場合は当日)に保育者から保護者に電話がありますので、迎えに行く保育機関の場所、方法、夕食の有無、実費支払いの金額等について、トラブルにならないよう詳細に打ち合わせを行ってください。

子どもの夕食は、保護者が用意するか、保育者に購入を希望する場合は、コンビニエンスストア等で購入できるもの(おにぎり、パン等簡易なものに限る)を指定してください。

乳児のミルク、離乳食(レトルト食品など)、哺乳瓶、おむつ、着替え等は保護者が用意してください。

(5)利用

利用にあたっては、「京都大学男女共同参画推進センターおむかえ保育利用規程」を遵守してください。

お子様が当日熱のある場合や、伝染病疾病の疑いのある場合は利用できません。この場合、キャンセル料が発生しますので、あらかじめご了承ください。

3. 料金の支払い

保護者は、所定の方法で定められた期日までに、本学が発行する請求書によりお支払いください。振込手数料は、保護者負担となります。

利用料金①、②に掲げる以外の料金(交通費、夕食費等)については、子どもをセンターに迎えに行った際、実費額を保育者へお支払いください。

◇保育について

保育場所：京都市左京区吉田橋町 京都大学男女共同参画推進センター保育室

◇補償制度について

万一の事故の場合には、施設に起因する損害は国立大学法人総合損害保険、業務に起因する損害は保育委託業者の賠償責任保険が適用されます。

○事前登録票、申込票は、ホームページ

(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp>)からダウンロードできます。

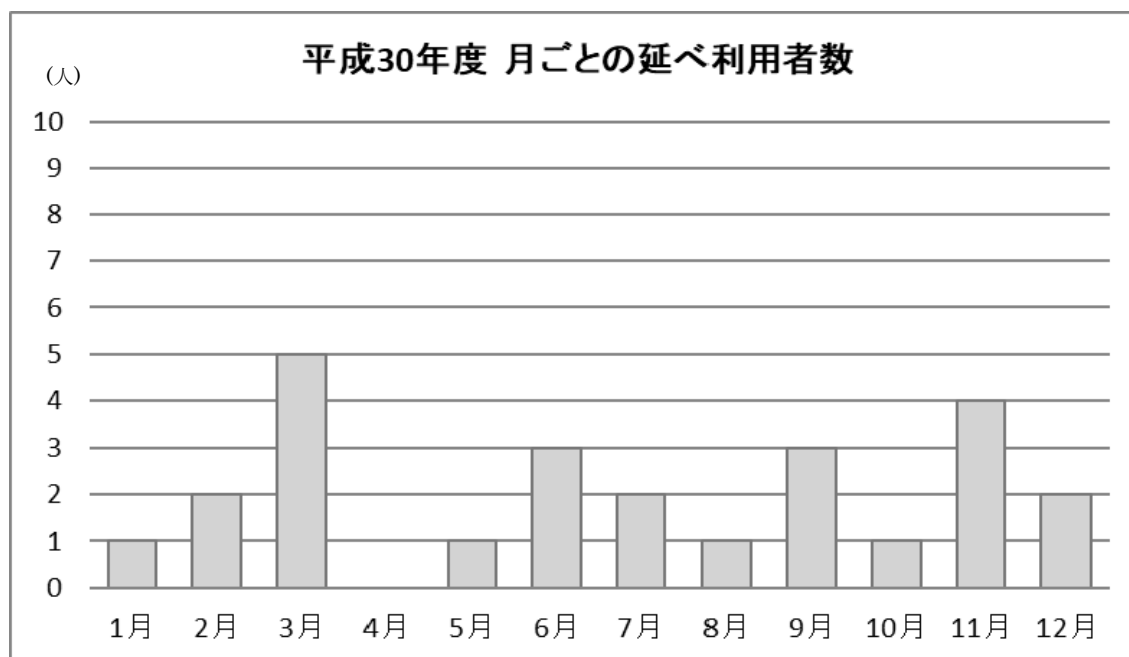
○事前登録及び利用申込において得た個人に関わる各種情報は、おむかえ保育の各業務及びそれらの業務に関する連絡・問い合わせのために利用します。

別紙一覧(省略)

別紙1:「おむかえ保育事前登録票」

別紙2:「おむかえ保育申込票」

別紙3:「おむかえ保育利用料金表」





京都大学男女共同参画推進本部では
ベビーシッター利用育児支援を行っています。



京都大学男女共同参画推進本部では、本学における教職員の仕事と子育ての両立支援を目的として、「ベビーシッター育児支援割引券」を発行して、ベビーシッターによる在宅保育サービス事業を行う者（以下「ベビーシッター事業者」という。）が提供するサービスを利用した場合に、その利用料金の一部を助成しています。

対象事業は以下の2つです。

- ①ベビーシッター派遣事業
- ②双生児等多胎児家庭育児支援事業

【注意事項】

○割引券発行枚数の上限は、1家庭につき①：280枚、②：2枚まで。

○最初の利用方法

※初回はお時間がかかる場合がございます。

- 1 ベビーシッター事業者（web サイト）もしくは別紙に掲載されている、「割引券取扱事業者」から選んだベビーシッター事業者と事前に請負契約をする。
- 2 下記の必要書類を人事課職員掛まで直接お持ちいただくか、学内便等でお送りください。

- 1) ベビーシッター利用育児支援事業初回利用申込書
- 2) ベビーシッター事業者との利用契約書（請負契約書）の写し

※以下のことが明記されているかご確認ください。

- ・ベビーシッター事業者の住所・名称・代表者氏名
- ・利用者の住所・氏名
- ・サービス内容・料金

・その他必要な事項

3) その他必要書類

①については、配偶者の在職証明書等（配偶者が本学教職員の場合にはその旨を申告）

②については、子供の年齢・人数がわかる書類（扶養に入っている場合にはその旨を申告）

3 学内便等で割引券が届きましたら、利用者記入欄に記入の上、利用時にベビーシッターに割引券を渡してください。
ベビーシッターが「報告用半券」を返却しますので、必ず受け取ってください。

4 割引券利用後の「報告用半券」は、翌月5日までに総務部人事課職員掛へ学内便等で提出してください。

○2回目以降の利用方法

1 割引券の発行依頼を E メールにて、人事課職員掛までお送りください。

ベビーシッター育児支援割引券発行依頼（2回目以降）

所属・職名：氏 名：

利用月：平成 年 月 希望枚数： 枚

2 割引券が届いた以降は、最初の利用方法3、4と同じです。

○利用するベビーシッター事業者を変更した場合

ベビーシッター事業者変更届を、E メールに添付して、人事課職員掛までお送りください。なお、変更届の提出と割引券の発行依頼を同時に行う場合は、変更届に発行希望枚数等を記載してください。

○制度自体に関しましては、公益社団法人全国保育サービス協会 HP をご覧ください。

担当：男女共同参画推進本部（総務部人事課職員掛）

（内）本部 16 2059

E-mail g-e@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

Ⅲ 「病児保育」事業

病児保育事業ワーキンググループ活動報告

京都大学男女共同参画推進センター・病児保育室「こもも」(以下、病児保育室)は、京都大学に在籍する全ての教職員・学生の子供(生後6ヶ月から小学校3年生)を対象とし、急な疾病により保育園／幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っています。事前登録制による運用で、登録者数はのべ1,113名、うち平成30年度の新規登録者97名と年々増加しています(平成30年12月末現在)。定員は5名(感染隔離室1名を含む)であり、平成30年度は730名の利用がありました(平成30年12月末現在)。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、定員を上回る利用希望のために断わらざるを得ない日が続くこともしばしばみられますが、利用者からは概ね良いご意見をいただいています。また、今年度も京大病院オープンホスピタルでのポスター掲示やホームページ等を通じての広報活動も継続して行いました。

保護者からの要望を受けて、京都大学医学部附属病院感染制御部の承諾を得て平成28年4月より利用基準(利用開始時間)を変更しました。また、予約時間や事前登録方法の見直しも行った結果、より利用しやすくなったという声をいただいています。感染対策上、困難な点もありますが、京都大学職員・学生が育児を行いつつ、仕事や学業を継続することの可能な環境を実現するため、今後も引き続きよりよい運営方法を検討する必要があると考えています。



病児保育事業WG主査 足立 壯一

■H30 活動記録

- | | |
|------------|--|
| 11月10日(土) | オープンホスピタルにポスター参加 |
| 12月17日(月) | 京都府立医科大学病児保育室運営業務外部有識者意見聴取会議
当病児保育室の技術補佐員(保育士)が出席 |
| 1月16日(水) 他 | 病児・病後児保育実習生受け入れ |

病児保育室「こもも」

病児保育室は、2006年2月に附属病院内に開室しました。

2007年に、病児保育室登録者に対して利用者の声を聞くためのアンケート調査を行い、その結果出された意見に基づいて、2008年より、学生割引(半額)を導入、病児保育相談窓口の開設、お昼の食事メニューを増やす、ホームページに病児保育室のスタッフの紹介や保育室の紹介を写真入りで行うといった改善を行ってきました。

また、2009年2月には、感染隔離室の設置について、アンケートによる学内のニーズ調査を行い、2009年12月に病児保育室内に、感染隔離室を設置しました。

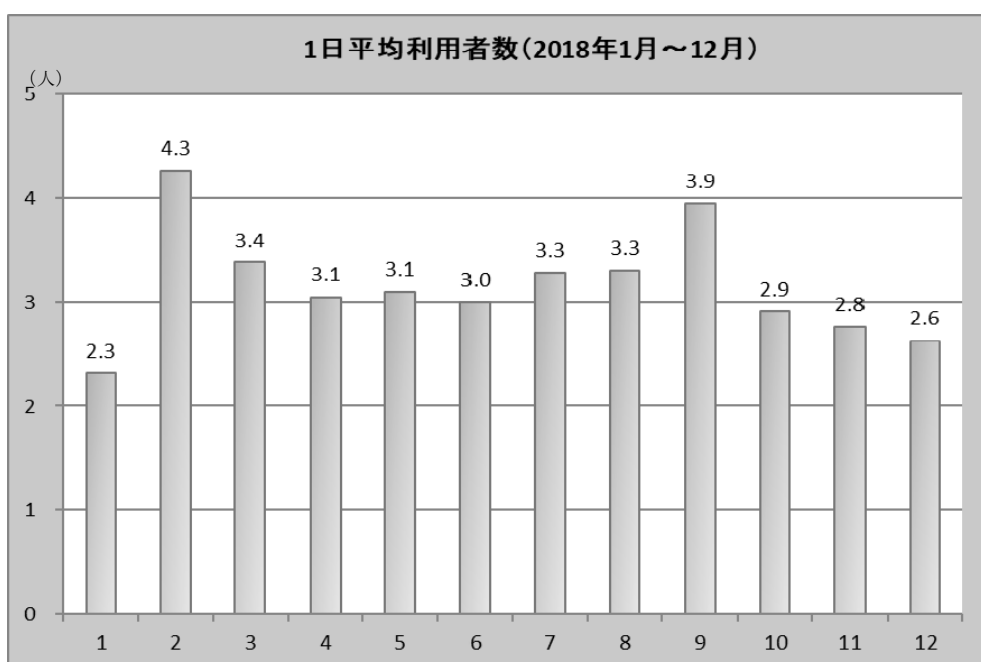
作年度より更に保育サービスを充実させるため、京都大学構成員にアンケートを行い、利用開始時間を7時30分からに変更しました。

■病児保育室利用状況

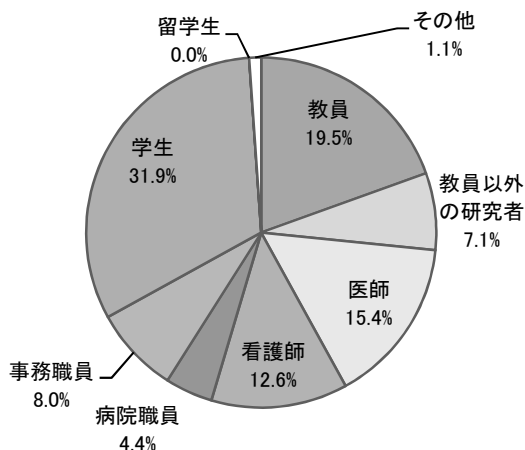
1.利用実績(2018年1月～2018年12月)

1)利用者数

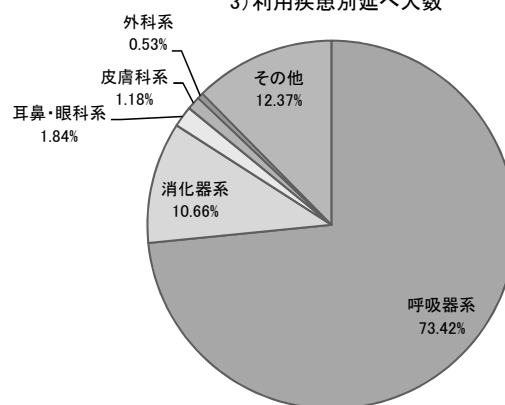
月	人数	うち隔離室利用者
1月	44	14
2月	81	16
3月	71	12
4月	61	5
5月	65	4
6月	60	1
7月	69	3
8月	66	1
9月	71	2
10月	64	3
11月	58	4
12月	50	3



2)利用者の職種別分布



3)利用疾患別延べ人数





京大病児保育室

こもも



- ★事前診察が必要。京大病院では7時から救急外来で受診できます。
- ★熱が38.5度以上でも利用できるようになりました。
- ★感染隔離室があります。
- ★病児保育室では、医師の観察があります。



- 開室日時：月曜日～金曜日 午前7時30分～午後7時
- 場 所：医学部附属病院 外来棟5階 
- 利用資格：京都大学の教職員および学生の子どものみで、生後6ヶ月から小学校3年生までの病中・病後の子ども（伝染性疾患を除く）
- 料 金：1時間500円（昼食・おやつ代込）
※保護者が学生の場合は、保育料金の半額を大学が負担します
- 定 員：5名 



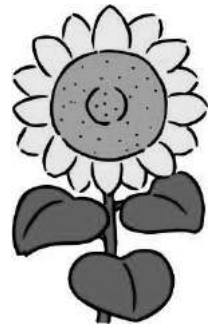
利用方法など、詳細は男女共同参画推進センターのホームページで！



<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/ikujikaigo/byoujihoiku/index.html>

■こもも日記

おもちゃ紹介⑱ ~アンパンマンのアイスクリーム屋さん~



今年は雨がたくさん降りましたね。

梅雨が終わるとまた暑い夏がやってきました。

春は、新しく保育園に入った赤ちゃんが、さっそくいろいろな病気をもらって熱が出て…と乳児の多い時期が終わり、小学生、幼児、乳児、いろんな病気の子が来るようになりました。

暑い夏。体調を崩さないようにしてくださいね。



さて、みんなが大好きなアンパンマンのおもちゃ。

「こもも」にはアンパンマンのおもちゃがたくさんありますが、またひとつ増えました。

「アンパンマンのアイスクリーム屋さん」です。

アンパンマン、バイキンマン、ドキンちゃん…アンパンマンに出てくるたくさんのキャラクターのアイスがあります。かわいい音楽とともにアイスクリームがまわります。

みんな上手にアイスのカップに入れたりコーンにのせたりして遊んでいます。

「こもも」に来た時には、保育室で楽しく遊べるように、おもちゃと一緒に待っています。



こももの昼食内容が変更になります

8月1日から、こももの昼食の内容が変更になります。



今までの固定メニューに加え、日替わりメニューが加わります。

【固定メニュー】

日付		メニュー	使用食材	価格(税込)
通年	固定	ハンバーグ	白米 ハンバーグ かぼちゃ ブロッコリー ケチャップ フルーツ(A:みかん・バナナ、B:すいか)	※フルーツは AとBから お選びください。 400円
通年	固定	オムライス	鶏卵 チキンライス かぼちゃ ブロッコリー ケチャップ フルーツ(A:みかん・バナナ、B:すいか)	※フルーツは AとBから お選びください。 400円
通年	固定	おにぎり	白米 海苔 鮭フレーク フルーツ(A:みかん・バナナ、B:すいか)	※フルーツは AとBから お選びください。 350円
通年	固定	うどん	うどん かまぼこ 鶏卵 小ねぎ うどんつゆ フルーツ(A:みかん・バナナ、B:すいか)	※フルーツは AとBから お選びください。 350円

※フルーツはカットフルーツになります

【日替わりメニュー】 *価格400円(税込)

日付		メニュー	使用食材	
8月1日	日替わり	海老マヨ	海老フリッター 赤玉ねぎ パプリカ(赤黄) ブロッコリー 海老マヨソース サウザンドレッシング	
	惣菜	洋風野菜のポテトサラダ	じゃがいも レタス きゅうり 赤パプリカ 黄パプリカ	
	惣菜	京風 お煮込み	ごぼう 人参 椎茸 鶏肉	
	フルーツA	みかん バナナ	みかん バナナ	※フルーツはAとBから お選びください。
	フルーツB	すいか	すいか	
8月2日	日替わり	チキンとポテトのモッツレラチーズ	白米 鶏もも肉 マッシュポテト モッツレラチーズ デミソース キャベツ	
	惣菜	ごぼうとアスパラのサラダ	ごぼう 人参 胡麻 アスパラ	
	惣菜	京揚げ入り ひじき	ひじき 京揚げ 人参	
	フルーツA	みかん バナナ	みかん バナナ	※フルーツはAとBから お選びください。
	フルーツB	すいか	すいか	
8月3日	日替わり	鶏の唐揚げ 味噌タルタルソース	鶏もも肉 生姜 ニンニク 片栗粉 タルタルソース 白ネギ 合わせ味噌	
	惣菜	ハムと人参のサラダ	ロースハム 人参 玉葱 パセリ レモン	
	惣菜	壬生菜の煮浸し	壬生菜 椎茸 京揚げ 人参	
	フルーツA	みかん バナナ	みかん バナナ	※フルーツはAとBから お選びください。
	フルーツB	すいか	すいか	
	日替わり			
	惣菜			
	惣菜			
	フルーツA			※フルーツはAとBから お選びください。
	フルーツB			
	日替わり			
	惣菜			
	惣菜			
	フルーツA			※フルーツはAとBから お選びください。
	フルーツB			

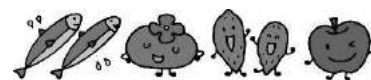
※フルーツはカットフルーツになります



1週間ごとにメニューをこもも日記に掲載しますので、ご覧ください。



昼食の申込みについて

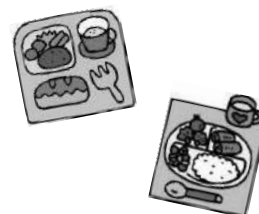


昼食の申込み方法が変わりました。

①病児保育室で予約した場合（当日 9:00 まで）

→予約時に昼食を伝えていただきます。

9:00 以降の予約の方は、**昼食持参**となります。



②時間外受付で予約した場合

→8:00～9:00 までに病児保育室へ電話(075-751-3090)し、
昼食を伝えていただきます。

9:00 までに昼食の連絡がなかった場合は、
おうどん(たまご・かまぼこ入り)にさせていただきますので、
よろしくお願いいたします。



昼食メニューはハンバーグ、オムライス、おにぎり、うどん、日替わりの5種類となります。

使用食材はHPに掲載していますが、原材料までの表記は対応しておりません。

万が一のことを考慮し、アレルギーのあるお子さまのご注文はお控え頂きますようご協力ください。

日替わりは病児保育室ホームページでご確認ください。

(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/ikujikaigo/byoujihoiku/>)

ご協力、よろしくお願いいたします。



病児保育室 こもも
075-751-3090

【固定メニュー】

日付		メニュー	使用食材
通年	固定	ハンバーグ	白米 ハンバーグ かぼちゃ ブロッコリー ケチャップ フルーツ (A:みかん・バナナ、B:適変わり) ※フルーツは AとBから お選びください。
通年	固定	オムライス	鶏卵 チキンライス かぼちゃ ブロッコリー ケチャップ フルーツ (A:みかん・バナナ、B:適変わり) ※フルーツは AとBから お選びください。
通年	固定	おにぎり	白米 海苔 鮭フレーク フルーツ (A:みかん・バナナ、B:適変わり) ※フルーツは AとBから お選びください。
通年	固定	うどん	うどん かまぼこ 鶏卵 小ねぎ うどんつゆ フルーツ (A:みかん・バナナ、B:適変わり) ※フルーツは AとBから お選びください。



おもちゃ紹介⑱ ～ラキュー～



お盆も過ぎ、少し涼しくなるかと思いきやまだまだ暑い日が続いていますね。しっかり水分摂取をして、残りの夏休みも楽しく元気に過ごしましょう。

今回は小学生の男の子たちが作ってくれたラキューの作品を紹介したいと思います。新しい色のピースも加わり、作ることでできる作品の種類も増えました。子どもたちは作り方の本を見ながらパーツを組み合わせ、完成に向けてとても集中して取り組んでいました。

ラキューって？

小さな四角形や三角形のパーツを組み合わせて様々な形が作れるおもちゃです。動物や乗り物、さらにアクセサリやスイーツなど、いろいろなものを作って楽しめます。

原色のパーツにパステルカラーやスケルトンのパーツも加わり、さらに作品の幅が広がりました。

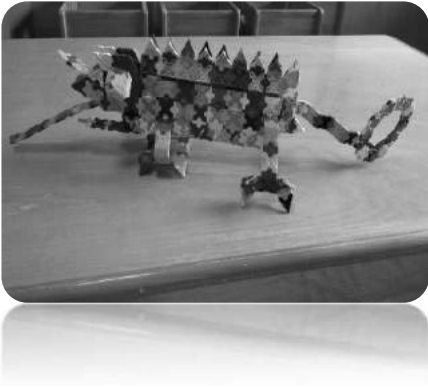
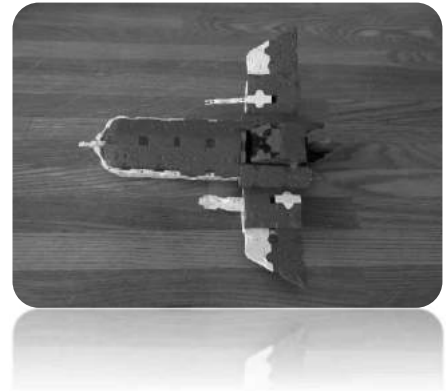


こちらはレースカー。運転席にはレーサーも座っています。ヘルメットのパーツを透明のものにアレンジして「ちゃんと前も見えるよ！」と教えてくれたりもしました。壊れないようそうっと、かつ素早く走らせます。



こちらはロボット。なんと、腕も足も自由に動きます！両手を上げたり、歩かせてみたり、パンチを繰り出したり・・・セリフを交えながら、手足を動かして遊んでいました。

ジェット機です。丸い機体を組み合わせるのが大変そうでしたが、作ったところを壊さないようにしながら集中して作っていました。こちらにも運転席がついています！



こちらはカメレオンです。とってもカラフル！長い舌を出したりしまったりと動かすことができます。これを作ってくれた男の子はさらに折り紙でバッタを作り、食べさせてあげていました。作った後も子どもたちのアイデアで楽しい遊びにつながっていました。



おもちゃ紹介⑳ ～「こもものおうち」とままごとあそび～



暑かった長い夏も終わりすっかり秋らしくなりました。9月の終わりから発熱でくる子が多くいましたが、今週は落ち着いています。

さて、3日続けて利用された4歳の女の子。遊ぶのが大好きで、保育室にあるままごとのおもちゃを総動員して遊んでくれました。

アイスクリーム屋さん、ジュース屋さん、パン屋さんもあるお店屋さんです。レジスターもちゃんとあります。レジで「ピッピッ」「OOOOえんでーす」と楽しく遊んでくれました。



ベビーカーの赤ちゃんも連れてお買い物。ままごとセットのお野菜もだして大にぎわい。

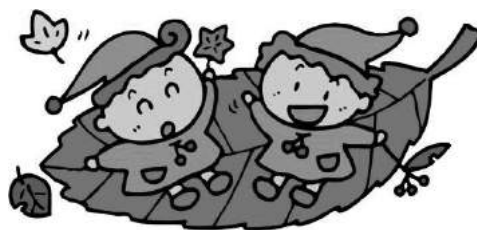
この後、一緒に利用していた6歳の男の子も巻き込んで「かくれんぼ」と「たからさがし」も始まり、スタッフともどもいっぱい遊びました…。



おもちゃ紹介 21 ～プラレール「こまち」と「ひえい」～



秋になり天気の良い日が続いています。
紅葉まっさかりでもみじの赤やいちょうの黄色が
美しいですね
気候の良い時期は子どもたちもあまり体調を崩さないのか、
比較的落ち着いた日々の病児保育室です。



さて先日プラレールの新しい電車が入りました。東京～秋田間を走る新幹線「こまち」と叡山電鉄の「ひえい」です。「こまち」は赤と白のボディが美しく、「ひえい」はレトロな感じがいいですね。プラレールの新しい電車を…と思っていたところ、なじみのある叡山電車が出ていたので思わず買ってしまいました…。



こまち



ひえい

子どもたちの反応は…。「こまち」はもちろんみんな知っているようですが、「ひえい」もなかなかの人気。早速遊んでくれました。

電車好きな子は「電動で走らせたい派」「手で持って走らせたい派」に分かれます。小さい子は「手で持って走らせたい派」が圧倒的ですが。

男の子で人形やままごとで遊ぶ子はよく見られますが、女の子で電車好きな子はあまり見かけません。性差なのか経験なのか…。もちろん関係なく、いろいろなおもちゃを手に取りれるようにこころがけ、いろいろなおもちゃで遊んでみる経験を大切にしています。





こももでのインフルエンザの利用基準



インフルエンザが流行してきました。

今年もこももでは1月9日よりインフルエンザ対策を行うことになりました。

今回はこももでの、インフルエンザ対策を紹介します。

病児保育室内での感染拡大及び附属病院内での院内感染の防止のため、インフルエンザウイルス流行期には、38.5℃以上の発熱児は原則としてインフルエンザウイルス抗原の迅速検査を行い、陰性と判定された方のみ病児保育室でお預かりすることとします。

ただし、発症から12時間程度は迅速検査の信頼性が低いため、インフルエンザウイルス流行期の病児保育室の入室基準について以下のように定めています。

○ BT38.5℃以上の発熱時

発熱した時刻より、12時間以上経過してからインフルエンザウイルス抗原検査施行。

陽性→病児保育室利用不可。(発症後の利用基準は下記)

陰性→病児保育室利用可能。



○ 病児保育室でBT38.5℃以上に上昇した場合、隔離室に移動して保育可能。

(家族・兄弟にインフルエンザ罹患者がいる場合は利用不可、またはお迎え)

12時間以上経過してから、インフルエンザウイルス抗原検査施行。

結果は、上記に準ずる。

○ インフルエンザ発症後は、解熱後(BT38℃以下)24時間経過すれば隔離室で保育可能。

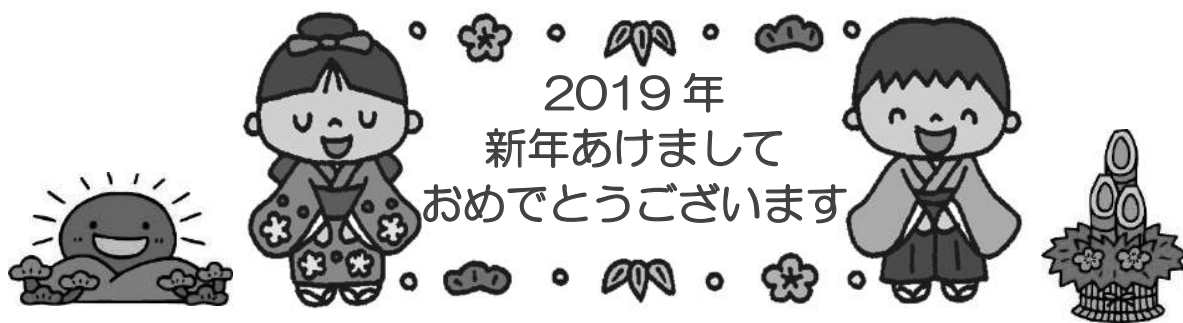
発症後5日経過しかつ解熱後3日(学童は2日)経過すれば通常保育室で保育可能。それまでは隔離室で保育。(学校感染症に準ずる)



◇ 隔離室優先順位について ◇

利用者の増加により、感染隔離室が既に空いていない状況があるかもしれません。

その場合は、入室時に38.5℃以上の発熱がある場合や、入室中の発熱の際には利用できないか、お迎えに来て頂く場合がありますのでご了承ください。



年末から寒い日が続きましたが、皆様どのようなお正月をお過ごしでしたでしょうか。1月になりそろそろインフルエンザの流行期にはいりそうです。手洗いうがいをしっかりしましょうね。今年も病児保育室をよろしくお願いいたします。



保育室で「おみくじ」を作ってみました。今年の運勢はどうかな。

伝えたい、
医療を支える
わたしたちの力



／ 京大病院 ／

オープンホスピタル

OPEN HOSPITAL 2018

11/10 ±
2018

10:00-16:00

場所 当院外来棟
アトリウムホール 他



国立大学法人【特定機能病院】
京都大学医学部附属病院

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町54

TEL.075-751-3005

http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp

京大病院 検索

京大病院 寄席

大好評
イベント!!

開催時間 14:00-15:00 開催場所 臨床第一講堂・第二講堂

出演 桂米二
桂二葉

予約
不要





京都大学男女共同参画推進センター 病児保育室 こもも



I. 病児保育室とは

「京都大学男女共同参画推進センター病児保育室」(以下、京大病児保育室)は、京都大学教職員・学生の子どもが、病中・病後のため幼稚園・保育園・学校へ登園・登校できない時、親が仕事や研究を休むことなく、子どもの保育ができる環境を提供する施設です。京大病児保育室では、京都大学医学部附属病院と連携し、看護師・保育士が常駐する安心できる環境において、病児の保育を行っています。

II. 病児保育室の利用状況について

2018.1～2018.9

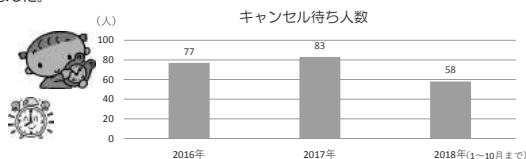
利用者：589名 1日当たり平均利用者数：3.23人
利用率：64.23% ※利用率は、開室日数×5人(定員)を母数として算出

利用許可基準の見直しや2016年から開室時間の変更後、利用者数の増加に伴い、予約時に定員オーバーでキャンセル待ちとなることが多くなってきました。そのため、キャンセル待ちの現状を見直し、今年の6月より対策を実施しました。



III. キャンセル待ちの現状と対策

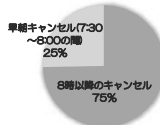
多くの方がスムーズに利用できるよう、利用状況を分析してキャンセル待ちの対応、予約者のキャンセル連絡時間について見直し、今年の6月より予約者・キャンセル待ち者のキャンセル連絡時間の変更を行いました。



今まで、予約者のキャンセルの連絡時間は設けておらず、なるべく早くかけてもらうように伝えていました。しかし、朝の8時～9時前後が多く、連絡を忘れる方もおられ、結果、空きが出てキャンセル待ちの方への連絡が遅くなり利用できなくなることが多くみられていました。

総利用者数と総キャンセル数
(2016.1～2018.10)

キャンセルの時間帯



☆ キャンセル待ちで入室できなかった人はその後どうしたか

- ◎他の病児保育室利用
- ◎親が仕事を休んで家で看る
- ◎家族以外の誰かに看てもらう
- ◎保育園に一度連れて行く



対策として、今年の6月より、8時半までにキャンセルの連絡をしてもらうよう変更を行い、利用者に変更内容を配布しました。以降、キャンセルの連絡を8時半までにかけてくれる方が増え、キャンセル待ちの方にも8時半までに利用できるかどうかお伝えすることが可能となりました。

連絡先 ☐ 7～8時 時間外受付 ☐ 8～8時半まで 病児保育室

IV. 隔離室の利用について

病児保育室には、保育室と隔離室があります。隔離室とは、通常の保育室と隔てて1室、フィルター付き陰圧換気空調と上下水道が整備されたお部屋のことです。

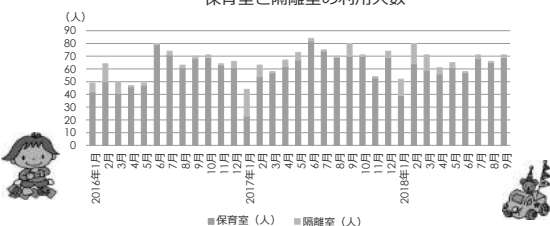
隔離室へは、①伝染性疾患の急性期以外の感染症

- ②確定診断の付いていない嘔吐下痢や胃腸炎
- ③咳や咽頭炎がひどくマスク装着が困難な場合
- ④高熱でインフルエンザが疑いがある場合、入室となります。

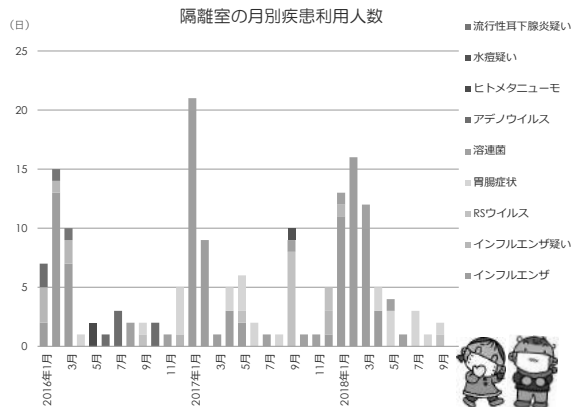
①の伝染性疾患の急性期以外の感染症として隔離室を利用できる疾患は以下の通りです。

インフルエンザ感染症：解熱後24時間が経過した出席停止期間中
アデノウイルス感染症：症状軽減し、解熱後2日までは隔離室利用
溶連菌感染症：有効な抗生剤内服後24時間以内
マイコプラズマ感染症：マスク着用が困難な場合
RSウイルス・ヒトメタニューモウイルス感染症：乳児の利用状況により判断
胃腸炎：ノロ・ロタ不明である場合、児の状態及び保育室の状況により判断
水痘：すべての水疱が痂皮化すれば利用可
麻疹：発疹を伴う発熱が解熱し3日経過後
風疹：発疹が消失

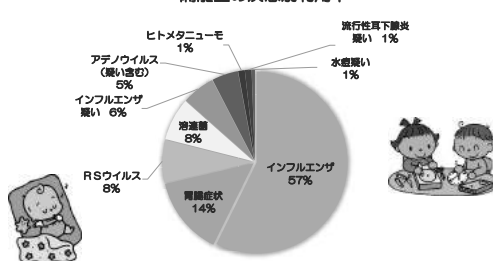
保育室と隔離室の利用人数



隔離室の利用状況を見てみると、1年の中で冬が1番多く20～30%利用しています。疾患別では、寒い時期に流行するインフルエンザの利用率が1番高く50%以上です。以前は、隔離室の利用人数を1人/日としていたのですが、同じ疾患2人/日まで利用できるように変更し、多くの児に利用してもらえるようにしました。



隔離室の疾患別利用率



また、普通の病児保育室にお預かりしたお子さんに対して、急な激しい下痢や嘔吐が始まったり、症状の変化があった場合は、病気の伝播を防ぐ目的で、医師の判断のもと、お子さんを隔離室に入室または移動させていただくこともあります。

保育室から隔離室への移動になった人数と疾患
(2016.1～2018.9)

インフルエンザ感染症疑い…7人
下痢等胃腸症状が続くため…2人
アデノウイルス感染症疑い…2人
アデノウイルス感染症(確定)…1人
ノロウイルス感染症疑い…1人

計：13人



V. 隔離室での過ごし方について

隔離室では、同じ病気の子がいた場合、例外的に2人で使うこともありますが、基本的に1人で過ごします。保育士が看護師1人が一緒に過ごします。他の子と遊ばないことは残念ですが、感染予防のためご理解をいただいています。

廊下に向けた部屋で広さも限られているので、いろいろな工夫をしながら楽しく過ごせるようになってきました。

○好きなおもちゃを持ってくる…保育室から好きなおもちゃを持ってきて遊べます。(利用後は消毒して返す)

○1対1でゆっくり遊ぶことができます。

○隔離室専用のおもちゃを用意しています。

隔離室ではじっくり遊べるので、お米粘土を使ってたくさんのおもちゃを作ってくれた子がいました。

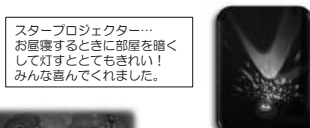
またほかの子は、紙飛行機を作るのが好きで厚紙で精巧な紙飛行機を作り、上手に飛ばしてくれました。

お友だちと遊べないのは残念ですが、一緒に遊びを深めていくことはできます。

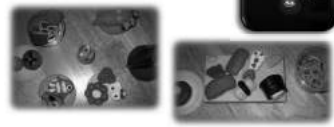
子どもたちにもいろいろな提案ができるように、私たちもいろんな遊びを考えていきたいと思っています。



ボールプール…カラフルなボールがたくさん！中に入って遊べます。



スタープロジェクター…お昼寝するとき部屋を暗くして灯すととてもきれい！みんな喜んでくれました。



粘土作品の数々…ステキなごちそう出来上がり！！

IV 「就労支援」事業

就労支援事業ワーキンググループ活動報告

本 WG の主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して、アンケートなどに示される利用者の声も考慮しながら、毎年、少しずつ改良を加えてきている。本年度中の実績は、第1期で応募者 24 名、利用者 19 名、第2期で応募者 24 名、利用者 16 名と、時期により変動はあるものの、ここ数年増加傾向にある。予算の制約のなかで、応募者が困難な状況にあることがわかりながら十分な支援ができないケースも増えてきている。また、ここ数回の傾向として、特任教員・研究員など比較的短い任期で京都大学に所属している研究者、特に外国人研究者からの応募が増加している。不安定な雇用、慣れない土地、家族からの援助も望めない、という状況のなかで育児や介護と研究の両立に苦慮されている男女研究者も多い。

雇用形態の変化や教員のダイバーシティ拡大に適応した制度とその運用の見直しも、制度全体の拡充とともに今後の課題である。



就労支援事業WG主査 喜多 恵子

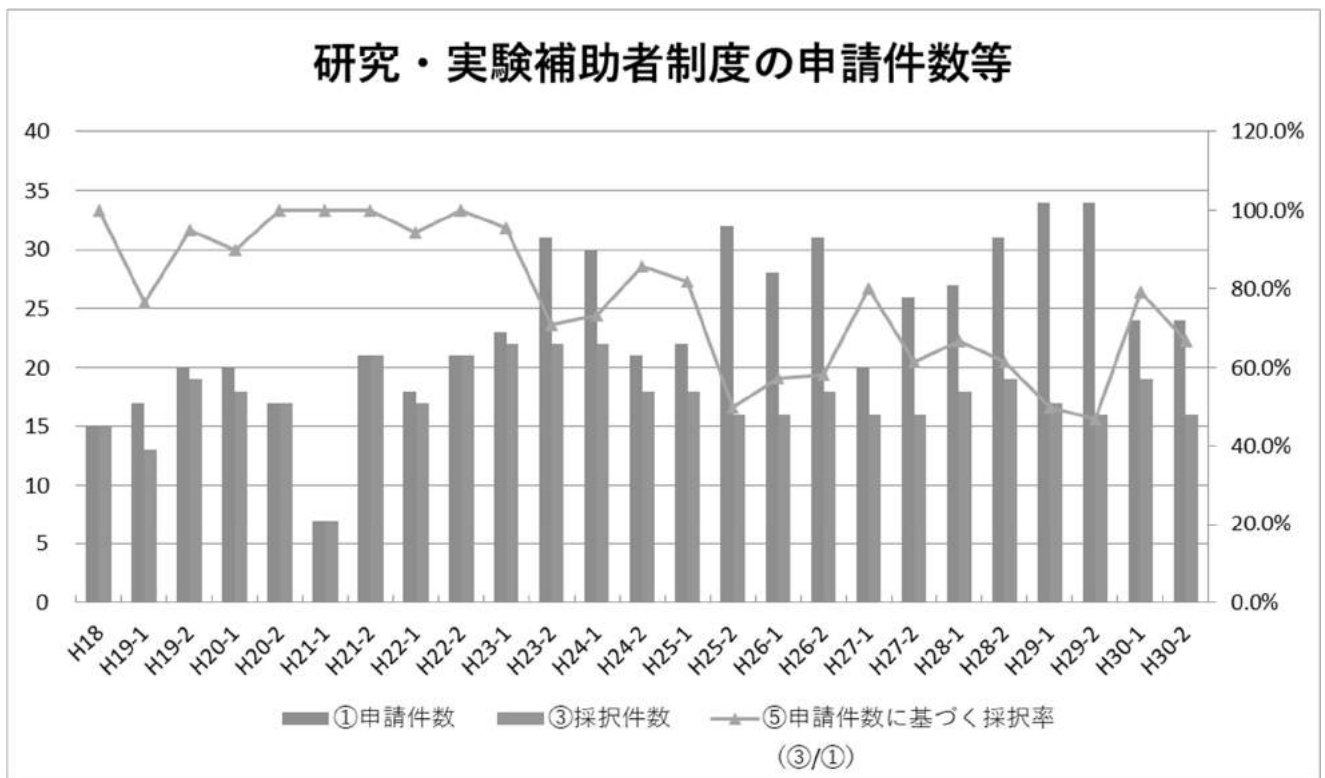
■H30 活動記録

- 5月28日(月) 第48回就労支援事業ワーキンググループ会議
- 6月4日(月) 平成30年度2期 就労支援事業による支援希望者募集開始
- 7月30日(月) 第49回就労支援事業ワーキンググループ会議
- 11月22日(木) 第50回就労支援事業ワーキンググループ会議
- 11月26日(月) 平成31年度1期 就労支援事業による支援希望者募集開始
- 2月12日(火) 第51回就労支援事業ワーキンググループ会議

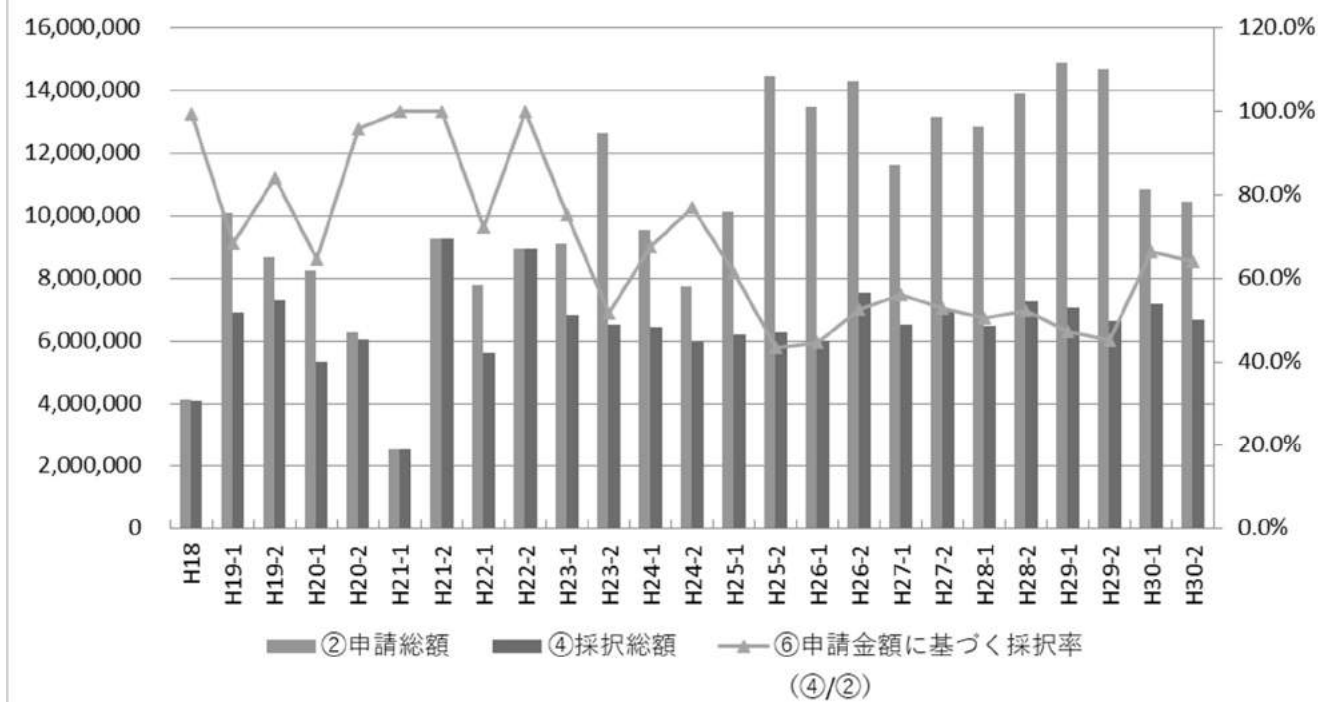
研究・実験補助者雇用制度 利用状況

期 間	①申請件数	②申請総額	③採択件数	④採択総額	⑤申請件数に基づく採択率 (③/①)	⑥申請金額に基づく採択率 (④/②)
H18	15	4,124,400	15	4,100,400	100.0%	99.4%
H19-1	17	10,091,600	13	6,911,800	76.5%	68.5%
H19-2	20	8,683,500	19	7,291,000	95.0%	84.0%
H20-1	20	8,246,400	18	5,321,200	90.0%	64.5%
H20-2	17	6,294,300	17	6,035,100	100.0%	95.9%
H21-1	7	2,505,000	7	2,505,000	100.0%	100.0%
H21-2	21	9,261,000	21	9,261,000	100.0%	100.0%
H22-1	18	7,772,500	17	5,617,500	94.4%	72.3%
H22-2	21	8,932,500	21	8,932,500	100.0%	100.0%
H23-1	23	9,100,000	22	6,837,500	95.7%	75.1%
H23-2	31	12,617,500	22	6,530,000	71.0%	51.8%
H24-1	30	9,545,000	22	6,450,000	73.3%	67.6%
H24-2	21	7,729,000	18	5,957,500	85.7%	77.1%
H25-1	22	10,115,000	18	6,219,400	81.8%	61.5%
H25-2	32	14,440,000	16	6,275,000	50.0%	43.5%
H26-1	28	13,452,500	16	6,002,500	57.1%	44.6%
H26-2	31	14,300,000	18	7,528,750	58.1%	52.6%
H27-1	20	11,600,018	16	6,503,000	80.0%	56.1%
H27-2	26	13,128,998	16	6,931,000	61.5%	52.8%
H28-1	27	12,830,184	18	6,466,000	66.7%	50.4%
H28-2	31	13,896,100	19	7,253,000	61.3%	52.2%
H29-1	34	14,890,586	17	7,051,000	50.0%	47.4%
H29-2	34	14,690,886	16	6,649,000	47.1%	45.3%
H30-1	24	10,841,229	19	7,199,000	79.2%	66.4%
H30-2	24	10,454,112	16	6,682,000	66.7%	63.9%

研究・実験補助者制度の申請件数等



研究・実験補助者制度の申請金額等



■研究・実験補助者雇用制度 アンケート報告①

対象者:平成 29 年度第 2 期 研究・実験補助者雇用制度利用者 17 名

形式:実績報告と同時にメールにて依頼。

回答率: 94%(16 名)

1. 「研究・実験補助者雇用制度」を利用することで、どのようなことが可能になったか

・絶対的な時間がなく、また連続的に分析に従事できる日もなかったため、データ入力や試料の分析が進まず、論文のための解析が進まなかった。しかし、本制度を利用することで、一気にデータ入力・整理、大量の試料の整理、仕分け、秤量、粉碎の一部までが完了した。引き続き、本制度を利用させていただくことで、分析を終わらせ、論文完成までの目標に近づきつつある。

・既存のプランクトン相互作用データを文献に基づき精査することができた。その結果、今後どのような形式のデータベースを開発していけばよいのかに関して方針を打ち立てることができた。

・保育園のお迎えの時間があり、画像の前処理や解析の途中であっても帰宅しなければならなかったため、前処理の一段階が終わるごとの結果の確認が翌日に持ち越され、前処理に多くの時間を要していました。研究補助者雇用制度を利用することで、時間のかかる画像処理を補助者に依頼し、その間に論文執筆や共同研究先との打ち合わせに時間を使うことができました。

・pph-4 サプレッサー株のアウトクロスは、2週間以上にわたる連続した作業を4回以上繰り返すことが必要であるが、この連続作業の一部を実験補助者に依頼することで、滞りなく作業を完了させることができた。

・子供の急な病気や予防接種などで勤務できない際の実験補助をしてもらうことができ、途切れず実験を行うことができました。

・実験してデータを出し、論文を書かないと生き残っていけない分野におります。実験を手伝っていただくことで、論文のデータをまとめる時間を作れたり、共同研究先に赴いて実験をすることができたりすることができました。補助者がいない時は、ポジション上の雑用ややるべき実験が溜まるばかりでしたが、日々の全てのことをスムーズに進められています。

・本学医学部附属病院の倫理審査委員会事務局は、実務が多く、毎日研究の時間を確保することが非常に難しい職場です。科研費を獲得できても、各種手続きに時間がかかってしまい、自分ひとりでは到底論文投稿や調査を実施できなかったと思います。2017 年度から研究・実験補助者雇用制度を利用することで、事務的な手続きに時間を費やすことなく各種申請や書類の整理を行うことができ、研究と実務の両立が可能になりました。

・この制度を利用させていただき、検体処理や事務的作業を依頼できるようになったため、実質的な研究の遂行にあてられる時間が増えました。今回は第 2 子妊娠中で体調に不安がありましたが、おかげさまで研究も少しずつ進んでいます。

・手術や外来の終わる夜間から研究活動を開始することが多いが、加えて当直業務が平均週 1 回あり、子供を迎えに行かねばならないため、実験を行う時間を確保することが極めて難しい。実験補助者雇用制度により、動物実験を行ったり動物を飼育維持管理を委託することが可能になり、また、細胞培養、核酸抽出や蛋白抽出などの実験や、PCR、ウエスタンブロット、免疫化学組織染色等も実施していただけるようになり、研究活動が進行できるようになった。

・データ集計、解析がスムーズになり、またダブルチェックによりより正確になりました。

・研究会の開催にあたり短期間に事務局作業を進めることができたため、後援、共催を得ることができ、たくさんの参加者がつどう満足度の高いものにすることができました。

・継続して雇用制度を利用させていただきました。回数を重ねるごとに、補助者との連携がうまくいき、作業がスムーズで研究速度が上がりました。ありがとうございました。

・育児のため、研究に費やす時間が大幅に減少し、また細切れになっていました。このため、長時間集中して取り組まなければならない研究課題は諦めていましたが、研究・実験補助者の方に、膨大な研究データの整理や長時間にわたる実験を手伝ってもらえるようになったおかげで、諦めていた研究課題にも取り組むことができました。

・有機合成実験をいろいろ手伝ってもらいましたので育児を並行しながら研究を進めることができました。また、研究・実験補助者が実験を行ってくれる間に自分は論文作成・文献調査など育児で限られている勤務時間を有効に使うこともできましたのですごく助かっております。

・本制度により無菌操作に優れた技能をもつ実験補助者を雇用させていただきました。おかげさまで、危機的な状況にあった貴重な緑藻株コレクションの維持管理、凍結保存や実験に必要な細胞試料の調製などが順調に回るようになりました。また緑藻の形質転換、遺伝学的実験など実験技術についても習得し実施していただけるようになりました。

・昨年度より三期連続で本制度を利用させていただきました。そのため、実験補助者に修得していただいた実験技術も増え、依頼できる実験の幅が広がり、様々な実験データを得られることができました。培養細胞を用いた実験には、細胞の継続的な

継代作業が必要となりますが、こういった作業も実験補助者にサポートしていただくことで、休日や子供の急な体調不良による不在時にも助けられました。

2. 「研究・実験補助者雇用制度」を利用した感想

・大変助かった。補助者がいなければ、研究が進まず、精神的にも追いつめられたと思う。試料処理・分析などの時間がかかる作業をしてもらい、自分は論文を読んだり書いたり、学会で発表したり、研究の打ち合わせにも時間を割くことができた。

・長女の誕生により家庭における責任が増加した時期に、このような研究補助者雇用制度により、研究を遅延なく進めることができたのは、大変ありがたいことです。

・同じ研究室の修士学生を雇用できたので、コミュニケーションが取りやすく、依頼した作業の不明点があればすぐに話し合える環境であり、非常に助かりました。

・平日は夫の協力を全く得られない状態で子育てをしており、精神的にも肉体的にも大変なことが多いが、その中で、自分の実験に専任の実験補助者を雇えることは、非常に大きな支えとなっている。

・子育て中は、実験を行う時間が限られているだけでなく、グラントに応募する書類をじっくり準備する時間も不足しており、論文や学会発表のペースも落ちることから、グラント獲得の成功率そのものが落ちる傾向があると思います。この子育て補助があることで、実験補助を雇うことができ、精神的にも実際の実験上もとても助かっています。

・本当にありがたいです。子供のペースに合わせた生活になり研究時間は大幅に減りましたが、本制度のおかげで出産前と同程度の生産性があるかと思えます。本制度がなければ、すべきことが溜まるばかりで自分の研究は捗らず、そんな状況に嫌気がさして「そこまでして仕事をすべきなのか」など自問していたように思います。

・3歳の子どもがおり、共働きで残業が難しいなか実務と研究を両立させるためには、研究・実験補助者制度はとても有り難く、必要不可欠な制度だと感じています。調査・研究に関わるデータや機密事項を共有し、また経理を扱っていただくこともあり、研究・実験補助者として信頼できる方に出会うことがとても大切だと感じています。

・研究・実験補助者雇用制度を利用することで、研究に使える時間ができただけでなく、研究を続けるように背中を押していただいたように感じ、感謝しております。

・本制度を利用することで、日中業務のある中、実験を依頼し研究を遂行できることが、大変生産的であり、睡眠時間や家族への時間を最低限であるが確保することにつながり、大変ありがたい制度であると感謝しています。

・業務の指示を行う経験が今までなかったため、本制度の利用により自分の日常業務の内容をあらためて分析したことが、全体的な効率向上につながりました。育児の時間的ストレス緩和

のため子供にも良い影響があったと思います。

・安心して研究を続けられてたことが大変大きかったです。例えば、インタビュー調査に行っても、その日に子どもが熱を出すかもしれない、その場合は交代者がいるという安心感がありました。これは大変大きいです。また、研究が進んでいくので、遅れるという恐怖感が少なくなりました。

・夫婦共働きの子育て世帯ということもあり、家事・育児・仕事を一杯こなしても仕事が滞るような状況でした。このような中、今期は大きな研究プロジェクトに参画中ですが、本制度のお陰で一定の研究成果を挙げることができました。

・私は出産2か月後から仕事に復帰していますが、育児と研究を並行することはやはり体力を含めいろんな意味で大変です。今回「研究・実験補助者雇用制度」を利用することで本当に助かっておりますのでこれからも支援を強く希望しております。

・夫婦共働きで妻の労働時間も長いと、託児所の送迎、子供の病気の対応などの負担が大きく仕事が滞っていました。そうした点をご理解いただき、支援して頂けることを心から有難く思っています。

・教員だけでなく、研究員という身分でもこの制度を利用させていただくことができたため、子が小さく、研究に十分な時間を割けない間も、実験を進めていただくことができ、大変助けられました。なにより、気持ちに余裕をもって過ごせたことが、一番の支えになったと思います。

3. この制度を利用する上で、困ったこと、改善した方がよいと思うことがあるか

・科研費の申請状況は大学のシステムでも分かるかと思うので、できるだけ本報告書作成の時間を短縮できるよう工夫していたらと助かります。

・特にありません。

・自身が出張等で不在の場合、監督ができないため依頼できないことが少し不便だと感じました。

・本制度の拡大を願います。

・研究・実験補助者の条件が短時間・期限限定なので、技術もあつてかつお願いできる人をタイミングよく探すのが難しいと思いました。

・時間の設定をした場合、その変更手続きが簡便ではないので、変更をもう少し簡便にさせていただきたいです。

・子育て・介護と仕事を両立しようとすると、肉体的、精神的にかなりきつい状況となり、過酷な状況が招いた悲しいニュースもよく聞かれます。実際に子育てや介護に携わっていない職場の人々に対して、育児・介護従事者がどのような状況に置かれているのかということを理解してもらうような活動も必要かと思えます。無知、偏見、妬み嫉みによるハラスメントをなくす職場環境を作っていく必要があると思います。

・特に困ったことはありません。これからも支援を希望しております。

- ・本制度は、雇用者、被雇用者双方にとって素晴らしい制度であり、ぜひ今後とも継続をお願いしたいと思います。できれば1年単位にさせていただけたほうが、候補者の募集や雇用契約の際にスムーズかと思います。
- ・子を持つ親にとって、本制度は本当にとっても良い制度だと思います。ありがとうございました。

4. この制度の募集情報の入手方法(※複数回答あり)

区分	人数
メール（うち所属部局から）	7
センターHP	1
指導教官からの情報	2
知人からの情報	4
その他	2
合計	16

5. その他

・病児保育、お迎え保育や臨時保育、バウチャーを含めて大変お世話になっております。夫婦とも実家が遠方であることから子育て、実務、研究を平行して進めるにあたり、これらの制度があることはとても心強いです。依頼時にも丁寧にご対応くださり、感謝申し上げます。

・次回もこの制度に応募を検討しましたが、産後休暇と重なっていたため、補助者の候補者の調整ができず応募を断念しました。復帰直後に補助者の方がおられればよりスムーズに研究を継続できたかもしれませんが、復帰後軌道にのればまた応募させていただきたいと考えております。

また、よく利用させていただいているほかの事業としては病児保育があり、大変感謝しております。子供もよくなつていて喜んでいきます。風邪のシーズンなど時々定員がいっぱいで困ることがあります。

・1年以上の間、この制度を利用させていただきありがとうございました。本制度のおかげで研究が飛躍的に進みました。このような制度のお陰で、「子育てをしても研究が進められる」、という思いができました。また機会がございましたら、よろしく願います。

・今回は本学の学生を雇用しましたが、学生の予定(講義、出張等)と自分の予定を調整するのが大変な場合がありますので、一般の人をパートで雇うような仕組みを作ってはどうかと思います。1か所だけの研究・実験補助ですと給料が少ないかもしれないので、複数の研究・実験補助の掛け持ちも可能にすればよいと思います。派遣会社に派遣社員として登録するのと同じように、本学の学生も含めて一般の人に京大の研究・実験補助者として登録してもらい、登録してもらった人と本制度の申請者の希望がマッチングすれば雇用するというやり方もできるの

ではないでしょうか。

・以前、子供が待機児童になった際には託児所を利用させていただきました。直前のお願いだったにもかかわらず、すみやかに受け入れていただき、また対応も懇切丁寧で感動しました。その後無事に保育園がみつき、ご無沙汰してしまっておりますが、本当に感謝しております。

・本期間まで、三期間にわたって本制度を利用させていただきました。来年度より異動するため、本制度の利用は今期が最後となります。支援していただき、本当にありがとうございました。

■研究・実験補助者雇用制度 アンケート報告②

対象者:平成 30 年度第 1 期 研究・実験補助者雇用制度利用者 19 名

形式:実績報告と同時にメールにて依頼。

回答率: 94%(18 名)

1. 「研究・実験補助者雇用制度」を利用することで、どのようなことが可能になったか

・京都大学医学部附属病院の倫理審査委員会事務局における業務は実務が中心となるため、毎日研究の時間を確保することが非常に難しい状況でした。科研費を獲得できても、各種手続きに時間がかかってしまい、自分ひとりでは到底論文投稿や調査を実施できなかつたと思います。研究・実験補助者雇用制度を利用することで、事務的な手続きに時間を費やすことなく効率的に各種申請や書類の整理を行うことができ、研究と実務の両立が可能になりました。

・研究・実験補助者雇用制度で支援を得ることで、大学病院で日常業務を行いながらも、実験を遂行し、大学院生の指導が円滑にできるようになった。これまで睡眠時間や家族との時間を削って研究を行ってきたが、使える時間を睡眠、家族との時間に充てることが可能になった。

・保育園への送迎や急な呼び出しにより、長時間の実験を計画できずに困果てていましたが、本制度を通して雇用補助者に実験を依頼し、自身はデータ解析や論文執筆に集中できるようになりました。また、共同研究先に赴いて実験する際なども、学内での実験を一旦止める必要がなくなったので、色々なことを円滑に遂行できました。

・本支援制度では、研究室単位ではなく個人で専任の実験補助者を雇用できるので、実験を依頼しやすく、その他の業務に集中できるようになり、格段に研究スピードが向上しました。

・データ集積がかなり効率的になった

・大学における一定の作業を補助者に任せることにより、申請者が介護のために遠方(八王子市)の病院に通うことが容易になった。博士後期課程大学院生である補助者の研究および就学支援にも役立ち、成果が上がるとともに、日本学術振興会の特別研究員に応募して採用が決定した。終末期の親を抱える申請者の安心感にもつながった。

・3 人の乳幼児の育児中につき研究時間が限られていましたが、本制度を利用し実験補助者を雇用することで、ルーチンワーク化した作業にかかる時間を節約することができました。その分の時間を、データ解析や論文執筆に当てることができ、研究の生産性が上がりました。

・アウトクロス実験は、2週間以上にわたる連続した作業を繰り返すことが必要であるが、この連続作業の一部を実験補助者に依頼することで、滞りなく作業を完了させることができた。

・子供の看護や、出産後の体の不調などで、自分が従事でき

ない部分の実験作業を継続してもらい、実験を大きく途切れさせることなく続けることができました。

・末梢神経の再生を評価するために、電子顕微鏡で得られた画像から再生神経の形態を数千本計測する必要がありますが、補助者に行ってもらうことで大幅に時間的な余裕が生まれました。その結果、論文の執筆時間を増やすことが可能となりました。そして何より、子どもの保育園までの送迎が可能となり、妻の負担軽減や子どもと触れ合う時間が確保できております。

・補助者の方が研究をサポートしてくれることで、保育所の迎えの時間までに仕事を終わらせる事、子供の体調不良時でも研究が中断されることが少なく、研究を続けられる事が可能となりました。また、補助者の方をお願いすることと、私自身が行うことを整理することにより、効率的に時間が使えるようにもなりました。これにより、研究論文の発表につなげることができました。

・4 月に芦生研究林の林長になり、また PTA の役員になり、ますます研究に費やせる時間が減った。しかし、本制度のおかげでサンプル処理やデータ入力を研究補助者にさせていただけることで、僅かな時間でもデータを解析したり、論文を読んだり、論文の執筆を行うことができた。

・本制度により雇用させていただいた方は、これまでに企業や大学で勤務されてきた、植物の培養、無菌操作のエキスパートです。本研究室の貴重な緑藻株コレクションの維持管理、凍結保存や実験に必要な細胞試料の調製や交配実験などを担当させていただいており、我々にとって欠くことのできない存在です。

・保育園への送迎、急病による保育園からの呼び出し、共働きによる家事の分担等のため、どうしても細切れ時間内のできる研究が中心となり、膨大な実験データを取り扱うような研究はできずにいました。しかしながら、本制度で大学院生を雇用し、データ解析の一部を分担していただくことにより、このような研究を実施することが可能になりました。

・有機合成実験をいろいろ手伝ってもらいましたので育児を並行しながら研究を進めることができました。また、研究・実験補助者が実験を行ってくれる間に自分は論文作成・文献調査など育児で限られている勤務時間を有効に使うこともできましたのですごく助かっております。

・研究活動の一部を研究補助者に分担していただくことで少ない研究時間を有効に使えるようになりました。

その結果、多くの研究成果を論文として発表できました。

・サンプルの保存と管理、完成したライブラリの様々な定量・定性解析、次世代シーケンサの操作は、単純作業ですがとても

時間がかかります。その作業を補助して貰うことで、本実験およびその準備・解析に時間を割けるようになりました。

・実験を手伝っていただくことで、解析をしたりデータをまとめる時間を作ることができました。補助者がいない時は、やるべきことを思うようにこなしていけずストレスが溜まるばかりでしたが、日々の全てのことをスムーズに進められています。“こまごまとしたやるべきことに追われない時間”をいただいて、思考や調べものに時間を割くことができ、新しいアイデアが浮かんできます。

・生命科学系の特に生物個体を用いた実験はサンプル数も多く時間のかかる作業も多いのですが、それらを補助者と分担することで、研究がスムーズに進みました。一連の時間のかかる作業を真面目に丁寧に取り組んでくれました。私が子供のお迎えで帰宅した後も継続して作業をして下さり、そのお陰で研究が着実に進みました。

2. 「研究・実験補助者雇用制度」を利用した感想

・4歳の子どもがおり、共働きで残業が難しいなか実務と研究を両立させるためには、研究・実験補助者制度はとて有難く、必要不可欠な制度だと感じています。調査・研究に関わるデータや機密事項を共有し、また経理を扱っていただくこともあり、研究・実験補助者として信頼できる方に出会うことがとても大切だと感じています。

・研究を継続する時間が日常業務で、手術や外来でほぼとれないため、支援を受けられて大変ありがたい制度であると思います。睡眠時間や家族の時間を削って研究を行わざるを得ない状況ですので、心身の健康の維持や家族(妻)への負担も軽減できれば、ありがたい限りです。

・補助雇用者に給料を与えられることにメリットがあり、モチベーションアップにつながれたと思う。

・申請者の場合には、家族の病気が継続的に進行していたので、事前の申請や制度の利用が計画的に可能であったが、予期せぬ事情によって支援が必要となるケースもあるように思われる。随時申請可能な短期支援があってもよい。

・子供ができてから研究にかけられる時間はかなり少なくなり気持ちが焦ることもありましたが、本制度により研究の生産性を少し取り戻すことができました。精神的にも余裕ができ、本当に感謝しております。

・夫が東京に単身赴任しており、両親は中国にいるため、平日は家族の協力を全く得られない状態で子育てをしており、子供がイヤイヤ期に突入し、精神的にも肉体的にも大変なことが多いが、その中で、自分の実験に専任の実験補助者を雇えることは、非常に大きな支えとなった。

・子育て中は、実験を行う時間が限られているだけでなく、グラントに応募する書類をじっくり準備する時間も不足しており、論文や学会発表のペースも落ちることから、グラント獲得の成功率そのものが落ちる傾向があると思います。この子育て補助が

あることで、実験補助を雇うことができ、精神的にも実際の実験上もとても助かり、また、グラント応募にかかる時間も確保できました。ありがとうございました。

・継続して支援を受けることで、実験の遂行だけでなく論文の執筆や外部資金の獲得のための申請書作成など、着実に研究を前に進めることができております。大変ありがたく思っております。

・仕事と育児の時間を確保することができ、精神的にも体力的にも、無事に過ごせていることに感謝しています。

このような制度がもっと普及し、出産・育児・介護をする研究者の支えになることに期待しています。

・大変ありがたい制度である。サンプル処理はとくに時間がかかり急いでやらないといけないので、補助者がいなければ、データの質にも関わる事になっていたと思う。特に、昨年度に続き継続していただけたので、補助者へ細かい点まで指示する必要がなく、サツと丁寧かつ精度よくやってくれたので、私の精神的にも、また研究の進行の面でも大変助かった。

・夫婦共働きで妻の労働時間も長いと、託児所の送迎、子供の病気の対応などの負担が大きく仕事が滞っていました。そうした点をご理解いただき、支援して頂けることを心から有難く思っています。

・夫婦共働きで、子育て中、家事・育児・仕事を目一杯こなしても仕事が滞るような状況で、大きな研究プロジェクトの中で成果を出していかなければなりませんでしたが、本制度を利用して大学院生に研究の一部を分担していただくことで、新たな研究にも着手でき、目途を立てることができたのは大変大きな意味がありました。

・私は出産2ヶ月後から仕事に復帰していますが、育児と研究を並行することはやはり体力を含めいろんな意味で大変です。今回「研究・実験補助者雇用制度」を利用することで本当に助かっておりますのでこれからも支援を強く希望しております。

・子育てに時間を割くべき人生の一時期を研究者としても有意義に過ごすことを可能にする素晴らしい制度だと思います。

・出産後は、保育園の保育時間内しか仕事ができず、また、発熱などの呼び出しの為に、急所帰宅を余儀なくされることがあります。出産前と比較して、実験に割ける時間が大幅に減りましたが、この制度を利用することで、実験の進捗が少し早くなりました。

・本当にありがたいです。継続して同じ技術員の方に働いているので、技術が向上していったとどんどん高度なことを任せられる、というメリットを受けながら、二人三脚で力を合わせて進められていると感じています。本制度のおかげで出産前と同程度に進められていると思います。

・補助者の方は、時間がかかってなかなか進まなかった作業を根気強く処理して下さり、作業について提案もして下さいました。子育て中の研究は時間の制約との戦いですが、人との出会いも含め、この制度には大変助けていただき、感謝しています。

3. この制度を利用する上で、困ったこと、改善した方がよいと思うことがあるか

- ・半年契約と継続が困難になった場合、せっかく雇用した方が途切れてしまうと、また新しく雇用先をみつけたり、雇用者を探したりとなりますので、1年契約に期間延長してほしいと思います。
- ・雇用期間を半年間から一年単位にするほうが、雇用者は依頼しやすく、実験補助者も契約しやすいと思います。私の場合、幸いにも近くに適当な技術者がいましたが、そうでない場合は、雇用期間・給与の観点から実験補助者を外部から募集するのは難しい印象を持ちました。
- ・潜在的ニーズは多いと思うので、枠を拡大し男性でも応募しやすいように周知すべきではないか。
- ・半期ごとの支援のため、長期的な計画を立てづらい点があります。優秀な補助者を雇用したくても、なかなか短期で雇うことは難しい状況かと思えます。子育てや介護は年単位で行うものだとことを鑑みますと、支援も年単位に延長していただくと助かります。いずれにしても、このような支援があること自体素晴らしいことだと思いますので、継続していただければ幸いです。
- ・補助者として、社会人を採用する場合、半年の雇用しか保証ができず(非常に不安定な雇用環境で)、補助者を探すこと自体が難しいです。半年ではなく、少なくとも、1年以上の補助ができれば、もっとこの制度を利用して研究をしよう、とする方が増えるのではないかと思います。
(補足:研究分野によって色々かと思いますが、学生を研究補助者として採用するのは、教育的によいのかどうか、迷うところがあり(講義のTAとは違う)、可能であれば、社会人を採用したいと思っています)
- ・利用できる期間の制限をなくして頂けるとよいと思いました。例えば、複数人の子供を出産した女性は、長い期間、手のかかる乳幼児の育児をすることになり、3ヵ年では不足する方もいるのではないのでしょうか。また、介護は育児と異なり、先が見えないため、期間の制限があつて困る方もいるのではないのでしょうか。一律に、利用期間を3年と区切るのではなく、その方の置かれている状況によって補助期間を決めた方がよいと思いました。
- ・私は適切な補助者が見つかったが、見つからない研究者もいる。一方、最適なスキルを持っていて、補助者として働きたいという方もおられると思う。修士号や博士過程まで行かれたけども、結婚、育児のためフルタイムの仕事ができない、でも研究系のしごとがしたいという方など。こうした方の登録バンクがあれば、よいかもしれない。
- ・本制度は、雇用者、被雇用者双方にとって素晴らしい制度であり、ぜひ今後とも継続をお願いしたいと思います。
- ・本制度では、大学院生等を雇用することが多いかと思えます

が、学生は講義、研究やその他の活動で大変忙しく、学生の時間と手伝ってほしい実験等の時間を合わせるのが難しい場面がありました。本制度について、学外にも周知し、学外からも経験者を実験補助者として雇用しやすい環境を整える必要があるのではないかと感じました。例えば、学外の実験経験者の中で本制度に関心がある方に実験補助者バンク(?)に登録してもらい、実験補助者を希望する人と実験補助者バンクに登録した人が面談してマッチングすれば、そのまま雇用し、マッチングしなければ、学内の院生等を雇用するといったこともできるのではないかと思います。実験補助者バンクには、学外の実験経験者の他、学内の学生も登録してもらうようにすれば、人材をより活用しやすくなると思います。

- ・子育て・介護と仕事を両立しようとして、肉体的、精神的にかなりきつい状況となり、過酷な状況が招いた悲しいニュースもよく聞かれます。育児・介護従事者に対しては本制度は必須と思いますが、実際に育児・介護に携わっていない職場の他の人々に対して、育児・介護従事者がどのような状況に置かれているのかということを理解してもらうような活動も必要かと思えます。無知、偏見、妬み嫉みによるハラスメントをなくす職場環境を作っていく必要があると思います。
- ・特に困ったことはおりません。これからも支援を希望しております。
- ・本制度の雇用時間、雇用期間の拡充を望みます。
- ・

4. この制度の募集情報の入手方法(※複数回答あり)

区分	人数
メール(うち所属部局から)	8
センターHP	2
指導教官からの情報	2
知人からの情報	1
その他	3
合計	16

5. その他

- ・病児保育、お迎え保育や臨時保育、バウチャーを含めて大変お世話になりました。夫婦とも実家が遠方であることから子育て、実務、研究を平行して進めるにあたり、これらの制度があることはとても心強く感じておりました。深く感謝申し上げます。
- ・病児保育室にはいつも助けられています。
- ・男性の間での認知度が低いように思う。共同参画を当たり前にするには、従来関心を持っていなかった層にもアピールする工夫が求められる。
- ・雇用財源が確保できるかどうか不明な段階で候補者を見つけることは難しいので、採択決定時期はもう少し早いとありがたいです。募集要項に「補助者雇用経費について他の資金による代替の可能性が低い者を優先」とあるように、本制度の申

請者は代替財源が確保できないことが多いはずなので尚更です。

・育児も頑張りたいと常々思っており、このような制度があつて大変うれしく思っております。今後も継続していただければいいなと思います。

・以前、子供が待機児童になってしまった際、どこも面倒をみていただける場所が見つからず困っていたところ、男女共同参画推進センターの託児所の存在を知りました。直前のお願いだったにもかかわらず、すみやかに受け入れていただき、また対応も懇切丁寧で本当に助かりました。重ね重ね、御礼申し上げます。

・ベビーシッター支援は実際に利用されている方はいらっしゃるのでしょうか？シッター代が高く、業者も自ら選んで手続きしなければならぬ点も煩雑ですし、2000 円程度の支援を頂いてもなかなか利用には踏み切れないように思います。

佐藤 亨 男女共同参画推進本部支援室長 退任の挨拶

ジェンダー論で高名な先任の伊藤公雄先生とは異なり、男女共同参画とまったく縁のない仕事をしてきた私が女性研究者支援センター（当時）のお手伝いを始めたのは、所属する工学部電気系教室の女性教員が私の妻が研究者であることをご存知で、「働く女性の夫」の立場でよいから、と勧誘された、というはなはだ個人的な事情でした。2009年度から就労形態検討WG（現就労支援事業WG）に参加し、伊藤先生のご退職に伴い昨年度から支援室長を勤めさせて頂きました。



毎年就労支援事業の募集に寄せられる多数の申請書に切々と書かれた、女性研究者を取り囲む厳しい現状を読んで、この国がいかにか立ち遅れているかを痛感して参りました。10年が過ぎてもその状況には目に見える変化がないように思われます。私自身、申請書を機械的に処理する以上の貢献を何一つできずに勤めを終えようとしていることに忸怩たる想いです。男女差別という問題の根深さと共に、政府の唱える女性活躍社会とは何かにか大きな疑問を抱いてしまいます。

しかし、問題が根源的であるだけに、解決に長い時間と多くの人々の継続する意思が不可欠なのは明らかです。「持続可能な活動」こそが重要であると思います。幸いなことに支援室には、若い男性教員も含め多くの強力なメンバーにご参加頂き、日々この問題に取り組んで頂いています。これらの活動がいつか実を結び、京大は男女を問わず働きやすい職場であると、構成員のすべてが感じる日が来ることを祈っております。

資 料

男女共同参画推進センター 関係者名簿

2018.10.1 現在

役職	氏名	所属・職
センター長	稲葉 カヨ	理事・副学長
男女共同参画推進本部支援室長	佐藤 亨	情報学研究科・教授
広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ°		
主査	今村 博臣	生命科学研究科・准教授
事業推進員	鈴木 晶子	教育学研究科・教授
事業推進員	松下 佳代	高等教育研究開発推進センター・教授
事業推進員	久家 慶子	理学研究科・准教授
事業推進員	竹之内 沙弥香	医学部附属病院・特定講師
事業推進員	末永 幸平	情報学研究科・准教授
育児・介護支援事業ワーキンググループ°		
主査	矢野 孝次	理学研究科・准教授
事業推進員	岩崎 奈緒子	総合博物館・教授
事業推進員	齋藤 真紀	法学研究科・教授
事業推進員	渡辺 範雄	医学研究科・准教授
事業推進員	中村 沙絵	アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
事業推進員	片岡 正子	医学部附属病院・助教
事業推進員	吉永 直子	農学研究科・助教
病児保育事業ワーキンググループ°		
主査	足立 壯一	医学研究科・教授
事業推進員	丹羽 房子	医学部附属病院・助教
事業推進員	長尾 美紀	医学部附属病院・准教授
事業推進員	河合 優美子	医学部附属病院・副看護部長
事業推進員	小川 優	医学部附属病院・総務課長
事業推進員	隈村 綾子	医学部附属病院・医務課掛長
就労支援事業ワーキンググループ°		
主査	喜多 恵子	農学研究科・教授
事業推進員	木下 彩栄	医学研究科・教授
事業推進員	高橋 淑子	理学研究科・教授
事業推進員	横山 美夏	法学研究科・教授
事業推進員	瀬原 淳子	再生医科学研究所・教授
事業推進員	船越 資晶	法学研究科・教授
事業推進員	高橋 良和	工学研究科・教授

男女共同参画推進委員会会議 議事

■推進委員会会議議題と資料

2017年4月2日(月)

【報告】

1. 新しいメンバーの紹介
2. 関西科学塾の主催について
3. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. センター2019年度予定表
2. ILASセミナー講義予定表
3. メンター新規・継続登録依頼状
4. 待機乳児保育室 アンケート結果(コメント欄)
5. 病児保育室こもも パンフレット

5月14日(月)

【報告】

1. ベビーシッター育児支援割引券の利用について
2. 女性研究者キャリアカフェ in 京都大学 申込状況
3. 女子高生・車座フォーラム2018 チラシ案(デザイン、プログラム)
4. センターHP バナー作成
5. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 平成30年度 ベビーシッター割引券について
2. 車座フォーラム2018 チラシデザイン案①～⑤、プログラム案
3. センターHP バナー
4. ニュースレター「たちばな」第78号
5. 関西科学塾 チラシ
6. メンター登録者一覧(文系・理系別)

6月4日(月)

【報告】

1. 5/17(木)女性研究者キャリアカフェ in 京都大学 24名参加
2. 女子高生・車座フォーラム2018 チラシ決定
3. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. キャリアカフェ in 京都大学 参加者アンケート
2. 車座フォーラム2018 チラシ
3. 研究実験補助者 平成30年度2期 募集要項

7月9日(月)

【議事】 女子学生を増やすための取り組みについて

【報告】

1. 8/31 日経ウーマノミクスについて
2. 女子高生・車座フォーラム2018 チラシ送付
3. 学会での病児保育室利用、保育士派遣について
4. 地震発生時 待機保育室の対応について
5. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 日経ウーマノミクス 登壇者紹介
2. 車座フォーラム 2018 チラシ
3. ニュースレター「たちばな」第 79 号原稿
4. センターHP 完成予定図
5. 育児介護支援事業 WG 新メンバー

9月10日(月)**【報告】**

1. 8/31 日経ウーマノミクスに参加
2. 9/4 台風のため、待機乳児保育室を臨時休室
3. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 青いリボンのエトセトラ Vol.5 表紙デザイン
2. 卒業生取材対象者リスト
3. 女子高生応援大使 募集チラシ
4. 研究実験補助者平成 30 年度 2 期 採択一覧
5. ニュースレター「たちばな」第 80 号原稿
6. メンター相談依頼実績

10月1日(月)**【報告】**

1. 女子高生・車座フォーラム 2018 参加者募集開始
2. 全学共通科目【ジェンダー論】開始 10/1～ 担当:文学研究科 落合 恵美子先生
3. 女子学生母校訪問事業『女子高生応援大使』募集締切
4. 卒業生(OG)冊子 取材開始
3. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. ニュースレター「たちばな」第 80 号

11月5日(月)**【議事】**

1. 第 5 回 Women & Wish フォーラムの開催について

【報告】

1. 第 11 回京都大学たちばな賞 募集開始
2. 11/2 BBC ジャーナリスト大井真理子氏の講演会 後援
3. 1/16 日本工学アカデミー第 2 回ジェンダーシンポジウム 共催
4. 11/26 東南研開催ジェンダーセミナー 育児介護 WG の吉永先生が出席
5. 車座フォーラム プログラム変更
6. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 第 11 回京都大学たちばな賞 募集チラシ
2. BBC ジャーナリスト大井真理子氏の講演会 チラシ
3. 日本工学アカデミー第 2 回ジェンダーシンポジウム チラシ
4. 車座フォーラム 訂正プログラム
5. ニュースレター「たちばな」第 81 号原稿
6. 病児保育室 オープンホスピタルポスター

12月3日(月)

【報告】

1. 第11回京都大学たちばな賞 募集終了
2. ベビーシッター育児支援割引券利用状況
3. 自然災害発生時の保育室の開閉所の基準について
4. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. 自然災害発生時の保育室の開閉所の基準
2. ニュースレター「たちばな」第81号

1月15日(火)

【議事】

1. 平成31年度 待機乳児保育室の開室について

【報告】

1. 第11回京都大学たちばな賞 審査状況
2. ベビーシッター割引券 利用状況、平成31年度利用について
3. 3/4(月) Women and the World 5 開催について
4. 京大サイトおよび研究者支援・制度一覧サイト情報について
5. 来年度より病児保育室の利用資格(年齢)引上げについて
6. 4月からの病児保育WG 主査、推進員について
7. ワーキンググループの活動状況と今後の予定

【資料】

1. H31 待機乳児保育室 開室準備資料
2. ベビーシッター割引券 利用状況
3. 京大サイトおよび研究者支援・制度一覧サイト情報
4. 車座フォーラム2018 アンケートコメント
5. ニュースレター「たちばな」第82号
6. 基金申請案

京都大学教員数

(平成30年5月1日現在)

区分	総長		役員			教授			准教授			講師			助教			助手			合計				
	男	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
総長	1	1																					1	1	
理事・監事(非常勤含む)			8	1	9																		8	1	9
文学研究科						40	10	50	24	3	27	2		2	4	1	5						70	14	84
教育学研究科						11	7	18	9	3	12	1	1	2	3	1	4						24	12	36
法学研究科						41	5	46	11	4	15		1	1				1	1				52	11	63
経済学研究科						21	1	22	9	2	11	1	3	4	1		1						32	6	38
理学研究科						78	1	79	78	10	88	9	1	10	75	6	81						240	18	258
医学研究科						68	8	76	53	12	65	50	7	57	36	19	55						207	46	253
医学部附属病院						5	1	6	15	2	17	9		9	125	19	144						154	22	176
薬学研究科						13		13	10	2	12	4	2	6	9	2	11						36	6	42
工学研究科						129	1	130	109	3	112	27	3	30	101	8	109						366	15	381
農学研究科						61	4	65	43	3	46	4	1	5	59	6	65						167	14	181
人間・環境学研究科						59	10	69	24	4	28		1	1	17	1	18						100	16	116
エネルギー科学研究科						19		19	20		20			9		9							48	0	48
アジア・アフリカ地域研究研究科						14		14	8	4	12			1	1	2							23	5	28
情報学研究科						39		39	24	1	25	9		9	29	1	30						101	2	103
生命科学研究科						17		17	16	1	17	3	1	4	13	1	14						49	3	52
総合生存学館						6	2	8	3		3												9	2	11
地球環境学堂						17		17	10	5	15			9	3	12							36	8	44
公共政策連携研究部						10		10															10	0	10
経営管理研究部						14	1	15	3	1	4												17	2	19
化学研究所						27		27	15	1	16		2	2	34	3	37						76	6	82
人文科学研究所						19	1	20	14	2	16		1	1	7	5	12	1		1			41	9	50
ウイルス・再生医学研究所						17	2	19	16	1	17	4		4	20	6	26						57	9	66
エネルギー理工学研究所						10		10	12		12	1		1	11		11						34	0	34
生存圏研究所						13		13	10		10	2		2	8	2	10						33	2	35
防災研究所						29	1	30	34	1	35		1	1	16	1	17						79	4	83
基礎物理学研究所						9		9	9		9	1		1	3		3						22	0	22
経済研究所						11		11	2		2			1	1	2							14	1	15
数理解析研究所						13		13	10		10	3		3	9	1	10						35	1	36
原子炉実験所						14		14	21	2	23	1		1	26	3	29						62	5	67
霊長類研究所						12		12	10		10			7	5	12							29	5	34
東南アジア地域研究研究所						12	3	15	10	2	12			3	2	5							25	7	32
iPS細胞研究所						11	2	13	9		9	3		3									23	2	25
附属図書館											1	1				1	1						0	2	2
学術情報メディアセンター						8		8	6		6	1		1	4		4						19	0	19
生態学研究センター						6		6	2	1	3												8	1	9
野生動物研究センター						3	1	4	1		1				1	1							4	2	6
高等教育研究開発推進センター						2	1	3	2	1	3												4	2	6
総合博物館						2	1	3	1	1	2	1		1	2		2						6	2	8
フィールド科学教育研究センター						4	1	5	7	1	8	2		2	6	3	9						19	5	24
福井謙一記念研究センター						1		1															1	0	1
こころの未来研究センター						3	1	4		1	1												3	2	5
文化財総合研究センター									1		1				4		4						5	0	5
学生総合支援センター						1		1	1	2	3	2		2									4	2	6
大学文書館						1		1															1	0	1
学際融合教育研究推進センター									1		1												1	0	1
国際高等教育院						21	4	25	14	3	17	2		2									37	7	44
環境安全保健機構						5		5	4	1	5			8	1	9							17	2	19
情報環境機構						3	1	4	1		1			1	1	2							5	2	7
産官学連携本部									1		1												1	0	1
高等研究院						3	1	4	5		5	1		1	1		1						10	1	11
合計	1	1	8	1	9	922	71	993	688	81	769	143	25	168	662	105	767	1	1	2	2425	284	2709		

(注)育児休業者・退職者、再雇用者は除く

京都大学学生数

学部学生数

(平成30年5月1日現在)

区分	学部学生			聴講生			科目等履修生			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
総合人間学部	421	163	584				8	6	14	429	169	598
文学部	594	411	1,005	31	17	48	8	5	13	633	433	1,066
教育学部	169	116	285	4	2	6	3	1	4	176	119	295
法学部	1,091	412	1,503	1		1				1,092	412	1,504
経済学部	919	214	1,133	1		1				920	214	1,134
理学部	1,253	132	1,385				12		12	1,265	132	1,397
医学部(6年制)	565	123	688							565	123	688
医学部(4年制)	158	380	538							158	380	538
薬学部(6年制)	84	75	159							84	75	159
薬学部(4年制)	134	42	176				2		2	136	42	178
工学部	3,860	408	4,268	1		1	1	1	2	3,862	409	4,271
農学部	879	436	1,315				5	1	6	884	437	1,321
計	10,171	2,946	13,117	38	19	57	39	14	53	10,248	2,979	13,227
	(141)	(96)	(237)							(141)	(96)	(237)

(注) ()内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数。

大学院学生数

(平成30年5月1日現在)

区分	修士課程			博士(後期)課程			専門職学位課程			聴講生			科目等履修生			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
文学研究科	143	90	233	135	63	198				12	13	25				290	166	456
教育学研究科	47	47	94	44	37	81							2	4	6	93	88	181
法学研究科	16	21	37	64	14	78	253	104	357	1		1	1	1	2	335	140	475
経済学研究科	62	44	106	83	29	112							2	1	3	147	74	221
理学研究科	572	93	665	414	70	484							3		3	989	163	1,152
医学研究科				502	216	718										502	216	718
	63	112	175	97	96	193	36	35	71							196	243	439
薬学研究科				24	13	37										24	13	37
	113	36	149	40	17	57										153	53	206
工学研究科	1,358	176	1,534	406	85	491				1		1	1		1	1,766	261	2,027
農学研究科	452	234	686	171	64	235								2	2	623	300	923
人間・環境学研究科	192	147	339	180	134	314										372	281	653
エネルギー科学研究科	252	31	283	53	19	72								1	1	305	51	356
アジア・アフリカ地域研究研究科				80	79	159							1	2	3	81	81	162
情報学研究科	405	49	454	110	29	139										515	78	593
生命科学研究科	109	74	183	59	47	106										168	121	289
総合生存学館				34	28	62										34	28	62
地球環境学舎	46	52	98	27	36	63										73	88	161
公共政策教育部							68	17	85	1		1				69	17	86
経営管理教育部				19	3	22	116	81	197				9	2	11	144	86	230
計	3,830	1,206	5,036	2,542	1,079	3,621	473	237	710	15	13	28	19	13	32	6,879	2,548	9,427
	(376)	(340)	(716)	(493)	(372)	(865)	(35)	(52)	(87)							(904)	(764)	(1668)

(注1) 医学研究科・薬学研究科の博士(後期)課程の上段は博士課程(4年制)

(注2) アジア・アフリカ地域研究研究科、総合生存学館は一貫制博士課程

(注3) ()内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数。

京都大学の女性研究者・女子学生の状況

1. 教員数の経年変化と女性比率

(分析データ：京都大学概要 2018)

2004年までは、保田その氏の作成データ（京都大学女性教員懇話会 2005年度ニュースレターNo.2）による

2018年5月1日現在の京都大学の教員数(助手2名を含む)は、全体で2,709名である。そのうち女性教員は全体の10.5%、数にしてわずか284名である。2006年は7.3%だったので、この12年間で3.2%増加している。女性教員数が目立って増加の傾向を見せてきたのは、2000年頃からである。図1に1952年以來の女性教員の推移を示す。

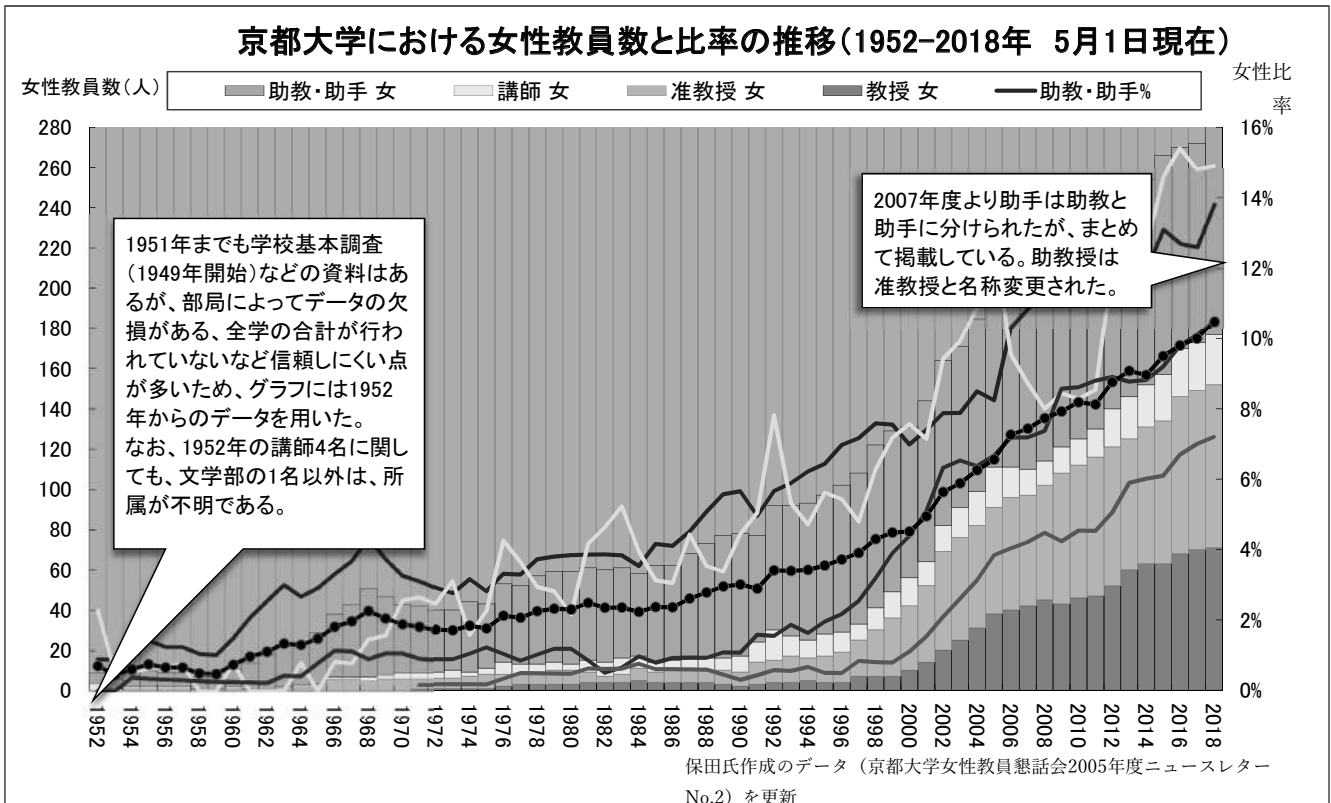


図1：1952年以來の女性教員の推移

職階別に男女比を見ると、女性は総数が少ないのでどのポストでもわずかだが、その中でも、教授ポストの女性比率が特に少なく、7.2%しかない。准教授ポストでは10.5%、講師では14.9%、助教・助手では13.8%が女性である(図2)。

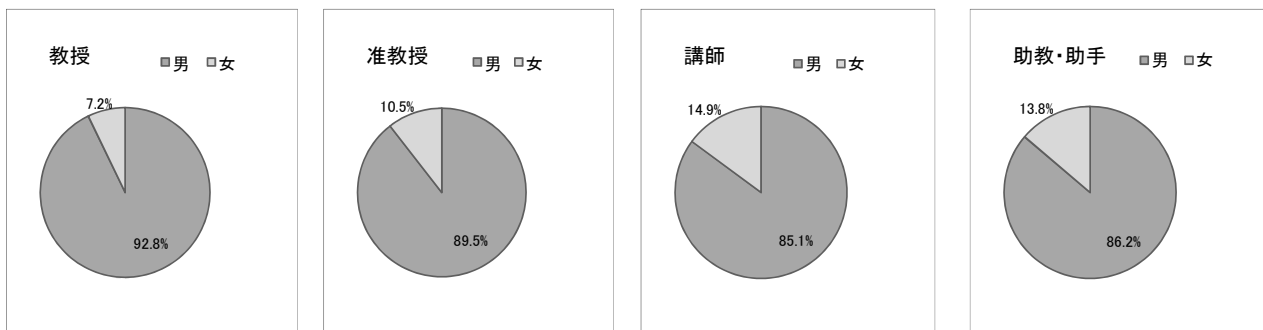


図2 教員の職階毎の男女比(2018年5月1日現在)

図3の職階分布からわかるように、男性では教授(38.2%)が最も多く、女性では助教・助手(37.5%)が最も多い。

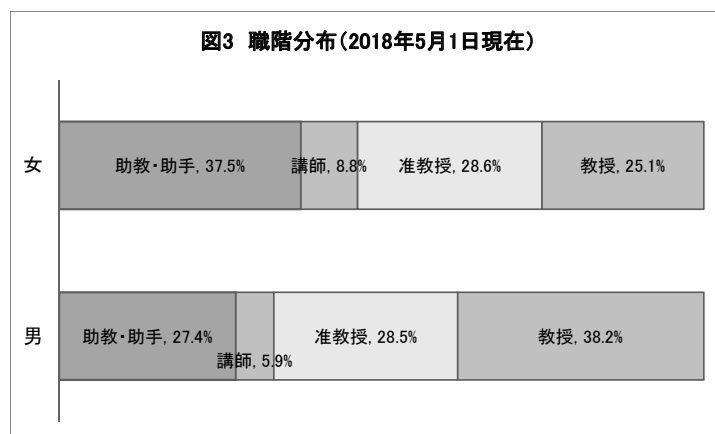


表1に男女別教員数(「定員」)を示す。女性がない部局は載せていないが、総合計は総教員数である。

表1 男女別教員数(「定員」)と女性比率(部局別)

部	局	男	女	計	女性比率
附属図書館		0	1	1	100.0%
こころの未来研究センター		3	2	5	40.0%
野生動物研究センター		4	2	6	33.3%
高等教育研究開発推進センター		4	2	6	33.3%
学生総合支援センター		4	2	6	33.3%
教育学研究科		24	12	36	33.3%
情報環境機構		5	2	7	28.6%
総合博物館		6	2	8	25.0%
東南アジア研究所		25	7	32	21.9%
フィールド科学教育研究センター		19	5	24	20.8%
医学研究科		207	46	253	18.2%
総合生存学館		9	2	11	18.2%
地球環境学堂		36	8	44	18.2%
人文科学研究科		41	9	50	18.0%
アジア・アフリカ地域研究研究科		23	5	28	17.9%
法学研究科		52	11	63	17.5%
文学研究科		70	14	84	16.7%
国際高等教育院		37	7	44	15.9%
経済学研究科		32	6	38	15.8%
霊長類研究所		29	5	34	14.7%
薬学研究科		36	6	42	14.3%
人間・環境学研究科		100	16	116	13.8%
ウイルス・再生医科学研究科		57	9	66	13.6%
医学部附属病院		154	22	176	12.5%
生態学研究センター		8	1	9	11.1%
環境安全保健機構		17	2	19	10.5%
経営管理研究部		17	2	19	10.5%
高等研究院		10	1	11	9.1%
i P S細胞研究所		23	2	25	8.0%
農学研究科		167	14	181	7.7%
複合原子力科学研究科		62	5	67	7.5%
化学研究所		76	6	82	7.3%
理学研究科		240	18	258	7.0%
経済研究所		14	1	15	6.7%
生命科学研究科		49	3	52	5.8%
生存圏研究所		33	2	35	5.7%
防災研究所		79	4	83	4.8%
工学研究科		366	15	381	3.9%
数理解析研究所		35	1	36	2.8%
情報学研究科		101	2	103	1.9%
総	計	2,415	282	2,697	10.5%

2. 女性研究者の雇用形態

(分析データ：総務部資料 2018年5月1日)

表2に示すように、本学には女性研究者が約906人いる。プロジェクトなどの雇用でない、いわゆる“定員”の教員は283人、残り623人が種々のプロジェクトなどで雇用されている任期付きの研究者である。表2にその職種、職階分布を示した。表2で常勤というのは、勤務形態は定員と同じだが雇用形態が例えば、准教授(産官学連携)というように職名に財源の由来が付いている任期付きのポストを示している。非常勤というのは、勤務形態が非常勤で雇用の財源はいろいろである。例えば「最先端研究」などである。

表2 女性研究者の雇用形態

学内の雇用形態		人数	%
定員	教授	71	7.8
	准教授	81	8.9
	講師	25	2.8
	助教・助手	106	11.7
	合計	283	31.2
常勤	教授	4	0.4
	准教授	24	2.6
	講師	14	1.5
	助教	87	9.6
	研究員	158	17.4
	合計	287	31.7
非常勤	研究員	263	29.0
	医員	68	7.5
	教員	5	0.6
	合計	336	37.1
総合計		906	100.0

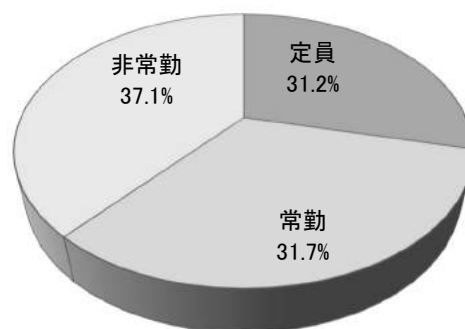


図4 女性研究者の雇用形態

3. 女性教員の部局別・職階別分布

表3に全部局の職階別女性教員数(2018年5月1日現在)を示す。

(分析データ：総務部資料2018年5月1日)

表3：部局別職階別女性教員数（2018年5月1日現在、総務部より）

部局	定員					常勤						非常勤				総合計
	教授	准教授	講師	助教 助手	合計	教授	准教授	講師	助教	研究員	合計	研究員	医員	教員	合計	
医学部附属病院	1	2	0	19	22	0	2	1	22	9	34	18	68	0	86	142
医学研究科	8	12	7	19	46	1	3	3	12	12	31	61	0	0	61	138
i P S細胞研究所	2	0	0	0	2	1	0	0	5	44	50	5	0	0	5	57
工学研究科	1	3	3	8	15	0	0	0	3	12	15	19	0	0	19	49
農学研究科	4	3	1	6	14	0	1	0	5	5	11	20	0	0	20	45
理学研究科	1	10	1	6	18	0	0	0	0	11	11	7	0	0	7	36
ウイルス・再生医学研究所	2	1	0	6	9	0	0	0	3	3	6	13	0	0	13	28
霊長類研究所	0	0	0	5	5	0	0	0	2	6	8	9	0	2	11	24
人間・環境学研究科	10	4	1	1	16	0	0	1	1	2	4	3	0	0	3	23
生存圏研究所	0	0	0	2	2	1	0	0	0	8	9	12	0	0	12	23
生命科学研究科	0	1	1	1	3	0	0	0	2	2	4	12	0	0	12	19
学際融合教育研究推進センター	0	0	0	0	0	0	2	0	5	7	14	4	0	0	4	18
教育学研究科	7	3	1	1	12	0	0	0	3	0	3	3	0	0	3	18
高等研究院	1	0	0	0	1	0	2	0	3	4	9	8	0	0	8	18
文学研究科	10	3	0	1	14	0	0	0	0	2	2	2	0	0	2	18
法学研究科	5	4	1	1	11	0	0	0	6	0	6	0	0	0	0	17
地球環境学	0	5	0	3	8	0	1	0	0	2	3	5	0	0	5	16
国際高等教育院	4	3	0	0	7	0	2	5	0	0	7	0	0	0	0	14
東南アジア地域研究研究所	3	2	0	2	7	0	0	0	3	2	5	2	0	0	2	14
防災研究所	1	1	1	1	4	0	0	0	0	5	5	4	0	0	4	13
化学研究所	0	1	2	3	6	0	0	0	0	2	2	4	0	0	4	12
人文科学研究科	1	2	1	5	9	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	12
野生動物研究センター	1	0	0	1	2	0	0	0	2	1	3	6	0	1	7	12
薬学研究科	0	2	2	2	6	0	0	1	0	1	2	4	0	0	4	12
産官学連携本部	0	0	0	0	0	0	1	0	1	4	6	5	0	0	5	11
アジア・アフリカ地域研究研究科	0	4	0	1	5	0	0	0	1	2	3	1	0	0	1	9
こころの未来研究センター	1	1	0	0	2	0	0	2	0	1	3	4	0	0	4	9
情報学研究科	0	1	0	1	2	0	0	0	1	5	6	1	0	0	1	9
生態学研究センター	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	2	6	0	0	6	9
複合原子力科学研究所	0	2	0	3	5	0	0	0	0	0	0	3	0	1	4	9
フィールド科学教育研究センター	1	1	0	3	5	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	8
経営管理研究部	1	1	0	0	2	0	2	0	0	0	2	3	0	1	4	8
白眉センター	0	0	0	0	0	0	3	0	4	0	7	0	0	0	0	7
経済学研究科	1	2	3	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
高等教育研究開発推進センター	1	1	0	0	2	0	0	0	1	1	2	2	0	0	2	6
総合博物館	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	4
アフリカ地域研究資料センター	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	2	3
エネルギー理工学研究所	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	2	3
学生総合支援センター	0	2	0	0	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3
環境安全保健機構	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3
基礎物理学研究所	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	1	0	0	1	3
総合生存学館	2	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3
エネルギー科学研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	2
学術情報メディアセンター	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	2
情報環境機構	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
大学院横断教育プログラム推進センター	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	2
附属図書館	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
経済研究所	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
数理解析研究所	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
総務部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1
大学文書館	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1
福井謙一記念研究センター	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1
合計	71	81	25	106	283	4	24	14	87	158	287	263	68	5	336	906

4. 女子学生の状況

(分析データ：総務部資料 2018 年 5 月 1 日)

2018 年 5 月 1 日現在の京都大学の学部生数、大学院生数、女性比率を表 4 と表 5 に示す。1946 年からの女子学生数とその比率は図 5 にある。

学部学生の女性比率は全体で 22.5%と、教員と比較するとかなり高い。医学部(4 年制)では、70.6%、薬学部(6 年制)では 47.2%、文学部、教育学部は、約 40%が女子学生である。工学部は教員と同じく低く、女性比率 9.6%である。大学院では、修士課程から博士課程に進むに従って、女性比率が、23.9%から 29.8%へと高くなる。しかし、図 6 に示したように教員への道は細いパイになっている。

表4 学部学生数と女性比率

	学部生数計	女性%
総合人間学部	584	27.9
文学部	1,005	40.9
教育学部	285	40.7
法学部	1,503	27.4
経済学部	1,133	18.9
理学部	1,385	9.5
医学部(6年制)	688	17.9
医学部(4年制)	538	70.6
薬学部(6年制)	159	47.2
薬学部(4年制)	176	23.9
工学部	4,268	9.6
農学部	1,315	33.2
計	13,117 (237)	22.5

注) () 内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数

表5 大学院生数と女性比率

	修士課程	女性%	博士課程	女性%
文学研究科	233	38.6	198	31.8
教育学研究科	94	50.0	81	45.7
法学研究科	37	56.8	78	17.9
経済学研究科	106	41.5	112	25.9
理学研究科	665	14.0	484	14.5
医学研究科			718	30.1
	175	64.0	193	49.7
薬学研究科			37	35.1
	149	24.2	57	29.8
工学研究科	1,534	11.5	491	17.3
農学研究科	686	34.1	235	27.2
人間・環境学研究科	339	43.4	314	42.7
エネルギー科学研究科	283	11.0	72	26.4
アジア・アフリカ地域研究研究科			159	49.7
情報学研究科	454	10.8	139	20.9
生命科学研究科	183	40.4	106	44.3
総合生存学館			62	45.2
地球環境学舎	98	53.1	63	57.1
公共政策教育部				
経営管理教育部			22	13.6
計	5,036 (716)	23.9	3,621 (865)	29.8

(注1)医学研究科博士(後期)課程の上段は博士課程(4年制)

(注2)アジア・アフリカ地域研究研究科、総合生存学館は一貫制博士課程

(注3) () 内は、外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数

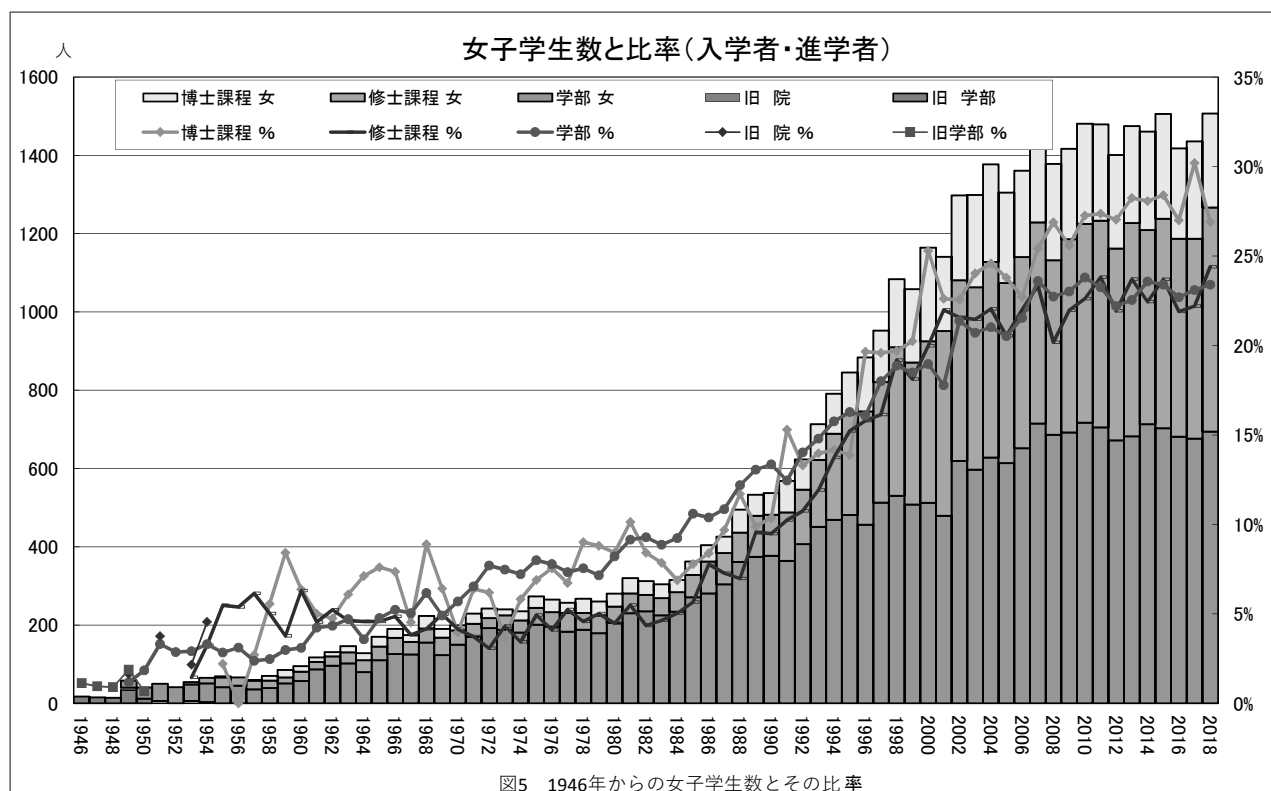


図5 1946年からの女子学生数とその比率

図6 女性の比率の流れ



※ 2.「女性研究者の雇用形態」(表 2、図 4)、3.「女性教員の部局別・職階別分布」(表 3)は、総務部(2018年5月1日現在)より作成。その他は、京都大学概要 2018(2018年5月1日現在)より作成。総務部データと京都大学概要では、集計上の事情によって女性研究者総数で数名の違いがある。また、作図にあたり四捨五入している。

「京都大学教員・研究員の生活時間に関する
アンケート調査」

報告書

はじめに

本学の男女共同参画推進については、2015年4月、新たに2020年までの山極総長のもとでのアクション・プランを策定した。同アクション・プランでは「女性リーダーの育成」・「家庭生活との両立支援」・「次世代育成支援」を3つの重点目標を定めており、これらの実現に向けた基盤整備と推進体制の拡充を図っているところである。

また、2015年6月には、山極総長は「京都大学の改革と将来構想」として「WINDOW 構想」を提示したが、「WINDOW 構想」の最後の“W”は“Women and Wish”（2018年3月からは“Women and the World”）であり、「男女共同参画アクション・プランや学生のキャリアパス支援機構により明るい希望を持てる環境を整備します。」とされたところである。

他方、2018年11月に公表された「国立大学における男女共同参画推進の実施に関する第15回追跡調査報告書」によると、2018年5月における国立大学法人全体の常勤女性教員数比率が16.7%である中、本学は12.1%に留まっており、今後、本学の男女共同参画をさらに強力に推進するためには、さらに裾野を拡大するとともに、必要とされる環境整備や、多面的な支援を効果的に実施していくことが必要であると考えられる。

本件は、上記のような背景のもと、本学の研究者が置かれている実態や状況及び過去の調査時点からの変化を把握するとともに、本学の男女共同参画推進に係る今後の方策の検討に資するため、2017年に実施したアンケート調査の結果について取りまとめ、報告するものである。

調査の概要

1. 調査目的

京都大学における教員・研究員が自らの研究をどのような状況の中で進めているのか、また、研究を推進する上で、どのような環境の整備が必要であるのかを明らかにし、今後の大学としての男女共同参画推進の方策や施策立案に役立てるため。とりわけ、女性研究者の育児介護の状況を知り、それを公表することにより、啓発活動に資するため。2011年に続き、今回が2回目の調査となる。

2. 調査対象

本学に在籍する教員及び研究員（約4,500名）。

3. 調査方法

WEB上での回答。期間は2017年7月4日（火）から8月31日（木）に実施した。

第1章 京都大学に在籍する教員・研究員

1.1 本アンケート調査の目的

本調査の対象者は教員及び研究員に限った。その理由は、絶えず研究の進展を目指して日夜励まなければならない女性研究者にとっての生活とはどのようなものであるのか、また、男性研究者との生活時間構成に違いがあるのか、育児介護等を抱える研究者（女性に限らず男性研究者）は研究時間をどのように確保しているのかなどについての状況を知ることにあつた。筆頭著者としての研究業績の積み重ねが必要な研究者にはワークシェアが難しく、日進月歩の研究の進展の中で研究の中断により、周囲から取り残されるようにも感じられる研究者を支援するには、どのような方策が必要とされているのかを明らかにしたいと考えてのものでもある。

1.2 京都大学の教員・研究員構成

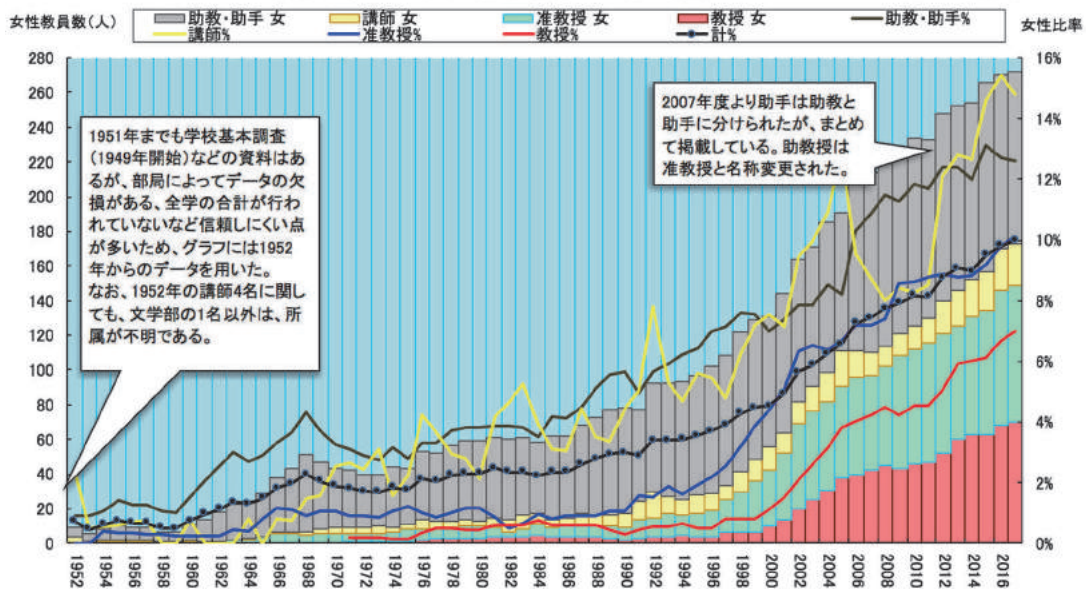
京都大学における女性研究者数は、「男女共同参画社会基本法」が公布された1999年以降急速に増加してきた。2005年に策定された「男女共同参画基本計画（第2次）」には、「12.新たな取組を必要とする分野における男女共同参画の推進」において、項目「(1)科学技術」が立てられ、科学技術分野の男女共同参画が重要な分野として位置づけられ、女性新規採用割合の数値目標「各研究組織毎に、当該分野の博士課程（後期）における女性割合等を踏まえつつ、自然科学系全体として25%（理学系20%、工学系15%、農学系30%、保健系30%）」を目安とすることが盛り込まれ、この数値目標は「科学技術基本計画（第3次）」にも反映され、ポジティブ・アクションの推進も明示された。これらを受け、2006年には科学技術振興機構では「女性研究者支援モデル育成事業」が開始され、女性研究者のライフイベント及びワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や女性研究者数の増加と研究力の向上、上位職位への積極登用などが目指されることになった。

一方、国立大学でも、2000年には「国立大学における男女共同参画を推進するために」とした提言がまとめられ、2007年に公表された「国立大学における男女共同参画推進の実施に関する第3回追跡調査報告書」以降は、国立大学各校における職位毎の女性研究者比率が示されるようになってきている。その結果を「第15回追跡調査報告書」を見ると、どの大学でも女性教員比率が増加しているが、本学は他の旧帝国大学

中での伸びは高くはないのが現状である。2009年以降、任期制の特定有期雇用制度が設けられたことから、この調査では、これらの人達もカウントされている。

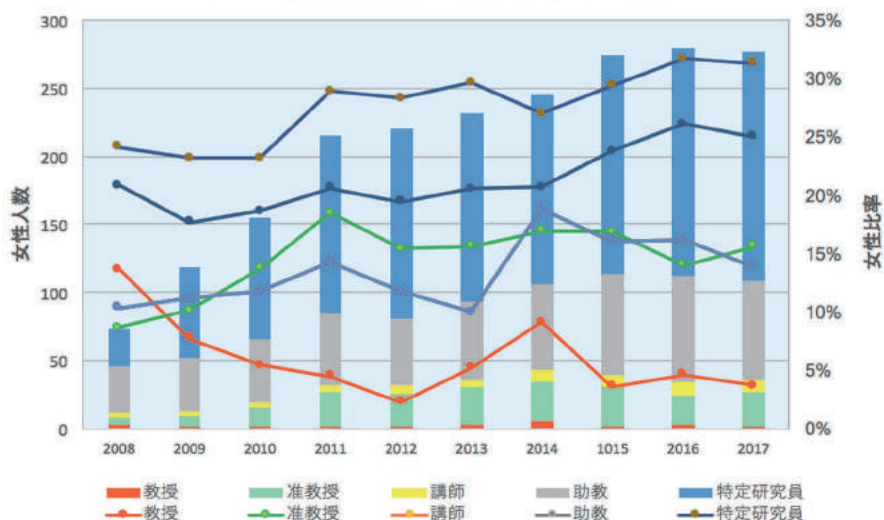
これらを踏まえて、今日に至る京都大学の女性教員数とその比率の推移を図1-1に、特定有期雇用である教員と研究員の数とその比率の推移を図1-2にまとめた。

図I-1 京都大学における女性教員数と比率の推移(1952-2017年 5月1日現在)



保田氏作成のデータ(京都大学女性教員懇話会2005年度ニュースレターNo.2)を更新

図I-2 特定有期教員・研究員の比率と推移



「第14回追跡調査報告書」では、本学の女性教員比率は2017年度5月1日現在で11.7%であり、「京都大学概要2017」では特定有期雇用を除いた女性教員の比率は9.9%、特定有期雇用の女性教員比率は19.0%である。特定有期雇用の教員に於いて

は、上位の職では大きな増加は見られず、教授職ではむしろ低下している状況ではあるが、それ以外では増加傾向が見て取れることから、特定有期の上位職だけでなく、正規の女性教員の増加にも繋がるのが期待できるのかもしれない。

1.3 アンケート調査対象者と回答者

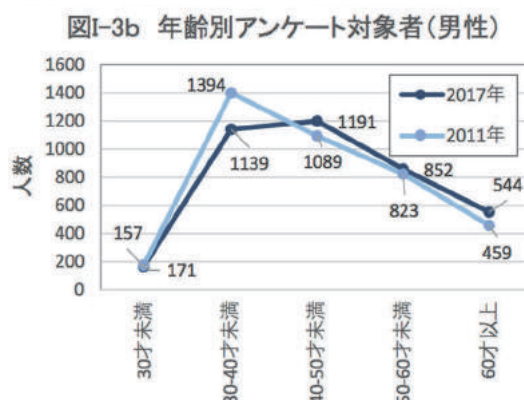
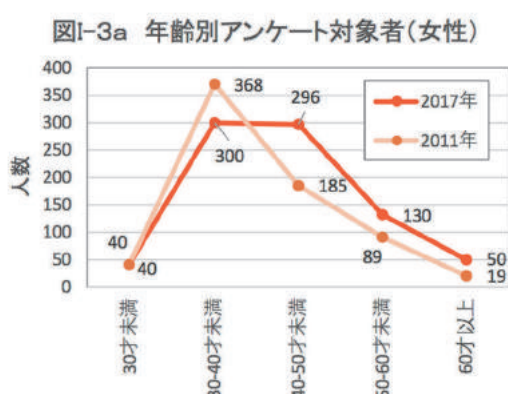
本調査は本学に在籍する教員・研究員を対象としたものであり、後掲の調査票を用いて WEB 上において実施した。

今回ならびに前回 2011 年のアンケート調査の対象者数については表 I-1 にまとめた。なお、教員の人数には特定有期雇用教員を含めている。注目すべきは、全体としての女性数の増加率が 130% であるのに対して、男性数は 105% にとどまり、とりわけ女性教授と講師及び常勤（特定有期雇用）研究員数の増加率の高さが目を引く。それぞれ、女性では 145%、155%、172% であるのに対して、男性では -3%、114%、145% である。男性教授と非常勤研究員の数、実員数としても減少していることが見て取れる。

表 I-1 今回ならびに前回調査の対象者数

	女性							男性						
	教授	准教授	講師	助教	常勤研究員	非常勤研究員	計	教授	准教授	講師	助教	常勤研究員	非常勤研究員	計
2017年	74	102	34	180	165	245	800	997	839	195	957	371	430	3789
2011年	51	81	22	137	96	230	617	1032	780	171	914	259	445	3601
増減	23	21	12	43	69	15	183	-35	59	24	43	112	-15	188

また、男女対象者の年齢構成に着目してまとめたものが図 I-3 a（女性）と図 I-3 b（男性）である。ここでも注目すべき点が示された。それは、30 才以上-40 才未満（以下は 30-40 才というように記載）の人数が男女とも減少していることである。女性では 68 名、男性では 255 名である。さらに、男性では 30 歳未満も減少していた。一方、40 才以上の人数に関しては、男女ともどの年代でも増加していた。実員数に男女差があるためグラフからはその変化が読み取りにくいこともあるが、女性では 40-50 才、50-60 才、60 才以上の人数の増加は、それぞれ 111 名、41 名、31 名であり、男性では 102 名、29 名、85 名であった。

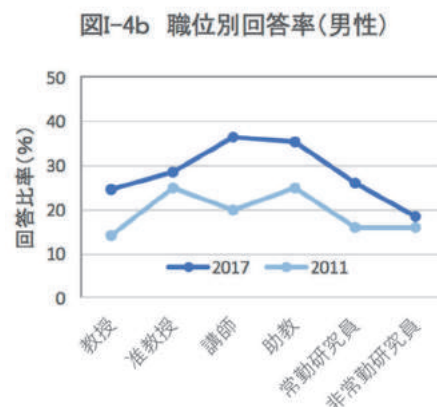
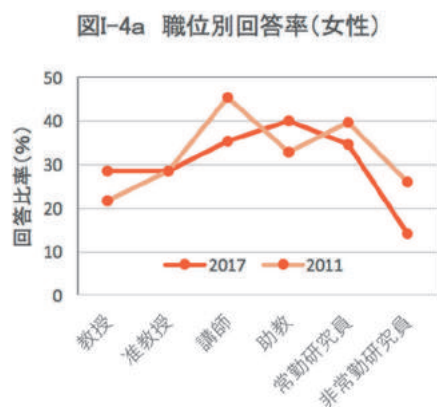


次に、アンケート回答者を見てみる。まず、各年度の全体としての回答率は表 I-2 の通りである。それぞれの年度の女性の回答者数は、2011 年は 187 名、2017 年は 226 名、これに対して男性は 750 名と 1,520 名であった。興味深いことに、女性でも回答者数そのものは増加しているにも関わらず、率としては僅かではあるが減少していた。ところが、男性は回答者数、比率とも大きく増えた。

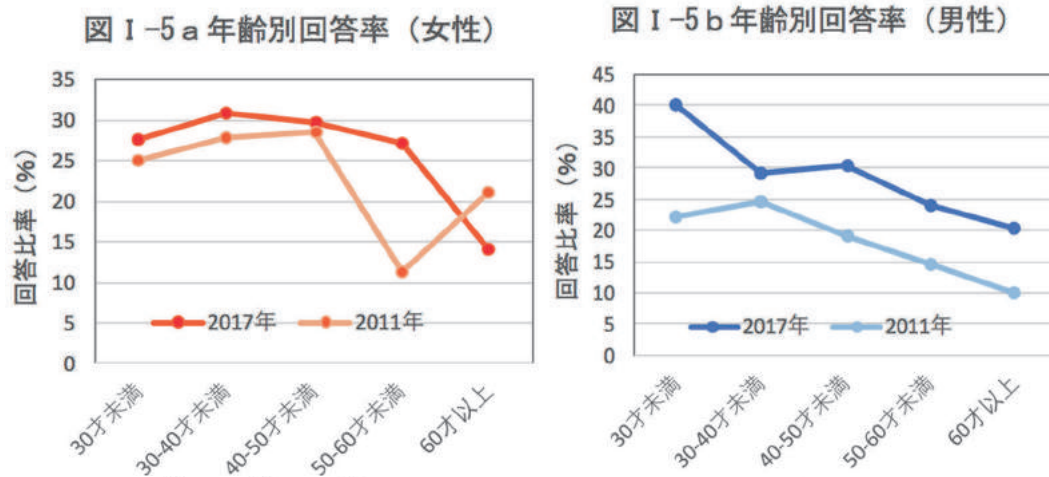
表 I-2 アンケート回答者率

	女性	男性
2017 年	28.3%	28.2%
2011 年	30.3%	20.8%

そこで、どの職位の回答者が増加したのかを調べるために、男女それぞれについて職位別の回答率を調べた。その結果が、図 I-4 a (女性)と図 I-4 b (男性)である。女性については、対象者数が増加した講師で、回答者が伸びなかったこと、非常勤研究員の回答者数が減少したことが明らかである。男性では、准教授層では回答者数の増は多くはなかったものの、他のどの職位でも回答者数が増えたことによって、回答率が大きく増加した。



また、年齢別に回答者の比率を見てみると（図 I-5 a, b）、女性での大きな変化は 50-60 才での上昇と 60 才以上低下である。これに対して、男性ではどの年代に於いても回答者の比率が上昇している。



これらの結果をどのように考えるのかについては、異論もあるかも知れないが、男女共同参画についての男性の意識が高まってきたことを示唆していると考えたい。この結果とも一致するものとして、2015年に本学の教職員を対象として実施した「京都大学男女共同参画推進に関する意識・実態調査 報告書 2016」でも、男性の方が女性よりも高い比率で本学に“男女共同参画推進本部が設置されていること”、“男女共同参画に関する基本理念と基本方針があること”、“男女共同参画に関するアクション・プランが存在すること”などについての認知が 10 あるいはそれ以上のポイントで認知されていた。

第2章 教員・研究員の生活

2.1 家族構成と日常の生活状況

大学の教員・研究員は、その年齢構成が一般の企業等に比べて幅が広いだけでなく、種々の職位と共に多様な形態で雇用されている者から構成されている。しかも、ワーク・シェアができにくい研究という仕事を抱えて、男女それぞれがどのような家庭を持って生活をし、研究を行っているのかという視点で、結果をまとめてみた。

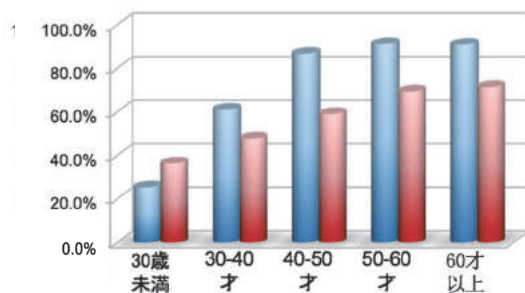
2.1.1 配偶者の有無

まず、Q2において回答者自らの性別、Q4において雇用形態、Q5において職位と共にQ7において配偶者の有無について尋ねた。

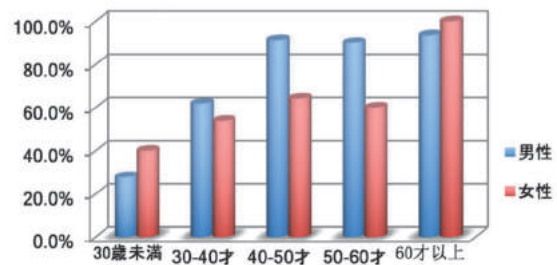
2017（図 II-1 a）年と 2011 年（図 II-1 b）の調査結果を比べてみると、若い世

代では女性の結婚割合が男性に比べてやや高いものの、年齢が上がるにつれて男性の方が結婚している割合が高くなっていることが明らかである。しかし、どの世代でも90%に届かない状況である。しかし、この値が、未婚によるものなのか、離別や死別によるものが含まれるのかについては不明である。女性の結婚割合が低いことについては、離別や死別の人も含まれるとは考えられるが、女性研究者には未婚者が多いのだと推測される。

図II-1a 配偶者がいる人の比率(2017)

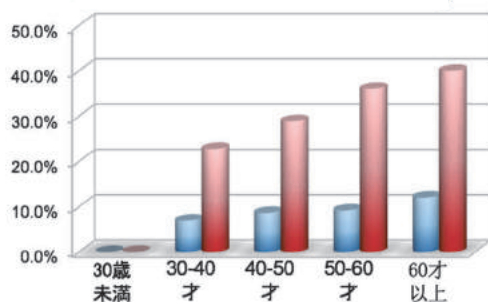


図II-1b 配偶者がいる人の比率(2011)

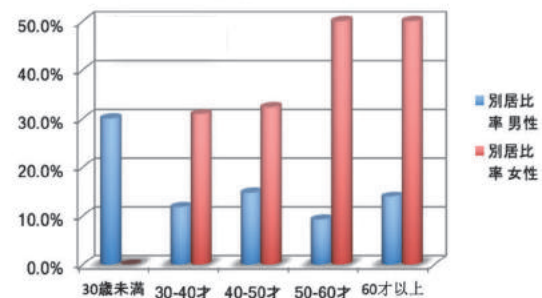


次に年齢別の配偶者との別居比率を比較したものを、2017年は図II-2 a、2011年は図II-2 bに示した。その結果、前回の調査に比べると女性研究者の別居比率が若い程低くなっているように見えていると思われる。なお、前回2011年調査での30歳未満の男性の別居率については、回答者数が少ないことに加えて、本人および配偶者の就業と雇用状況の解析を行っていなかったこともあって、参考程度と見なしている。2017年度調査に於いては、30歳未満の男女の回答数は男性63名中配偶者ありとした16名全員が、女性では11名中、4名全員が同居と答えていた。ただ、この世代には、有期雇用や時間雇用の研究者も多いことから、職を得ることが

図II-2a 配偶者との別居比率(2017)



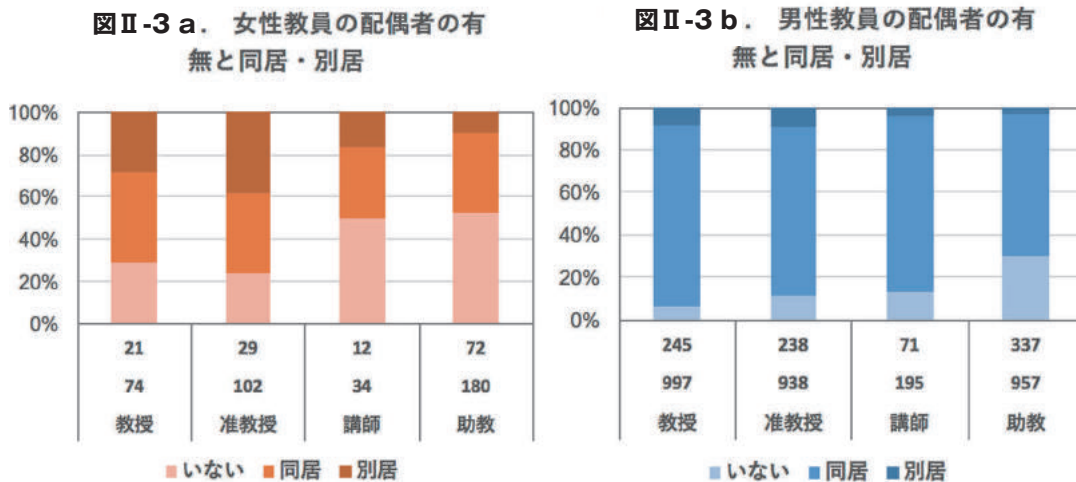
図II-2b 配偶者との別居比率(2011)



比較的容易であるために、同居できているのかもしれない。

そこで、助教以上に限定して、配偶者の有無と同居・別居の割合を見ることにした。その結果が、図II-3 aと図II-3 bである。職位の上の数字は対象者人数、その上の数字は回答者の人数であり、その中での配偶者なし、配偶者と同居、配偶者とは

別居と答えたそれぞれの割合を示している。



男性に比べて女性で配偶者がいないと答えた割合がどの職位に於いても高いことは、年齢による違いを比較した図Ⅱ-1とも一致しており、さらに若い世代で結婚する割合が減少していることから、研究を続ける多くの女性が結婚せずに研究に打ち込んでいる様子が垣間見える。さらに、結婚した上でなお、同居が適わず別居してでも研究を継続しようという姿勢も伺える。一方、男性では、別居者の割合は女性に比べて低い、一定の割合が存在することも事実である。

そこで、別居していると答えた男女教員について、本人と配偶者の雇用形態を調べてみた。その結果は、表Ⅱ-1に示す。男女とも全てが常勤であり、さらにほとんどが正規雇用教員である。女性教員の配偶者もまた、常勤で勤務している。女性研究者の多くが結婚相手は男性研究者であるとの調査もあることと、一致しているのかもしれない。それぞれが、常勤職を得るために、敢えて別居していると考えられるのであろう。

表Ⅱ-1 別居している男女教員の本人および配偶者の雇用形態

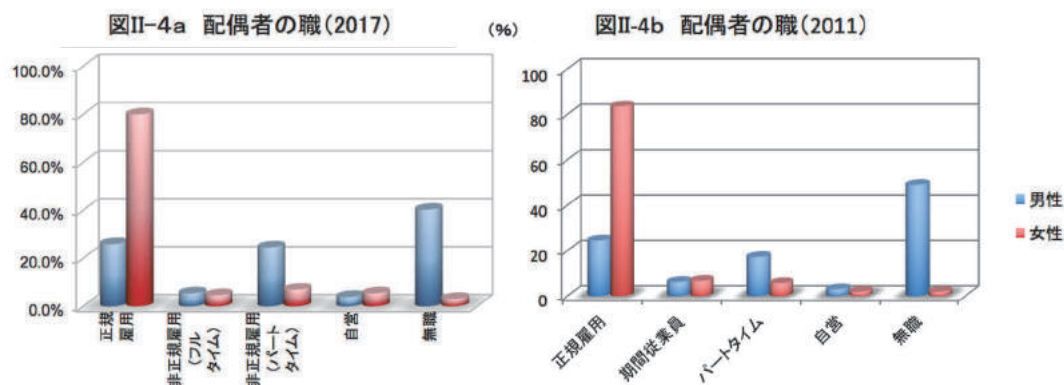
	女性			男性			
		常勤			常勤		無職
	本人	配偶者		本人	配偶者		
教授	6	6	6	20	20	12 (2)	5
准教授	11	11 (1)	9	22	22 (4)	16 (1)	3
講師	2	2	2	3	3 (2)	2	
助教	7	7 (2)	6 (2)	10	10 (2)	7 (1)	1

() は特定

これに対して、男性についても配偶者の多くは常勤で勤務しているが、無職（主

婦) や数値には表れていないパートや自営のために別居しているものが一定数存在する。これらの人は、子供の学校等の個人的理由により単身赴任として京都大学に勤務している可能性が高い。

家庭生活の中で、配偶者の有無だけではなく、配偶者の職(雇用形態等)も生活のあり方に対して大きな影響をおよぼす。その典型が表II-1で見たように別居という形に表れている。そのため、配偶者の職(働き方あるいは雇用形態)について、Q9において尋ねた。その結果が図II-4a(2017年)と図II-4b(2011年)である。



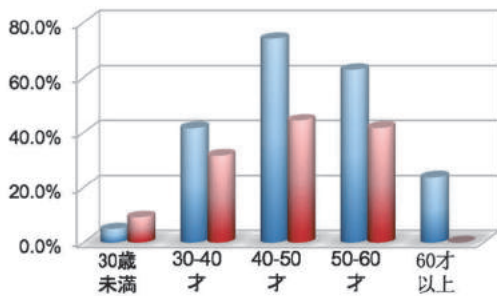
女性研究者の配偶者は正規の職に就いている割合が男性研究者に比べてはるかに高いことが明らかであるが、社会の労働慣行からすれば当たり前であろう。しかし、男性雇用者と無業の妻からなる世帯が大きく減少し、雇用者の共働き世帯数の半数強に達している現在、本学に於いては減少傾向にあるとはいえ、今なお40%弱の研究者の配偶者が無職(主婦)という状況にあることは明記しておかなければならない。その理由は、後に検討する育児や研究との関わりに大きな影響をおよぼす事象だからである。他方で、男性研究者の配偶者にもパートタイムで働く者が増加していることもこの結果から見て取れる。

2.1.2 養育中の子の有無

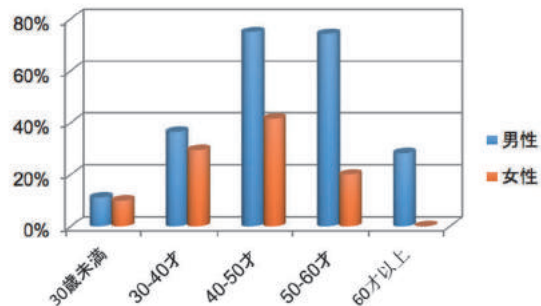
次に養育中の子供(アンケート内に養育中とする子の年齢を明記しなかったため、回答者によって高校生や大学生を含めている可能性もある)の有無を検討することにする。今回調査のQ10での「養育中のお子さんはいますか?」との問い、「いない」としたのは全体で50.4%、「いる」としたのは49.6%であった。男女に分けると、男性では養育中の子を持つのは52.6%、女性では35.9%と15ポイント以上の差が見られた。前回調査でも男性では51.3%、女性では30.7%であり、男女間で大きな差があることには変わりはないが、女性で子を持つ人が5ポイント以上増えたことは

喜ばしいことであろう。

図II-5a 養育中の子供のいる人の比率(2017)

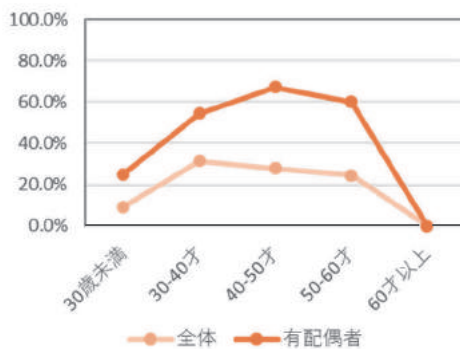


図II-5-b 養育中の子供のいる人の比率(2011)

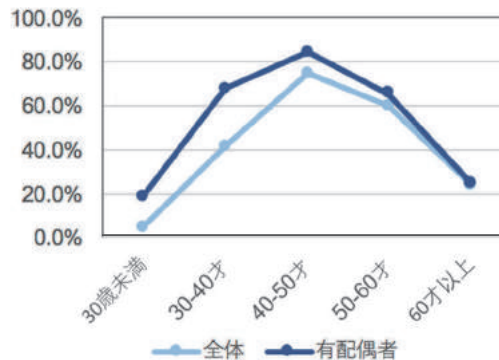


年齢別に検討したのが、[図II-5 a](#) (2017年)と[図II-5 b](#) (2011年)である。とりわけ、50-60才の女性での割合の上昇が目につく。2011年の調査で、50-60才の女性に子を持つ人が少なかったのは、結婚せず、あるいは結婚しても子供を持たない選択をした可能性もある。

図II-6a 養育中の子供を持つ女性研究者割合



図II-6b 養育中の子供を持つ男性研究者割合



そのため、2017年度の調査では、男女研究者について、配偶者の有無と養育中の子供の有無との関係を検討した。その結果が、[図II-6 a](#) (女性)と[図II-6 b](#) (男性)である。

その結果、男性では図II-1 a に示すように女性に比べて結婚割合が高いことから配偶者の有無の養育中の子供のありなしにおよぼす影響は若い世代に認められる。一方、女性研究の場合には、男性に比べて結婚する割合が低いことが、子供を持つ人が少なくなる大きな要因であり、配偶者を持てば一定割合の人が子供を持つことが示されている。

子供の養育状況(同居か別居か)についてはQ11において尋ねた。その前に、男女ともに配偶者がいない状況で、養育中の子供を持つ人がいることにも言及しておきたい。データは示さないが、2011年度の調査では女性に2人、男性に6人であった。これに対して、2017年度には、赤字で示すように、女性で9名、男性で12名

に増加していた。(表 II-2a (女性) と表 II-2b (男性))。

表II-2a 女性研究者における配偶者、養育中の子供の有無とそれぞれとの同居・別居の別

女性 年齢	配偶者無			配偶者有								
	子供 なし	子供有			子供 なし	同居			別居			
		同居	別居	両方		同居	別居	両方	同居	別居	両方	
30歳未満	7				3	1						
30-40才	43	4	1		14	20			6	4		
40-50才	32	2	1	1	10	25	1	1	7	4	3	1
50-60才	11				6	2	2	6		4	4	1
60才以上	2					3				2		

表II-2b 男性研究者における配偶者、養育中の子供の有無とそれぞれとの同居・別居の別

男性 年齢	配偶者無			配偶者有								
	子供 なし	子供有			子供 なし	同居			別居			
		同居	別居	両方		同居	別居	両方	同居	別居	両方	
30歳未満	47				13	3						
30-40才	128	1			56	132	1		10		3	1
40-50才	44	3	1		40	237	3	7	10	2	14	1
50-60才	12	3	2	1	59	65	13	32	5	1	11	
60才以上	9	1			66	11	5	6	9		3	

この結果は、離別・死別等の理由については不明ではあるが、配偶者がいない中で養育をしなければならない研究者が増加していることを示唆するものであると考えられる。ただ、これに関しては、前回とのただ1回の比較であり、数も少ないことから、本学のみならずより広範な調査が必要である。結果次第によっては、何らかの支援も考えなければならないかもしれない。

さらに、この表から予想される問題がもう一つある。男女研究者共に、それぞれの職のために別居を余儀なくされている者が少なからず存在することについては先に述べたとおりである。これに加えて、別居中の女性研究者は子供と同居している比率が高い。一方、男性研究者の子供の場合には、子供とも別居している割合が大きい。

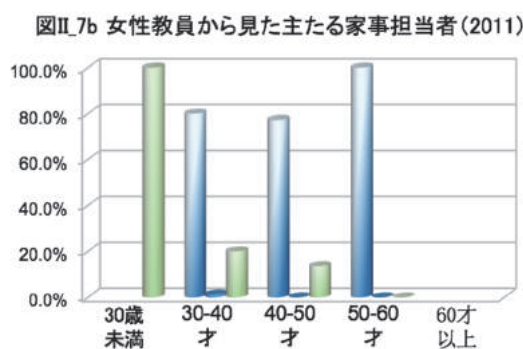
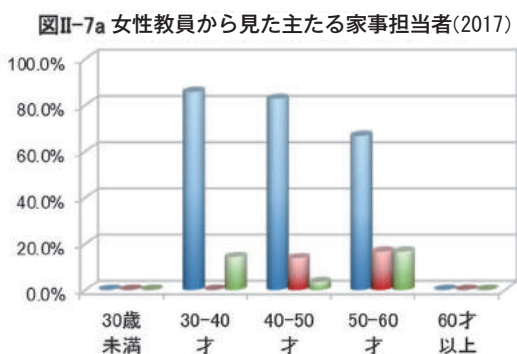
そこで、配偶者なしの状況で同居して養育している子供の年齢層(Q12)を見ることにした。その結果、女性(6名)の場合、2名が小学生以下の子を、1名が小学生以下と小学生の子を、さらに2名は小学生と中学生以上を、残る1名が中学生以上の子と住んでいた。それに対して、男性(8名)の場合には、6名が中学生以上の子

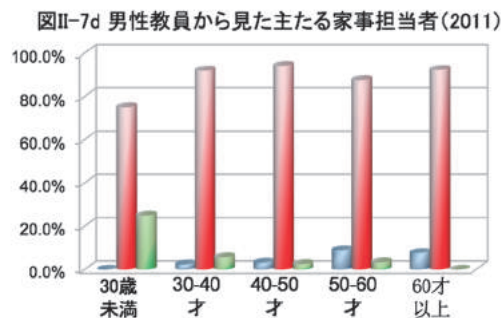
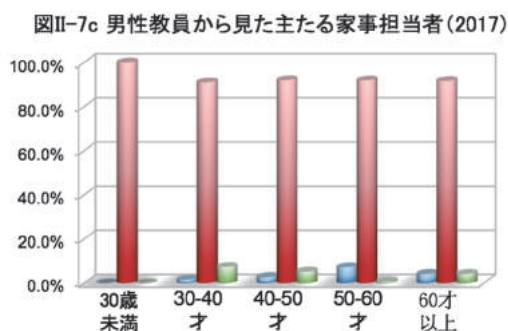
と住んでおり、小学生以下の子の面倒を見ているのは1名、小学生と中学生以上の子の面倒を見ているのが1名であり、女性の養育している子の年齢が低いことが示唆されている。

同様に、配偶者と別居しつつ一緒に暮らしている子供についても調べた。その結果、女性（12名）の場合、小学生以下4名、小学生3名、中学生以上3名で、小学生と中学生以上の世話をしているのが2名であった。一方、男性の場合には、配偶者と別居して自ら子の世話（同居）をしているのは3名であり、小学生以下、小学生、中学生以上の子と住んでいるのはそれぞれ1名であった。しかし、別居している場合（31名）には、17名の子は中学生以上であった一方、残りは小学生あるいはそれ以下であり、幼い子の養育の負担が配偶者である女性にかかっている様が推測される。

2.1.3 養育中の子の世話をする主たる担当者

育児の問題を考える際には、子供の年齢が大きく関わるのが容易に推測できる。小学生までは手がかかることが多く、この年齢の子の世話を女性教員が主たる役割を担っていることは想像に難くない。この点を確認するため、Q13において「主に育児をしている人はどなたですか」と尋ねた。1番から4番までを7つの項目から順位づけてもらったようにしたが、本人、配偶者、父母・義父母が大半であり、他の項目が選ばれることは少なかったため、3番目位以降をまとめてその他として集計した。その結果が、2017年度女性（図II-7a）と男性（図II-7c）であり、2011年度女性（図II-7b）、同じく男性（図II-7d）である。





予想通り、多くの女性が育児を担っており、男性も配偶者が育児を行っていると考えている。2017年の調査では、40-60才の年齢層では配偶者である男性が担っているとしている女性も出現しており図II-7a、これは2011年の調査では見られなかった図II-7bことである。これは、配偶者との別居件数が増えていることとも関係があるのかも知れない。一方、男性に比べて女性で育児を両親や義父母の助けを得ているとするものの割合が高いことにも注目する必要がある。この結果は、家族の支援が女性の研究継続に大きな役割を占めつつあることを示唆している可能性がある。

2.1.4 要介護者の有無

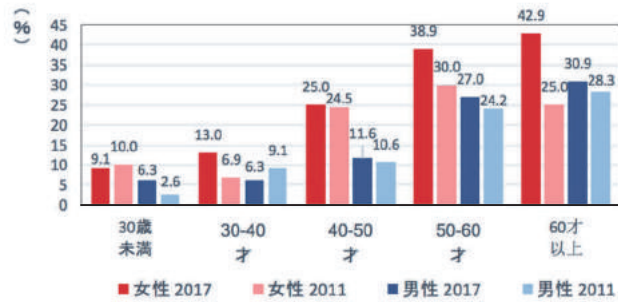
育児の負担は子供の年齢が上がるにつれて徐々に軽減されていく。しかし、介護においては先が見えず、しかも男女ともそれぞれの家族で抱える問題である。そこで、Q14では「家族に介護の必要な方がいますか」、Q15では「要介護の度数（複数の場合には重度の方）」を尋ねた。

図II-8では2017年と2011年の調査結果をまとめ、男女別にその比率を示す。なお、2017年の調査では要介護者がいるとした人は計208名（15.4%）、女性52名（23.4%）、男性156名（15.5%）表II-3であり、2011年では計121名（13.0%）、女性25名（14.0%）、男性96名（12.8%）であった。年代別に見ると、男女とも年齢が高まるにつれて介護を行わなければならない人の割合が増加している。しかし、その比率は男性に比べて女性に高く、とりわけ40-50才以降で顕著な差がある。さらに、2017年には50才以降では40%あるいはそれ以上の女性が身の回りに介護を必要としている人がいると答えている。

表II-3 男女別での介護等を必要とする人の要介護度

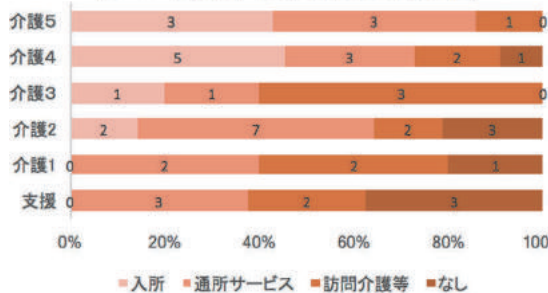
	女性	男性
支援	8	18
介護1	4	22
介護2	13	34
介護3	5	28
介護4	9	15
介護5	5	16
未認定	8	23
計	52	156

図II-8 2017年及び2011年における要介護者を抱える男女別の比率

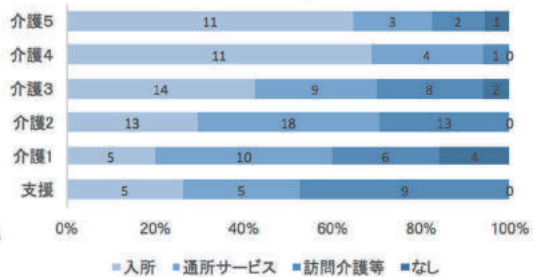


そこで、検討対象者の数が多い2017年調査における未認定を除いて、介護の必要度に応じた介護状況を Q17 の問に従って見てみた図 II-9a (女性)、図 II-9b (男性)。当然のことながら、介護の必要度が高くなる程老人ホーム等の施設入所が増え、通所サービスや訪問介護・看護の利用も増えている。なお、各数値については複数の利用があることから、表 II-3 の数字とは一致しないことを断っておく。

図II-9a 必要度に応じた介護の実状(女性)



図II-9b 必要度に応じた介護の実状(男性)



このような状況で、男女研究者がどの程度自ら介護を担っているのかは興味深い。そこで、介護を必要とした男女それぞれについて、どのような介護度に於いて、誰が第1あるいは第2の介護者であるのかについて、回答者本人あるいは配偶者とした者の数を Q16 に従って調べた表 II-4。

表II-4 男女それぞれから見た介護活動における担当者

	女性				男性			
	介護者第1位		介護者第2位		介護者第1位		介護者第2位	
	本人	配偶者	本人	配偶者	本人	配偶者	本人	配偶者
支援	3		1		4	6	3	
介護1	1			1	2	2	4	2
介護2		2	2	1	2	3	6	7
介護3			1	2	4	11	4	
介護4	1		1	1	2		1	
介護5			1	1	1	2	2	2
未認定	2	2	2		1	6	2	

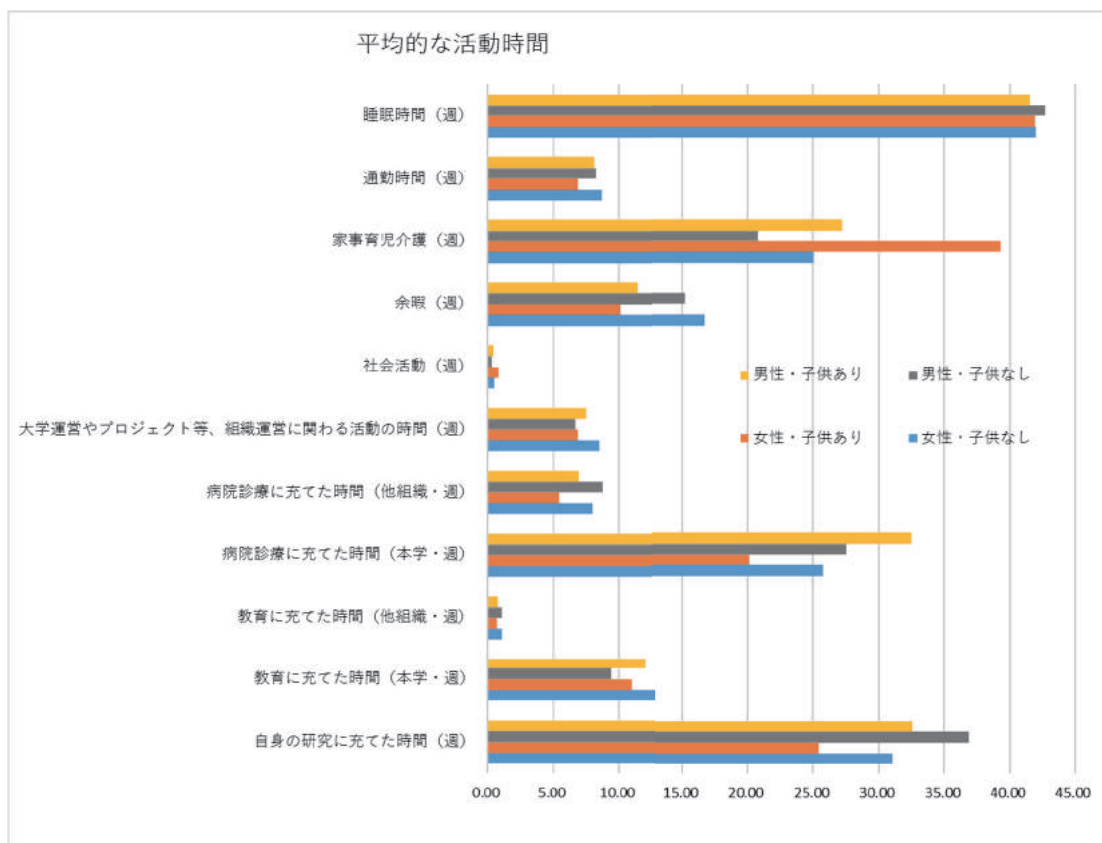
男女が個別の事例の中で本人と配偶者がどちらかが1位、どちらかが2位としてあるものがあることを断った上で、しかも、数が少ないために確かなことは不明で

はあることを承知で推論してみた。その結果、育児の場合に比べ男性自らが介護を行っているという割合が高く、女性の側もそれを認識している様に見えると考えられる（男性に相当する女性の配偶者と男性本人を青字で示す）。ただ、それでもなお、男性自らが介護を最も行っているのが配偶者であるとしていることも厳然たる事実である。図 II-4a に示したように全男性の配偶者のおよそ 40%が無職（主婦）であることに比べて、介護が必要な人がいると答える男性が急増する 50 代以降の場合には、その配偶者が無職である割合は 50% となることとも関係があるのかも知れない。

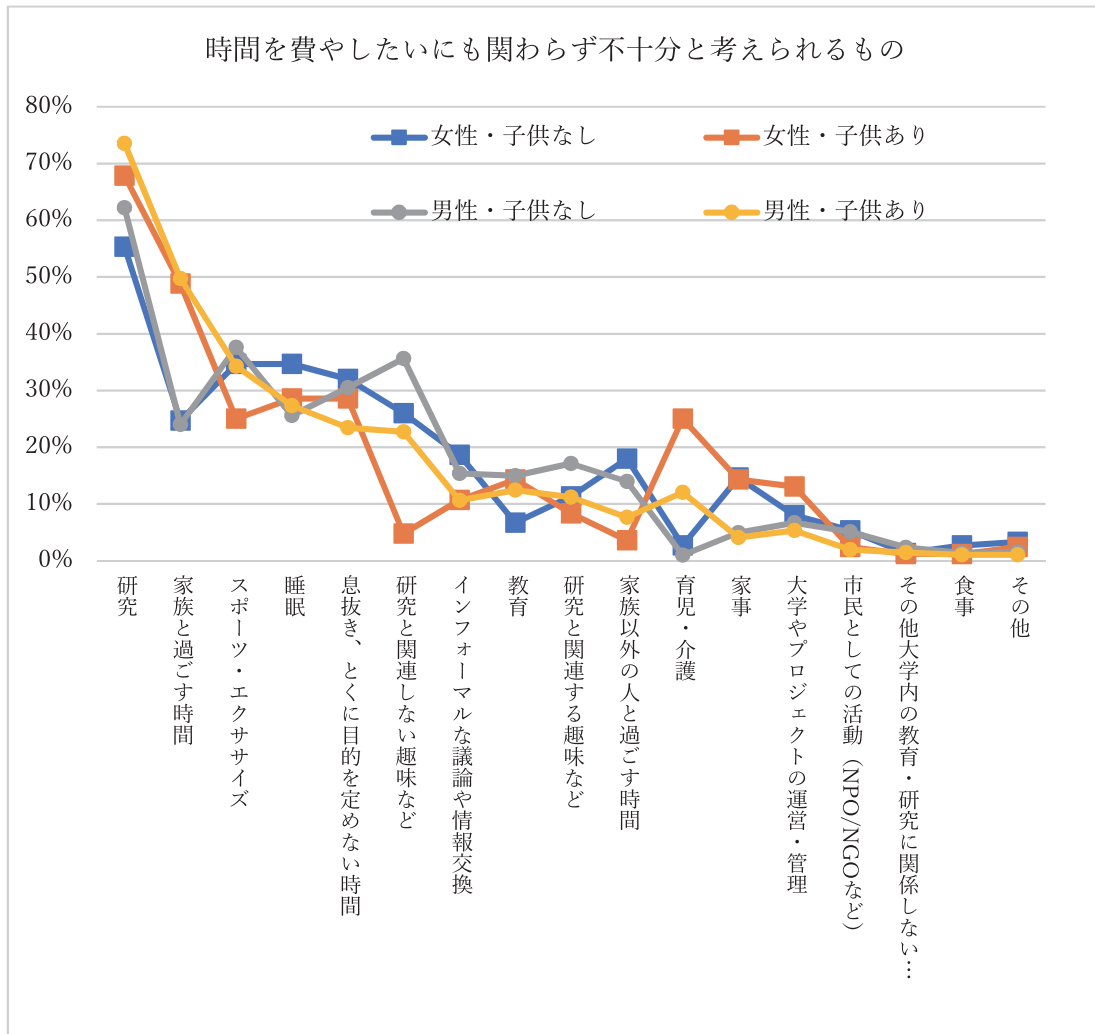
2.1.5 その他

その他、上記以外の項目に係る回答結果については、以下のとおりまとめた。

図 III-1 週あたりの平均的な活動時間（Q 18 - 21、25 - 28）

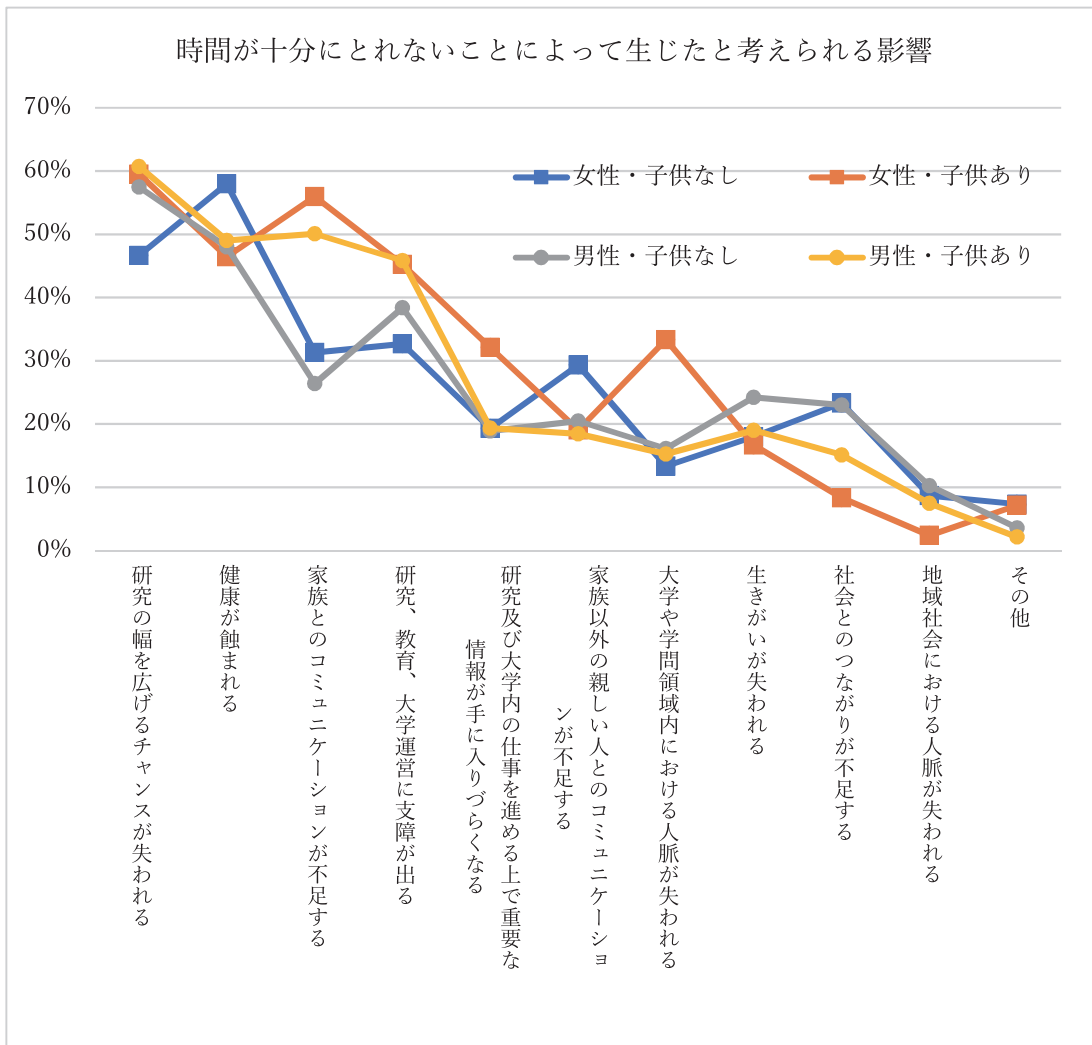


図III-2 時間を費やしたいにも関わらず不十分と考えられるもの (Q29)



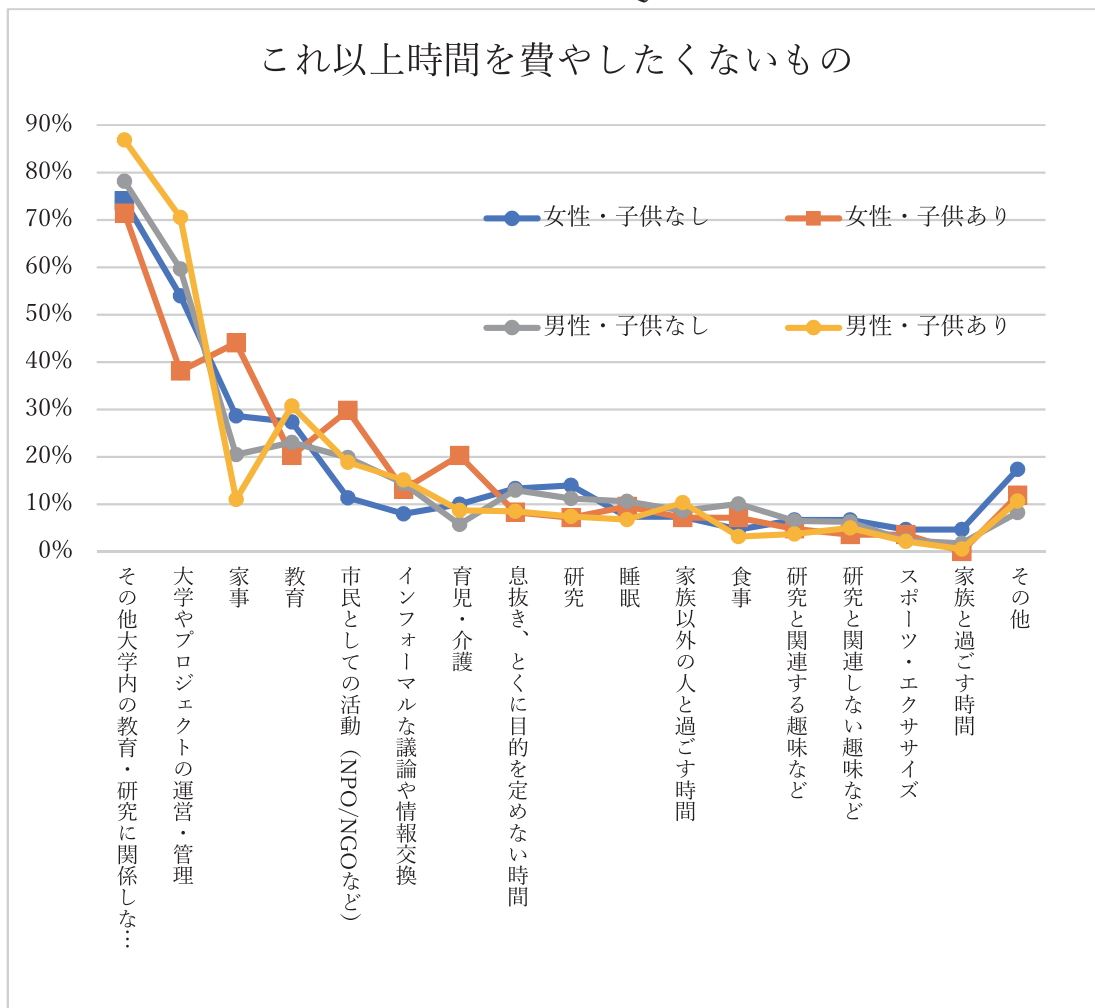
- ・ 前回調査で指摘されている通り、男女とも研究時間の不足が最大の懸念とされている。
- ・ 育児中の女性が、今以上に家事時間や育児介護時間が必要だと考えており、育児中の男性と意識に開きがある。

図III-3 時間が十分にとれないことによって生じたと考えられる影響（Q30）



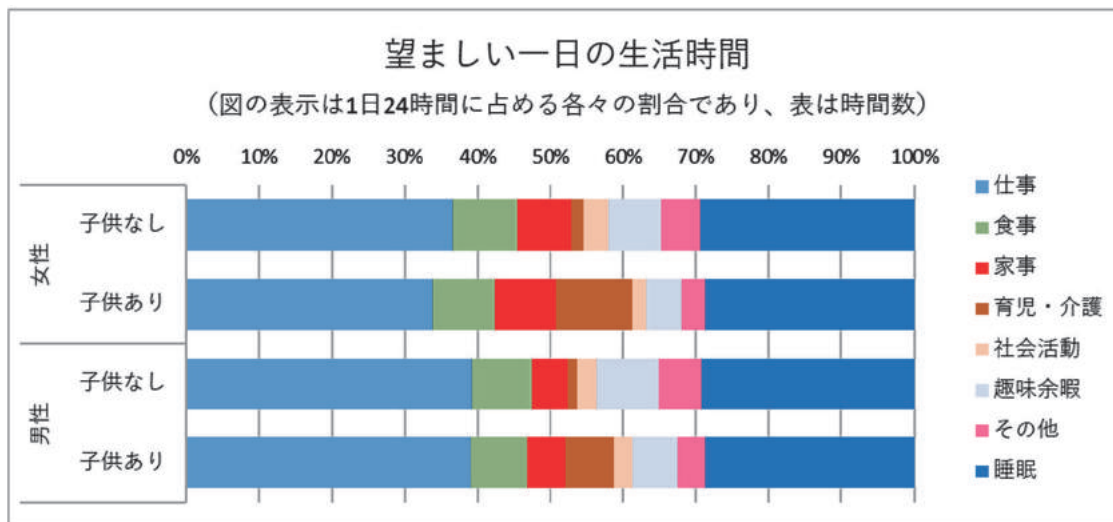
- ・ 子供のいる女性は研究領域や大学における人脈形成に課題を抱えている一方で、社会一般および地域社会での人脈には不足を感じていない。育児中の女性にとって仕事と育児の問題が大きく、社会全体や地域のことに関心を示す余裕が失われていることがうかがえる。

図Ⅲ-3 これ以上時間を費やしたくないもの（Q31）



・子供のいる女性で市民としての活動に負担感を覚えている層が一定存在しており、子育てに伴う地獄的な活動を負担に思っている可能性がある。

図III-3 望ましい1日の生活時間モデル (Q32)



	男性		女性	
	子供あり	子供なし	子供あり	子供なし
仕事	9.39	9.43	8.13	8.77
食事	1.85	1.96	2.04	2.14
家事	1.25	1.19	2.01	1.77
育児・介護	1.60	0.31	2.51	0.43
社会活動	0.62	0.65	0.45	0.77
趣味余暇	1.47	2.03	1.18	1.78
その他	0.91	1.40	0.77	1.27
睡眠	6.91	7.03	6.90	7.07

- ・男女とも、養育中の子供の有無に関係なく、7時間程度の睡眠を必要としているが、それ以外については、かなりの違いが認められる。
- ・仕事時間に関しては、男性の場合、子供の有無によらず10時間に近い時間を確保したいとしているのに対して、女性はそれより少ない傾向にある。
- ・育児介護時間については、子供がいない男女で差は認められない。ところが、子供がいる場合、女性は男性に比べてより多くの時間を費やす必要を感じている。またこのような状況を反映するものとして、社会活動や趣味・余暇、その他に関する時間に違いが認められ、とりわけ子供のいる女性においてこれらに対する時間の減少が認められる。

Q9 配偶者の雇用状態についてお答えください。

- 1. 正規雇用
- 2. 非正規雇用(フルタイム)
- 3. 非正規雇用(パートタイム)
- 4. 自営
- 5. 無職

Q10 養育中のお子さんはいますか？

- 1. いない
- 2. いる

Q11 お子さんはあなたと同居していますか？

- 1. すべての子どもと同居している
- 2. すべての子どもと別居している
- 3. 同居の子どもと別居の子どもがいる

Q12 お子さんの就学状況をお答えください。(いくつでも)※2人以上の場合はそれぞれお答えください。

- 1. 小学生未満
- 2. 小学生
- 3. 中学生以上

Q13 おもに育児している人はどなたですか？以下の中から、携わる時間の長さ順に、1位から4位までお答えください。※4位までない場合は、該当するところまでお答えください。

	1 回答者 (あなた) 本人	2 配偶者	3 回答者 (あなた) の父母・ 義父母 (子ども の祖父母)	4 回答者 (あなた) の父母・ 義父母 (子ども の祖父母) 以外の 親族	5 友人・ ご近所	6 家政婦・ ベビー シッター	7 保育施設 の職員
1. 1位/番目	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 2位/番目	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. 3位/番目	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4. 4位/番目	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Q14 家族に介護の必要な方がいますか？※同居・別居にかかわらずお答えください。

- 1. いない
- 2. いる

Q15 その方の要介護度を教えてください。(ひとつだけ)※複数の要介護者がいる場合は、その中で重い方を選択してください。

- 1. 要支援
- 2. 要介護1
- 3. 要介護2
- 4. 要介護3
- 5. 要介護4
- 6. 要介護5
- 7. 介護認定を受けていない

Q16 おもに介護を担当されているのはどなたですか？以下の中から、携わる時間の長さ順に、1位から4位までお答えください。※4位までない場合は、該当するところまでお答えください。

	1 回答者 (あなた) 本人	2 配偶者	3 祖父母・ 父母・ きょうだい・ きょうだいの 配偶者	4 祖父母・ 父母・ きょうだい・ きょうだいの 配偶者以外 の親族	5 友人・ ご近所	6 家政婦など 個人で雇用 するケアワ ーカー	7 施設職員
1. 1位/番目	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 2位/番目	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. 3位/番目	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4. 4位/番目	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Q17 介護サービスや施設を利用されていますか？(いくつでも)※複数利用されている場合は、複数お答えください。

- 1. 施設に入所(老人ホーム等)
- 2. 通所サービス(ショートステイ、デイケアなど)を利用
- 3. 訪問介護・看護を利用
- 4. 利用していない

Q18 自身の研究に充てた時間は、平均で一週間あたり何時間程度ですか？

1. Q18S1 週【 】時間

Q19 教育(準備時間を含む)に充てた時間は、平均で一週間あたり何時間程度ですか？京都大学と他大学等にわけてお答えください。

- 1. Q19S1 本学: 週【 】時間
- 2. Q19S2 他大学等: 週【 】時間

Q20 病院および医学部関係者にお尋ねします。(それ以外の方は0時間を記入してください。)病院診療に充てた時間は、平均で一週間あたり何時間程度ですか？京都大学医学部附属病院・健康科学センター等と他大学・医療機関にわけてお答えください。

- 1. Q20S1 本学: 週【 】時間
- 2. Q20S2 他機関: 週【 】時間

Q21 大学運営やプロジェクト等において、組織運営に関わる活動を行った時間は、平均で一週間あたり何時間程度ですか？

1. Q21S1 週【 】時間

Q22 研究および職務に関連した社会活動(講演会、各種委員会・審議会、学会など)を行った日数は何日ですか？また、そのうち土曜日・日曜日および祝日に行った日数は何日ですか。京都大学の業務とその他(兼業など)にわけてお答えください。※専門の研究・教育に直接かかわる活動も含めてお答えください。(参考)5月:平日20日、土日祝11日 6月:平日22日、土日祝8日

1. Q22S1 本学業務: 【 】日

2. Q22S2 (内土日、祝日):【 】日

3. Q22S3 兼業等: 【 】日

4. Q22S4 (内土日、祝日):【 】日

Q23 海外出張について伺います。2016年7月から2017年6月までの1年間、海外での出張・調査は何回あり、それは合計何日でしたか？

1. Q23S1 【 】回

2. Q23S2 計【 】日

Q24 市民としての活動(NGO/NPO、地域社会での活動、ボランティア活動など)に充てた時間は、平均で一週間あたり何時間程度ですか？※専門の研究・教育に直接かかわる活動は含めずお答えください。

1. Q24S1 週【 】時間

Q25 余暇に充てた時間は、平均で一週間あたり何時間程度ですか？

1. Q25S1 週【 】時間

Q26 家事・育児・介護に充てた時間は、一日あたり、平均で何時間程度ですか？

1. Q26S1 1日【 】時間

Q27 睡眠時間は、一日あたり、平均で何時間程度ですか？(15分単位でお答えください。)

1. Q27S1 1日【 】時間

2. Q27S2 【 】分

Q28 大学への通勤時間は、通常で何分程度ですか？また、大学への通勤に費やす時間は、平均で一週間あたり何時間程度ですか？

1. Q28S1 片道【 】分

2. Q28S2 週【 】時間

Q32 あなたは、自分の平日(週日)の生活時間をどのように組み立てることが望ましいと考えていますか？ 平日1日のモデルで回答ください。※合計が「24(時間)」になるようにお答えください。

1. Q32S1 仕事: 【 】時間
2. Q32S2 社会活動: 【 】時間
3. Q32S3 睡眠: 【 】時間
4. Q32S4 食事: 【 】時間
5. Q32S5 家事: 【 】時間
6. Q32S6 育児・介護: 【 】時間
7. Q32S7 趣味・余暇・スポーツ:【 】時間
8. Q32S8 その他: 【 】時間

Q33 教員・研究員の労働・生活時間についてのご意見、本アンケートへの感想などありましたら、ご自由にお書きください(本項目で最後となります。ご協力、誠にありがとうございました)。

Q1	あなたの年齢をお答えください。 単一回答	N
1	30歳未満	46
2	30歳～39歳	443
3	40歳～49歳	260
4	50歳～59歳	130
5	60歳以上	50
	全体	929

Q2	あなたの性別をお答えください。 単一回答	N
1	女性	179
2	男性	750
	全体	929

Q3	あなたの専門分野をお答えください。 単一回答	N
1	人文・社会科学系	128
2	理工系	466
3	農学系	109
4	医歯薬学系(基礎)	98
5	医歯薬学系(臨床)	108
6	その他【 】	20
	全体	929

Q4	あなたは以下のどの区分に該当しますか？ 単一回答	N
1	常勤	601
2	特定有期教職員または有期雇用教職員	192
3	外国人教師、外国人研究員	12
4	時間雇用教職員(週当たり所定勤務時間が30時間)	78
5	時間雇用教職員(週当たり所定勤務時間が30時間未満)	46
	全体	929

Q5	あなたは以下のどの区分に該当しますか？ 単一回答	N
1	教授	156
2	准教授	218
3	講師	45
4	助教	273
5	助手	6
6	研究員	231
	全体	929

Q6	あなたの主な研究方法を選んでください。 単一回答	N
1	おもに文献資料等による研究方法	144
2	実験・観測を相当程度含む研究方法	576
3	学外調査を相当程度含む研究方法	113
4	病院臨床を相当程度含む研究方法	58
5	その他【 】	38
	全体	929

Q7	配偶者はいますか？ 単一回答	N
1	いない	266
2	いる(婚姻届の有無にかかわらず)	663
	全体	929

Q8	配偶者とは同居ですか、別居ですか？ 単一回答	N
1	同居	558
2	別居(単身赴任など)	105
	全体	663

Q9	配偶者の雇用状態についてお答えください。 単一回答	N
1	正規雇用	225
2	非正規雇用(期間従業員)	43
3	非正規雇用(パートタイム)	94
4	自営	19
5	無職	282
	全体	663

Q10	養育中のお子さんはいですか？ 単一回答	N
1	いない	489
2	いる	440
	全体	929

Q11	おさんはあなたと同居していますか？ 単一回答	N
1	すべての子どもと同居している	350
2	すべての子どもと別居している	60
3	同居の子どもと別居の子どもがいる	30
	全体	440

Q12	お子さんの就学状況をお答えください。 (いくつでも) ※2人以上の場合はそれぞれお答えください。 複数回答	N
1	小学生未満	224
2	小学生	154
3	中学生以上	166
	全体	440

Q13	おもに育児している人はどなたですか？ 以下の中から、携わる時間の長さ順に、1位から4位までお答えください。 ※4位までない場合は、該当するところまでお答えください。	全体	1	2	3	4	5	6	7			
			回答者 (あなた) 本人	配偶者	回答者 (あなた) の父母・ 義父母・ 義父母 (子どもの 祖父母)	回答者 (あなた) の父母・ 義父母 (子どもの 祖父母) 以外の親 族	友人・ご 近所	家政婦・ ベビー シッター	保育施 設の職員	無回答		
			単一回答	440	60	355	6	1	0	1	17	0
			1位/番目	440	276	47	29	0	0	0	29	59
			2位/番目	440	44	18	62	4	3	4	27	278
3位/番目	440	2	2	25	7	4	6	6	388			
4位/番目												

Q14	家族に介護の必要な方がいますか？ ※同居・別居にかかわらずお答えください。 単一回答	N
1	いない	808
2	いる	121
	全体	929

Q15	その方の要介護度を教えてください。(ひとつだけ) ※複数の要介護者がいる場合は、その中で重い方を選択してください。 単一回答	N
1	要支援	15
2	要介護1	24
3	要介護2	18
4	要介護3	16
5	要介護4	10
6	要介護5	15
7	介護認定を受けていない	23
	全体	121

Q16	おもに介護を担当されているのはどなたですか？ 以下の中から、携わる時間の長さ順に、1位から4位までお答えください。 ※4位までない場合は、該当するところまでお答えください。	全体	1	2	3	4	5	6	7			
			回答者 (あなた) 本人	配偶者	祖父母・ 父母・き ょうだい の配偶者	祖父母・ 父母・き ょうだい の配偶者 以外の親 族	友人・ご 近所	家政婦 など個人 で雇用す るケア ワーカー	施設職 員	無回答		
			単一回答	121	4	24	52	3	1	9	28	0
			1位/番目	121	16	14	20	4	2	9	10	46
			2位/番目	121	16	2	7	4	1	5	5	81
3位/番目	121	9	0	1	0	1	1	2	107			
4位/番目												

Q17	介護サービスや施設を利用されていますか？(いくつでも) ※複数利用されている場合は、複数お答えください。 複数回答	N
1	施設に入所(老人ホーム等)	37
2	通所サービス(ショートステイ、デイケアなど)を利用	38
3	訪問介護・看護を利用	33
4	利用していない	32
	全体	121

Q29	現在、時間を費やしたいにもかかわらず、充分時間の取れていないものを3つお選びください。 ※該当するものが3つない場合も、お気持ちに近いものを3つお選びください。 複数回答	N
1	研究	630
2	教育	110
3	大学やプロジェクトなどの運営・管理およびその他の組織的活動(学会、アウトリーチ活動など)	48
4	その他大学内における教育・研究に直接関係しない諸々な業務	14
5	市民としての活動(NPO/NGO、地域社会での活動、ボランティアなど)	40
6	インフォーマルな議論や情報交換	113
7	研究と関連する趣味など	119
8	研究と関連しない趣味など	276
9	家族と過ごす時間	345
10	家族以外の人と過ごす時間	121
11	スポーツ・エクササイズ(散歩、ジョギング、ジムなど)	340
12	息抜き、とくに目的を定めない時間	231
13	睡眠	236
14	食事	23
15	家事	60
16	育児・介護	68
17	その他【 】	13
	全体	929

Q30	その結果生じたと思われる影響を以下からお選びください。(いくつでも) 複数回答	N
1	研究、教育、大学運営に支障が出る	368
2	研究の幅を広げるチャンスが失われる	524
3	大学内、あるいは、学問領域内における人脈が失われる	134
4	地域社会における人脈が失われる	87
5	研究及び大学内の仕事を進める上で重要な情報が手に入りづらくなる	162
6	社会とのつながりが不足する	193
7	家族とのコミュニケーションが不足する	369
8	家族以外の親しい人とのコミュニケーションが不足する	246
9	健康が蝕まれる	465
10	生きがいが失われる	165
11	その他【 】	34
	全体	929

Q31	現在、時間を費やしている活動のなかで、これ以上時間を費やしたくない、あるいは少なくしたいと思っている活動を3つお選びください。 ※該当するものが3つない場合も、お気持ちに近いものを3つお選びください。 複数回答	N
1	研究	100
2	教育	237
3	大学やプロジェクトなどの運営・管理およびその他の組織的活動(学会、アウトリーチ活動など)	563
4	その他大学内における教育・研究に直接関係しない諸々な業務	727
5	市民としての活動(NPO/NGO、地域社会での活動、ボランティアなど)	175
6	インフォーマルな議論や情報交換	115
7	研究と関連する趣味など	37
8	研究と関連しない趣味など	81
9	家族と過ごす時間	14
10	家族以外の人と過ごす時間	70
11	スポーツ・エクササイズ(散歩、ジョギング、ジムなど)	23
12	息抜き、とくに目的を定めない時間	129
13	睡眠	106
14	食事	66
15	家事	205
16	育児・介護	59
17	その他【 】	80
	全体	929

Q33:教員・研究員の労働・生活時間についてのご意見、本アンケートへの感想などありましたら、ご自由にお書きください。

年齢	性別	回答
40歳～49歳	男性	(1) 3つ必須で選択させる設問がいくつかありましたが、当てはまる選択肢はどの設問でも1～2個しかなく、苦しみました。無理矢理選ぶのが心苦しく、その設問で回答をやめようかとも思いました。設問を熟慮いただき、負担に感じずに回答できるよう配慮いただきたく、強く要望したいと思います。(2) Q32は、0.5時間単位で入力できるようにすべきと思います。
30歳～39歳	男性	「3つない場合でもお気持ちに近いものを」といって強制選択させるのは質問として良くないと思います。基礎研究のポストがもっとあればより研究に集中できると思いました。
60歳以上	男性	「学会」は、委員や役員をしている場合は別として、本来研究活動に属するものであって、社会活動というカテゴリに入るものとは考えにくいように思うのですが。
50歳～59歳	女性	「仕事を早くこなす」という能力が自分になからと妥協していますが、できることなら「ドコデモドア」がほしいです。
30歳～39歳	男性	「平日1日あたりの時間」は回答しやすいが、平日・休日を合わせて「一週間あたりの時間」は直感的でなく回答しにくいのでは?と感じました。
30歳～39歳	男性	「戻る」ができないのは致命的にやりにくかったです。せめて最初に全ての質問を見えるようにしておいてほしかった。
30歳～39歳	女性	「戻る」ボタンは必要かと思います。アンケートを進めていく中で趣旨がわかったものもあり、間違った理解をそのままにすると結果があまりよくないかもしれないと思いました。なお後半の時間の使い方などは答える項目が限られて(当てはまらない)、答えるのが難しいこともありました。
30歳～39歳	男性	「余暇」と「育児・家事」に掛ける時間について質問があったが、自分は育児や家事を「業務」と捉えておらず、子供と過ごす時間や家の用事も「余暇」に含めて考えている部分がある為、完全に分けて考える事が出来なかった。
30歳～39歳	男性	・無駄な仕事が多い・教育に関する業務が多すぎる。研究者の本文は教育ではなく研究・教育方針が出来る悪い学生を中心に考えすぎ。高等教育機関の本来あるべき姿ではない。
60歳以上	男性	20～30年前と異なり、教員への事務処理時間の負担が大幅に増加している。仕事のための仕事を作っている気がする。教員定員の削減の折り、事務処理の大幅な改善が望まれる。
40歳～49歳	女性	After living in Japan for more than a decade, I think that, in general, the Japanese society (including academics), puts less value to personal/family time; making it hard to reach a balance between personal/family time and work/research time.
40歳～49歳	男性	long hours at the office are useless many times, but people stay and stay. I have the feeling that I do not even have the time to go see a doctor because I need to be at the office as everybody else.
50歳～59歳	女性	アウトリーチや評価に関わる時間を減らして欲しい。結果が出ればだすものであるなので、特別な様式や提出は必要ないと考えます。
30歳～39歳	男性	あとで戻れないのはやりにくいです。余暇時間に子育てを計上してしまい、訂正したいのに戻れない等、正確性を損なっていると思います。
50歳～59歳	女性	あまり意識していないので、はっきり答えられない項目が多くありました。自分の生活を見直す反省のきっかけになりました。
30歳～39歳	女性	ある程度自分の裁量で仕事時間を決めて、させてもらえているので、仕事時間が長くても、それほどストレスではないです。逆に、仕事時間が短くなくても、始業時間や就業時間が固定されると、作業効率もより悪く、ストレスもより高くなるように思います。
30歳～39歳	男性	アンケートじゃなくて直接調査しにきたらいいだろ手抜き

年齢	性別	回答
50歳～59歳	男性	アンケートについては研究室での勉強会が教育に該当するのか研究に当たるのかなど、切り分けが難しかった。ただ、この手のアンケートとしては答えやすく作られていると感じた。自身の働き方は一般通念からすれば明らかに過重労働に相当する。基本的には月から土の9時から11時までやらないと、研究活動が滞る。大学運営に関する業務が一部の者に大きく偏っている。ただ、最近問題になった企業のように勤務時間を一律に制限されては困る。教育に要する時間は減らすことができないし、研究にはもっと（細切れでない）時間が必要。吉田勤務の方はあまり深刻に捉えておられないと思うが、実は講義、会議でキャンパス間の移動に要する時間は極めて重い負担である。本年5、6月を例に取ると、海外出張で不在の日を除いた平日の38日のうち、21日間吉田/桂キャンパスを往復している。単純な移動時間だけでも一回につき往復2時間、待ち時間や調整時間を合わせると少なくとも一回につき本務に加えて3時間は余計に要しており、負担は極めて大きい。3回生以上の講義を桂キャンパスで行う、会議は基本的にテレビ会議で行うなど、大学としての対策が必要と強く感じる。
60歳以上	男性	アンケートの依頼が再度きたが、回答が2回目だったように思う（確実な判断がつかなかったので回答してしまった）。アンケートの集計・分析結果を何らかの方法で公開してほしい。
30歳～39歳	男性	アンケートを進めても、本アンケートがどのように男女共同参画の推進に活かせるのかみえてこなかった
40歳～49歳	男性	アンケート項目で研究や教育などの項目ごとの時間を問われたりする部分があったが、そのような質問の場合は続けて問う項目がいくつあってどのような項目なのかを明示してほしい（分類の判断に苦しむ時がある）。
40歳～49歳	男性	アンケート項目を始めに提示するか、「戻る」機能を設けて欲しい。後に出てくる項目が分からないため、再入力6回ほど行うことになった。最後の項目は現在における希望か、将来の希望か、家族の有無により大きく異なる。それらも詳細に条件を設定・説明して欲しい。
50歳～59歳	男性	アンケート作成のご努力には敬意を表しますが、書き込む項目が多すぎて、正確に記載しようとすると10分ではとても済みません。仕事内容とか家事・介護だけに焦点を当てたほうが正確で回収率の高い調査になるのではないのでしょうか。ご検討いただければ幸いです。
50歳～59歳	男性	アンケート作成の御苦労はわかりますが、設問の難しきから果たして役に立つ情報が回収できるのか、またどう生かされるのか想像が付きません。問題点はすでに明らかではないでしょうか。1. 5年間の研究費獲得の困難さへの疲労と焦燥.2. 研究の現場への影響を無視した、大学本部の一部（国際高等教育院）からの一方的な要求（教育 duties、それもニーズに乏しく、学生側からは魅力に全く欠けるもの）による負担増、その他。7月4日京都新聞夕刊に掲載された小倉紀蔵教授のコラムを読んで、問題解決を議論した方がよいのでは。
30歳～39歳	男性	アンケート実施、ご苦労様です。
40歳～49歳	女性	アンケート調査、ありがとうございます。この結果が、どのように利用されるのか、広く公表していただけると幸いです。
40歳～49歳	男性	アンケート調査や書類などの雑務の負担が多い（教員でなくても出来る事務仕事を事務の専門の方をお願いできる環境が出来ると非常にありがたいです）。
30歳～39歳	男性	アンケート内容はまさに自分が悩んでいることであり、知りたいことでした。集計結果について、楽しみにしております。
50歳～59歳	女性	いわゆるワンオペ育児をしているので、時間がいくらあっても足りない。平日の夜も自宅で業務をしている。メールのやりとりや論文作成、資料作成、授業の準備は夜遅く、深夜まで自宅でやらなければ終わらない。それにもかかわらず、どんどん定員削減で人手が少なくなり、研究時間が削られてしまう。
40歳～49歳	男性	いわゆる雑用処理時間を減らしたい、そこへ深層学習や機械学習等の最先端研究知見を投入するなど、京都大学全学プロジェクトとして、雑用時間撲滅プロジェクト設立をお願いしたい（雑用はなくならないと思いますが、雑用処理時間を減らしたいのです）
30歳～39歳	男性	うちは婚姻届を出していないので、「（婚姻届の有無は問いません）」という但し書きは助かりました。あとうちにはまだ子供がいないのですが、子供ができれば生活時間は激変するだろうと思いました。
50歳～59歳	男性	こういうアンケートの必要性はわかりますが、同様の調査やアンケート、検査、講習等に費やす時間が年々増えていくことに対して日々大きなストレスを感じています。いかに有意義な調査であれ、教員の研究時間を奪うことに変わりはありません。異なる部署の思い付きでこのような調査が際限なく増殖しないように管理する仕組みを是非作っていただきたいです。教員があらゆる調査の回答に毎週何時間を費やしているか質問項目に加えると良いかもしれません。

年齢	性別	回答
40歳～49歳	男性	ここ数年教務を担当していますが、学科・専攻の運営や大学院入試に関連する業務が多すぎるように感じます。おそらくそれは、学際化や多様性といったことに過剰に配慮して、組織や仕組みがいたずらに複雑化したためだと思います。学際化、多様性はもちろん大事ですが、コストパフォーマンスをよく考えるべきだと思います。
30歳未満	男性	この2ヶ月における具体的な時間の割り振りを順々に新しい項目を出して問われても、全体でどういった項目を想定しているのかが最初に不明であったため、回答しにくく、最初からメモを取っていなかったためどの程度正しく回答しているのか自信が持てない。
50歳～59歳	男性	このアンケートが神様に届きますように
30歳～39歳	男性	このアンケートが前に戻れないこと、「一週間あたり」や「一日あたり」など質問が一貫していないことなどから、得られる統計データの信頼性について非常に疑問があります。また、祝日や休日にも通常仕事をたくさん片付けていますが、平日ほどではありませんので、その辺りもわけてアンケートを取らないと（一週間のうち平日に研究に費やす時間の合計、休日に研究に費やす時間の合計、など）回答の意図が人によってブレると思います。
40歳～49歳	男性	このアンケートが男女共同参画と何の関係があるのかが、よく分からなかった。
30歳～39歳	男性	このアンケートが無駄です。
40歳～49歳	男性	このアンケートでは前の項目に戻れないのはちょっと残念だと思います。
60歳以上	男性	このアンケートにはけっこう時間を要したので、それなりの集計結果、分析結果を示してほしい。
40歳～49歳	男性	このままでは皆倒れると思います。
40歳～49歳	男性	このようなアンケートすら時間がかかります。アンケートを利用して、大学での仕事環境の改善をお願いします。
40歳～49歳	女性	このような調査自体は意味があると思うが、アンケートとしては回答しにくい項目が多く、10分では終わらないなど改善の余地があると感じた。
30歳～39歳	男性	この結果が具体的にどのような形で還元されるのかわかりたいところではある。
60歳以上	男性	このようなアンケートを実施する際は、何を目的としているかはっきりさせて欲しい。時間の使い方は人それぞれ違って当然であるので、それを知って何になるのか理解できない。
40歳～49歳	男性	これ以上は働けない
40歳～49歳	男性	ぜひ働き方改革をお願い致します。
40歳～49歳	男性	とても答えにくいアンケートだった・・・ 「そんなの、わからないよ！こたえられないよ」といったといばかり・・・ 適当に入力せざるをえない。このアンケートで得た結果は、真実とかなりかけはなれていると感じざるをえない。
30歳～39歳	男性	どのように時間を使ったか、2ヶ月間を振り返ること自体に時間を要した。アンケート対象となる期間の前にアンケートのアナウンスがあると、もう少し短時間で回答することができたと思う。
30歳～39歳	男性	バックして回答を修正できる機能が欲しい。
40歳～49歳	男性	プロジェクトによる特定有期雇用のため、雑務が多すぎる。また次の職を探す必要があり、研究成果はそのためにも必要であるが、十分に時間をとれない。一方で、科研費などへの応募は強く促されるにもかかわらず、エフォートという意味のないものに制限され、研究エフォート分の給与はプロジェクトから直接支給されない。制度設計があまりにも非効率かつ不合理。多くの同世代の研究者がこの問題に直面している。これを改めない限り、日本の科学に未来はない。京都大学たるもの、その改革を前面に立って押し進めるべき。
30歳未満	女性	ほとんど寝なくても活動できる体質になりたいです。
60歳以上	男性	ほぼマークシートのアンケートでしたので、集計した数値の解釈が難しいかと思います。数値のみが独り歩きして、実態に合わない解釈等々が起きないことを願っております。
60歳以上	男性	まるでブラックジョークのようなアンケートでした。
60歳以上	男性	もう少し具体的な選択があってもよいように思う。
50歳～59歳	男性	もう少し時間的余裕が欲しい
40歳～49歳	男性	もともと研究・教育とも時間が無限にかかるので、時間がいくらあっても足りない。せめて、これらに専念できるような環境が整うとよいと思われる。
60歳以上	男性	育児・介護は別建てにしたほうが良い。自分を例にして考えると、数年前と今では全く異なり、すべての状況が異なるように思います。

年齢	性別	回答
40歳～49歳	男性	育児と遠距離介護という、どちらも突発的に変更が生じ、しかも遠隔ではできない(駆け付けなければならぬ)用事と、締め切りのある仕事との両立が、ほとんど不可能になってきて悩んでいる。自身での育児・介護の経験が無い人(の多い世代)との認識の隔りが大きく、理解されず余計な手間がかかるのがしんどい。
50歳～59歳	男性	運営、管理に関する仕事は増える一方で、減らす努力が全く欠如している。
30歳～39歳	男性	運営管理業務に大半の時間を取られ、研究を行う時間がない。また、家族との時間、休息の時間もなく、人としての生活レベルとはいえない。また、このような環境であるにも関わらず、まるでブラック企業のように金銭的な補償等もなく、家族には理解を求められ、それをいう側言われる側のストレスについても全く考慮されていない。
50歳～59歳	女性	遠隔地に勤務ですが、大学本部での朝からの仕事や夜遅くまでの仕事は、子どもの預け先などなく、実質引き受けられない状況で、他の教員との関係がまずくなりがちです。遠隔地ということを考えて業務をお願いしたいです。
40歳～49歳	女性	欧米のように教員の業務を少なくする働きかけが必要であると思われます。
30歳～39歳	男性	欧米の生産性の高い(有名論文を生産している)研究室では、長期間の休暇(おそらく3週間くらい?)を取っている人が非常に多い。翻って、現在の所属専攻、所属研究室の中では、有給休暇消費することは雰囲気として厳しい。上からの措置として、一定数の有給休暇(十日くらい?)を半ば強制的に取らせるくらいの措置をしても良いのではないかと。
40歳～49歳	男性	何にどんな時間をとっているのかのアンケートは、どういう項目があるのかの全体像が見えていないと答えにくい。例えば、研究と教育は分けるのか分けないのか、家事と育児は分けるのか分けないのか。
30歳～39歳	男性	家庭を築こうなどという夢を持つべきではなかった
30歳～39歳	女性	介護は予測できものもあるが、急(けが・急病)にやってくる。家族の介護は家族がメインになる。そうした時に、大学組織全体に関わる仕事など代わりに依頼できない状況だと、自分がぎりぎりまで頑張るしかなく途方に暮れる(途方に暮れた)。急に介護が必要になった時のサポート(情報提供)があれば助かると思った。裁量労働制の勤務時間管理について、職員のオーバーワークを検討していただきたい。裁量労働とは言えども、教育業務の都合上早朝より勤務、教育業務が終了する夕方以降、大学の諸業務を行うと毎日かなり長時間勤務をしている。
60歳以上	男性	介護を行っている人に関する選択肢が適切でないように思います。私の場合、私の母が要介護です。その介護は、私の父、兄の妻(義姉)、兄が行っています。この場合、選択肢はどれも3となります。しかし、同じ選択肢を複数回選ぶことは禁止されていました。ということで、選択肢が適切でないと考えます。
40歳～49歳	男性	会議を1つ増やしたら、必要性の薄いものを1つ減らす等、上限無く(事務などの)手続き等を増やさない決まりの導入を希望します。
30歳～39歳	男性	回答が戻れるようにしてほしい。もしくは、最初に設問が全部見えるようにしてほしい。特に時間配分の部分は、最初に、配分する項目のリストがわからないと回答しようがない。研究や教育、運営仕事など、必ずしも明確に区分できない場合もあるので、項目の区分の仕方によって、回答も変わる。このようなアンケートのやり方で、正確な情報が集まるとは思えない。
40歳～49歳	男性	回答に時間のかかる(きちんと考える気が起きない)質問が多すぎると思います。質問の形式が悪いと正確な情報は得られないと思います。
40歳～49歳	男性	回答は戻れるようにしてほしい
50歳～59歳	女性	回答者は女性で、育児と家事を一人で担っています。身近な正規雇用教職員の拘束時間の長さなどを知る身としては、正規雇用で安定した生活を望む一方で、生活と職業のどちらの責任も全うできなくなる可能性ばかりを考えてしまい、現状に甘んじています。男性正規雇用職員の仕事以外の時間数、たとえば家事時間数を知りたいです。
60歳以上	女性	回答者は人事書類上の教員・研究員ではありませんが、同様の職務をしている者であることを申し添えます。助手が職名選択に上がっているにも拘わらず、私どもの立場の職名が上がっていないことに不審に感じます。
40歳～49歳	男性	海外での野外調査を6カ月行って帰国したところです。
40歳～49歳	男性	外病院と比べて給料が安い必要ではありますが、外勤で費やされる時間を診療、研究に使うことができると大きく生産性が上がると思います。

年齢	性別	回答
40歳～49歳	男性	学研究スタッフと学生・院生が、もっと朝早く来て夕方早めに帰れるような環境・雰囲気が醸成されると良いと思います。
50歳～59歳	男性	学校での教育（授業準備、授業自体など）、教育・研究以外での院生・学生の指導（研究室訪問や各種相談など）に大半の時間を奪われ、論文を書いたり本を執筆したりする時間がほとんどない。給与がその分高ければよいが、どう見ても不釣り合い。院生や学生は気軽に相談を持ちかけたり、話をしに来るが、そのために時間がコントロールできない。かりに時間が空いても、研究室にいると必ずだれかやって来て仕事にならない。雑務は増えるばかり。研究が立ちゆかなくなるのではないかと不安な面もある。以上、愚痴でした（笑）。
30歳～39歳	男性	学生に対する教員の割合が少ないため、学生の実験指導などに膨大な時間を取られてしまう。結果として平日の長時間労働や休日出勤が当たり前になっているので、改善してもらいたい。
40歳～49歳	男性	学内、組織内の雑務が多すぎる。
40歳～49歳	女性	学内に学童保育をつくる計画がいったん出たものの、当時のアンケート結果をもとになくなったと聞きましたが、現在は当時より必要性が増しているのではないのでしょうか。名古屋大学なども学童保育を行っているそうですので再度検討していただけると助かります。
40歳～49歳	男性	学内の委員会の数が多すぎます。
50歳～59歳	男性	学内業務、教育負担が大きく、研究に打ち込める十分な時間がとれないため、その他時間を削減して日々生活しているように思う。
30歳～39歳	男性	企業では裁量労働制でも勤務時間を厳しく管理し、働きすぎないような仕組みが取られていることが多いが、大学は全く管理されないことからどうしても働きすぎになってしまっていると思います。
40歳～49歳	男性	休暇をもっと取れる環境にして欲しい、
30歳～39歳	女性	休日を研究に費やすことが前提のあり方を変えるべきだと思う（研究会や学会は週末開催、自身の研究のための海外調査等は夏休みなどまとまった時間を使って実施、など）。研究・教育・大学運営と、教員にいろいろなことを求めすぎだと思う。特に有期雇用の教員は、有期雇用であるがゆえにモチベーション維持に苦労するし、転職活動の時間も欲しいので、心身ともに負担が大きい。
30歳～39歳	男性	給与が良ければ、労働時間が長くても問題無い
30歳～39歳	男性	給料が低い
50歳～59歳	男性	給料をあげてほしい。
60歳以上	男性	給料半分で勤務半分、兼業自由となるポジションがあると良い 競争的資金獲得を前提にした教育が教員のココロ（生活）を歪め、大学教育を破壊している 薄く広い科研費（少額でよい、基盤校費を補填できる、京大科研）を創設してほしい
40歳～49歳	女性	京大の研究者として、周囲の期待や責務に応えて、365日24時間常に締め切りに追われている現状が辛い。徐々に研究の楽しさ、魅力すら、忘れかけている。加えて、遠方の親の介護が降ってくると、生きているだけで精一杯の状況になる。みんな同じ状況だからと言われるので、誰にも相談できず、自分一人が不完全な人間であるかのように思うときがある。
30歳～39歳	男性	共働き家庭にとって子育ての分業は死活問題です。（病気対応もある）保育所等の併設等、サポートがあるととても助かります。また、これは女性にのみかかわることではなく、男性教職員にとっても同じであることをあらためて認識していただけると助かります。
50歳～59歳	男性	教育、研究で時間を使うのはよいが、事務仕事に大きな時間を割かれることは大いに不満である。大学とは教育研究機関であるのだから、教員および研究員が教育・研究に時間を十分使えるようにすべきである。とくに若手の教員・研究員をサポートする体制を整えないと、研究機関としての大学のレベルは下がり続けると思う。
50歳～59歳	男性	教育、研究意外にとられる時間が多すぎる。大学として何か新しいことを教員にやらせるという事は、教員に教育あるいは研究の時間を減らすことを強要しているという事を忘れないでいただきたい。京都大学の本来の役割、社会で果たすべき事が何であるか、京都大学の教員でなければできないことは何であるかを厳選して、行うべきである。京都大学以外の大学でできること、京都大学以外の教員でもできることを、京都大学がやることは、日本全体を考えた時に、非常に非効率的である。京都大学がやるべき事のみをやり、京都大学がやらなくても代替がきくことはやるべきではない、と強く考えます。
30歳～39歳	男性	教育・研究者に対する過剰な労働やそれが当然という異常な意識・文化が改善され、人間として豊かな生活ができるようになることを祈ります。

年齢	性別	回答
30歳未満	男性	教員（特に助教）が負担する事務仕事が多すぎるように見えます。研究に従事出来ている時間がほとんどないように思います。その皺寄せが研究員や研究室の学生に及んでいる、或いは最近特に及ぶようになっていいる、と感じます。また、外国人留学生が増える事それ事態は良いですが、その事が日本人学生の負担をかなり増加させているのは事実です。
30歳未満	女性	教員・学生ともに授業数が多すぎる。研究室にそのしわ寄せが来るため、少し考えてほしい。
40歳～49歳	男性	教員・研究員が研究教育以外の学内業務や研究教育に関わっていても外部資金申請やプロジェクトマネジメント等の雑務に時間を取られすぎていることが、本学の研究と教育の質を著しく損ねていると感じます。また、子ども子育ての年齢に相当する教員・研究員の有期雇用の割合が高まっていて、プロジェクトに従事する有期雇用であるために育休等が取りにくいという例が身近でも複数あり、制度的な改善が必要と感じます。一方で周囲の理解があれば、裁量労働制である大学の教員・研究員は子育てとの両立がしやすい職でもあると思いますし、ワークライフバランスがうまくいっている本学教員の例を発信することは意義があると思います。
50歳～59歳	男性	教員がすべき事務作業が多すぎる。また、このようなアンケートもできるだけ少なくしてほしい。
40歳～49歳	男性	教員が事務作業に追われて研究教育活動の質が低下しているというのはさまざまところで聞かれることかと思ひます。ぜひこうしたアンケートの結果を活かして大学行政の改善をよろしく願ひいたします。
40歳～49歳	男性	教員と研究員の待遇が違い過ぎる。
30歳～39歳	男性	教員によって勤務態度に差があり過ぎるのが問題だと思います。全般的に、年齢が上の人（教授～講師）が仕事をしない分が若手の負担になっているので、そのあたりを是正するなり、その分の補償を行うなりの対応をして頂けると幸いです。
40歳～49歳	男性	教員の本来の時間を蝕むような非効率な手続きを求める事務に関するルール変更や、事務職員の解雇を求める。自身の権力の誇示や縦割り行政にしがみつくと事務方職員によって、膨大な無駄な時間を奪われた経験がある。昨今のITテクノロジーや社会的要請で、教員、研究者の仕事内容が変化し効率化しているように、事務職の作業も効率化推進のために見直すことができれば、職員の無駄な残業問題は軽減されるのではと感じる。優秀な民間企業の事務方の効率性を見習い、国際、ITに強い柔軟な人材登用及び、重用すべきである。
50歳～59歳	男性	教員の本当の生活の実態を把握したいのなら、週に何時間労働しているのか（例えば大学で勤務する時間の合計など）、研究に費やす週末の時間数などを聞く質問がなければならぬと思います。まともな研究者なら、週40時間だけ仕事をしている人はいないと思います。ほとんどすべての人が、家族や自分の趣味などに使いたい時間を犠牲にしています。そういう意味で、今回のアンケートが何の役に立つのか、私にはわかりません。また、技術的なことですが、前の質問に戻ることができないようなページ構成では、進めていくうちに訂正したいことがあったとき最初からやり直さなければなりません。実際私は2回やり直しました。一般のウェブアンケートでは全画面に戻れるのは常識です。今後こういう方法で調査をされる予定があるのでしたら、改善を強く望みます。
40歳～49歳	男性	教員数が減っているにも関わらず、学内プロジェクトや講義数は増えておりそれに関わる時間が増える結果、従来の研究・教育業務に大きな支障が出ている。これに伴って、睡眠時間や家族との時間が減少し、健康や精神面に影響がでる可能性がある。
40歳～49歳	女性	教員数の不足のため、個々の教員にかかる教育タスクが大きい。学生への手厚いケアも重要であるがチューター制度による教員の負担も大きい。事務作業、雑事も多く、研究に費やす時間を捻出することが大変難しい。
40歳～49歳	女性	業務の負担の過多、偏りにより、教員、職員とも健康を害している人が多いのではないかと感じます。前回の報告書はどこに公開されているのか、とそれらの結果がどのように大学運営に反映されたか知りたいです。
50歳～59歳	男性	業務内容や生活時間の改革は難しいと考えますが、業務（労働）に対する評価（賃金）が他の職種と比較して低いと感じることが改善されればより魅力的になり、優秀な人材が競って集まり、アカデミックにも個人の満足度にも寄与すると考えます。
30歳～39歳	男性	勤務時間外や週末に働くことを前提とするような業務の進め方をやめてほしい。（金曜の夕方に翌週月曜朝の会議のための資料作成を指示するなど）勤務時間中や休憩中に、業務と直接関係のない話題で延々と1時間も2時間も話しかけ続けるのはやめてほしい。（その分残業をしなければならない）

年齢	性別	回答
40歳～49歳	男性	桂キャンパスに、リフレッシュ施設、特にお酒やコーヒーが気楽に飲めるレストランをおいて欲しい。研究のリフレッシュに必要だと思います。周辺にレストランも無いので、おそらく全国的に見ても酷い状況だと思います。これでは国際化も難しいと思います（桂キャンパスで研究したいと思えない）。後はサバティカル制度の導入でしょうか。
40歳～49歳	男性	結果が決まっている伝達会議は全く不要である。回覧板が何かにして欲しい。著しい時間の無駄である。
30歳～39歳	男性	結局技術員は切り捨て要員であり長年続けることは不可能であると感じた。また大学側も人手が必要であるにも関わらず、5年以上の連続した人員の確保は（ほぼ）しない/できないという考えであると理解した。
40歳～49歳	男性	結構時間かかりました。
50歳～59歳	男性	結構面倒でした。10分では終わらなかったような...
60歳以上	男性	研究・教育と直接関係がない業績の調査への対応や薬剤・危険物・廃棄物等職場環境等の管理に費やす時間と労力が最近特に増加傾向にあるように感じられる。事務方で対応できる範囲をできるだけ広げて、不要・不急の要件を教員に回さないように工夫して欲しい。または、外部資金の獲得に頼らずに研究室の事務的作業ができる人材を大学として確保して欲しい。
40歳～49歳	男性	研究・教育に直接関係しない諸々の業務負担が、研究に費やす時間を著しく減じさせている。にもかかわらず、研究業績がキャリアアップに重要視されている現状では、特に准教授以下の教員にとって、諸々の業務負担を引き受けるインセンティブが非常に乏しいことを理解してほしい。
40歳～49歳	女性	研究する時間を削るしかない業務を暗黙知でさせておき、研究できていないという理由で職場をやめるしかない。大変な、面倒な仕事をしている者へは理解していただけない。このアンケートも意味はない。
50歳～59歳	男性	研究に没頭したい一面で、人生設計などの面から没頭しきれない社会的環境下に置かれていると思う。時間管理上の問題というより、研究にかけることに対する不安からくるストレスが非常に大きく健康的でないと感じている。
40歳～49歳	男性	研究に裂ける時間が年々少なくなっていると感じる。研究以外の雑務の効率化を進めて欲しい。そのためには事務の柔軟な取り組みが必要。教員と同様、事務方の外部評価、自己点検を進めてほしい。
50歳～59歳	男性	研究のためアンケートを用いた調査を行う立場から見ると、アンケートの設計が適切に行われていないように思える点が多々あり、気になりました。調査自体はとても重要な目的に資するはずですので、学術専門家のアドバイスを受けながら改善をはかっていただくようお願いしております。
40歳～49歳	男性	研究のみをしている人と私のように安全管理主体の人間とでは本アンケートの意味合いが全く違ってくるのではないのでしょうか。
40歳～49歳	男性	研究の時間がほしい（ため息）...
40歳～49歳	男性	研究や研究に関わる思考(アイデア)にふける時間が少なくなっている。
30歳～39歳	女性	研究や子育て、余暇に十分な時間を費やしたい。ただ、大学から支給される給与のみでは生活が成り立たず、アルバイトを余儀なくされている。そのため異動希望中。
30歳～39歳	男性	研究以外の仕事が多すぎて、研究に時間を割けない。教育も重要だと考えるなら、教育だけする人員も配置すべきだと思う。大学の経費を削減するために非正規雇用の職員が多く雇っているにもかかわらず、非正規雇用の職員に5年の任期があるのはおかしいと思う。5年以上かかる研究もあることを考えても、マイナスだと思う。
40歳～49歳	男性	研究以外の仕事が多すぎます。
30歳未満	男性	研究員としては、労働に見合った賃金を得られないことが問題だと思う。さらに深刻な問題を教員が抱えているように感じる。学生の数が教員の許容量を客観的に見て大きく超えてしまっている。オーバーワークになってもなお学生の面倒を見きれない状況が続いている。
40歳～49歳	男性	研究員として生活をしていると、社会との接点がある時間が少なく、理解が得られない、あるいは誤解を招いていることが多々あるように思います。他の職種の人と同様に社会参加ができる良いと考えます。また、収入も十分得られず、臨床などもして何とか生活しておりますが、研究者の生活環境を改善できるような社会的なシステムがあると助かります。
30歳～39歳	男性	研究員の労働環境、収入は十分ではない。勤務時間を大幅に超過しなければ仕事が終わらないのが現状である。
40歳～49歳	男性	研究教育を行う上で、1日あたりの労働時間が長くなるのは、致し方ない部分はあるが、その分、1週間以上のリフレッシュ休暇を何度か取れる実効性のある仕組みを構築して頂きたい。

年齢	性別	回答
60歳以上	男性	研究経験のない、学位持たない文部科学省の役人は大学への介入をやめるべきだ。
40歳～49歳	男性	研究時間が圧倒的に不足。事務作業が複雑で多すぎる。本部一宇治キャンパス間のバスが少なく、時間のロスが多い。
40歳～49歳	女性	研究時間の確保が常に課題です。
30歳～39歳	男性	研究室への運営交付金の減額をやめてください。このままでは教員が死にます。学生定員を減らさないのに人員削減をすすめると職員の負担が増えるのは当たり前ではないでしょうか。
30歳～39歳	男性	研究者という身分の本質的な多忙さと不安定さを考えると、余暇の充実よりも雑務の削減と責任の分散、雇用の充実を期待します。
40歳～49歳	男性	研究者として、研究は仕事でも有り趣味でもあり、人生そのものなので、work/lifeバランスと言われてもその仕切りは難しい。
30歳～39歳	女性	研究者のスタイルはまちまちですので、可能であれば選択肢の中から選ばせる項目よりも、自由記述の項目を多く設けた方が良かったのではないかと思います。しかし、統計データを出す必要があると思いますので、これ以外には難しいのかもしれませんが。
50歳～59歳	男性	研究労働については、教授の能力は限界があるために、客観的な、また、外部の評価はどう？
60歳以上	女性	県外からの通勤です。交通費は支給していただきたいです。
40歳～49歳	女性	現況に満足していないという前提で必ず選択肢から選ばなければならないという設問には無理があると思った。
30歳～39歳	女性	現在、子育てをしながらフルタイムで働いています。毎日仕事と家事育児で忙しく時間の使い方は常に工夫していますが、どうにもならない事も多くつらい思いもします。できれば全職員にフレックス制を導入していただきたいです。子供の調子が悪い時など非常に助かります。
30歳～39歳	男性	現在の若手研究者の苦労は、今の教授先生方が経験されてきた苦労とは、全くの別物であることを上は理解すべき。研究費の減少、任期付きポジション、給与の減少、研究に必要な機器の増加および費用の増大、大学のポジションの減少。このような環境で上が若手育成と言っても、上辺だけのものであることを理解すべき。本場に日本の若手研究者を育成するのなら、海外の研究者獲得のための給与上限の見直しなどをせず、まず、若手の処遇を改善すべき。さきかけ、などの研究費が終了した今、著名な研究者のみが研究費を獲得できるシステムを変えるべき。京都大学からの若手スタートアップの50万円の研究費で、実験機器が買えますか？何か新しい実験系を立ち上げられますか？それなら、若手の給与に使うべき。若手の雇用体系の見直しがあってこそ、革新的な発想、若手の成長に繋がると思っています。
50歳～59歳	男性	現状の生活に満足しています。
40歳～49歳	男性	雇用形態(特に期限付き雇用)による被雇用者の精神的負担が大きく、これに関連して人事権を掌握する職位から不当に扱われていることが多いように思います。そのため休暇の取得が困難であったり、職務の遂行が困難であるケースをたびたび目の当たりにします。
40歳～49歳	男性	誤回答に気付いた時にバックできるシステムは必要。この調査により、事務員および教員を増やす努力&労務を減らす努力を大学としてまとめて実行していただきたい。
30歳未満	男性	交通費でないマジで最悪なのでなんとかしてほしい
40歳～49歳	男性	講義や受け持つ指導学生の数が多いため、授業期間中は通常業務時間内ではほとんど自分の研究に費やす時間が取れない状況です。大学やプロジェクト運営に関する研究以外の業務がもう少し減らせれば良いと感じています。
50歳～59歳	男性	高速道路を利用した自動車によるキャンパス間の移動に対して大学が費用を負担してはどうか。私の例では、公共交通機関による移動では、例えば1時間の会議のために、移動時間が往復4時間ということになり、他の業務に支障が出る。現状の自己負担では、大学にとっての費用が発生しないので、遠隔地からの移動を減らす工夫が大学全体としてなされない(テレビ会議などの導入を委員会が変わるごとにその都度働きかけるということになっているので、改善を望む)。
40歳～49歳	男性	合理的ではない事務作業(書類作業等)を大幅に削減する日必要がある。上記の作業は、物理的に時間を費やすだけではなく、心理的なストレスにもつながり、重要な業務に基大な影響を及ぼしている。
50歳～59歳	男性	今年7月に採用されたため、2017年5月、6月に関する質問への回答は参考にならないかもしれません。
40歳～49歳	男性	些か、自分の生活を見直す良い機会になりました。有り難うございました。

年齢	性別	回答
40歳～49歳	男性	最後に入力データを確認し、修正できる形式が望ましい。間違えたらすべて入力しなおさないといけないのは時間の無駄。
40歳～49歳	男性	細かな時間数についての調査は、事前に告知をうけて、毎日記入していくような形式ならば、正確な時間を回答できると思いますが、1ヶ月分についてまとめて報告を求められても、正しく回答できるとは思えません。
50歳～59歳	女性	裁量労働の教員には、授業や会議の無い日は在宅勤務も認めてほしいと切実に思う（往復通勤3時間。転居以前の8年間は往復4時間半だった）。本当に忙しい時は、通勤時間節約のため年休を取って自宅で仕事をしている。こんなことは本来おかしい。京都大学には研究専念日もサバティカルも無いのもおかしい。真剣に検討してほしい。
50歳～59歳	女性	裁量労働者の時間管理について、学生の頃から学習する機会があればよいかと思います。
50歳～59歳	男性	裁量労働制であることから、残業手当が一切つかない。代休を取ろうにも、とれる日がない。
30歳～39歳	男性	裁量労働制ではあるが、業績を出すために労働基準法で定められた労働時間を守るのは難しいと感じた。自己責任ではあるが。
40歳～49歳	男性	裁量労働制とはいえ週40時間を超えた労働に関しては時間外手当の支給を希望します。
30歳～39歳	女性	裁量労働制なので、自主的な長時間労働には残業代が出ない。だが、実験や仕事量や業績のことを考えると、結局は長時間労働をすることになる。なのでプライベートの時間がとれないことが問題だと思う。また、女性の研究者は、婚期が遅れやすい。この研究者の労働に理解のある異性と出会えることが少ない。有期雇用なので、5年で雇い止めになる。そうなれば、配偶者と同棲しづらいし、子育てにしても、研究では短時間労働で済むような実験はあまりない。女性研究者の労働環境としては、プライベートを犠牲にすることが男性より多いと思う。
40歳～49歳	女性	裁量労働制の名のもとに、過労が隠れていると思う。
40歳～49歳	男性	雑務を減らしたい
40歳～49歳	男性	雑用、会議が多い傾向にあり時間が費やされるので困ることが多い。短時間に議論できる場が望ましい。
30歳～39歳	男性	雑用が多い
30歳～39歳	男性	雑用が多く、教員が事務的な仕事を加担せねばならない状況が一番の問題でと思います。
40歳～49歳	男性	雑用が多すぎる。
40歳～49歳	男性	雑用的な仕事が増加して、臨床・研究・教育に十分な時間を確保できない。特に研究の時間が犠牲になる。大学・病院を改善するためと称して、会議・雑用的な書類業務が増加している。本末転倒である。そういったことがこのアンケートにより少しでも改善する方向に進むことを期待している。
30歳～39歳	女性	仕事が忙しく、それでもやるが多くて終わらないため、人生において他の大切なものを犠牲にすることが多すぎると思う。
40歳～49歳	女性	仕事においては研究・教育というもっとも重要な項目の時間がどんどん減り、それ以外の雑用がどんどん増えて危機感を覚える。教育・研究の時間を奪うような仕事を減らすように、効率化をすすめてほしい。無意味な仕事、無駄な仕事が多い。
40歳～49歳	女性	子どもが3人いるので、子どもが多い世帯に対して、子ども手当か住宅手当を有期の研究員にも与えて欲しい。給料が足りず、子育ての時間と研究時間が削られてしまいます。
50歳～59歳	男性	私の場合にはすでに終了しましたが、在宅介護の約10年間、在宅介護に対する理解と支援体制が不足していることを常に感じておりました。介護離職とまではいかないまでも、介護に伴うパフォーマンスの低下を小さくできるようなサポートが欲しいと思います。
40歳～49歳	男性	私自身は臨床医なのでまだましですが、日本では研究職の待遇とワークライフバランスが悪く、改善の余地が大いにあると思います。
40歳～49歳	男性	事前にこのようなアンケートがあると通知しておいて下さったら、もう少し手帳に行動を記録し、スムーズに回答できたと思います。
40歳～49歳	男性	事務的な仕事が多すぎる。事務手続きの簡略化を進めて欲しい。
40歳～49歳	男性	時間がかかる。

年齢	性別	回答
40歳～49歳	女性	時間で表現するのは難しいことも多いと思います（ながらでやっていることも多くあり）。今は介護者や子供がいないので生活できているが、割り当てられる時間はほぼない状況であり、今回のアンケート結果が実際何かの役に立つのか？。今回アンケートに回答できた人は、私も含めて何とかバランスをとっていている職員に限られていると思います。余暇は睡眠時間も入れてのことかと思って長時間入力してしまったけれど、実際にはあまりないです。
30歳～39歳	男性	時間の使い方について、客観的に見る機会を作ることも大事だと思った。
50歳～59歳	男性	時間を見積もるのが難しかった。
50歳～59歳	男性	時間を算出するのは苦手なので、変な回答になったかも知れません。すいません。
30歳～39歳	男性	時間を整数しか入力できない、全く思っていないものであっても3つ選ばなければいけないなど、アンケートとして無理があった。これが実際の考えを完全に反映していると思わないでいただきたいし、これをもとに誤った結論に至らないようにしていただきたい。
30歳～39歳	女性	時間を測定していないので平均時間が把握しづらい。余暇の線引きも休日の学生対応や研究活動など難しい。
50歳～59歳	男性	時間内訳については、あらかじめ回答項目を教えていただかないと、整合性のある回答ができません。
40歳～49歳	女性	時給が低い。私一人の給料では、基本的な生活が維持できない。
40歳～49歳	男性	次の質問がわからない状態で、後ろに戻れないので、正確な回答は無理です。
50歳～59歳	男性	自分が学生であった30年前と比べ、社会からの大学への要求項目と説明責任が大幅に増大かつ詳細化していることは事実であり、その潮流を簡単に変えることは難しいと思われる。この潮流のもとでそれによる大学教員の本務である教育・研究以外の「雑務」が増大していることは間違いなく、それが本務に多大な支障をもたらしている。教員自身の身体・精神状態をむしばむに至ることも、いまや珍しくない。すでに、わが国の大学における人材養成や世界と競うレベルの研究活動には、甚大な影響が生じている。看過すれば、わが国の大学に将来はないと憂う。大学を取り巻く環境が大きく変わっている現状を正しく理解し、それに対応しつつ、教育と研究をきちんと担保するシステム作りは、焦眉の急である。
50歳～59歳	男性	自分が大学生・大学院生の頃の大学教員は、平日の午後に卓球などのスポーツを一緒に楽しんだり、研究・研究以外の雑談などで院生と交流をしつつ、研究もしっかりとしていたように思います。あこがれの職業でした。しかし今、自分が大学教員になってみると、大学院生たちが「お忙しいところすみませんが・・・」と言って研究の相談をしに来る状況を私は作ってしまっている。睡眠ももう少し多く摂りたい。自分の能力不足と管理能力の欠如に拠るのかも知れない。なぜ、これほどまでに忙しいのだろうか。
30歳～39歳	男性	自分の研究に集中できる時間が欲しい。また、授業の質を上げるための準備時間が欲しい。自己啓発（研究遂行能力も含め）をできる時間が欲しい。雑務が多すぎて、時間に余裕がない。それでも、若い世代は甘いと言いつつ続けられると、正直辛い。他の業界（ブラックを除く）と比較して、長時間労働、仕事の難しさ、給料などに魅力がないと、次の世代の良き指導者が生まれないことが一番懸念される。
30歳～39歳	男性	自分は研究・教育以外の労働を週7時間程度しているのですが、このアンケートの内容だと、同じような境遇の研究者の生活状況が見えてこないことがあり得るように思います。
50歳～59歳	男性	自分は研究費をほとんど必要としないため各種研究費申請などを積極的に行なっておりませんが、研究費申請を暗黙的に強制するような風潮にはげんなりします。そもそも3割程度しか当たりもしない申請書作成に、日本の研究者の多くの貴重なエネルギーが7割も無意味に毎年浪費されている現状に強く危機感を覚えます。書類作成業務、書類形式、書類連絡業務等を、すみやかに、できるかぎり簡素化し最適化することが肝要と思われます。事務業務でエクセル方眼紙などが多方面で流行ってる現状こそ各種事務手続きの非効率を雄弁に物語っていると考えています。複雑怪奇な定型書類にずれなく印刷しないといけないという旧来の紙文書主義を国家として早急に改める検討を速やかに開始するべきだと思っています。近い将来、人口減少によって、現状の文書管理水準を維持することすらできなくなると思います。
30歳～39歳	男性	質問の意図が後に続く質問を見ないと理解しづらいものもあったので、質問を遡って修正できるとよかったです。
30歳未満	男性	質問を明確に理解することができなかつたり適切な答えがなかつたり、答えにくい。前提として、時間をどういう分類しているかを最初に説明してくれないと辻褃が合わなくなる。
60歳以上	男性	質問項目の全体がわからず（特に研究、教育などどのような項目があるのか）、入力しにくかった。
30歳～39歳	男性	質問内容の定義に分かりづらい物がありました。（余暇などの定義）
30歳～39歳	男性	社会活動と研究活動、家事と育児が別項目なのか含むのか最初に提示された方が良いと感じました。

年齢	性別	回答
40歳～49歳	男性	社会活動や委員会の時間の項目は、どこまでのものを含めたらよいか判断に迷った（自分なりに判断して回答した）。例示などあったら良いと思う。また、該当するものが3つ未満の場合でも3つ答えさせるのは困る。
40歳～49歳	女性	社会構造的に日本は女性の家事、育児負担が大きく自由な時間がない。また、効率的に労働する意欲が全員欠けている。コスパが悪すぎ。
30歳～39歳	男性	社会的モラルや運営方法、マネジメントなどを学ばせるセミナーに研究室の教授等を参加させてやってほしい。社会に出ておらず、アカデミック一筋の教授、准教授などは人の動かし方や運営方法が出来ていない方が多く、大学側の指導または教育カリキュラムを専門に作る必要性があります。
30歳～39歳	女性	若手研究員ですが、仕事を「任せられている」というより、「投げられている」と感じるものが少なくなく、そういった業務で研究時間・自分の時間が犠牲になっている部分があります。とくに独身者に対して、「自由な時間が多いだろうから」「とくに早く帰る必要もない」という感覚でいらっしゃる上の教員が存在するのも事実で、こういった現状がなんとか改善しないか、意識を変えられないものか…と感じています。
30歳未満	男性	若手研究者にとって、任期の定めがない研究職に就くことは非常に難しくなっており、とても辛い状況にある。
40歳～49歳	男性	授業などまとまった時間は見積もりやすいですが、メールの対応などこまぎれの時間で消えて行くものはなかなか見積もりがむずかしい（しかも積算するとばかにならない）と思いました。
30歳～39歳	男性	授業や実習の準備を含めると、労働時間のほぼ全てを教育に時間を割いている。そのような現状のなかで、研究を行い業績を上げて行くことが非常に難しくなっている。
30歳～39歳	男性	週30時間しか契約できない雇用形態って理屈は通るように思うが、結局全ての問題は生活が保証されるかどうかにあります。安定した仕事に就職できない限り、自分自身の生活を犠牲にせざるを得ません。
30歳～39歳	男性	週30時間の労働条件ですが、土日祝日も研究せざるを得ない状況、かつ1日10時間は研究室に滞在しております。この条件で通勤費用が支給されないので、生活が困窮しております。本アンケートにより、研究員の労働条件の改善がなされることを願います。
40歳～49歳	男性	書類書きなど雑用が多すぎて、研究に取り組む時間がうばわれている。
30歳～39歳	男性	諸雑務に追われ、研究に十分打ち込めない。家族サービス、睡眠時間、自らの生活の質を削って研究にあてているのが現状。研究教育以外の仕事のサポートがなければ、研究成果を今以上あけるのは極めて困難。
40歳～49歳	女性	女性研究者の場合は、結婚、妊娠を希望する時期とキャリアの形成期が重なってしまう問題があるので、日々の生活の調査に加え、長期的なキャリアとライフプランの振り返りと今後の希望が分かる調査をされるとよいではないでしょうか。
40歳～49歳	男性	少し考えないといけない質問もあったけど全体としてはよく設計されていると思いました。
40歳～49歳	女性	職員数の増加が必要
40歳～49歳	女性	職場はみな自分が一番忙しいと思っている人たちばかり。職業柄、時間に融通が利く反面、雑用を断れず、家族を大事に思う気持ちが強い人ほど、研究に没頭することに後ろめたさを感じ、雑用や育児・介護に時間を使ってしまう。結局、研究時間と、本人の睡眠や健康が犠牲になる。
40歳～49歳	女性	色々とお答えしましたが、研究成果があがるのが一番のストレス解消になります。
40歳～49歳	男性	人員の少なさが研究・教育・事務の全てにひずみをもたらしている。自分が休むと職場に支障を来すので、病気以外で年休を取ることはほぼない。もっと人件費を増やすべきなのに、まず人件費から削減するというのでは、大学は立ちゆかなくなるだろう。
30歳～39歳	男性	人員削減をして学生を減らさず、仕事を増やされて、この職場に全く未来が見えません。
30歳未満	男性	人文系の研究者なので研究活動の中心は読書になるが、研究のための読書と趣味としての読書はゆるやかにつながっているため、研究の時間と趣味の時間の境界を定めることが難しい。同じような人文系の研究者は多いはずなので、そうした事情を反映できるようにアンケートの選択肢を設計（具体的な提案はないが……）していただくとより有益な結果が得られるのではないかと思います。
50歳～59歳	男性	整数しか回答を受け付けないのは不便だった
50歳～59歳	女性	整数のみで記入するのは難しかったです。思いの外時間をとられました。
50歳～59歳	男性	整数値以外で答えたかった

年齢	性別	回答
40歳～49歳	男性	正義感を持って仕事をする教員に負担が集中しがちであり、不公平感を持っている。特に、講義他の教育分担に積極的な教員と消極的な教員を数字などで明確化すべきである。
30歳～39歳	男性	生活時間は個人の努力でどうとでもするので、正規雇用を増やしてほしい。
30歳～39歳	男性	設定の仕方が非常に不適切である。例えばQ31「該当するものがない場合も気持ちに近いものを3つ選べ」など、該当するものがないにもかかわらず何かを選ばなければならなかった。このような調べ方で意味のある結果がでるとは思わない。
40歳～49歳	女性	前に勤務していた12年前と比較して、大学にも女性の職員が多くみられるようになったが、その中にあっても仕事面において(労力は差別なく、むしろ男性以上に課される割に)経験や昇進を平等に認めないか、阻む傾向が残っていることが残念である。
30歳～39歳	女性	前の回答に戻れる(回答を修正できる)ようにしてほしい
40歳～49歳	男性	前の項目に戻れないので齟齬があるかもしれません。
40歳～49歳	男性	前の質問の回答を自由に変えられたり一時保存をできたりすると、より正確な記入ができると思いますし、より多くの人の回答を得られると思います。
50歳～59歳	男性	前問に戻れないのは不便で仕方がなかった
30歳～39歳	女性	装置の故障・学生や外国人研究者のケアなど、「本来の勤務内容からはやや外れるが、研究室の運営に欠かせないような業務」が発生したとき、時間雇用の制約により少しずつ損をしているように感じる人が多いです。例えば日本語の話せない外国人研究者に付き添って市役所に出向いたりする業務は業務とみなされず交通費は自腹でした。装置の故障の対応などで残業が続いても残業時間に上限があり、しかし、やらないわけにはいきません。研究室の業務がどんなものか、事務局が把握されていないように感じます。
60歳以上	男性	存在(出席)にのみ意味があるような学内の不要な会議と事務手続きに関する作業が多すぎます。
60歳以上	男性	多くの人がそうだと思いますが、また海外で働いている研究者(頭脳流出者)が日本に帰ることを戸惑っている理由は、雑務の多さです。研究・教育以外の仕事で本当に不必要なことについて確認しないでくと、これから精神的に破綻する教員も出てくるのではないかと思います。
40歳～49歳	女性	大学にいる日中に研究をしたいが、臨床業務や事務仕事に費やし結果的に家事や余暇の時間を削って研究することになる。日中研究だけに費やす時間の保障がほしい。女性職員の更衣、トイレ、仮眠などの環境が乏しいが、健康に配慮すれば、こういった施設環境も最優先で整えてほしい。
40歳～49歳	男性	大学運営のための委員会などが多すぎる。予算が付くたびに委員会が増える。委員会を減らす工夫や多くのものを時限付きにしてほしい。評価やアンケート、e-learningなども多すぎる。
30歳～39歳	男性	大学運営の会議が長いことが多い。
60歳以上	男性	大学外の公的委員会等の審査等でかなりの時間を取られている。本人が兼業を受けるから悪いということもあるが、制度として、十分な対価がある仕組みづくり(つまり、依頼する方が安価であるので、安易に依頼するということがないよう)に、大学側も発言すべきであると考えます。
30歳～39歳	男性	大学関係の業務を土日に入れるのは避けてほしい。
30歳～39歳	男性	大学教員が、研究・教育に集中できる環境になり、その他多くの事務管理に関わる時間が軽減される方向に変わっていくことが望ましいと考えている。
30歳～39歳	男性	大学内での事務作業に教員が関わらなければいけないものが多いと感じるため、減ることを期待する。その理由としては、研究・教育に時間をもっと割くべきだからである。
50歳～59歳	男性	大学内の非効率な事務作業やその擦り合わせのために、多大なるエネルギーを消費して、肝心の研究教育に時間が割けないなど、教員にとっても周辺の学生にとってもなんの利益も無い、本末転倒の時代である。我々教員が楽しい顔で研究教育活動をしていてこそ、学生たちも自分の未来に意義を感じて頑張るのに、こんなことでいいのか。
30歳～39歳	男性	大事なアンケートです。また実施してください。
40歳～49歳	男性	大量の非常勤と任期つきポストで運営が成り立っている組織に疑問をいただいています。
40歳～49歳	女性	単身赴任の場合は時々自宅にも戻らなければならない、体力的にも時間的にも金銭的にも大きな負担になっていますが、余暇時間にカウントしました。
30歳～39歳	男性	長すぎです
40歳～49歳	女性	長時間働く(研究する)人や学生がえらい、という考え方には注意すべき。とくに学生に対して。

年齢	性別	回答
30歳～39歳	男性	定員が削減されているにも関わらず、講義は減らないので教員あたりの負担が増えています。教員が研究に没頭できる環境を整備して頂きたいです。研究に没頭する背中をみせるのも、教育の一つなのではないかと思います。
60歳以上	男性	途中で戻れないのが、とても不便でした。
30歳未満	男性	途中の数値の入力を、ちゃんと調べて入力する研究者は少ないと思うので、適切なデータは取れないと思う。
50歳～59歳	女性	土日に教育用務が入っても、平日を代休にすることで対応するよう数年言われており、1日の重みが違うので納得出来ない。事務的な仕事も割り当てられて、自主的に教育のための企画をして実行する場合には、残業、休日勤務が必要となり、過去3年間研究が遅れた。企画せずとも月～金では教育用務のため研究時間が不足し、土日、祝日、代休あるいは有給休暇をとって対応している。
50歳～59歳	男性	土日祝日も仕事しなくては、求められている仕事は絶対に終わらない。予算申請、様々な調査・評価、学術集会主催、実験施設運営、各種の全学委員会、講習会などの雑用を手助けしてくれる専門職員が不在では、このような状況に改善の余地はない。
60歳以上	男性	当方は定年退職していますので、ここでの記載は、現役のときとは全く異なり、回答にも苦慮しました。したがって、一般的な研究教育者として、あまり参考にしていただかないほうが良いかもしれません。未だ、新たな生活のリズムができていず、試行錯誤での情報であることをお許しください。
40歳～49歳	男性	働きすぎが当たり前になっている状況はおかしい。トップダウンで仕事が配分される割に、トップはこちらの仕事量を把握できていない（例えば、教授→助教、学会→助教、学部→助教など）
50歳～59歳	女性	同居していない要介護の家族がいるため、回答しにくい質問形式だった。非正規雇用の身分で成果を出しながら就職活動や介護/家事のために帰省する時間を如何につくるかが日々の課題になっている。
30歳未満	男性	特定有期雇用職員に対してもある程度の住宅補助や年度一時金を認めてもらいたい。
40歳～49歳	男性	入力していて、自分の実情を振り返ると、とても悲しくなりました。
30歳～39歳	男性	任期があるので、研究成果を出さないといけない。しかし、教育にかけなければいけない時間が多い。その結果、疲労と睡眠不足に悩まされている。研究成果も良くないので、今後どうなるか大変不安である。私が頑張った教育活動は成果として捉えられないが残念である。今後転職出来るか不安である。
50歳～59歳	男性	任期付き教員が、教員公募に使う労力についても調査してほしい。化学研究所の職員は、常勤でも任期があります。
40歳～49歳	男性	年々学内業務の一人あたりの負担が増え、そのために消費される時間が増えているように感じる。このアンケートが単にその一つとならないことを願う。
50歳～59歳	男性	年齢が上がるほど外来業務や病棟業務、教室業務が増えるが、当直などの義務は変わらず、研究や家族にも時間が割けず、長くは続けられないと感じている。
30歳～39歳	男性	煩雑な事務手続きが教員の研究・教育時間を奪っている。旧態依然とした紙ベースのワークフローが全ての原因。なぜ事務効率を高めるためのIT投資をしないのか、理解ができない。また、（事務部門の）極端なまでの前例主義、事なかれ主義が多くの弊害をもたらしている。一般企業では当然と思われることが通用せず、全く合理的でない。明確な規定がないにもかかわらず、「暗黙の前提でそうなっている」と言われても納得できない。とにかく、そういう考え方からは早急に脱却していただきたい。
30歳～39歳	女性	非正規雇用の教育職、やめてほしい。
50歳～59歳	男性	評価や目標は組織レベルで評価する必要があるのか、あるいは評価できるものなのか疑問です。個人の評価をせずに、全体の平均値を見せるような評価では、新しい芽を積むことにならないか、不安もあります。やるべきことに注力できるように、評価の仕方、頻度や種類について、評価側も真剣に議論していただきたく思います。その意味で、このアンケートも役に立ってほしいと思います。
30歳～39歳	男性	普段どのくらいの時間を使っているのか十分に考えたことがなかったので振り返るいいきっかけになりました。
30歳～39歳	男性	部局のプロジェクトの運營業務やシンポジウムなどのイベント開催など、研究と直接結びつかない活動およびその準備に多くの時間を取られており、結果、研究に費やせる時間が限られています。欧米の研究者の研究に費やしている時間を見るにつけ、これでは日本の研究成果が相対的に低くなるのも無理はないと感じざるを得ず、強い危機感を感じます。

年齢	性別	回答
50歳～59歳	女性	文科省からくる5年ものプロジェクトが増えると、部局での会議がどんどん増えて研究に使える時間が激減します。もっと研究に打ち込める時間がないと、研究の質も下がるし論文もなかなか書けないです。よろしくお願い申し上げます。
60歳以上	男性	文科省が押し付けてくる雑用を減らせれば、皆余裕ができる。制度をいじりすぎである。
40歳～49歳	男性	平均的な労働・生活時間とは別に、育児・介護従事者には突発的に子供の急病等で予定を変更する必要があることがあります。このような状況下に置かれているということについて、職場の理解が重要だと思います。
40歳～49歳	男性	平日は自身の研究のための時間の確保が難しく、休日を研究のための時間に充てないと研究が進まない。
50歳～59歳	男性	募集関連、評価関連も含めた事務仕事や大学行事を出来るだけ減らす方向で。
30歳～39歳	男性	報告書の作成と公表が目的とあるが、報告の目的はなにか、大学としてなにか改善をする目的があるのかが不明、ただの報告書作成だけなら、いろんなひとの時間が無駄になる。
40歳～49歳	男性	忙しいことは、教育職・研究職・医療職である限り、仕様がなにかと割り切っている。ただ、その分だけ給与が上がることを希望します。
60歳以上	男性	本アンケートで果たして多様性のある生活時間について把握できるか大いに疑問！
30歳～39歳	男性	本アンケートについての意見です。「回答もれがないか確認」となっていますが、戻れないため確認のしようがなく、訂正もできません。訂正できるようなシステムにさせていただきたく存じます。
40歳～49歳	男性	本アンケートにて、1つ前の質問に戻れないのは、入力しづらい。前の質問での回答に、後の質問内容の時間を含めてしまっていた場合に訂正ができない。
60歳以上	男性	本学、及び他大学の運営にかかわる作業が多すぎると常々感じております。分野長になってからは、研究テーマに関して、考えるのはいつも移動中になります。この状況を何とかしなくては、といつも思っておりますが。
60歳以上	男性	本学定年後、研究員として研究活動を行っていますので、若い研究員とはデータが異なると思います。
30歳～39歳	女性	本調査は教員・研究員の一日もしくは週単位の生活時間に関する調査に限られています。しかし研究者にとって必須なので、海外の学術・研究機関ではすでに実現されている長期間（月単位または年単位）のリフレッシュの時間を与えることです。時間雇用や期限付きの研究者には難しくても、常勤の教員には必要な制度だと思います。ずっと校内に囲まれ、研究成果に関係ない教務を负担させるのは成長にはつながりません。
40歳～49歳	女性	毎日、育児と仕事の割合に関して悩みながら仕事しています
50歳～59歳	男性	無駄なアンケートをやめて欲しい。技術系・事務系職員を充実して、研究・教育の集中できる環境を作ってほしい。
40歳～49歳	男性	無駄な仕事はかなり多いので仕組みを変えると時間は作れるはず。特に管理運営や事務書類に関連する仕事。職場全体の意識改革を行わないと職域問わずみんなが苦しむだけ。教員としては研究ではとても世界と戦えないし、教育の質も低下する。
30歳～39歳	男性	無駄に見える書類仕事が多すぎる
60歳以上	男性	無理に3項目選べという設問があったが（ほとんど該当する項目がなくても、3件選択しないと次に進めない質問）、切実な課題になっている回答者と、と仕方がないから無理の答えている回答が数の上で同等に扱われることになり、統計資料として扱うには問題があるのではあると思います。
40歳～49歳	男性	命を削ってるような気がします。会議をもっと効率良くしてほしい。
40歳～49歳	男性	明日締め切りといった単納期締め切りの無理な書類作成仕事が無ければ時間は計画的に使えるはず
30歳～39歳	男性	面倒な事務作業が増えつつあります。先日、出張後に、打ち合わせの事実を確認できるメールを事務に要求され、先方が打ち合せ内容を共同研究者に送ったメールを転送したら、日付と来訪の事実を確認できるメールを再度要求されたときは正直、馬鹿なのかなと思いました。そんな事務にとって都合のいいメールのやりとりを毎回している訳ではないです。どうしても必要なら相手方に確認してくださいとお伝えしましたが、このような手続きが増えることを懸念しています。
50歳～59歳	男性	目的を明確にしてからアンケートを行って欲しい。
30歳～39歳	男性	有意義なアンケートだと思います。これが労働・生活時間改善につながることを期待します。
40歳～49歳	男性	有期雇用だと教員公募に応募する資料作成にとっても時間が取られます。

年齢	性別	回答
40歳～49歳	女性	有期雇用職員の契約です。一番の不満は通勤手当が出ず、給料の4分の1が交通費で消えることです。職場環境は申し分無いのですが、有期雇用なので引越すこともできず、実質の生活費がとても低いことが悲しいです。
60歳以上	男性	湧いてくるような仕事に追われ、ゆっくり物事を考える時間が取れないのがつらい。
40歳～49歳	女性	夕方以降の会議をやめてほしい 育児中、介護中の教員の教育負担を減らして欲しい
30歳～39歳	女性	余暇にあてた時間、の回答に迷いました（育児を含めて記入してしまった）。子どもが小さいので、育児を含めないとすれば、ほぼ余暇はない気がします。
30歳～39歳	女性	余暇の定義がわかりにくかったです。明確にいただけると答えやすいです。
60歳以上	女性	余裕を持ちつつ教育・研究に専念したいと思うが、あまり重要とは思われない、しかし義務となっている雑用が多く非常にストレスを感じる。日本の科学技術の将来を考えると現在の研究環境は危機的であり、暗澹たる思いがする。女性のアカデミアへの進出を推進するためには、大学教員が魅力ある職業でありすべての意味で余裕が必要であると強く感じている。
30歳～39歳	男性	理系に進み、教員になれたのは幸せだし、名誉な事だが、異性との交流が無さ過ぎて精神的につらい。中高男子校それ以降もほぼ男子校的生活を送って来た（選択してきた）自分にも責任はあるかもしれないが、もっと人間としてまともな生活を送りたい。理系男性教員らは心の叫びを公に訴える事はないだろうが、そういう苦悩がある事をアンケートを通して裏で知っておいて頂きたい。近年、女性が働きやすくするために様々なディスプレイやアプローチがされているのは結構な事だが、職場の大多数である理系男性の幸せも考慮した改革もして頂きたい。学生&職員全体の男女比さえまともになれば、京大という職場に対する文句は何一つない。
40歳～49歳	男性	立場上、大量のアンケートに答えています。負担に感じています。
40歳～49歳	男性	労働以外の事に時間を割く事が出来る組織に変革出来るようにアンケート結果を役立てて欲しい。
30歳～39歳	男性	労働環境改善のために、新たなタスクを作ることを禁止して欲しいです。もしタスクを教員に課す場合、その後の結果を知らせることを義務化して欲しいです。メールなどで雑務を知らせる場合に責任者を特定できるようにして欲しいです。雑務を徹底的に無くして欲しいです。
40歳～49歳	男性	労働時間については、残業時間が長いと感じています。本学職員として致し方ないとは思っておりますが、何らかの方策を立てないと健康面でも持たないと感じる時があります。
40歳～49歳	女性	労働時間に不満はありませんが、年契約の研究員の身分は不安定なので、そちらのほうの環境が整備されて働きやすくなればよいなと思います。
40歳～49歳	男性	労働時間の上限が事実上無い中で、成果主義による評価をうけると、必然的に長時間労働になってしまいます。始めはある程度、強制的な形で労働時間の短縮を実現して戴けると助かります。

平成30年度 京都大学男女共同参画推進センター報告書

発行日 平成31年3月

発行所 京都大学男女共同参画推進センター

© 京都大学男女共同参画推進センター

